
魔王誘拐

三浦平原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王誘拐

【Nコード】

N2766W

【作者名】

三浦平原

【あらすじ】

命を操る幼女と、秘密の多い中年男の恋物語。年齢差26の勘違いラブコメ。

あらすじ

中年男が幼女を誘拐した。

幼女の持つ不思議な力が目的だった。

しかし、不幸のそこにあった幼女はこれを誤解。
助けられたのだと勘違いする。

アジトに向かう馬車の中、あっという間に傷を治す幼女の力に男は呆然と眩く。

「ああ、なんて素晴らしいんだ。僕は——キミが欲しい」

この言葉をまたも幼女は誤解する。

すなわち、『あいのこくはく』をされてしまったのだと。

命を操る幼女と、秘密の多い中年男の恋物語は、こうして始まった。

1. 魔王誘拐（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する人物、団体、国や地域などは実在のなにかと関係するものではありません。ところで私はミヒヤエル・エンデの大ファンです。

1. 魔王誘拐

「お嬢ちゃん、おじさんと楽しいところに行かない？」
「いきます。つれてって」



黒目石の床に水晶玉の破片が散らばっている。
月詠の間には多くの武官文官が集まっていた。

「まったく、恐ろしいことをしてくれたものだ。いったい誰がこんな真似を」

勇者アルファが気だるげに呟いた。

民の評判は極めて高いが、王宮内では陰険で知られる剛の者である。この場で口を開ける者は彼をおいては一人よりいなかった。その一人である王は子を奪われた魔猿の形相で言う。

「なんとしてでも犯人を探し出すのだ」

優れた統治者が必ずしも優れた父とは限らぬ。そんな言葉を身を持って証明してみせた脳髓不具の息子であった。前王亡きあと、若い娘十人で貴族からの税率変更要求に応じた彼の英断は後世にまで高く評価されたものである。その政治力たるや他国の民を笑わせ、自国民には暴動という形で国政参加への意欲を示させるほどのものだ。この男こそ、未来この国が大陸のどこより早く民主化することの因として、五百余年の永きにわたり語り継がれる名暴君であるのだが、それはしかしながらいましばらく未来の話である。

「ところで陛下」

勇者アルファが言う。

「外務長官殿がいらっしゃらぬようですが、いずこへ？」

王はフン、と鼻を鳴らしてこたえた。

「シグマの奴は熱が上がって動けぬそうだ。肝心な時に役に立たぬ男よ」

「熱、でございますか」

「うむ。それがどうかしたか？」

「いえいえ。なんでもございません。……………熱がね。それはそれは」

この時、勇者の笑みに企みの色を見た者は一人としていなかった。



《予言の絵本》と《遠見の水晶》。

これら二つの秘宝により、この国《アカナ王国》の王家は大きな災いの発生する時と場所を事前に知ることが出来た。《予言の絵本》は国内の大きな災禍に関する全てを予見し、《遠見の水晶》は指定した場所を空から見下ろすかのごとく眺めることができた。伝説を創作するのにこれほど有用なアイテムはない。王家は二つの秘宝を最大限に活用した。

災いは起こるであろう。ただしそれを未然に防いだのでは意味が無い。かといって遅すぎて被害が嵩むのはいただけでない。適度に国民の恐怖を煽ったところに、救い手が颯爽登場、即時解決。英雄とは語られやすいものでなくてはならない。

王家はこれまで何度か『災い』を作り上げ、始末してきた。

本来、《予言の絵本》は災いが起こらぬよう事前に物語で持ち主へと警告を与える秘宝だ。しかしアカナナの王家は逆の使い方をしていた。わざと絵本の物語を乱す真似をし、災いが大きくなるよう

に仕向けるのだ。時に森を切り開き、時に田畑を荒らし、時に対象の親兄弟を殺すなどして、王家は『災いのもと』を成長させた。そうして『災い』が適度に災厄をばらまいた頃に王家自らの手によって『わかりやすいかたち』で解決し、国民の支持を得てきたのである。

今回の災いは五年ぶりの『魔王』だった。

飢饉や自然災害では面白みに欠けるし、見返りとしての民衆の熱狂が薄い。どんと大きな事件が起こり、それを王家が愛と勇気で解決してこそ『災い』だ。国を動かすには敵が必要なのである。その点、魔王は実に効果的だった。

まず、自国に魔王という名のテロリストを生み出す。

魔王が暴れる。

王家は悪を許すなど国民を扇動する。

王自らが指揮を取り、魔王を討伐する。

国民は熱狂。支持はうなぎのぼり。

簡単なものだった。

例外といえば五年前の一件、勇者誕生の事件くらいのものである。王以外の者――王家とは縁もゆかりもない者が一步先に魔王を仕留めてしまったのだ。このとき王家はやむなく『勇者』というシステムを作ることになってしまったが、幸い勇者は素直な男であったから殺さずに済んだ。勇者は幼い頃より王家の子飼いであったというふうに過去を捏造したのだ。彼は謁見の間で「金と地位を頂けるなら喜んで」と恭しく頭を垂れたものだった。

さて、問題は場所だった。

今回魔王にする娘が住んでいるのは隣国スズカゼとの国境にほど近い名もなき村だ。《予言の絵本》によればその村に住む娘が今月

末に魔力を暴走させるということであった。村にいる幼い娘は一人だけ——特定は容易だった。彼女の親は既に野盗を装った兵によって殺し終えているし、唯一の血縁である祖父への差別も万全である。娘が狂うのも時間の問題だった。そうなればあとはいつもどおりにやるだけだ。

しかし、今回は場所が場所だった。

国境にほど近いといったが、これは極めてアカンナ寄りの表現で、あちら側からみればその村はスズカゼ王国の領土なのだ。そんなデリケートな位置でドンパチやろうものなら宣戦布告ととられかねない。アカンナの軍が攻めてきました。返り討ちにしたらい。そうですね。——両国の戦力はそれくらいに差があるのだ。

くわえて、《予言の絵本》はどういった理由からか、国の中心から離れれば離れるほど力が弱くなっていき、国境沿いなどでは予言がひどく曖昧になるという性質があった。実際のところ、娘の暴走が今月末なのか来月初めなのかも灰色なのである。

とどめに国境のすぐあちら側には《戦士の街》ジソがある。ジソにはスズカゼ王国一の騎士と、彼に憧れて集まった戦士たちがいる。小さな問題でも起きようものならば屈強な戦士たちがたちまちのうちに駆けつけ、アカンナの兵を捕らえるだろう。そうなればせっかくの自作自演が台無しだ。それだけはなんとしても避けねばならなかった。

しかして王はない頭を絞って考えた。

「よし。娘を攫って王都で事件を起こさせよう」

早速、王は勇者と、自身の右腕である外務長官を呼び、拙い計画つたなを語って聞かせた。

「素晴らしい。一分の隙もない素晴らしい計画で御座います、国王陛下」

勇者アルファは模範的な解答を披露した。

「……わかりました、陛下」

いっぽう外務長官シグマの返事は赤点スレスレだった。

翌朝、王宮・月詠の間において《遠見の水晶》が何者かの手によって割られているのを勇者が発見した。その二時間後、《予言の絵本》がどこにも無いことに王が気付いた。外務長官の屋敷がもぬけの殻になっていることが王に報告されたのは更に八時間が経った頃だった。

王宮は大混乱に陥り、魔王拉致計画は延期されることになった。

二日後、国境沿いの村を監視していた兵が報告を持って王宮に現れた。

「魔王候補の娘が誘拐されました！攫ったのは外務長官殿であります！」



★予知欠落／ある少女の独白

今よりもっともっと小さいころから、わたしには空気のユラユラが見えました。

ユラユラにさわると、わたしはげんきになりました。

どうしてかはわかりません。

でも、げんきになりました。

ユラユラにさわるとからだがフワフワして、

おとなのひとに蹴られたきずも治りました。

おなががへっても、ユラユラにさわるとまんぷくになりました。

あるとき、ユラユラが森の木にまきついているのに気づきました。

空気のユラユラはどうめいなのに、木のユラユラはみどり色でした。

木のユラユラにさわると、いつもよりもっといっぱいげんきになりました。

でも、木は枯れました。

その日から村のひとはわたしに近づかなくなりました。

わたしはあぶない子なんだなあと思いました。

あぶなくて、ダメな子なんだなあと思いました。

だからおじいちゃんが、わたしのかわりにいじめられるんだと思いました。

あるひ、へんなひとがわたしに会いにきてくれました。

そのひとは、黒いかみのけのおじさんでした。

やさしい目をしたおじさんでした。

怖いひとじゃないのはすぐにわかりました。

おじさんはにこっとわらって言いました。

「楽しい所に行きたくないかい？」

わたしひとりはイヤ、とわたしは言いました。

「おじいちゃんもいっしょじゃダメ？」

おじさんはわらいました。

「キミの幸せに必要ななら、なんだって持っていくといい」

わたしはわらって、おじさんもわらいました。

「それじゃあ、もういちど聞くよ。」

お嬢ちゃん、おじさんと楽しいところに行かない？」

「いきます。つれてって」

わらいながら、わたしはなきました。

こんなわたしにも、すきなひとができました。

2. 転機の光

「ねえねえ、お年はいくつなの？」

「いくつに見える？」

「うーん。わからないわ」

「今年で36になります」

「すごおい！」

「年齢に対して凄いだなんて、いや、おじさん初めて言われたなあ」

「ねえ、わたしには？わたしには聞いてくれないの？」

「お嬢ちゃんはいくつなんだい」

「もうすぐ十才になるわ」

「凄いなあ。十歳かあ。十歳……うん。そんな若い頃もあったなあ。

おじさん、心が抉^{えぐ}られるようだよ」

「ねえねえ、あなたのお名前はなんていうの？」

「おじさんかい？おじさんはねえ、シグマ・ユーニっていうんだ」

「シグマ！すてきなお名前ね！」

「ありがとう。呼ぶときはシグマでいいよ。本当は区切る箇所が違
うんだけどね」

「なあに？」

「いやあ、なんでもない。独り言さ。ところで、お嬢ちゃんの名前
はなんていうんだい？おじさんに教えておくれ」

「わたしはね、ニユウっていうの。かわいい？」

「可愛いとも。可愛いキミにぴったり可愛い名前だ。きっと心も

可愛いんだろうね。見えないのが残念だよ」

「シグマったらお上手ね！」

「はっはっは」



うっそうと茂るたんぽぽ杉の森の中を幌馬車の隊列が進む。国外逃亡をはかる犯罪組織の一団だった。

隊列のちょうど真ん中をゆく軍用馬車の中、アカンナ王国元外務長官シグマは膝に載せた少女と歓談に興じていた。この少女こそ今次誘拐作戦の中心人物、アカンナの魔王になる『予定』だった少女である。

少女ニュウは誘拐一日目ではやくも大いにシグマに懐いていた。当初、祖父と二人で別の馬車に乗る予定であった彼女がここにいるのも、シグマと離れることを嫌がって泣いたためだ。やむなくシグマはニュウを自分の馬車に招き入れた。

シグマは少女に故郷の物語を語って聞かせ、ニュウはそれを蕩け^{とろ}た顔で聞いた。

ニュウの目にはシグマが物語から出てきた勇者様のように見えた。恋に恋する幼い心は突如現れた救いに憧れを見たのだった。

一方のシグマはニュウを扱いかねていた。九つの少女にどんなことを話していいものか、彼にはまるでわからなかったのである。ニュウを助けたのは打算からだ。懷かれて悪い気はしないし、実際の状況は彼が望んだ以上のものだが、対応を戸惑っているのもまた事実なのだった。くわえてシグマはニュウと似た顔を過去にどこかで見たことがあるような気がしていた。それがいつだったのか、どこの誰であったのかを思い出せないことがシグマの心をもやもやさせていた。

シグマには夢があった。今回、彼が地位さえ捨ててニュウを助けたのもその野望のためだ。シグマの夢はアカンナ王国への復讐だった。それを叶えるためには優秀な人材と大きな力がそれこそ山のよに必要となる。《予言の絵本》で見たニュウの異質さは彼が長年求めた力の一つであるようにシグマには思えたのだった。

石を踏んで馬車が揺れた。ニュウがシグマにしがみつく。シグマ

はニュウの頭を撫でた。

少女はエへと笑い、男もまたへらりと笑った。

予言では、あのままニュウを放置すれば彼女のいた村は月末にも滅びることになっていた。原因はニュウの暴走だ。それを『魔王』の所業として王と勇者が力を合わせて倒す、というのがアカンナの描いたシナリオだった。

痛い気持ちに狂った女の子は、魔法の力をあふれさせ、村を食べてしまいました。

《予言の絵本》には挿絵と共にそう記されていた。食べるという表現はわからないが、ともあれ村一つを滅ぼすほどの力を持った個人だ。シグマは是非とも彼女を手に入れたと思った。彼女は彼の復讐に必要な人材だった。――だから攫った。ヒーローを装い、これまでもそうしてきたように、拐^{かどわ}かした。シグマには彼女が必要であり、なんとしてでも好かれていなければならなかったのである。

ニュウはシグマの膝の上に座り、彼と楽しく話しながらも、心の三分の一では不安を感じていた。それは誰もが一度は感じる不安、他者との距離から来る不安だった。重くないかしら？迷惑じゃないかしら？本当はくつつかれるの、嫌だったりしないかしら？そんなことを彼女は考えていた。両親が野盗に殺されて以後、彼女の『まとも』な話し相手は祖父だけだった。話すといっても祖父は寡黙な男で、幼い少女が一所懸命に話すのに対し、しわしわの顔で笑って頷くだけだった。ニュウには人間がよくわからなかった。ニュウはシグマを気に入っているが、シグマが自分をどう思っているのかはわからなかった。気に入られたい。好かれたい。しかし、気に入られ方がわからない。もっと仲良くなりたいのに、どこまで突っ込んでいいかわからなくて二の足を踏んでしまう。距離感が掴めないのだ。

このときシグマとニュウは、理由は違えど全く同じ願いを互いの

胸に持っていた。即ち、「嫌われたくない」という願いを。

関所で二時間ほどとまり、いよいよ国境を越えるというところで、ニュウはシグマの腕に傷を見つけた。彼が背伸びをしたときに偶然見えたそれは、火傷の痕だった。

これが少女の転機となる。

ニュウはこのとき余計なことを一切思わず、ただ「治してあげたい」とだけ考えた。善悪も利害も絡まない純粹な願いだった。そう思うと彼女の手は自然に傷跡へと伸びていた。

シグマはニュウが自分にペタペタ触るのを特段不思議には思わなかった。彼はそれを子供によくある意味のないスキンシップ行動だと思った。だが違った。ニュウは呟いた。

「なおれ」

しかして光は暴れた。

ニュウの体から緑色の光の線が溢れ、馬車の中を眩しく照らした。線は束になり、その束は渦となった。それはまるで、光でできた小さな竜巻だった。その竜巻をニュウは手に持っていた。

「なんだ……それは……」

突然の出来事にシグマが目を見張る。

ニュウは手に持った光の渦をシグマの腕へと押し付けた。

「待て。何を――」

言葉は途切れた。ニュウがシグマの腕に触れていた。彼女は虚ろな目でシグマの腕の、ある一点だけを見つめていた。シグマは自分の腕がこれまで触れたことのないほど温かくて優しいものに包まれてゆく感覚を味わった。光に包まれた白い世界で命が踊っている。そんな幻覚をシグマは見た。一瞬の出来事だった。

やがて光はおさまり、優しい熱も余韻を残して消えた。シグマはまぶたをこすり、自分の腕に目を落とした。そこに火傷の痕はなか

った。

「……あれ？」

ニュウはぱちぱちとまばたきした。そしてキョロキョロと馬車の中を見回し、小首を傾げた。不思議そうな顔だった。起きたら知らない場所にいた、とても言い出しそうな顔だ。事実、このとき彼女は自分が何をしたのかまるでわかっていなかった。

シグマはゴクリと唾を飲み込んだ。

「すばらしい……」

彼は熱に浮かされたように呆然と呟いた。傷を治す魔法など物語を除けば見たことも聞いたこともなかった。彼は目の前の少女を見つめてただ「すばらしい」を繰り返した。

ニュウはまたまた首を傾げた。なにがすばらしいのかしら？なにをよろこんでるのかしら？少女にはシグマが何を言っているのかさっぱりわからなかった。しかし次の言葉は彼女の心に届いた。

「ああ、なんて素晴らしいんだ。僕は——キミが欲しい」

「ええっ!？」

これが。この先ながい時間をともに過ごす二人の。
最初にして最大の勘違いであった。



★命廻す娘／ニュウの独白

たいへんなことになりました。

シグマに愛のこくはくをされました。

シグマとお話をしていて、ちょっぴりねむたくなって、はっとし

たらこくはくでした。

シグマはすつごくシンケンな顔をしてました。
あたまがふらふらしてよくおぼえてないけど、すごいことを言われた気がします。

「キミが欲しい。キミさえいればなににも要らない。愛しているよ、ニユウ」

たぶんそんなかんじのことを言われました。

おぼえてないけど、だいたいそんなかんじでした。

どうしよう。どうしよう。うれしい！

わたしはあんまりかわいくないけど、シグマはかわいって言うてくれます。

シグマはわたしをさらってくれた勇者さまだから、そばにいとほこほこします。

わたしはシグマが大好きで、シグマもわたしが大好きです。

わたしたちは好きどうしになりました。

好きどうしのお話をいっぱいしようと思ったのに、シグマはお外にいつちやいました。

いま、お外でシグマのけらいのひとたちと、せきしよの兵隊さんがさわいでます。

「今の光は何だったんだ！」

「説明してくれ！危険なモノを通すわけにはいかない！」

「魔法を使った新型の馬車が故障してしまっただけですよ。なにも問題はない」

「そんな嘘で我々を騙せると思っているのか！」

わたしは、シグマ早く帰ってきて、と思いました。

シグマと恋人のお話をしたいなあと思いました。

シグマに頭をなでてほしいなあと思いました。

おじいちゃんにも教えてあげようと思いました。

おじいちゃんはいつもわたしを心配するから喜ぶなあ、と思いま

した。

わたしはむねがいっぱいになりました。

おひさまのたくさんあたたた土になったみたいな気持ちです。

わたしはいま、とってもしあわせです。

これからもっともっとしあわせになるんだなあ、と思いました。
シグマのかくれがつくのが楽しみです。

ちょっとだけ涙が出ました。

わたしでもしあわせになれるんだなあ、と思いました。

3. 気配

「シグマのかみのけは、まっ黒ね」

「黒い色は嫌いかい？」

「好きよ。夜の色だから。夜はみんなねむるから、だれもわたしをいじめないの」

「……。ニューの髪も可愛いよ。とても素敵だ。夕陽を浴びた麦畑の色だね」

「わたし、シグマといっしょにいると、たのしいわ。おなかとおむねの真ん中がふわふわするの」

「そんなこと言われたら、おじさん照れちゃうなあ」

「ねえシグマ。おひざに乗ってもいい？」

「かまわないよ。さあ、おいで」

「くつつくの、イヤじゃない？」

「嫌じゃないよ。どうしてだい？」

「イヤだったら、ちゃんとゆってね？わたし、シグマにきらわれたくないわ」

「同じだね。おじさんも、ニューには嫌われたくないよ」

「シグマ、ずっといっしょにいてくれる？」

「ニューと一緒にいられなくて困るのは、おじさんの方さ」

「ねえシグマ。わたし、いま、とってもしあわせよ」

「……………」

「シグマ？」

「……ああ、ところで、ニュー。キミはさっきの、緑色の光を覚えているかい？」

「さっき？わからないわ。いつのおはなし？」

「いや」

「？」

「……………わからないなら、いいんだ」



国境を越え、アカンナ王国からスズカゼ王国へ。

多額の贈賄により関は難なく越えられた。金貨三十枚の支出をシグマは別段惜しいと思わなかった。減った財の補填は同志に任せておけばよい。それは、自分の役割ではない。なにより今、彼の手の中にはニュウがいる。この娘の力は貴重なものだ。金などいくらでもつかってやろう。――たれ目の奥にあるシグマの心は、半分が風のように穏やかであり、もう半分は血に酔った牛のように興奮していた。

「ニュウ、食べたいものはないかい？ 欲しいものは？ なにかあったら、なんでもおじさんに言うんだよ？」

「シグマにいつしよにいてほしいわ」

「そんなことでいいのかい？」

「シグマがいてくれたら、なにもいらないわ」

「キミは、本当に素晴らしい子だ」

シグマは駆け引きの笑みを浮かべ、ニュウは純粹に彼の言葉を喜んで笑った。

――まずは、この娘の力がどういう類のものか調べなくては。

シグマは幼い少女を膝に抱きながら、アジトに戻った後のあれこれに思いを馳せた。

――かくれがにいたら、シグマのお部屋を見せてもらおうつと。ああ、わたし、こんなにほかほかでいいのかしら……。

ニュウは男の膝の上で、幸せな現在に涙を零した。

「お、おいおい。どうしたんだい？ おじさん、なにか気に障ることを言ったかな？」

「ううん、ちがうの。ただ、胸がいっぱいで……幸せがくるしいだ

け」

「……………」

馬車は進む。アジトへ向けてゆっくりと。



「昨日のあれ、何だったんでしょう？」

「昨日のって、あの、緑色の光のことか？」

隊列で進む幌馬車の中、二人の男が話し合っていた。

まだ十七の、体の各部にほどよく筋肉のついた少年と、筋肉の全身鎧を着込んだ四十過ぎの大男である。集団の中でも特に大きな力と役割を持った二人だった。

「大将の馬車でしたよね。あんなの、見たこともありません。大将、またなにかすごい発明でもしたんでしょうか？」

「いや、おそらく違うな。大将の馬車には魔王もどきの娘が乗っていたはずだ。光の原因はそれだろう」

少年は絶句した。やがて彼は語気を荒げて言った。

「なんですかそれ、そんなの聞いてませんよ！彼女にはおじいさんと一緒に馬車が用意されていたはずでしょう？くそっ、どうして教えてくれなかったんだ。危険すぎる。今すぐにでも——」

「落ち着けエータ。大将には大将の考えがある。俺たちには決して届かない考えだ。大将は遠い人だ。あの人が自ら娘を近くに置いたというなら、それは必要なことだったに違いない」

「でも、もしも大将の身になにかあったら……」

「だったらどうする。殺すか？大将が外務長官の地位を失ってまで『救った』あの娘を」

その言葉に少年エータはたちまち黙り込んだ。シグマの手によって闇の底から救いだされた——その境遇は二人も同じであった。大

男は岩のような手で少年の頭を叩いた。

「俺たちは俺たちの仕事をしていればいい」

この無骨な男は、これで優しく撫でているつもりなのである。エータは苦笑し、岩のような手を押しのけた。

「痛いですよ、先輩」

大男はむう、と唸って手をおろした。少しだけ残念な気分である。彼はエータを息子のように思っていた。エータもまた彼を父のように慕っているということを、大男は知らなかった。

もうすぐ、と大男は言った。「あれだ、アジトに着く。準備をしておけよ」。不器用さのよく出た声だった。「了解です、先輩」とエータは答えた。

エータは自分たちの旗頭と同じ馬車に乗る幼い娘のことを考えた。自分と同じく魔王にされるはずだった少女のことを。自分とは違い、一歩手前で救い出されたニュウのことを。

優しくしてやらなきゃな、と彼は思った。大将もきつとそうするだろう。僕や他のみんなと同じく、可哀想な境遇の子なんだ。怖がらせるようなことをしちゃいけない。エータは少女を害そうとした自分を恥じた。

——大将が僕らにしてくれたように、僕もあの娘に優しくしてあげなきゃ。

また一つ、勘違いの種が生まれた瞬間であった。



「あれがシグマのかくれがなのね！」

アジトが見える位置まで来るとニュウは馬車から顔を出して大はしゃぎした。

「大きい！すてき！おばけが出そう！」

「おばけでそんなに喜ぶ女の子は、おじさんちよっと初めて見るなあ」

その屋敷は山の麓ふもとに立っている。いちばん近くの街まで一日かかるという巫山戯た立地条件。隠れ家とはよく言ったもので、まさしく隠れ潜ひそむためだけに存在するかのような不動産であった。

「シグマは見ないの？まど、かわる？とっても大きいのよっ」

「ニューが見てていいよ。懐かしくはあるけど、おじさん、もう何度も通かよってるから。ただ、あんまり身を乗り出して、落ちたりしないようにね。そこだけは気をつけなさい」

「はい！」

注意を促しながらも、シグマの心の内にはニューの背中を押してやりたい衝動があった。この娘の力ははたしてどの程度まで傷を治すのか。過去の火傷の痕程度のものまでか？或いは、走行中の馬車から落ちたような大怪我でも？それは自分の怪我也治せるのか？

「――閣下」

そこでシグマの思考は遮られた。

軍用馬車の屋根に取り付けられた受話口から、シグマにだけ聞こえるように声がかかる。不自然なまでに感情の色の無いその声は組織に仕えるのシノビの隊長のそれだった。彼の素顔を知る者は、いま現在この組織にシグマ一人しかいない。

ご苦労、とシグマは答えた。

「確認を終了いたしました」

「どうだった」

「屋敷にも、アジト周辺にも不審な者はありません」

「わかった。さがれ」

「はっ」

音もなく頭上からシノビが消える。

シグマは溜息をついた。味方だとわかっていても、死角から声をかけられるのはどうにも心が気が落ち着かなかった。

やがてニュウが頭を引っ込め、振り向いた。彼女は満面の笑みを浮かべて言った。

「もうすぐなんでしょう、シグマ！もうすぐつくのね！とっても楽しい！」

「ニュウは元気がいいなあ。おじさん、元気のいい子は好きだよ」「わたしも、シグマのこと、大好きよ！」

「はっはっは。それじゃあ好き同士だなあ」

「好きどうしだわっ」

シグマは未だ少女に懐かれていることに安堵し、ニュウは『恋人』に愛されていることを確認して喜んだ。

「シグマ、わたしにかくれがをあんないしてくれる？」

「おじさんでいいのかい？まだ話してないだらうけれど、エータやラムダや、ロー……はいないけど、若くて恰好いい男が、おじさんの仲間にはいっぱいいるんだよ？強くて大きいのがいいならガンマがいる。ガンマは強いぞー、三つ目熊が決闘を避けるぐらい強い」

「わたし、シグマがいいわ。いちばんすてきなのはシグマだって、知ってるもの」

「おいおい、参ったなあ。そんなこと言われたら、おじさんニュウにメロメロになっちゃうよ」

「めろめろ？」

「遠い国の言葉で、好きで好きでたまらないって意味さ」

「シグマはわたしのこと、めろめろ？」

「そうだね。ニュウにメロメロだ」

「わたしもシグマのこと、めろめろよ！」

「はっはっは。女の子にそんなこと言われたの、おじさんこの世界では初めてだよ」

やがて馬車がとまった頃、そうだとニュウが言った。シグマは彼女を膝からおろし「なんだい？」と聞いた。しかして少女はシグ

マの度肝を抜いたのだった。

「さっきのやねのひと、シグマのおともだち？おばけみたいに『けはい』がなくて、すごかったわ！」



★感じ取る者／ニューの独白

かくれがにきました。

そばで見ると、とっても大きくて、わたしもおじいちゃんもびっくりしました。

かくれがなのにかくれてないなあと思いました。

シグマはわたしを抱っこして、かくれがを案内してくれました。

シグマは雨のあとの森のにおいがするから、抱っこはうれしいなあと思いました。

かくれがのおやしきには、お部屋がいっぱいありました。

メイドさんもいました。5人も！

すごい！お金持ち！

エータっていうお兄さんが丸い甘いのをくれました。アメっていうんだって。

ガンマっていうでっかいおじさんはヒゲもじゃでこわい顔でした。でも、やさしいのはすぐにわかりました。かたぐるまって、はじめてされたわ！

クシーっていうメイドのお姉さんとあったかいお風呂に入りました。

クシーはガンマのこと、めろめろなんだって！

「大將さんの方針でね、ここでは毎日お風呂に入るんだよ。凄いでしょ？」

わたしは、毎日あったかいお風呂に入るなんてお金持ちだなあと思いました。

クシーはわたしに服をくれました。かみのけのくしもくれました。クシーは「妹ができたみたいで嬉しいわ」と言いました。

わたしは、うれしいのはわたしのほうなのにへんなの、と思いました。

ごはんはみんなで食べました。

かくれがにはいっぱい人がいました。

みんなシグマのなかまなんだって。みんなシグマが大好きみたい。でも、シグマの恋人はわたしなのです。ひょーい！

わたしとおじいちゃんは、なんと、お部屋をいっこもらいました。きれいなお部屋で、ベッドもイスも二つありました。

わたしもおじいちゃんも、今日からみんなのなかまなんだなあと思いました。

これからはおじいちゃんがいじめられないからうれしいなあと思いました。

いま、おじいちゃんはぐっすりねむってます

わたしもねむるところです。

でも、わたしはねむりたくないなあと思いました。

ぜんぶゆめだったらイヤだなあと思いました。

だんだんねむたくなってきました。

明日も、このおやしきで、起きられたらいいなあ。

3. 気配（後書き）

4. どんぐりの約束

「シグマはとりが好き？」

「大好きだとも」

「なんのとりが好き？」

「焼き鳥だね。いやあ、おじさんあれには本当、目がないんだ。塩がいいね、塩がいい」

「やきとり……それはキレイなの？」

「綺麗だとも。濁った肉汁がとっても綺麗だ。炭の上に落ちてじゅっと蒸発するのが勿体なく思えるくらいさ。キンキンに冷えた麦酒と一緒にやったらもう最高だね」

「ふふふ。シグマ、やきとりが大好きなのね」

「愛していると言っても過言じゃあないね」

「わたしとどっちが好き？」

「そんなの、ニューに決まってるじゃないか。おじさん、焼き鳥七本よりもまだニューのことが好きだよ」

「わたしもシグマのこと、大好きよ。どんな鳥よりも好き！」

「なんとまあ、嬉しいことを言ってくれるじゃないか、こいつめ」

「えへへへ」

「ニューは、どんな鳥が好きなんだい？」

「わたしはどんぐりが好き！」

「……………うん？」



スズカゼ王国南部、モルイの街から馬で一日。近くに家はなく、周囲は木ばかり岩ばかり。ちょっと歩けば川こそあるが、魔物が出

てきてさあ大変。山に登れば鳥の化け物が炎を飛ばしてお出迎え。そんな立地の素敵な隠れ家は、名を《どんぐり屋敷》といった。名付け親はこの隠れ家の『大将』ことシグマである。仲間内でひっそりとおこなわれた命名式の際には、その奇妙な語呂を巡って以下のようなやり取りがあった。

「大将、どんぐりって何です？」

「随分と男らしさを感じる響きですが、どういう意味なんです？」

「獣の名前じゃなからうか」

「ええ。大将さんがお決めなっただんですもの、きっと恐ろしい魔獣かなにかですわ」

「案外、鳥だったりせんかね？世にも美しい玉模様の羽をもつ青き大鳥。目は爛々と輝き、鋭い嘴を持つが争いを好まない——そんな鳥がいたら、まさに『どんぐり』の名に相応しいと思うんじゃない」

「それだ」

「それだな」

「ぜったいそれだ」

「それに違いない」

「異議なし」

「……そうでしょうか？私は、御主人様のことですから、木の実かなにかだと思うのですが」

「それはない」

「ないね」

「どんぐりなんて木の実、聞いたこともねえよ」

「これだからラムダは」

「ラムダは本当に顔だけの奴だよ。ガキの頃からそうだった。ガキの頃なんて知らんけど」

「みんなすまねえな、うちのラムダが。こいつは本当に顔だけの男だからよ」

「私がいったいなにをしたと言うのか……」

実はひとり正解者がいたのだが、それを知るシグマが「秘密にし

とくよ」とたれ目を細め、お茶を濁したまま席を立ったため、仲間たちはどんぐりの正体を「なにやら綺麗な鳥である」として納得することを選んだ。彼らはああでもないこうでもない架空のどんぐりについて語り合い、屋敷の正面扉に大きな鳥の絵を描いた。作業には八時間もの時が要された。彼らはシグマを正面玄関に呼んだ。見てください大将、どんぐりです。そんな言葉とともに掛け布は取り払われた。そうして現れた美しい絵に、シグマはぽつりと一言つぶやいた。

「完全にクジャクだこれ」

仲間たちにその言葉の意味はわからなかったが、彼らは笑うシグマを見て、「やはりどんぐりは鳥だったのだ」と満足した。これ以後、彼らの間でどんぐりは神聖なものとして考えられるようになり、どんぐりという言葉は生き様の美しさや振る舞いの麗しさを表現する最上級の褒め言葉として用いられるようになった。街におりたときにも彼らがそんな言葉を使うので、今やモルイの街にどんぐりの意味を知らぬものはなかった。

「おまえは本当にどんぐりだな」

「ありがとよ。おまえこそどんぐりだぜ」

「儂も若い頃はどんぐりじゃった」

「聞いてよ。靴の直しを頼みに行ったら、そこの店長さん、あたしのことどんぐりだって！」

「やだ、それきつとあんたに気があるのよ！」

今ではそんな会話をあちこちで聞くことができた。

シグマだけはどんぐり呼ばわりされることをひどく嫌ったが、仲間たちは彼の態度を謙遜であると褒めた。俺たちの大将は強くて賢くて物知りで、おまけに謙虚だ。彼こそまさにどんぐりだ、と。

そんなどんぐりどんぐりした屋敷の庭で二人の少女が洗濯物を干していた。

一方は栗色の髪の子メイド。16になったばかりの恋する乙女、クシー。もう一方はストロベリー・ブロンドのあどけない子供。まもなく十歳になるニユウである。二人は出会って一日でだいの仲良しに、三日が経った今ではオレンジ水で義姉妹ぎきょうだいの盃さかずきを交わし友達以上恋人以上家族以上の関係にまでなっていた。今はクシーの仕事をニユウが手伝っているところであった。

「クシー、これでおしまいよっ」

ニユウは籠かごから最後のシャツをとり、クシーにはいと渡して言った。

「ありがとう、助かったわニユウ。ニユウは本当にどんぐりね」

「どんぐり？」

「偉くてすごくて立派、ってという意味よ」

「わたし、どんぐり？」

「うん、ニユウはどんぐりよ」

「それなら、クシーもどんぐりだわ！」

「ありがとう。でもね、ニユウ。このどんぐり屋敷で一番のどんぐりは――」

「？」

「――ガンマさんよ！あの人はまさにどんぐり！どんぐりの中のどんぐりだわ！あの逞たくましい筋肉とお髭、そして飾らない態度……ああ、なんて素敵なのかしら！」

「なんて素敵なのかしら！」

テーブルに身を乗り出してニユウが歓喜の声を上げた。

クシーは苦笑し、そうね、とニユウの頭を撫でた。

「わたし、シグマの役に立てるのね！」

「ニユウったら、ほんと、大将さんが大好きなんだから」

「ええ、めろめろだわ！」

朝の仕事をひと通り片付けた二人は、居間で仲良く『おべんきよ

う』をしているところであつた。どんぐり屋敷では、シグマの案で『義務教育』という制度が生活方針に取り入れられている。即ち、「子供だろうが大人だろうが、ある程度の知恵は持つておかなくちゃ駄目だぞ」というお話である。

「僕も『ここ』に来たばかりの頃は苦労したもんさ。ものを知らないってのは、つらいよ。女の子は特にそうさ。この世界じゃ女に学は要らないなんて言われてるけど、それって、考えないお人形さんを欲しがる人たちの主張だからねえ。そんな人の所に貰われていった後のことを考えてごらん？ いったいどうなっちゃうんだろうね」

11歳でここに來たクシーには、シグマのそんな言葉が恐怖の呪文に聞こえたものだった。

今は読書きのできないニュウにクシーが文字と算数を教えているところである。一日一杯までと決められているオレンジ水をこっそり二杯ほど飲みつつ彼女たちは熱心に教え、教わっていた。とりわけ集中力が化け物じみているのはニュウで、彼女はみるみるうちに字と単語、簡単な文、そして数字と足し算・引き算を覚えていった。乾いた土のように教えたことを飲み込んでいくニュウが面白くて、クシーは彼女に知識の水をどんどんかけた。ニュウは瞬く間にそれを飲み干した。

ニュウの並外れた集中力の原因となっているのは勿論シグマだ。クシーが「読書きができたら大将さんの役に立てるわよ」と言い終えた瞬間、ニュウの脳は最高のパフォーマンスでもって演算を開始していたのだった。大好きな恋人の役に立てる。大好きな恋人が喜んでくれる。いま、学習以外のことでニュウの頭にあるのはそんな思いだけだった。

今日の分の『おべんきょう』を終えたニュウは、クシー以外のメイド四名と庭で遊んでいた。クシーがいないのは、彼女が『じゃんけん』で負けてジャガの芽取りの当番になったためだった。

今やっているのはゴンギンである。ゴンギンはこの大陸の子供な

ら奴隷でもなければみんな知っている、石と葉っぱを使った簡単な点取り遊びだ。ニュウはこれをメイドたちに教えてもらっていた。ゴンギンでもしようか、とメイドの一人が言い「なにそれ？」とニュウが聞いた時など、みな様に悲しげな顔をしたものだ。ゴンギンが三ゲーム目に突入した丁度その時、ニュウが突然顔を上げた。

「――だれかいる……」

森の一点をじっと見つめてニュウが呟いた。

「どうしたの？」

メイドのリーダー格、ファイが聞いた。楽しくなかったのだろうか、と彼女は思った。ニュウは森のある一点をただじっと見つめている。「どうしたの、ニュウ？」。ファイはもう一度たずねた。ニュウは顔をあげ、ファイを見上げて森を指さした。

「森にだれかいるわ。二人。こっちを見てる」

メイドたちは顔を見合わせ、やがて笑った。彼女たちは次々にニュウを「すごい」「たいしたものだ」と褒めた。ニュウはわけがわからず、「なんのこと？」と聞いた。

やがてファイが言った。

「ニュウ、あんたは森に人がいるのがわかるのね？ 獣じゃなくて、人が」

「わかるわ」とニュウはこたえた。

「それはどんな人？」

「クシーより少し大きい女のひとと、シグマよりちよつとだけ小さい男のひとだわ。イヤな感じとか、怒ってるわけじゃなくて、ただこっちを見てるの」

「……驚いた。そこまでわかるの？」

ファイは呆れて溜息をついた。この子は本物だ、と彼女は思った。残りの三人も一様に驚いた。ファイはニュウの頭を撫でた。ニュウは喜び、エヘへと笑って目を閉じた。

「それは、見えるの？」

「ちがうわ。感じるの」

ファイは目の前の少女が只者ではないことを確信した。ファイ自身、九年前にアカンナで魔王に仕立て上げられた化け物もどきだ。『そういった』素質は充分に持っている。しかし、そんな彼女からでさえニューの才能は常軌を逸して見えた。ファイは言った。

「ニュー。あたしにはわからないけど、たぶん、あんたが感じてるのはシノビの人たちよ」

「シノビ？」

「ええ。悪意は感じなかった——つまり、嫌な感じはしなかったんでしょ？」

「しなかったわ。どっちかってゆうと、ほわほわして、やさしく見える感じよ」

「だったらやっぱり、それはシノビだわ。シノビの人たちは昼も夜も交代で、影からこのお屋敷の周囲を守ってくれてるの。あんたはシノビを見つけちゃったのね」

「わたし、わるいことしちゃったの？」

「まさか。悪いことなんかじゃないわ。ただ、仲間以外には言っちゃだめ。基本的には、シノビは隠れてるものだからね。いい？ あたしとの約束よ」

「わかったわ。わたし、やくそくする！」

「よろしい。じゃあ、指切りげんまんしましょ」

「ゆびき、げん……なあに？」

「指切りげんまん。大将さんの故郷で、平民同志が神聖な約束を取り交わすときにする簡略化された儀式行為なんですって」

「シグマの！？ やるわ！ ユビキリげんま、やる！」

「ねえニューちゃん、あたしとも指切りしようよ」

「あ、じゃあわたしも」

「指切りげんまんと聞いちゃあ黙ってられねえなあ。ひひひ」

こうしてニューはメイド四人と神聖な約束を交わしたのだった。

この後、遅れてやって来た姉貴分が仲間はずれにされたと勘ねるの

だが、それはまた別の話である。



「やられたな」

「やられましたね」

「まさか、あれほどまでとは」

「でも、目標ができましたね」

「ああ。俺もまだまだ修行不足だとわかった。成長してやるさ、あの嬢ちゃんに見つかからないくらいにな」

「頑張りましょう、先輩」

「おう。宜しく頼むぜ、相棒」

「ところで、話は変わるんですけど、明日の非番、わたしと一緒に――」

どんぐり屋敷の見える森の中。シノビの二人がなにやら悪くない雰囲気を作っていたのだが、これもまた別の話である。



★ニューウの日記

くしいは とつても やさしい です。

くしいは がんま が めりめり です。

しぐまは かつこうよい やさしい どんぐり。

わたしは しぐま が すきです ます。

ふあいとみんなとゆびきげまりんしました。

おじいちゃんはおさけすきですました。

しのびはどんぐりですか。

きょうもたのしかつたでした。

おやすみなさいました。

5. 結婚

「シグマ、こどものお名前はなにがいい？男の子と、女の子よ」

「エータの奴だな。あいつめ、今度は何を拾って来たんだ？」

「シグマ、お名前よっ。お名前、なにがいい？」

「……ああ、わかったよ。まったく、ニユウには敵わないな。いいよ、飼っていい。好きに名前をつけなさい」

「ちーがーうーの！シグマにつけてほしいの！シグマ、男のひとでしょ！」

「えーっ、おじさんかい？おじさん、名前をつけるの苦手なんだよ。動物なんて飼ったことないし」

「むうう」

「わ、わかった。決めるよ。いま決めるから。おじさんすーぐ決めちゃうぞ……あー」

「……………」

「何がいいかね。んー……イエシゲ……ヒデタダ……ヨシムネ……」

「……………」

「た……太郎。タロウってのはどうかな？ええと、知り合いというか、そんな感じの奴の名前なんだけど」

「タロウ？」

「そう、タロウだ。タロウ……いい響きじゃないか！単純な中にも味がある。おじさんの生まれ故郷ではね、男の子に付けられる最もポピュラーな名前の一つがタロウなんだ。近所でも三人に一人はタロウだった。いや、むしろ全ての少年がタロウであった、と言っても過言ではないくらいさ。空も飛ぶ」

「すてき！タロウ、タロウ……うん！カッコいい気がするわ！」

「はっはっは。そうだろう、そうだろう。おじさん動物いっぱい飼ってたからね。名前をつけるのは得意なのさ」

「シグマ、女の子は？」

「ハナコで」



「いやはや、さっぱりわからないなあ」

「さっぱりなの？」

「さっぱりだね。さっぱり妖精さ」

「さっぱりよんせてなあに？」

「遠い国の妖精だよ。なんだかよくわからないことがあったときに、どこからともなく現れて消えていくだけの可愛い奴さ。ぐるぐる模様の扇子を持ってる」

「せんす？」

「扇子っていうのは、風を起こす道具だね」

「シグマはせんす、見たことある？」

「あるとも。竜巻を起こしたこともある。台風が来るぞ、と思った
らこう、ババツ！とね。そうすると台風が列島をそれていくのさ」

「すごおい！」

「そうだろう、そうだろう。センスのいいジョークだろう。扇子だけに」

「さっぱりよんせは？シグマ、さっぱりよんせは見たことある？」

「うん、さっぱり妖精かい？もちろんあるとも。おじさん、あれの唐揚げが大好物だね。運ばれてきたらすぐにレモンをかけちゃうよ。みんなが取り皿に取り分ける前にかけてひんしゅく顰蹙を買っちゃう。そりゃあもう大顰蹙さ」

「すごおい！」

「はっはっは。そうだろう、そうだろう」

「また大将はわけのわからんことを言う。ニューが真に受けるでしょうが。メイド連中に怒られますよ」

どろり屋敷で最も見晴らしのいい部屋、シグマの書斎で三名の紳士淑女が歓談していた。シグマ、ニュウ、ガンマの三人だ。彼らはニュウの持つ『不思議な力』について話し合っていた。そして脱線していた。ニュウ誘拐及び『緑の光』の一件から既に六日が経過していた。

この間、シグマはニュウに嫌われない限りのあらゆる実験をおこなっていた。六日間でシグマが「光を出してごらん」「光を出せるかい？」に類する発言をした回数はゆうに百を超える。しかし収穫は殆どゼロだった。緑の光の正体はわからず、ニュウを喜ばせるだけの結果となっていた。はっきりしたことと云えば、ニュウが何らかのかたちで『生き物の気配を察する』ことができるということだけである。それにしてもシグマのいない所でばかり発揮されるのだから、彼としてはたまったものではなかった。

一方のニュウは『年上の素敵な恋人』に毎日かまってもらえて幸せであった。光がどうのこうのというのはよくわからないが、膝に座らせてもらったり頭を撫でられたりするの嬉しかった。

ニュウはシグマに一つだけ隠し事をしていた。

それは『ユラユラ』のことだ。彼女はなにもない宙空に『よくわからない紐ひものようなもの』が漂っているのを見ることができた。それは空中にゆらゆらしているだけのものもあれば、木や草などの植物に片側が繋がっているものもあった。ユラユラにはそれぞれ薄く色がついており、色の着いた部分を意識して触れると、ニュウはなぜか元気になるのだった。どろり屋敷に来てからのニュウは肉体精神ともに『元気』である。だからもう何日もユラユラには触ふれないが、それは必要がないからしなくて、触さわれればもっと元気になれることを少女は知っていた。ニュウはこのアジトの仲間たちに、とりわけシグマには、ユラユラに関することを知られたくなかった。嫌われるのは嫌だった。また『あの目』で見られるのは嫌だった。空気中のユラユラは触れてもただ消えるだけだが、木や草や花に繋がっているものは違う。触れればそれに繋がっている植物が

枯れてしまうのだ。かつてニュウが木を枯らした時、村の大人たちはみな一様に怯えた顔をした。あんな顔をどんぐり屋敷のみんなから向けられるのは嫌だった。この幸せな場所を失えば、自分という生き物はただ生きるだけの物になってしまうのではないか。ニュウはそんな気がしていた。

「……はあ。こりゃあ、失敗だったかなあ。まったく、僕はいつもこうだ」

シグマは小さく呟き、自嘲の笑みを浮かべた。その様子にニュウとガンマが首を傾げた。

「なにか言いましたか、大将？」

「シグマだいじょうぶ？おなかいたい？」

シグマは胸の内で苦笑し、いつものとぼけた笑みを浮かべた。

「いやあ、たいしたことじゃないさ。おじさんちよっとお昼寝したくなっちゃってね。昨日あんまり寝てないんだ。あー二時間しか寝てないわー。実質二時間しか寝てないわー」

「なっ！？なんてことを！早く部屋に戻って寝てください！大将はいつもいつも無理しすぎなんだ！あんたになにかあったら俺たちはどうすればいいんだ！」

「シグマねなきやダメ！ねなきやダメ！」

「あ……うん。わかりました」

シグマは少女と大男のでこぼこな二人に押されるようにして書斎を出た。冗談の通じない善人ほど厄介なものはない。心を刺す小さな罪悪感を彼は努めて無視した。

「眠くなんてないんだがなあ……まあいい。書類整理でもしますかね」

三時間後、夕食に呼びに来たメイドのファイが部屋の戸を開けて絶句した。

「大将さん、寝ずに仕事してたわ！」

どんぐり会議（家族会議のどんぐり屋敷版）が開かれた。ファイは怒り狂った。ガンマとエータは呆れ返った。ニュウはシグマ死な

ないでと泣いた。クシーがそれを慰めた。シグマは皆に叱られた。



どんぐり屋敷にもすっかり馴染んできた誘拐八日目の朝、ニュウはシグマの部屋へとずんたか向かった。ニュウは彼女の体にぴったりと合った小さなエプロンドレスを着ていた。クシーのお古を作り直してもらったものだ。これを着てシグマを起こすのがニュウの朝一番の仕事だった。

ニュウは二度ノックしてシグマの部屋の戸を開けた。返事がなくても入っていいよ、とはシグマの言葉である。彼はアカンナ王国への復讐のため、ニュウに嫌われるわけにはいかなかった。しかしニュウはこの言葉を特別な意味に受け取った。かけられた言葉そのものも「恋人なんだから当たり前じゃないか」というキザな台詞が後付けされるかたちで変換され脳へと収納された。頭の中のシグマは目がキラキラしており、男前度が九割ほど水増しされていた。それでも水が溢れないあたりがシグマであった。断っておくが、器が大きいという意味ではない。

シグマは枕を抱いて寝ていた。目は険しく閉じ、それなのに口はだらしなく開いていた。よだれも垂れていた。真っ黒い髪はボサボサで、顎には髭がちよっと生えていた。異性を惹きつける要素は微塵もなかった。しかしそんな有様でもニュウにはシグマがどんな美丈夫よりも恰好よく見えた。クシーの前では言わないが、ガンマでは足元にも及ばぬ男前に思えた。

わたしの恋人はなんてすてきなかしら。しばし幸せな気持ちでよだれおやじを眺めたニュウは、やがて我に返って職務を思い出した。そうだ、おこすんだった。

ニュウは頷き、膝を曲げ、そしてぴょんと跳んだ。

もちろん着地点はシグマの上である。この起こし方を教えてくれたのはファイだった。インパクトは速やかに。「むぐう！」とシグマが意味のない呻きを上げた。

「シグマ、起きてえ！えいつ、えいつ、えいつ！」

ニュウは舌っ足らずな声をあげ、シグマの上ののって跳ねた。

「やめてくれえ……ああ、自分が草壁さんちのお父さんと気持ちをシンクロさせる日がくるなんて……鬱だ……トトロ……」

ぼそぼそとシグマが意味不明なことをつぶやく。嫌がっても起こせと言いつかっているニュウはかまわず跳ね続けた。シグマは寝ぼけた頭でこの暴挙をやめさせる方法を考え、ニュウを布団の中に引きずり込んだ。そうしてシグマは再び夢の世界へ旅立った。

一方、引きずり込まれたニュウはシグマの腕の中でふるえた。それは果てしない喜びからくる魂の震えだった。

けっこんだわ！

ニュウはぎゅっとシグマを抱き返した。腕が短くて背中を回り切らないのは残念だったが些細なことだ。ニュウは今まさに幸せの頂点にあった。

けっこん！わたし、シグマとけっこんしたのね！

ニュウはクシーやファイや他のメイドたちから『けっこん』の話をよく聞いていた。彼女たちの発言から、幼い少女は『けっこん』を正しく理解していた。即ち、『けっこん』とは布団をかぶって抱っこをすることだ。これを毎日するのが『ふうふ』である。ニュウは「ふうふ。うふふふ」と笑いながら何度も何度もシグマの胸に頭をこすりつけた。

この日からニュウは、シグマを起こす前に一度布団にもぐりこみ、彼のからだをぎゅっと抱きしめることになる。結論から言うと、この行為はニュウが真実を知るまでの二年間ほぼ毎朝続けられるのだが、朝に弱いシグマがこれに気付くことは終ぞなかったという。



★ニューウの日記

わたしは しぐまと けつこんしました。

わたしは しぐまと ふうふします。

くしいは すごいねえつぎわたしばん といいました。

ふあいは やつぱりそゆうしみだたか といいました。

くしいと ふあいは にこにこしました です。

おじいちゃんは しぐまに よろしくおねがいます といいました。

ふうふは こどもが つくります。

わたしは こどもが ふたり ほしい ます。

わたしは おとこのこと おんなのこと いいです。

わたしは うれしいなあ とおもいました。

わたしは たのしいなあ とおもいました。

ねるます。

おやすみなさい。

6. 気付き

「シグマ、シグマ」

「なんだい、ニュウ」

「やねの上に、だれかいるわ」

「——えっ？」

「あのね、みんなでここに来るときに、馬車のうえにいた、シグマのおともだち」

「おじさんにはわからないけど……あいつ、いま屋根の上にいるのかい？」

「いるわ。じっと立って——あつ、いなくなっちゃった」

「いや、驚いた。凄いなあニュウは。あいつの気配まで感じ取れるのか」

「『けはい』じゃないわ。シノビのひとよりずっと静かで、とうめいな、もにゃもにゃした感じ」

「彼はね、シノビの隊長さんなんだ」

「たいちようさん？」

「そう。シノビでいちばん偉い人さ」

「すごいのか？」

「すごいとも。いつもおじさんのことを、影から守ってくれてるんだよ」

「シグマだけ？」

「おじさんは、敵が多いからねえ。それにおじさん、弱っちいから」

「たいちようさんがいたら、シグマはだいじょうぶなの？ 死なない？」

「死なないとも。あいつはとんでもなく強いし、特別な力を持つてるからね。ニュウが来るまでは、シノビの仲間以外には誰にも気付かれずに、おじさんのことを影から守ってくれてたんだよ。もしかしたらあいつ、落ち込んでるのかもしれないな。小さなレディに見

破られちゃったぞ、どうしよう、って」

「れで？」

「おねえさんのことさ」

「ふうん。——ねえシグマ。わたし、たいちょうさん、好きだわ」

「うん？」

「だって、シグマを守ってくれるひとだもの。シグマと、クシーと、ファイと、おじいちゃんと、みんなの次に好き！」

「ああ……それじゃあ、そう伝えておくよ。あいつもきっと喜ぶ」

「おねがいするわっ！」



朝ぼらけの森をシノビが駆ける。シノビは山麓に座す大きな屋敷を視界に収めると、その玄関に向けて文の筒を投げた。戸口でナイフを磨^{みが}いていたガンマが気づき、それを拾う。彼は辺りを見回すと、見当違いの方向に手を振った。声はないが口が動く、いつもありがとうよ、と。

シノビは満足し、仲間たちを影から守る職務に戻った。

どんぐり屋敷の朝は早い。そろそろメイドたちが起きだす頃である。

次の休みはあいつを誘って飲みに行こう、と彼は思った。



本日の『おべんきょう』を終えたニュウはシグマの書斎で『おままごと』をしていた。ニュウが亭主で栗^{くり}が妻、きのう拾った綺麗な

石ふたつが子どもだ。息子は名をタロウといい、娘はハナコといった。机の下で繰り広げられる仲良し家族のほのぼのドラマには練りこまれた細かな人物設定と舞台背景があった。

机の上ではシグマが各所に送る書状の内容に頭を悩ませていた。膝の間からときおりにゆるっと顔を出しては「おてがみおわった？」と聞くニュウに、彼はその都度「もうすぐだよ」「もうちょっとな」と曖昧にこたえた。

部屋の戸がノックされる。大将さん、と戸の向こうで声が言う。

声はクシーのものだった。

「大将さん、こちらにニュウいますか？」

「いるよー、どうぞー」

シグマは手紙を向いたまま言った。いつでもどこでも気怠さを隠さぬ男である。ぱつと顔を輝かせたニュウが机の下からぬるりと這い出る。この子タコみたいにカラダ柔らかいな、とシグマは思った。

戸が開き、クシーが顔をのぞかせる。彼女は言った。

「ニュウに教えたことがあるので、お借りしていいですか？」

「いいよー、どうぞー」

「ありがとうございます。ニュウ、おいで」

「はい！」

ニュウは元気よく答えると、ふと思いついたように机の上に石を二つ、そつと置いた。眉を寄せて石の並びを整え、彼女は言う。

「こっちがタロウで、こっちがハナコよ」

「うん？」

「二人をおいていくから、さみしくなったらなでてね」

そうしてシグマの背中を一度ぎゅっと抱きしめると、ニュウは書齋を出ていった。

戸が閉まる。廊下をゆく元気な足音がする。大将さんと何してたの？秘密よ。そんな会話が届く。階段を慎重におりる音が聞こえ、やがて書齋に静寂が訪れた。

少し考え、シグマは手紙の文面を決めた。そこが決まってしまえ

ばあとはあつという間で、彼は一時間で全ての手紙を書き終えた。ふわあ、とあくびし腕を伸ばす。庭の方からニュウとメイドたちの楽しげな声が聞こえた。

シグマは溜息をつく、「ふむ」と呟き、丸い二つの石ころに目をやった。その一つを人差し指で撫でる。意外と表面はざらざらしていた。

「ええと、大きい方がタロウだったっけ？タロウ……うん。オレンジ水を飲み過ぎて栗に叱られていたのは、おまえだよな？」

無表情で撫でられているのはしっかり者の姉、ハナコであった。

ニュウはメイドの先輩たちから、お出かけ用の靴の磨き方を教わっていた。どんぐり屋敷では、靴磨きは手の空いているメイドがする仕事であった。ニュウは仕事ぶりを認められ、ファイより一昨日から正式に『メイド見習い』の肩書きを与えられている。見習いとはいえ、誘拐から十日目での正社員登用。これはクシーに四日も勝る記録であった。

ファイのつくった、きめ細かい泥のような専用のクリームをいらなくなった布に少しだけ付けて、靴にまんべんなく塗る。水をちょろっとかけてゴシゴシ磨く。もう一度クリームを塗る。また水をかけて磨く。繰り返せば繰り返すほど靴は若返る。ニュウは靴磨きに没頭した。力のいる作業だったが、コツを覚えると楽しいものだ。祖父のノルフは靴を作る職人である。ノルフの背中を見て育ったニュウには靴の大切さがよくわかる。自分の磨いた靴を履いた人がどんな気持ちになるかを考えると胸がふわふわした。

塗って、磨いて。

塗って、磨いて。

ニュウがシグマの靴を片方終えた頃には、先輩メイドたちは今日の予定分、一人二足ずつをすべて磨き終えてしまっていた。途中、ガンマの靴ばかり熱心に磨くクシーがファイに叱られるというエピソードもあったが、これは毎度のことである。ニュウがシグマの靴

を両足とも磨き終えるまでには四十分の時間が経かった。最初はそんなもんよ、とファイは笑った。

「どれ、見せてみなさい」

「どうかしら？」

「あら、これ、なかなか……」

恋って凄いのね、とファイは言った。

ニュウが磨いたシグマの靴は他の誰の物よりピカピカだった。

仕事が一段落すると、ニュウはクシーから『おさいほう』を教わった。これができるのと男の人に大事にされるのよ、と以前に先輩メイドが言っていたことを思い出したのだ。彼女は仲間内で一番うまいのはクシーだ、とも言っていた。思えばガンマの服には色とりどりの豪華な刺繍が施されていた。ニュウ特段、いま以上に大事にされたいとは思っていなかった。ただ、シグマの服にお花の刺繍をたくさん入れてあげたいと思ったのだ。そのためには『おさいほう』を覚える必要があった。

「おねがい！」と頼み込んだ妹分に、姉貴分は「修行は厳しいぞよ」とこたえた。そうして笑った。

二人は庭の大きな栗の木の下で『おさいほう』をした。

「縫い物や編み物はね、着る人のことを思っているとどんぐりよ。あつという間に時間が過ぎちゃうんだから」

「お靴とおんなじね！」

「そうね。おんなじ」

ニュウはまた一つ役立つ技を身につけて喜び、クシーは洗濯籠から勝手に持ってきたガンマの服を存分に楽しんだ。ガンマの上掛けには『花をくわえた虎』の刺繍が増えた。

独身のガンマは、しかし街では知り合いの多くに妻帯者として見られていた。顔なじみに、今度紹介しろよ、などと言われる度、彼は「誰のことだろうか？」と首を傾げるのだった。

「クシー、どうかしら？」

「うん。最初にしては悪くないわ」
栗の木の足元、二人の少女はちくりちくりと針を動かし続けた。
だった。



「明日はラムダが帰ってくるそうぞ。朝、シノビが教えてくれた。
みんなもう聞いているか？」

思い出したようにガンマが言った。夕食時のことである。

「聞いてないです」とエータが言った。「朝に言ってくればよかったのに」

「聞いてないです」とクシーが言った。「でも、そんなガンマさんが好き」

「いや、大将には言っておいたんだがな」

「そうなんですか？」

仲間たちの目がいつせいにシグマを向いた。

シグマは気の抜けた平時の笑みを浮かべて言った。

「いやあ、おじさんすっかり忘れてたよ。はっはっは」

仲間たちは「嘘だな」と思った。大将のすることだ、なにか意味があるに違いない。大将が意味のないことをするはずがない。彼らは一様にそう考えた。この屋敷の人間はここに誘拐され、或いは招かれてきた経緯から、みな心のどこかでシグマを英雄視している節があった。実際のところ、今日のことはシグマが報告を忘れていたにすぎない。しかしそれをシグマ本人の口から言っても信じる者はいないのだ。こうした意思疎通のクロスカウンターが彼らにはよくあった。

さて、今はシノビを除いた屋敷の全員が居間にあつまり、めいめい床に座って談笑しながら今日の夕食、スープとジャガを食べてい

るところである。研究職も営業職もメイドも、ここで暮らす限り夕飯だけはみんな揃って居間で食べることに、というのがどنگり屋敷の決まりである。シグマの方針だ。屋敷には大勢の人間が暮らしており、テーブルや椅子があったのでは居間に全員が入り切らない。そのため、夕食時だけはこうした不行儀が許されているのだった。

「シグマ、おかわりは？ スープのおかわりいらない？」

「いやあ、おじさんもう、けっこう食べたからねえ」

「……そっかあ」

「ああ、いや、もらおうかな。うん、半分だけもらおう。頼めるかい？」

「待ってて！ すぐ持ってくるわっ。えへへへ」

「うっぷ。……はいるかな」

「チビは本当に甲斐甲斐しいな。あれ絶対いい嫁になるぞ」

「おいおい、爺さんの前でそんなこと言ってやるなよ」

「ニューが幸せなら、それ以上は望まんですじゃ」

「ニューちゃん、俺にも頼むよ。ちゃんと肉もいれてな」

「ちよつと、うちのニューを顎で使ってんじゃないわよ」

「なんだよ、じゃあファイ、おまえに頼むよ」

「いやよ。自分で立ちなさい」

「ちえ。おい、クシーちゃん、俺にスープー」

「ガンマさん、お髭にスープが付いてますよ？ 動かないでくださいね。すぐ取りますから。わたしがすぐ取っちゃいますから、わたしが」

「む？ いや、それくらい自分でできるんだが」

「あん、もう。動かないでくださいよう」

「むう」

「おい……誰か俺にスープのおかわりを……」

「僕、持ってきますよ。ついでだから」

「エータ、おまえってホントに良い奴だよなあ……あ、肉いれてな？」

「すみません、肉は駄目です。僕が食べるんで」

楽しいなあ、とニュウは思った。彼女はみんなが一箇所にあつま
る夕飯の時間が好きだった。食べ終わると仲間の半数は庭に出て
井戸の水で洗い物をし、もう半分はテーブルや椅子をもとに戻す。
この片付けの時間さえニュウには愛しく思えるのだった。

翌朝、ニュウは玄関の掃除をしながらラムダを待っていた。ラム
ダはニュウ誘拐^{きせうしゅう}作戦のあとすぐに別の仕事に向かった仲間だとシグ
マから聞いていた。ニュウにとっては始めて顔を見る仲間である。
どんなひとかしら？おやしきのみんなみたいにやさしくしてくれる
かしら？シグマの仲間だから、きっといいひとね！ニュウはわくわ
くしていた。

やがてもうすぐ昼、という時刻。馬に乗った青年が屋敷の庭へと
やってくる。その『ふんいき』を感じ取ったニュウはピクリと顔を
上げた。

「どうしたの、ニュウ？」

エータが言った。彼はよくニュウに砂糖の入ったお菓子をくれる。
今も「あとで食べな」と飴を貰ったところであった。

「だれか来たわ」とニュウは言った。そうして首を傾げた。

「なにかしら？知ってるのに、知らない感じ。とうめいで、かたい
感じ……」

「ニュウのその感覚は僕にはよくわかんないけど、たぶんラムダさ
んじやないかな？今日帰ってくる予定だから。行ってみようか？」

昼時だが、料理だけはまだ許されていないニュウには仕事が無い。
ニュウはエータと二人で、帰ってきた仲間を迎えに出た。

ちようど、厩舎^{うしや}に馬をいれたラムダが向かってくる場所であつ
た。

「おかえりなさい、ラムダさん」

エータが言う。

「ただいま戻りました、エータ君。いやあ、疲れました」

ラムダが人のいい笑みを浮かべる。ニュウは彼をじっと見つめた。ラムダは大きな荷物を持っていた。彼はクシーと同じく栗色の髪をした、キツネ目の、美しい青年だった。シグマより十歳は若く見える。しかしこれで歳はシグマと同じである。

「大将が、戻ったら書斎に来るように言っていましたよ」エータが言った。「あ、荷物持ちます」

「すみませんねえ。いや、エータ君は本当にいい子だ」

「ラムダさん、僕もう17ですよ」

「私にとっては息子のようなものです」

二人が楽しげに話す様子をニュウはあることを考えながら見つめていた。やがて「うん」と納得した彼女はラムダの服をちゃん、と引っ張った。

ラムダは小さな少女に目を落とし、そして丁寧にお辞儀をした。

「やあ、これははじめまして、お嬢さん。私はラムダと申します。こうして会うのは初めてですね」

「わたし、ニュウっていうの。よろしくね」

「はい、こちらこそよろしくお願いしますね、ニュウさん」

二人は笑顔で握手をした。

「わたし、あなたのこと、好きだわ。とってもどんぐり」

「おやおや、嬉しいことを言ってくれますね。私もニュウさんが好きですよ。ニュウさんだけでなく、御主人様も、エータ君も、どんぐり屋敷の人みんなが好きです」

「わたしも!」

ニュウが笑い、ラムダもまた朗らかに笑った。「気に入られましたね」とエータも笑った。

しかし、続くニュウの一言がラムダの笑顔を凍りつかせることになる。

少女は無邪気な笑顔で『おれい』を告げた。

「たいちようさん、いつもシグマを守ってくれてありがとう! 今日

は『けはい』があるのね!」



★ニューウの日記。

わたしは きょうは いっぱいの べんきょうを しました。
べんきょうは じとかず だけではないです。

わたしは おくつのこするやつも おさいほうも べんきょうと
おもいます。

わたしは きょうは しぐまのおくつを こすって きれいにし
ました。

ふあいは じょうずだねえ といいました。 うれしい。

わたしは つぎは おじいちゃんのおくつを こする とおもい
ました。

おさいほうは くしーが すごかった でした。

わたしは くしーに おさいほうを おしえてくれて もらいま
した。

おさいほうは ちいさいくて でも たのしいです。

わたしは おさいほうは じょうずでは もっとたのしいだろう
とおもいました。

わたしは がんばる とおもいました。

あしたは らむだ というの なかまが かえってきます。

わたしは たのしみだなあ とおもいます。

すいみんします。

おやすみなさい。

7. 事件／三人の目から

★ニューウの日記

きょうは わたしは ひみつです。

しぐまと らむだと わたしは ひみつを しました。

さんにんが ゆびきりげんまんを しました。

よるは わたしは おおきいのが なくのが ききました。

おおきいの は うれしくて なきました。

おおきいの は もりに います。

おおきいの は おおきいのでないのが きらいです。 とつても。

おおきいの は どんぐりやしきも きらいです。

わたしは おおきいのと みんなと なかよくしたいなあ とおも
もしました。

しぐまは しんぱいしなくてよいよ といいました。

わたしは しぐまかつこうよい とおもいました。

わたしは しぐまに かつこうよいのだからすきだなあ とおも
います。

わたしは しぐまとふうふだからがんばる とおもいます。

ねます。

おやすみなさい。



★クシーの独白

今日は、おかしなことがたくさんあった日でした。

朝、ファイさんの機嫌が妙によかったのがはじまりでした。

別に、いつもは機嫌が悪いっていう意味じゃなくて、むしろ普段から明るい、さっぱりした人なんだけど、それでも、鼻歌をうたったりはしない人です。それなのに、今日は朝からくるくる回って、歌ってました。

五年もここににいるけど、今日みたいなファイさんは初めて見ました。

なにがあっただろう？

お昼には、ニューが書斎に呼ばれました。

お昼ごはんも食べずに、大将さんとラムダさんの『秘密会議』に参加したらいいんです。

私はてっきり、ニューが我儘わがままを言って部屋に居座ったものと思っていた。あの子、普段は聞き分けがいいのに、大将さん関連のことだと、途端に頑固ちゃんになるから。

でも、どうやら今回は、そうじゃなかったみたいなんです。

これはエータさんが言ってたんですが、なんでも、帰ってすぐのラムダさんが、是非にとニューを呼んだんだとか。ニューはそのとき、ラムダさんを「隊長さん」って呼んだみたいです。

どういことだろう？

ニューとラムダさんって、接点は無はずだよな？

それに、大将さんとラムダさんの秘密会議は、いつも二人だけでやってたのに……。

お勉強が終わってから聞いてみても、ニューはなににも話してくれませんでした。

いちばん仲良しの、このわたしに、隠し事。

大将さんとの約束だから誰にも言えない、とニュウは言いました。「指切りげんまんした」とまで言われちゃったら、わかった、と引き下がるしかありませんでした。

わたしにも、誰にも話しちゃいけない話って、いったい何の話だったんだろう？

気になるなあ。

夕飯の時には、山のほうから大きな音がしました。

怖がるふりをしてガンマさんに抱きつけたからよかったけど、あれ、何の音だったんだろう？

ニュウは「おっきいのが喜んでる」って言ってたけど、どういう意味だろう？

ガンマさんは音の正体を知ってるみたいで、誰か（名前は聞こえなかった）に連絡するとか言っていました。大将さんはすぐ手紙を書いて、シノビのササノハさんに渡していました。

なにか起こるんでしょうか？

ガンマさんに五月蠅い子だと思われるのが嫌で黙っていたけど、聞いた方がよかったかもしれせん。

ついさっき、また山のほうから音がしました。

夜はやめてほしいです。

せっかく眠ってもあんなのが聞こえたら起きちゃうから。

それにしても、抱きついたときに触ったガンマさんの体、逞しくて、素敵だったなあ。

あーあ。

いつになったら、振り向いてくれるのかなあ。



★ある手紙

親愛なるよぞら殿

秋麗のみぎり、ますますご清栄の趣、大慶に存じ上げます。

日頃何かと心お留めいただき厚く御礼申し上げます。

さて、誠に勝手ではありますが、相談したいことがあり、こうして筆をとっています。

私どものアジトのある山に、ツチクイモドキが出ました。

仲間が言うには、それはどうやら山に巣を作り終えてしまっているようです。

恥ずかしい話ですが、我々はそんなものが山にいたというのに、気付くことができませんでした。

知っての通り、ツチクイモドキは獰猛な魔獣です。

それらは、こちらに人があると気付けば、すぐにでもアジトを襲ってくることでしょう。

一匹や二匹ならともかく、巣を作るほどの数がいてはとても太刀打ちできません。

卑しい願いとはわかっています。

どうか私どもに力を貸していただけないでしょうか。

私どもはここを離れることができません。

どنگり屋敷には幼い子どもおり、逃げるのがままなりません。

どうか我々を助けてください。

どうか、どنگり屋敷を守ってください。

貴殿の善意と我々の友情を信じています。

貴方の友 西熊勇

8. 理由

「わたし、シグマのこと、好きだわ」

「ありがとう」

「わたし、シグマが悲しいと、イヤだわ」

「ありがとう」

「ねえ、シグマ」

「なんだい、ニュウ」

「いたいときは、ちゃんと、いたって言わなくちゃダメなのよ？」

「……………ああ」



二人と一人が向い合って座っている。一方はニュウとシグマ、もう一杯はラムダだ。

「参ったなあ」とシグマが言った。

「ええ」とラムダがこたえた。「参りましたね」

「へいきよ」

シグマの膝の上、オレンジ水のお椀から顔を上げてニュウが無邪気に笑った。

「わたし、だれにも言わないもの。なかまは信じるものだわ」

ラムダは苦笑し、シグマは額に手を当ててため息をついた。

どんぐり屋敷三階にあるシグマの書斎。そこでおこなわれた秘密会議での一幕である。会議の議題は『ラムダの正体ニュウにばれちゃったようすんのこれ』であった。

「エータ君が気づかなかったのは不幸中の幸いですね。彼、誠実ですが、お喋り好きでもありますから」

ラムダがお手上げのポーズで笑う。シグマはテーブルから茶をたぐり、ニュウにかからぬよう唇をつきだして啜った。やがてふう、と息をつき彼は言った。

「まったくだねえ。それにしても、おまえの正体を見破るなんて、ニュウの力は相当なものだなあ。シノビの連中でさえ、隊長とラムダが同一人物だとは誰も気付いていないだろうに」

「えへへへ。わたし、すごいっ？」

「ああ、凄いよニュウは。ちょっと凄すぎるくらいさ。おじさんびつくりだよ」

「本当ですよ。私の術は、声はおろか骨格や匂いまで変えますからね。油断していたとはいえ、御主人様と同等か、それ以上の相手でなければ見抜かれることはないと思っていたのですが……はあ。地味に『シヨック』というやつです」

「僕と同等って、それはなにも凄くないんじゃないのか」

「能力においてはそうでしょう。ですが、御主人様と為を貼るほどの卑怯者がいたら、私ごときでは触れることさえかなわずに負けてしまいますよ」

「もしかして、あれかな。おまえはおじさんが嫌いなのかな」

「愛していますとも」

「わたしも！わたしもシグマのこと、愛してるわ！」

「素晴らしい。それでは私たちは仲良しさんですね、ニュウさん」

「うんっ！仲良しさんだわ！」

「では仲良しさんの握手をしましょう」

「あくしゅ！わーい！」

「わーい」

「うわあい。三つ巴だと思ったら二対一だったよ。なんだろうこの気持ち……言葉にできない」

「御主人様、それは嫉妬です」

「しっと！——しっとってなあに？」

「妬き餅をやくことですよ、ニュウさん」

「シグマはわたしにしつとなの？」

「違うからね。おじさん、いたいけな少女に嫉妬したりはしないからね」

「では、ニューさんではなく私に嫉妬しておられるのでしょうか。いたいけな少女を奪^とられたように感じて、御主人様自身もお気付きでなかった淡い恋心が回転し、小さな小さな火花を飛ばしているのです。それはまさしく満月の夜を駆ける一匹の――」

「いいよそういう喩えは。おまえは何でもかんでもそういう愛とか恋とかいうものに絡めてくるなあ。なんだっけ、なんとかっていう恋愛小説が大好きなんだっけ？おじさん物覚えが悪くてちよつと曖昧なんだけれども」

「ぬ！……恋愛小説と一括りにされるのはいくら御主人様でも勘弁なりませんね。ニューさんがいなかったらその首叩き切って三つ目熊に食わせているところですよ」

「おまえの辞書の『御主人様』の項を読んでみたいよ。どこまでヴァイオレンスな説明が載ってるか興味ある」

「ばいおれす？」

「暴力のことだよ。――なあラムダや、こんどおまえの辞書、おじさんに見せておくれよ」

「私が愛してやまないのはツノマル・ヒナが生み出す幼き愛の叙景的心理描写の数々です」

「あー、無視か。そうくるか。いいけどさ。……でも、叙景的心理描写なんて言葉は無いよね。おじさん初めて聞いたもの。断言するけど、そんな言葉はないよ」

「そう、かつては無かった……しかし今はあるのです！ツノマル・ヒナがその技法を大陸中に広めたのです！大陸中？いいえ、世界に！そう、それはまさしくたんぽぽ杉の森を往く一頭の――」

「ニュー、長くなりそうだから下に行こうか。今日はオレンジ水も一杯飲んでもいいよ」

「いくわ、下にいくっ！シグマ、だあいすき！」

「はっはっは。嬉しいこと言ってくれるなあ。おじさんもニュウが大好きだよ。さあ、膝から下りて。抱っこしてあげようね」

「うん！」

「その代わり、あれだよ？さっきの約束は、ちゃんど守っておくれよ？そうじゃないと、おじさんもラムダも悲しいことになっちゃうからね」

「もちろんよ！わたし、だれにも言わないわ！れでだもの！」

「そっか、レディかあ。でも、誰にもっていうのは、この屋敷の間にもだよ？」

「シグマのためだもの」

「よしよし。それじゃあ指切りをしよう。さ、手を出して」

「うん！わたし、ゆびきりげんまん、好きだわ！」

「そうかそうか。おじさん、指切りが好きって子には、ちょっと会ったことなかったなあ」

こうしてシノビ部隊を率いる寡黙な隊長の秘密は守られたのだった。

「――そこで彼女は言うのです！『こんなに美味しいジャガだって芽には毒があるの。完全なものなんてどこにも無いのよ』と。つまりこれは主人公の苦悩に対する……あれ？御主人様っ？……御主人さまー？どこに行ってしまったのですか？まだ話が終わっていませんよー？」



夕食時、ニュウは仲間ひとりひとりに皿を手渡す仕事を任された。命じたのはメイドのリーダー・ファイである。ニュウは、食事に深く関与する仕事を任されたのはこれが初めてだった。そのため彼女

は張り切った。張り切りすぎて落とした皿を床面衝突寸前でエータがキャッチする、というアクシデントも二度ほどあった。結果的に被害件数は0であるから失敗ではないとされた。小さな女の子が五枚ずつ皿を持って行ったり来たりを繰り返す光景は屋敷の仲間たちになんとか好評を博した。「こういう人形むかし見たな。なんだっけ、お茶運ぶやつ」というシグマの発言も友好的な意味合いに誤解された。ニュウは幸せな今に感謝し、それを与えてくれたシグマに感謝し、ついでに今朝から妙に機嫌のよかったファイにも感謝した。一方シグマは人形の名前が思い出せず、迫る老いの魔の手に恐怖した。

それは研究部のリーダーとの肉の奪い合いにエータが勝利を収めた、まさにその瞬間のことだった。

突如、大きな音が響いた。

びりびりと屋敷全体がふるえるような――そんな錯覚を住人たちにもたらす音だった。それは鳴き声ではなく『音』だ。どんな、と聞かれれば誰もが返答に窮する、万民を不快にさせる類の音。しかしてその音の正体と本質に気付いた者が居間には一人ずついた。前者がガンマで、後者がニュウだ。ガンマは経験から、ニュウは才能から答えを導き出したのである。

ガンマはこの音がツチクイモドキと呼ばれる魔物の発する音だといち早く気付いた。ツチクイモドキが巢に女王を迎えた時に鳴らす音である。

一方、ニュウはこの不快な音から大いなる喜びを感じ取った。なにか大きなものが大いに喜んでいる。ニュウはそう直感した。そしてそれは限りなく正解に近い答えだった。途中の式が無いことで説得力がそぎ落とされてこそいるが、個の事実認識としては完全解答だといえた。

ガンマはすぐにシグマの元へ行き、状況を説明した。腕にクシーがぶら下がっているのがシュールであった。

「大将、こいつはツチクイモドキだ。それも、巢を張ってやがる。」

場合によつては——」

「いや、いい。どうするのが最適だ？」

シグマは即座にそう聞いた。部下を頼ることを恥じる人格など彼は所持していなかった。使えない部下もまた彼は所持していなかった。ガンマはぽかんと一瞬^{ほう}呆けたあと、口を閉じてニヤリと笑った。彼は説明した。

「まず、シノビを走らせて助けを呼びましょう。奴らは好戦的な暴食家だ。勝てそうな生き物を見つけたら何でもかんでも殺して巣穴に持ち帰る。ここが見つかったら——」

「待て。なら先に手紙を書く。エータ、用意を。ラムダ、おまえはシノビを——そうだな、ササノハを呼べ」

シグマの指示に二人が走る。その僅かな間^{あいだ}さえもシグマはガンマから説明を聞き、質問をした。エータが紙とペンを持って現れると、シグマは奪うように受け取り、風のような速さでペンを動かした。

その間^{かん}もガンマの話を聞くことはやめない。やがて二番目に足の速いシノビ、ササノハが現れた頃には、彼は状況を完全に把握し書状も包み終えていた。やってきた赤毛の女にシグマは文の筒を渡した。「これをジソの街のアカデミーへ。ロカニ王女殿下か、騎士のヨゾラ君に直接渡し、いまずぐ読めと伝えろ。なにか言われるようなら『フェイベリオスを知っている』と叫べ。周りの全員に聞こえるようにだ。それで駄目なら争ってでも渡せ」

できるか、とシグマは聞いた。命にかえても、とササノハは答えた。彼女が窓から出ようとするとき、シグマはその背中に命じた。

「必ず戻れよ……必ずだ」

血を吐くような声だった。ササノハはぴたりと動きを止め、小さく頷き闇に消えた。

もはや見えぬシノビの背中をシグマは眺め続けた。『この世界』に落とされてよりこれまで、目的のため、関係した全ての人間を利用して生きていきた彼は、しかし一度身内と定めた者にはとことん甘かった。異常なほどに。仲間が害されでもすれば、加害者の身内

すべてを害してしまうほどに。そんな彼を仲間たちがどんな目で見ているか、彼は知らない。知りたいとも思わない。想われずとも想っていればよい。彼はそう考えていた。――それだけに、仲間を危険な場所に送るのは骨ごと身を切られるような思いだった。

拳を強く握り、立ち尽くすシグマの背中をラムダは黙って見つめた。あらゆる才能をもって生まれたラムダにとって、何の才も無く頂点に立つシグマは光そのものだった。彼の過去をラムダは知っている。敗北と足掻きの繰り返しを隣で見してきた。血の滲むような努力を一瞬で踏み潰され、それでも歩き続ける男の姿をいつも隣で見してきた。その眩しさにラムダは憧れた。いつしか男は仲間を増やし、国と争うまでになった。そんな男のはじまりの理由をラムダだけが知っていた。

『あいつら、おまえを魔王にしやがった。僕の友達を――虐めやがった！』

かつて友であり、今や従僕となったある男――ラムダのための復讐。

そんなものが、シグマの出発点だった。

そのために《予言の絵本》を出し抜き、《遠見の水晶》の目を掻い潜り、復讐に役立つ全ての『魔王』を救済ゆうかいしてきた。何度も失敗したけれど、攫さらうと決めた者だけは必ず攫いだして進んできた。その男が今また苦しんでいる。仲間のために苦しんでいる。

ラムダにはそれが苦しく、誇らしく、そして眩しいのだった。

もうやめようと言えない自分が苦しく、言っただとしてもやめなかつたの友が誇らしく、そうして最後までまっすぐ歩き続けるであろう主人が眩しいのだった。

万感の思いでラムダが見つめる先、ニューがシグマに近付いてゆき、その大きな握りこぶしを両手でそっと包み込んだ。シグマはい

つもの気の抜けた顔をつくり、ニュウを見下ろした。

「どうしたんだい」

シグマが訊ねる。

「わかるもん」

ニュウは言った。

「わたし、シグマが痛がってるの、わかるもん」

ニュウは花のように笑い、シグマは悲しげに笑い返した。

そんなことはないよ——その言葉はどうしても出てこなかった。

シグマはまだ知らない。

彼の心の深い部分で、この少女が既に身内としてカテゴライズされていていることを。

「わたし、ずーっとシグマのそばにいるわ。ずーっとよ！」

少女の場違いな告白に、男は慰めと癒しの光を見たのだった。

「おい！ エータの野郎、肉おとしてやがる！ 勿体ないだろうが！ 俺から勝ち取った肉をよ！」

シグマたちから離れた位置。静まり返っていた部屋の真ん中で、タイミングを見計らったように研究部のリーダーが落ちた肉を拾って食べた。

居間は爆笑に包まれた。



★慰めの少女／ニュウの独白

シグマとラムダと、ひみつの約束をしました。
ラムダはたいちようさんでした。すごい！

わたしはちゃんとラムダに、ありがとうってお礼を言いました。

わたしとシグマとラムダと、三人仲良しで、お約束です。
約束をしたから、わたしはラムダのことを誰にも言わないのです。

よる、みんなでご飯をたべるとき、山のほうで大きいのが喜んでました。

むずかしいのはわからないけど、大きいのはあぶないんだって。

シグマはとおいところにお手紙を書きました。シノビのお姉さんが持って行きました。

シグマはやさしいから、お手紙のお姉さんのこと、心配みたい。

わたしもすごく心配です。

わたしは、シグマが悲しいのはイヤだなあと 생각합니다。

シグマはやさしいのに、やさしくないことを言うから心配です。

シグマは痛いときも、痛くないよっていいいます。

わたしはシグマと夫婦なので、シグマの心を抱っこしてあげたいです。

大きいのが来るかもしれないから、今日からはあんまりお外に出ちゃダメです。

シグマがダメって言いました。

大きいのはあぶないことするんだって。

わたしは、大きいのもわたしたちも仲良くすればどんぐりだなあと思いました。

ねむたくなってきたちゃった。

もう寝ようっと。

9. 籠城

「シグマ、これも？」

「それもだよ」

「シグマ、これは？」

「それもだよ」

「ぜんぶこわすの？」

「ああ、全部壊すんだ。全部ね」



「気をつけてね？」

「うんっ！」

「こぼさないようにね？」

「うんっ！」

「重かったら言うのよ？」

「うんっ！」

幼女と少女が廊下をゆく。ニューとクシーだ。二人はサイズの違うたらいを抱えて風呂へと向かう。クシーが大きいたらい、ニューが小さいたらい。それぞれ七分目まで水が入っていた。

どんぐり屋敷の女風呂は特殊な構造をしている。特殊といえば聞こえはよい。要は井戸から遠いのである。男風呂は外にあるが、女風呂があるのは屋敷の中なのだ。男風呂が竹の水路によって井戸のポンプから直接水を入れられるのに対し、女風呂は外の井戸と屋敷の中の風呂を往復して水を貯めなければならなかった。風呂の支度はメイドの仕事である。この仕事がいちばん面倒だ、というのは屋敷のメイドの総意であった。なにせ屋敷の女風呂、大人の男五人が

ゆうゆう入れるほど広いのだ。メイドたちはこの仕事の担当者を毎日『じゃんけん』で決めていた。今日負けたのはクシーだ。妹分のニュウは彼女の『おてつだい』をしているかたちであった。ニュウは、『お風呂じゃんけん』では負けなしだ。彼女は、みんなどうしておそだしするのかしら、と不思議に思っていた。

今は早朝である。平時であれば風呂に水を張るのは夕方だが、ある理由により、きのうから厠などやむない事情を除いて日暮れ以降に屋敷を出ることは禁じられていた。

風呂に水を貯め終わると二人は土間に向かい、『かめ』からオレシジ水を一杯ずつ汲み、飲んだ。リーダーのファイにも黙認されている『お風呂当番』の秘された特権であった。ニュウが『おてつだい』を申し出たのもこれのためである。彼女は逞しく育っていた。

「今日は十よりいっぱいの数の足し算引き算です」

「わたし、ゆび、10本しかない……。そうだわ！石っ！」

「ふふん。なんとわたしは指も石も使わない方法を知ってるのです」

「くりをつかうのね！」

「栗もジャガもなにも使いません」

「すごい！おしえて！」

居間で『おべんきょう』をするニュウとクシーを見つめ、ガンマは微笑ましい気持ちで口元に笑みを浮かべた。笑みが髭でわからず、その怖い顔と巨体が相俟って熊が獲物を狙っているようにしか見えないのはなかなか不憫な話であった。このときクシーはガンマの視線に気づいており、彼を意識していつもより上品に微笑んでみたり、無意味に腰をくねらせてみたり、胸を寄せてみたりもした。これはニュウを笑わせ、ガンマに首を傾げさせるだけの結果に終わった。クシーはガンマの反応を「効果あり」と見ていた。こちらもある不憫な話であった。

奇妙な動きをするクシーを不思議に思いながら、ガンマはシグマの書斎へ向かった。居間を出てすぐに「ガンマさん、きつと照れち

やったんだわ。キャー」というクシーの声が聞こえた。ガンマはますます首を傾げた。



書斎ではシノビを除いた戦える者たちが集まって会議を開いていた。ツチクイモドキが現れたときの対策を考える会議だ。ガンマはノックをし「遅れてすまん」と言って部屋に入った。書斎にはシグマ、エータ、ラムダ、ファイ、そして研究部の人間が二名いた。アカンナ王国でかつて『魔王』や『化け物』にされた者たちが暮らす屋敷とはいえ、そのすべてが暴力に分類される力をもっているわけではない。例えばクシーの『意識して目をとじている間は誰からも視認されない』という能力のように、極めて限定的な場面でしか役に立たない力を持った『魔王』も多かった。攻めてくる魔物を相手に戦える類の技能を持った人間は一握りなのである。

「話はどこまで進んですか？」

席に着いて早々にガンマが聞いた。

「バリケードを張ることは決まったよ。いま、それ以外をどうするか話し合ってたところ。ガンマはなにかいい案、あるかい？」

通常運行の気怠げな顔でシグマが言った。

「ぱりけえど？」

ガンマが聞き返す。エータが答えた。

「大将の故郷の言葉で、防柵のことだそうなんです」

研究職二人の案は、予め玄関以外の全てをバリケードで封鎖してしまう、というものだった。そうすれば魔物は馬鹿正直に正面玄関だけを攻めてくるだろう、と。

「不便にはなりますが、命がかかっていますから、そこは我慢してもらわんと」

この案で行けば研究部で開発した『炎の瓶詰め』や『冷気の瓶詰め』などを二階三階の窓から投げることで非戦闘員も攻撃に参加できる、というのが彼らの主張だった。エータがこれを支持した。

一方、この案に異を唱えたのはラムダだった。バリケードはいいが、研究部の『魔法の瓶詰め』は数が少ない。戦えない者は予め街にでも逃がしておくべきだ、というのが彼の主張だ。実際、シグマが発案し研究部が開発した『魔法の瓶詰め』は呪文を唱えず誰でも使えるという利点はあるが、材料が高価なため在庫はそれほど多くない。くわえて威力も、同じ効果をもった魔法を放つより弱かった。勿論、弱いといっても人間の頭を吹き飛ばすくらいのことはできる。しかしそれがツチクイモドキに効くかは不明だった。魔物の中には魔法を食べるものもある。ツチクイモドキがそれであつたら餌ではない。

ツチクイモドキは、五年ほど前にここスズカゼ王国で発見された、珍しい魔物だ。この場でツチクイモドキと戦ったことがあるのはガンマ一人だけだった。ガンマは魔法を使わない。かつてツチクイモドキに襲われた時も、彼は斧で頭を叩き割って仕留めた。そのためガンマにも、ツチクイモドキに魔法が効くかどうかはわからなかった。ガンマは中立を宣言しながらも他の案はないかと考えた。

ファイは中立だった。彼女の場合はそうならざるを得なかった。それというのも、彼女は魔法剣士のラムダやエータとも、怪力自慢のガンマとも違い、完全な魔法特化タイプなのである。魔法の効かない敵が相手では、他のメイドと同じでまったく役に立たない。しかし彼女は、もしツチクイモドキに魔法が効くならば屋敷の誰より戦果をあげられる自信があつた。彼女のつかう『かみなり』の魔法は一瞬で敵を炭にする。聞けば、ツチクイモドキはガンマより少し小さいくらいのも——つまり体長2メートルほどの、巨大な虫だという。ガンマはそれを「頭を叩き割って仕留めた」と言った。ならば敵はかなり硬いのだ。ガンマが本気で斧を振るったにもかかわらず『真つ二つにした』や『叩き潰した』と言わなかったのだから。そ

んな相手であれば自分こそが最も役に立つだろう、とファイは思った。彼女の『かみなり』の前に敵の硬さは意味を持たないのだから。この場の誰とも違う作戦を提案したのはシグマだった。彼の案は『全ての出入口をバリケードで封鎖して籠城する』というものだった。これにはラムダを除く全員が難色を示した。

「むう。大将のことだからなにか考えがあるんでしょうが、俺は……。ちょっと考えさせてください」

「籠城となると、食べ物の問題が重要ですよ。ファイさん、今ある分でどれくらい保つか、わかりますか？」

「屋敷から出ないんじゃ、森でイノシシや鳥を獲ってくることもできないんでしょう？ そうなると、せいぜい一週間……ううん、五日かな」

「肉が食えないのかあ……。まあ、仕方ないか……」

「くわえて風呂もなしですよ。あ、大将。厠はどうするんです？」
いやあ、と彼は言った。

「籠城って言っても、今日これからバリケードを作って、明日一日引き籠もるだけだよ。水は女風呂にでも貯めておけばいいし、トイレ——厠は空き部屋を使えばいい」

シグマはへらりと笑い、茶を啜った。ラムダが目を細める。彼は「増援を待つのですね」と言った。そういうこと、とシグマは答えた。

「一日待って彼が来ないようなら、その時は——」

——この屋敷を捨てようと思ってる。

シグマはそう言った。

ラムダを除くみなが絶句した。その様子を眺め、シグマはもういちど茶を啜った。静寂の中、ずずず、という音がいやに大きく響くやがて彼は言った。

「玄関以外にバリケードを張って、ガンマみたいな強い奴だけが外で戦うとするよね。よしんば相手が思いのほか少なかったでしょう。それならまあ、勝てるだろう。どنگり屋敷の勝利だ。……けどさ

あ、連中、巢を持ってるんだろう？その巢の中には奴らの女王様がいるんだったね？女王様を一人残して全員で攻めてくるなんてこと、すると思うかい？しないよ。何匹かは残るに決まってる。その時点で僕らは負けてるんだ。襲ってきた分を返り討ちにしたらって、女王を殺さない限り奴らは永遠に増え続けるんだから。この先ずっと怯えて暮らすなんてのは、おじさん御免だよ」

「なら」とエータが言った。「こっちから巢を探して――」

「馬鹿を言うな」とガンマが言った。「探して見つかるようなものじゃない」

エータがしゅんと黙り込む。

「見つかったとしても、巢の中に入り込んで女王を殺すっていうのは、僕らじゃちょっと難しいんじゃないかなあ」

シグマは薄く笑った。

あの、とファイが言った。

「ここを出て、どこに行くんでしょう？」

意図せず声が震えた。彼女や他のメイドにはこの屋敷を出ても行き場所がない。『大将』が仲間を捨てるとは思えないが、心のどこかに不安はあった。しかしシグマは言った。

「みんなでルフオーの所に行こうと思ってる」

彼は『みんなで』の部分強調した。

「彼女の屋敷はモルイの壁の外だから、一日もあれば着く。彼女のところなら今よりいい生活ができるよ。特にラムダなんか、頼めば何でも買ってもらえる」

「あの魔女かあ……」

「あの人かあ……」

「俺あのひと苦手なんだよなあ」

「得意な人なんかいませんよ」

ファイがほっと表情を緩め、男性陣がいつせいに顔を顰めた。ラムダなど柄にもなく涙目になっていた。シグマは苦笑して言った。

「まあ、それも増援が来なかったらの話だよ。――誰か、異議のあ

る人いるかい？ いなければこの方向でいこうと思うんだけど」
手は挙がらなかった。
会議は終わり、バリケード作りが始まった。



「ばりけえど、ですか？」
「ああ。これからみんなで作るそうだ。庭に集まってくれ」
「了解です。あ、ガンマさんお髭にほりがついてますよ？ わたしがとりますね」

「む。自分で——」
「あん、もう。動かないでくださいよう」
「むう」

「まりけえど？」
「窓や出入口を塞ぐんだと」
「うそ、バケモン来るの？」
「来ねえようにするんだよ」

「まぐにーとー？」
「おう、たしかそんな名前だったと思う。要は薪だの椅子だので化け物が入ってこねえように柵を作るのさ」

「テーブルもか？」
「テーブルもだ」

「机は？」
「机も^{たんす}箆^{たんす}もベッドも全部だ」
「勿体ねえ」

「命の方が大事だろ。ぜんぶ捨てっちまえ」

「おい、庭に集まってくよ。大将が呼んでるらしい」
「なにすんの？」
「らぶにーと、だっけ？そんな名前の作戦をやるんだとよ」
「ふうん」
「なんか、全てを捨てて引き籠もる、とか聞いたけど」
「なにそれこええ」



★ニューウの日記

9 + 4 = 13

1 1 + 1 1 = 2 2

1 2 + 1 9 = 3 2

きょうは わたしは みんなで まほめつとをつくりました。
まほめつとは てーぶると いすと つくえと こわしました
つくった。

まほめつとは おおきいのが はいらないから つくりました。
わたしは いすを なれました たくさん。

たのしかった とても。

わたしは きょうは みんなで いっしょにねます。

わたしは しぐまといっしょ ねます。

おじいちゃんは ひとりで ねます。

くしーは がんまと ねれようと できなかったでした。

くしーは あせりすぎたんだあ いいました。

くしーは まくらを ばいおれす しました。

みんなが おんなじで おへやで いっしょにねます。

わたしは たのしくてよいなあすごく とおもいます。

おやすみなさい。

10. 風の時

「シグマ」

「——」

「シグマ」

「——」

「……わたし、しあわせだわ」



「おい、どうしたんだ。さっきからそわそわして」

「小便したくてよ」

「してくれればいいじゃねえか」

「だってよ、まほめつとのせいで——」

「ばりけえどだ」

「まぐねつとだろ」

「まぐにーとーだよ」

「らぶにーとじゃなかった？」

「パンツエッタだったと思うが」

「それだ」

「それだよ」

「それだな。——で、パンツエッタがどうしたって？」

「ああ、パンツエッタのせいで外に出られねえから厠に行けねえ、
つて言おうとしたんだ」

「あん？なに言ってるんだ、空き部屋でやるって決めたじゃねえか。
おまえ聞いてなかったのかよ」

「聞いてたさ。聞いてたがよ、まだ誰も行ってねえじゃねえか。厠

でも川でも林でもなく、床の上で小便しようってんだ。俺のあとに誰も行かなかったら、俺だけが屋敷を汚したことになるだろうが。

最初の一人にはなりたくねえよ」

「おまえは本当に馬鹿だなあ」

「なんだと」

「さっきから何人の女が小便やりに行ったと思ってんだ」

「メイドたちのことか？それとも研究部のパイか？部屋を出たのはそんだけだぞ。俺はちゃんと見てた」

「そいつらぜんぶだよ。それとニュウちゃんもだ」

「メイドたちは毛布の余りが無いか探しに行ったんだろう？ニュウちゃんは見習いだから一緒に行くのは当たり前だ。パイの奴だって、でけえ声で『あたしも手伝います』って言ってたじゃねえか」

「そりゃおまえ、かもふらんすだよ」

「なんだよ、かもふらんすって」

「大将の生まれ故郷の言葉で、誤魔化すとか偽装するとか、そういう意味のアレだよ」

「メイドたちとパイが何を偽装してたってんだ」

「廁だよ」

「あん？」

「だから、連中もおまえと同じで、床小便一番のりにはなりたくなかったんだよ。それでも小便はしたかった」

「えっ」

「だから毛布を探しに行くなんて口実でやりにいったのさ。パイの奴はあれでも女だ、氣付いたんだろう。もしかしたらあいつも我慢してたのかもな。それで手伝うなんて言っただけだったんだ。だいたい連中、戻った時に何も持ってなかったろうが。少なくとも俺の部屋には毛布があるぜ？一枚も無かったなんてことはねえさ。或いは、小便のときに敷いたのかもな。直接やったら床が傷むし、匂いがつくから」

「そうだったのか……。よし、じゃあ俺も毛布を――」

「馬鹿野郎。同じ手を使う奴があるか。それに一人で行ったら目立つぞ。俺と一緒に行ってやる」

「おまえ、なんていい奴なんだ。俺はおまえのことを誤解していたよ。てっきりただの助平だとばかり」

「いいってことよ。それじゃあ、俺の言葉にちゃんと乗っかれよ？」
「おう」

「よし。――さーて、ちよっくら酒でもやりに行くかな。部屋に隠してあったのを忘れてたぜ」

「お、俺も行こうかな！俺も、部屋に隠してあった気がする！」
「っ！？――俺もだ！俺も隠してあった！」

「っ！？――なんだよ、おまえもかよ。俺もなんだよなあ」
「っ！？――よう、一口くれよ。いいだろ？」

「いやあ、おじさんも飲みたくなっちゃったなあ。なんちゃって。
はっはっは」

「ほんと、男って馬鹿ねえ」

「馬鹿ばかり」

「なんのおはなし？なんのおはなし？」

「言い訳をせずこの機に堂々と立ち上がるガンマさん……素敵だわ」

「ねえ、なんのおはなし？ねえったら」

「なんでもないわ、ニュウ。もう寝ましよう？」

「むうう」



バリケード完成から一夜明けた朝、ニュウはシグマの腕の中で幸せな目覚めを迎えた。平時であれば、彼女は朝シグマの部屋へ行き、布団に潜り込んで『だっこ』をする。それで充分に幸福を噛み締められたものだが、何事にも上には上があった。『夫』の腕の中で目

を覚ますことがこんなにふわふわした気持ちになるものだとは知りもしなかった。ニュウの幸福の上限が更新された瞬間であった。大幅なバージョナップである。これが『ふうふのあい』なんだわ、と彼女は思った。一方シグマはよだれを垂らしていた。

もうすこしだけ、とニュウは願った。眠気以外の理由から、彼女は今のままの姿勢を保っていたかった。即ち、シグマに抱かれる幼い子どもの構図を。しかしニュウはすぐさまシグマの腕を抜け出した。シグマを起こすのは彼女に与えられた仕事だ。それを放り出してまで欲望を優先させたいとは思わなかった。正確にいうなら、思いたくても思えなかったのである。闇の底から救い出され、家と仲間と幸福を与えられた彼女は、たとえ小さな要素であっても『ここにいらなくなる可能性』を作ることが恐ろしくて仕方がなかった。そんな彼女に『おしごと』を放棄するなどという思考があるはずもない。

ううん、とシグマが唸った。ニュウは小さな手で彼の頬に触れた。それはあまりに自然な動きで、彼女自身もなぜそんな行動をとったのかわからなかった。

「シグマ」

彼女はそっと呟いた。ううん、と彼はまた唸った。彼女はもう一度「シグマ」と呼んだ。

怖いくらいに幸せだった。

少しだけ泣きたくなった。

彼女以外まだ誰一人として起きていない大広間。ニュウは一瞬だけ――ほんの一瞬だけ寂しげな笑みを浮かべて愛する彼を見つめた。その表情はすぐに消える。よし、と彼女は言った。そうしていつもの明るい笑顔で、いつものように彼を起こす『おしごと』を開始するのだった。

ジャンピング・ボディプレスによって。

◆—◆—◆

「そういえば、一昨日、妙に機嫌が良かったじゃないですか。あれ、なにがあったんです？」

「聞きたいの？」

「聞きたいです」

「ふふふ。いいわ。あのね、一昨日の朝、あたしの勇者様から手紙が届いたの」

「勇者様あ？あははは。ファイさん、いい年してそれはちよつと——」

「ふんっ」

「痛い！」

メイドたちが雑談をしながら荷物をまとめていく。時刻は夜。ササノハは帰っておらず、増援が来たとの報せもまだなかった。明日の朝になっても来なければ、このどنگり屋敷を捨て、モルイの街のルフォー邸まで旅立つ手筈になっていた。

ファイはこの屋敷で九年を暮らしている。仲間たちと一緒にであっても、ここから離れるのはつらかった。どنگり屋敷そのものが彼女にはもう一人の仲間であるように思っていた。魔物なんて死ねばいい、と彼女は思った。思って、はっとした。それは九年前に彼女の親や、暮らしていた村の人間が、彼女に向けた言葉だった。

おまえなんか死ねばいい。おまえなんか、いなければよかったんだ。

好きでこんなふうに生まれたわけじゃない。彼女は何度もそう思った。それは魔物も同じなのではないのか、と彼女は思った。

ファイは溜息をついた。疲れているんだ、と思った。冗談じゃないわ、とも。たった一日普通でない暮らしをただだけで心がまいっ

てしまっている。笑えない話だった。

「——なにかくる」

ふとニュウが言った。

メイドたちとシグマがいつせいに彼女に目を向けた。誰かがごくりと喉を鳴らした。

クシーが言った。

「ニュウ、どうしたの？」

ニュウは玄関のほうに目をやる。そうして言った。

「なにか……すごく大きいのが来るわ」

「大きいのもって、まさか魔物!？」

クシーの言葉にメイド一同は騒然となった。しかしニュウは首を横に振った。

「ううん、ちがうわ。にんげんよ。にんげんだけど、すごく大きい。……こんなに大きい生き物、はじめて」

ニュウが瞳を大きくして扉の向こうを見つめる。クシーにも、他の誰にもニュウの言わんとしていることはわからなかった。クシーは聞いた。

「大きいって、ガンマさんみたいに背が高いつてこと？」

「ちがうの。そうじゃなくって、『なかみ』が大きい」

「なるほど」とシグマが呟いた。

「もしかして、増援ですか？」

クシーが聞く。シグマは頷いた。

「たぶんね。——ニュウ、その人は人間なんだね？人間だけど、普通じゃない——信じられないくらい強い人なんだね？」

「つよい?……うん。そうかもしれない。とっても大きくて『濃い』わ」

「そうか。来てくれたか」

シグマは笑って何度も頷いた。メイドたちも、いつの間にか聞き

耳を立てていた広間の仲間たちも、みなほっと安心した顔をしていた。

ニュウだけが黙って扉の向こうを感じ続けた。

それは大きな生き物だった。体長ではなく存在が大きな。

ニュウは、確かにそれが人間だとはわかるのに、その生き物が人間であるとは思えなかった。信じられなかったと言い換えることもできる。こんなものが人間であっていいはずがない、と彼女の未熟な常識が告げていた。しかしその認識こそシグマとまったく同じものであった。

シグマもまた、『彼』を人間だとは認めたくなかった。

やがて彼は庭に到着した。それをニュウは感じ取った。ここでようやくもう一人の存在に彼女は気付いた。

「シグマ、もうひとりいるわ。大きいもののほかに、普通のニンゲンが一人いるの」

シグマは嫌な予感がした。

しかして屋敷正面玄関前のバリケードが吹き飛ばされた。正確に表現するなら、『蹴飛ばされ』た。それをニュウは感じた。感じ取ることのできない仲間たちも音と振動でわかった。魔物対策のために設置したバリケードが、一撃のもとに壊され、排除されてしまったのだと。屋敷の何人かは、シグマの話を聞いていたにもかかわらず魔物が来たと思い込んだ。

シグマは玄関に向かった。ニュウがトテトテとそのあとに続く。

シグマは彼女をとめなかった。

やがて扉は開いた。

現れたのは二人の人間だった。

一人はシグマと同じく黒い髪の青年、もう一人はクシーと同じくらしい背の、赤い髪の少女である。青年が少女を抱いている。

シグマはその場に跪いた。

真似したほうがいいかしら？と思いつながらもニュウは青年の方が気になって仕方なかった。青年の異常なまでの存在感が。ニュウは

青年をじつと見つめ続けた。青年の方もまたニューに興味をもったようだった。

黒髪の青年は赤髪の少女をおろした。

そうして赤い髪の少女は言ったのだった。

「遅くなったなシグマ・ユニー。スズカゼ王国が王女、ロカニ・アキト・スズカゼ——我が恋人ヨゾラと共に貴殿らを助けに参った」

11. 光

「——おまえなんかいない——」



男女と男女が向かい会い、屋敷にたった一つ残されたテーブルを挟んで座っている。片方はシグマとニュウ。もう片方はスズカゼ王国の王女ロカニとその騎士ヨゾラだ。ニュウはシグマの膝に座り、対抗するように王女は騎士の腕を抱き、しなだれかかっていた。

「まさかキミが来てくれるとは思わなかったよ。それも、王女殿下を連れて」

「弟子をやってもよかったんですが、我が主が行きたい行きたい言うので。刺激に飢えているんですよ、いつだってそうだ。俺なんかは退屈なくらいが丁度いいんですが」

「同感だ。僕も争いごとは苦手だよ。賑やかなのは嫌いじゃないけれどね」

「男と女の違いでしょうか」

「どうかなあ。おじさん、女心とか、さっぱりだから。ところでサノハは？」

「明日には着くんじゃないでしょうか。俺のスピードについてこれなかったので、置いてきました。責めないであげてくださいね。彼女、頑張っていましたから。俺があと三人、いや五人ひとを背負って

いたなら、かなりいい勝負になっていたと思います。それくらい速かった」

「……………」

「それにしても、老けましたね、西熊にしぐまさん」

「今はシグマだよ。シグマ・ユーニだ」

「失礼ですが、いくつになりました？」

「三十六になるよ。いや、もうなったか？まだかな。ヨゾラ君は？」

「さあ。もう忘れましたよ。繰り返しすぎて。西熊さんよりは若いはずですが」

「シグマだよ。シグマ・ユーニだ」

「本当……相変わらずですね」

「そういうキミも変わらない」

「変わりましたよ。愛を知りました」

「そういうところも変わらない」

「ふむ、おぬしが新しい魔王もどきか。小さいのう。まだ子どもではないか。いくつじゃ？申してみい」

「9才よ。あなたはいくつ？」

「妾わらわは今年で十六になる。『ちきゅう』ではようやく結婚できる歳じゃ」

「ちきゅう？」

増援としてやって来た騎士ヨゾラとシグマが神妙な様子で、王女ロカニとニューが楽しげな雰囲気それぞれ話しているその様子を、どنگり屋敷の住人たちは固唾を呑んで見守っていた。とりわけエータとラムダの二人は額に汗し、恐怖さえ感じながら一人だけを見つめていた。エータの憧れた男、ラムダを負かした男——生きる伝説、騎士ヨゾラを。

エータはちらとラムダを見やった。仲間以外の者がシグマに近づくの嫌い、いつでも近くに控える彼は、しかし今ヨゾラをじっと見つめるばかりでシグマの隣に行けずにいた。そんなラムダの気持ちがエータにはよくわかった。怖いのだ。直接見たわけではないが、

エータはラムダと騎士ヨゾラがかつて勘違いから決闘をしたことがある、という話をガンマから聞いていた。ガンマが審判をつとめ、そして彼の目の前でラムダは負けたのだという。しかしエータはそれだけならば、驚きこそすれ、そのことに恐怖を感じたりはしなかっただろう。ラムダさんも人間だ、上には上がある。時には負けることもあるだろう。エータはそうに納得した。彼は未だに仲間うちでガンマとラムダにだけは勝てずにいるが、自分の目の届く範囲が世界の全てではないと知っていた。しかし事實は残酷だった。ラムダの負け方だ。彼は試合開始と同時に気を失ったのである。殴られたわけでも、蹴られたわけでも、魔法をつかわれたわけでもなく、ただの一度も剣を交えぬままに彼は倒れた。敵意を向けられたことが恐ろしすぎて気を失ったのだ。エータはその事実に恐れ慄いた。

——ラムダさんほどの人が、戦いを恐れたんだ。

——いや。ラムダさんほどの人だったからこそ、恐ろしさに気付けたんだ。

それを知った瞬間から、エータの中で騎士ヨゾラは神格化された。スズカゼ王国の王女ロカニとその騎士ヨゾラ。

エータは、ガンマに話を聞く前から二人のことを知っていた。勿論こうして見るのは初めてだが、噂に聞いていたのだ。曰く、スズカゼの王女は化け物を飼っていると。

アカンナの『魔王討伐』は自国だけの、言ってしまうえば小国のさやかな儀式殺人にすぎない。それは他国の識者にとっては軽蔑と物笑いの種でしかなかった。《予言の絵本》という類稀な魔導書を発掘しておきながらやっていることはそれかと。周辺諸国にとってアカンナ王国は歴史も浅く特産もない、おまけに軍事力もない、取るに足らぬ小国だ。未だ滅ぼされていないのは隣にスズカゼという強国があるからでしかない。そうでもなければすぐにでも攻めこまれ、古代文明の秘宝である《予言の絵本》を奪われていただろう。アカンナの『英雄王』や『勇者』など一步国境をまたげばただの資

産家でしかない、というのはアカンナの王家が民にひた隠しにする大陸の共通認識だった。

しかしスズカゼは違う。

スズカゼ王国は大陸一の軍事大国である。軍事魔法の研究は極めて盛んで、スズカゼで『勇者』とされる者などは、もはやその存在が軍事的抑止力であるとさえいえた。

そしていま、エータの視線の先でシグマと話しているのは、その『勇者一味』の反乱をたった一人で鎮圧したと噂される男であった。公式には、スズカゼ王国はその噂を肯定も否定もしていない。しかし王女の通う王立第二碩学院のある街・学術都市ジソで聞けば、街の殆ど全員が噂について肯定するという。彼ならそれくらいやるであろう、と。できるのではなくやるのだと。可能不可能で言うならば街の全員が答えるそうだ。できるに決まっていると。黒の騎士はそれほどに規格外の存在なのである。

勇者一味の反乱鎮圧以外にも、彼は数々の『事件』を一人で解決している。その全てに王女ロカニが関係しているということで、巡りの詩人や講師が今もこぞって彼の物語を語っている。その殆どが王女とのラブストーリーであった。

スズカゼという国にとって王女の騎士ヨゾラは最も新しい伝説なのだった。

「ねえロカニ、ちきゅうってなあに？」

ニュウが首をかしげて王女に訊ねる。王位継承権第一位に近所のおねえさん感覚である。シグマは薄く笑い、仲間たちはハラハラした。ファイが慌てて手を振り「おいやめろ！おいやめろ！」と合図する。ニュウは面白がって手を振り返した。ファイはやさしくて楽しいから好きだなあ、とニュウは思った。すれ違いもいいところだった。

王女ロカニは呆れ顔でニュウを見つめ、やがてその頭を撫でた。ニュウは喜び、にへにへ笑った。「まったく酷いものじゃ」と王女

が言った。どんぐりズはいよいよ慌てた。しかし血は降らなかった。
王女は言った。

「こんなに小さな子を魔王などと……。やはりあの国は駄目じゃな。
好かん。――ユーニよ。あんな国さっさと滅ぼして、お主が王にな
ってしまえ」

どんぐりズは一斉にシグマを見た。彼は頭を掻き「あー……」と
口を開け、目を泳がせた。彼は言った。

「殿下。おそれながら、仰る意味がよくわかりません。何のことで
しょう」

「隠すでない。おぬしら《重苦の刃》はアカナを作り変える『て
ろりすと』なのであろ？ その同志は大陸中至る所に潜んでおり、我
がスズカゼだけでも五百にのぼるとか。《ユービンキョク》を影で
操っておるのもお主らしいではないか。知っておるぞ。妾の恋人は
隠し事をせぬのでな」

王女がニヤリと笑う。

屋敷住人はニュウを除いて一同に背に汗を掻いた。シグマはじと
じとした目をヨゾラに向けた。ヨゾラは目を逸らし「ばらさない約
束だったろうに」と溜息をついた。

――せめてレジスタンスと言ってくれ。革命組織《重苦の刃》の
大将シグマ・ユーニは胸中で呟いた。

安心せい。そう言って王女はいたずらっぽく笑い、手をひらひら
と振った。

「我らに牙を剥かぬ限りは言いふらさんし、邪魔もせぬ。なるべく
難民は出すなよ。あれは面倒じゃ」

「……ありがとうございます」

頭を下げながらも、シグマは複雑な思いであった。もしも、と彼
は思った。もしも自分たちの目標がアカナの民主化だと知ったら、
王女はどう思うのだろうか？ 王を必要としない国ができあがる。そ
んなことになれば、周辺諸国にも、勿論ここスズカゼ王国にも、少
なからぬ影響が出るだろう。シグマは溜息をつきたい気持ちをぐっ

と飲み込んだ。彼女たちとはいずれ敵になるのかもしれない。そう彼は思った。

「ねえ、ちきゅうってなあに？ねえ、ロカニ」

ニュウが王女の袖を引っ張る。王女は笑ってこたえた。

「争いと飢えのない豊かな世界——遠い遠い楽園の名じゃよ」

そんなにいい場所じゃない、とはシグマには言えなかった。



「それじゃあ、殺してきます」

騎士ヨゾラは王女を抱き、さっそく山へと向かって行った。王女を置いていかなくていいのかと聞くシグマに、彼は「俺の隣以上に安全な場所はない」とこたえて笑った。メイドの一人が「いいなあ」と呟いた。本気で羨ましがる声だった。「あたしの勇者様のほうが恰好いい」とファイが誰も聞いていないことを主張した。屋敷には普段の空気が戻りつつあった。

出発前、ヨゾラはシグマとニュウに一言ずつ声をかけた。

「俺は今からツチクイモドキを皆殺しにします。あなたに頼まれたからです。俺はあなたのために、罪もない動物を虐殺するんだ。そのことを忘れないでください」

「……わかってる」

シグマは頷いた。彼にも思うところがないわけではなかった。

ニュウもまた、ヨゾラにかけられた言葉に感じるものがあった。

「この茶番をもう二百回以上繰り返し返しているが、キミに会うのは初めてだ。——おそらくキミは、俺以上のイレギュラーなんだろう。色々と考えて行動しなさい」

意味はわからなかったが、ニュウはなぜか怖い気持ちになった。

少女はこくりと頷いた。

「まさかヨゾラ・ナツノが来るとはな」

ヨゾラと王女が屋敷を出ていくと、ガンマは大きく息を吐いて肩の力を抜いた。仲間たちも一斉に脱力した。中には座り込む者もあった。

「大将がヨゾラ・ナツノに手紙を書いたのは見ていたが、まさか本人が来るとは思いもしなかった。普通、弟子やなんかが来るもんだろう」

「王女様と二人でつてのがさらに驚かせてくれたよな」

「王女様めろめろだったな」

「それにしてもすごい迫力だった」

「ああ。威圧感が半端じゃなかった」

「片手で大木を引っっこ抜くらしいぞ」

「指一本で鉄を裂くと聞いた」

「何にせよアカンナ生まれの偽魔王じゃ敵わない、本物の化け物さ」

「お荷物背負って魔物の巣に突っ込むなんて、普通ならただの自殺だよなあ」

「背負うってどうか、抱いてたけどな」

「そもそも大将はどういう経緯いきさつであんな大物と知り合っただ？」

「そりゃおまえ、大将だからな。俺らには想像もできない壮大な物語があったんだよ」

——いやあ、生まれ故郷が同じってだけなんだけどねえ。

そんな言葉をシグマは飲み込んだ。盛り上がっているところに水をさすのは気が引けたためである。こうしてまた真実と認識の齟齬は加速した。のちにシグマはモルイの街で英雄ヨゾラの物語を聞くもう何度も聞いた話であったが細部が変わっていた。英雄ヨゾラには彼と同じく黒い髪のお師匠様がいる。そんな設定が追加されていたのだった。



前へ後ろへと首が揺れる。あぐらをかいたシグマの膝でニュウがうとうとと船を漕いでいた。王女とヨゾラが出てから三時間が経過していた。クシーとファイが毛布まで連れていこうとしたが、ニュウは頑として特等席を動かなかった。

「ほら、ニュウ、行きましょ。ちゃんと毛布で寝ましょ？」

「んうー……いやあ……」

「もう、ニュウったら。大将さんも困ってるわよ？」

「いやあ、いいよこのままで。ぽかぽかして悪くない」

気をつかったシグマのそんな発言は、ニュウの日頃の言動もあり、メイドたちの好奇心に疑惑の刺激を投げかけた。もしかして、ニュウの言葉は本当なのではないか？ 大将さんとニュウは本当に愛しあっているのではないか？ 噂好きな彼女たちはそう考えた。騎士ヨゾラの存在も理由の一つだった。彼女たちは物語の英雄を実際に目にしたことで軽い興奮状態にあった。

これ以後、メイドたちはニュウとシグマの仲を本格的に応援するようになる。シグマは可愛らしい秘書を得、ニュウはシグマと過ごす時間が増えたことを喜ぶのだった。

さて、そこから離れた位置。広間の隅でガンマとエータ、それに研究部のリーダー・タウがツチクイモドキの生態について話し合っていた。

「——しかし、雌が生まれねえってのは凄い話だなあ。雄が生まれねえってんなら、樹皮女や犬頭イヌツラコビト小人の一族、あとはまあ、青の民なんかがいるが、奴らは女だけで子を産める。言葉も話せず雌もない虫がどうやって子を残すんだ？」

「奴らは自分たちで雌を作れない代わりに、どんな生き物の雌にでも子どもを産ませることができる」

「え？待ってください先輩。それじゃあ、前に言ってた『女王を迎える』っていうのは？」

「そのままの意味だ。外から『迎える』んだよ。攫って巢穴に閉じ込めるんだ。奴らはそうして女王という名の産む機械を得る」

「そんな……」

「エゲツねえ話だ」

「そうしなければ子を残せないんだ。一概に非難することはできない。この世に善悪なんてものは無いと『義務教育』で教わっただろう」

「そりゃそうだが、直接に自分の身に関わる話となると別問題だろう。誰だって自分がいちばん大事だ。聞けばツチクイモドキってのはおまえよりちょっと小さいくらいだって言うじゃねえか。そうすると攫う種類は必然的に……」

「……まあな」

「どういことですか？」

「俺がむかし引き受けた依頼に、ツチクイモドキが捨てた古い巢の奥から娘を助けだしてほしい、というものがあつた。攫われた当時、娘は十八で、俺に依頼が回ってきたのはその三年後だった」

「その人は、いたんですか？巢穴の奥に」

「直接は見えていない。俺の役割は周辺の警戒だったんでな。そこで一匹のハグレと出くわしてやり合ったが、結果的には俺の仕事がいちばん楽だったと思う」

「助からなかったんですね。三年じゃ、さすがに死んでる」

「いや……生きてはいたんだろう。巢に潜った連中は『眠らせてやった』としか答えなかった。俺たちはその娘の首飾りを持ち帰り、依頼主には、彼女は既に死んでいたと報告した」

エータは絶句し、タウはがりがりと頭を掻いた。

「俺は人間だ」

タウが呟いた。

「善悪じゃなしに、そういう生き物の存在は、やっぱり胸糞悪く思

「つちまうよ」

そのとき、とつぜん笛の音が鳴り響いた。

シノビが緊急事態を知らせる笛だ。一同は一斉に立ち上がり、身構えた。みな一様に壁から離れ、広間の真ん中に集まった。

エータ、ガンマ、ラムダの三人はそれぞれ武器を持って外へと走った。遅れてシグマとファイも続く。そうして唯一バリケードが撤去されている正面玄関から庭に出た五名は、その光景を目にし、凍りついたように動きを止めた。

「先輩」

エータが言った。

「なんですか、あれ。先輩より少し小さいくらいって、言ったじゃないですか……」

屋敷に向かって迫り来る三体の『それ』をシノビたちが必死に牽制していた。

「ちがう……俺が戦ったのはこんなのじゃない」

ガンマが呆然と呟いた。

ラムダが無言で抜剣する。シグマも棒を構えた。

「ねえ、あれがツチクイモドキなの？聞いてたのと随分違うみたいだけど」

ファイが震えながら言った。

そこにいたのは、体長四メートルを超える巨大な虫たちだった。



ツチクイモドキの巣穴の奥、王女と騎士は揃って溜息をついた。

これまでの道には三メートルから、大きいものでは四メートルを超える巨大な虫が無数に転がり、しるべとなっている。全ての虫が的確に頭を潰されており、戦闘の形跡は一切なかった。

巢の奥には女王がいた。

それは巨大な虎だった。

虎の体には四肢がなく、黒や緑の粘液がぐるりいたるところに付着している。ヨゾラは苦々しい気持ちを噛み締めて近づいていく。虎は虚ろな目でヨゾラを見た。王女はウツと口を抑えて目を背けた。なるほど、とヨゾラが言った。

「どおりで虫どもがデカイわけだ。虎の王が虫の女王にされていたとはな」

虎は黙ってヨゾラを見つめる。騎士と虎の視線が確かに混じり合う。濁った目はヨゾラに告げた。殺してくれと。

ヨゾラは溜息をつき、拳を握りしめた。情を込めて彼は言った。

「一瞬で済む。痛みはないよ」

それは深い優しさの宿る声だった。

血が舞った。

「まるで洞窟じゃな」

外に出た王女は巢穴を振り返ってそうこぼした。地面に対して斜めにぼつかりと大穴があき、奥が見えないほど深くまで続いている。「ああ」とヨゾラが返す。三メートル、四メートルという大きさの虫が通るその穴は、もはや虫の巢穴と呼べる規模のそれではなかった。

「まったくもって嫌な仕事だった」

ヨゾラが言う。必死に生きている動物を作業で殺すのは心が痛んだ。

王女は苦笑し、そっと騎士に身を寄せた。

「仕事でさえないじゃろ。何一つ得るものが無いのじゃから。つらい思いをさせたな」

「国内での魔物騒動だ。国家公務員として黙ってはられないさ。……ああ、帰ったら風呂に入りたい。できれば熱い湯がいい」

「妾もじゃ。できればヨゾラと入りたい」

「できればってなんだ。いつも入ってくるじゃないか。やめろと言っても嬉々として。そのくせ熱いといって水を入れる」

「恋人とはそういうものであるからして」

「初耳だ」

「妾もじゃ。なにせ子どもの頃から恋物語が嫌いであつた。他人の色事にもまるで興味がもてぬ。妾にとって恋に関するものは全てそなたから貰った初耳、初体験なのじゃ」

「言ってくれる」

うれしいか、と王女が言う。

どうかな、と騎士が言う。

王女は笑い、騎士もまた笑った。

「だいたいヨゾラとて毎晩毎晩、妾の寝室に窓から侵入してくるではないか。一国の王女に夜這いとは何事であるかや。斬首ものの蛮行じゃ。ケダモノめ」

「恋人とはそういうものであるからして」

「初耳じゃ」

「キミだって俺を引き止めるじゃないか。夜明け前に去ってしまうのは寂しいと言って」

「……そういうことも、ないとは言わぬ」

「照れているのか？」

「ぬかせ」

「俺は照れている」

二人はじゃれ合いながら屋敷に向かった。

森を歩いていると、不意に、昼間のように眩い光が辺りを照らした。
まばゆ

ヨゾラは咄嗟に王女を押し倒し、その上に覆いかぶさった。状況は掴めない。しかし体が勝手に動いた。やがて強い光がおさまって

きた頃、ヨゾラは目を細めて顔を上げた。

樹々の向こう、屋敷の方向に光の正体があった。

それは夜の闇と雲を切り裂き、空まで続く光の柱だった。

「なんじゃ……あれは」

王女が呆然とつぶやく。

「わからない。でも、誰がやったかはわかる」

「ユーニか？」

「いや、西熊さんじゃない。あのイレギュラーの娘だ」

黒の騎士は赤の王女を抱き起こし、光の柱を睨んで告げた。

「彼女はおそらく——俺と同じ、カミヤドリだ」

12. 命の紐

遠方の空を見上げ、魔女は言葉を失った。

夜だというのに、モルイの街は人で溢れ返っていた。みんなが空を――そこから真っ直ぐ山へと走る光の柱を仰ぎみている。夜闇を突き殺す碧白の槍。天へと向かっているのか、天から落とされたものなのか。彼らはその光景のあまりの美しさと現実感の無さに、崇め、恐れ、或いは畏れて跪いた。老婆が大きく手を掲げ、母たちは子を抱きしめた。男たちは領主の館へ向かい、説明しろと声を荒げた。恐ろしいなにかが起ころうとしている。そんな予感が誰の胸の内にもあった。

そんな中、魔女であり魔法研究家でもあるルフォーは屋敷の屋根に立ち、ひたすらに光の魔力量を計測していた。

「百人？それとも千人分？こんなの見たこともない。どれだけの命を燃やしているの？いったいあそこでなにがおこなわれているのかしら……本物の魔王でも作ろうっていうの？」

行かなくては、とルフォーは思った。一刻も早くあの場所に行かなくてはならない。研究者としての彼女の性が唾を飛ばしてそう叫んでいた。



モルイの南東二十キロから先に広がるアカマ砂漠。その真ん中に、ポツリと一つ小さなテントがあった。側には二頭の馬と馬車があり、馬車には《ユキオト商連合》のマークが刻まれている。興奮する馬を撫でてあやしなから、青年は遠方の光柱にその心を奪われていた。

「なんと美しく、神々しい光……あれこそまさに女神の槍。あの先には美しい女神がいるに違いない」

諸国巡りの商人は陶酔の眼差しで光柱を眺め続ける。

のちにある少女に永遠の忠誠を誓う男の、はじまりの勘違いであった。



薄暗い部屋の中、蠟燭の灯りが端正な顔立ちを照らしなぞる。学術都市ジソの王立第二碩学院——通称第二アカデミーのとある研究室。一人の少年がはっと顔を上げた。

「なんだろう……？ なにか、ザワザワする」

少年は誰にともなくそうもらした。胸が熱い。なにかが始まる予感があった。

少年は急ぎ研究室を出て、職員寮の屋上へと向かった。屋上には先客がいた。彼は少年が近づくと振り返り、ニヤリと笑った。応用魔法学の非常勤講師、少年の師だった。少年は遠くに見える光の柱を見つめ、呆然とした表情で呟いた。

「先生。……あれは、何でしょう」

「私にもわからない。とてつもなく大きな力を持ったなにかだ、というくらいしかね」

「先生。……僕、あれが気になります。あれのことを、調べたくて仕方がない」

少年は師を見上げる。男は懷から干し肉を取り出し、噛みちぎった。やがて彼は言った。

「私も今、そう思っていたところだ」

◆—◆—◆
アカンナ王国の王宮。そのいちばん高い尖塔^{せんとう}のてっぺんに立ち、
金髪^{きんぱつ}の青年は目を閉じていた。

「参ったな」

彼は苦笑し、呟いた。

「これ、俺の百倍は強いぞ。あの人でも勝てるかどうか……」

育ての親、世にも珍しい黒髪^{くろかみ}の『大将』を思い、彼は大きく溜息をついた。

「まあ、頃合^{きりあひ}いつてことかなあ。ここもそろそろきな臭くなってきたし。俺は別に全然平気^{へいせい}だけど、ファイの奴は寂^{さび}しがつてるだろうし」

外套^{がいとう}をはためかせ、青年はまぶたを上げた。青い瞳^{ひとみ}があやしく光る。うん、と彼はひとり頷^{うなづ}いた。しかして遠く南の空を見つめ、青年は祖国への離反^{りはん}を決意^{けつぎ}するのだった。

「大将には食い物^{くいもの}でいいとして、みんなへの土産^{みやげ}は何がいいかねえ……」

この翌日、アカンナ王宮から勇者アルファが姿を消した。



大陸の外。遠洋の上空を一羽の大鷲^{じゆ}が飛ぶ。

——あれこそは我らの救い。

——永く夢見た救世^{きうせい}の灯^{ひかり}。

主人の命に従い、大鷲は微かに見える光の糸へと矢のような速さで向かっていった。



——突き飛ばされたことを覚えている。

ニュウは自分の前に横たわる男を見つめ、小さく「あ」と呟いた。何が起こったのか、彼女にはまるでわからなかった。ただ自分は無事であり、目の前には愛する男が死んでいた。

うつ伏せに倒れたシグマの腹の下から、じわりと血が広がり、土を潤^{うるお}してゆく。彼の命がゆっくりと逃げていく様子をニュウは確かに見た。彼女の愛した黒い髪^{くろい}の男は既に息がなかった。

周囲には二足歩行の巨大な蟻型甲殻虫が三匹と、仲間たちがいる。ラムダ、ガンマ、エータの三人が一匹を抑え、シノビ六名がもう一匹を抑え、残る一匹が四本の腕を揺らしてニュウとファイと、倒れたシグマの前に立っていた。

タウを中心に研究部の仲間たちが魔法の瓶詰めを投げるが、虫^{むしがた}型の巨大な魔物に、それは微塵も効果が無かった。

——突き飛ばされたことを覚えている。

ニュウを庇^{かば}ってファイが両手を広げる。ツチクイモドキがその様を無感情な複眼で見つめる。その複眼にナイフが当たる。続けざまに石が、茶碗が、花瓶がツチクイモドキの体に当たる。離れた位置からは屋敷の仲間が全員で物を投げ、虫の気を逸^{よそ}らそうと援護している。エータは腕に傷を負い、ラムダは肩で息し、ガンマは斧をはじく巨虫の硬い甲殻に舌打ちする。シノビたちは巨虫の関節と目を狙^{ねら}うが有効な攻撃はできずにいる。

そんな中、ニュウはただシグマだけを見つめていた。どうしてこんなことになっているんだろう、と彼女は思った。ほ

んの少し前まであんなに幸せだったのに、と。

——突き飛ばされたことを覚えている。

体が揺らされ目が覚めると、大きい生き物の気配が屋敷の庭にあった。ニュウはシグマを目で探し、広間から外へと出ていく彼の背中を見つけた。駄目だ、と思った。理由はわからないが、シグマを外に行かせてはいけない、とニュウは思った。

クシーが止める間もなくニュウは駈け出した。広間を出て、廊下を走り、そうして玄関を飛び出した。

そこに、体長四メートルの巨大な蟻が三匹いた。ツチクイモドキだった。

エータやガンマやシノビの皆が虫に向かっていくなか、「撤退しろ！屋敷に戻れ！」とシグマが叫んでいる。彼だけが冷静に「犠牲なしには勝てない」と判断していた。そして彼は仲間の犠牲を許容できる男ではなかった。

シグマは構えていた真っ黒な棒を膝に叩きつけて折った。すると棒から光が溢れ、庭にいる全員がシグマに気付いた。一度きりの使い捨て——魔法の棒を放り捨てると、彼は仲間たちに向かって呼びかけた。

「戻れエータ、戦うな！ガンマ、おまえもだ！ラムダ、ファイ、シノビも全員屋敷に入れ！争う必要はない！屋敷に入ってヨゾラ君を待つんだ！」

——突き飛ばされたことを覚えている。

そこからは全てが一瞬だった。

争いにならなかったことをニュウは喜んだ。そうして屋敷の中へ戻ろうとした。

撤退を開始した仲間の目が玄関にいるニュウをとらえた。

「ニュー、どうして！」とファイが叫んだ。
ニューが振り返る。

同時に三匹のツチクイモドキが一斉に跳んだ。その内の一匹がエータの頭上を飛び越え、屋敷の正面玄関前に着地した。ニューの目の前だった。

三匹は一斉に羽を鳴らした。それはあの不快な音だった。ガンマが顔を顰めた。ファイが耳を抑えた。そのどれよりも早くシグマが駆け出していた。

ツチクイモドキは、一匹がガンマとエータとラムダに襲いかかり、一匹がシノビたちに四本の腕を向けた。

最後の一匹がその複眼でニューをじっと見つめた。ニューは恐怖を感じなかった。ただ、大きいなあ、と思った。巨大な虫からは敵意を感じなかった。目の前の大きな生き物が自分のことを不思議がっていることだけを、ニューもまた不思議に感じていた。

羽を鳴らしながら、ぎぎぎ、とツチクイモドキは言った。その意味は、ニューにはわからなかった。だが話しかけられていることはわかった。

ここはあなたのおうちじゃないわ、とニューは言った。それは言葉ではなかったが、彼女はたしかに心でそう伝えた。ニューの目と虫の複眼がまっすぐに見つめ合った。虫は羽を鳴らすのをやめ、四本ある腕をすべておろした。ニューは微笑んだ。虫もまた笑ったように彼女には思えた。

そこに、シグマが飛び込んできた。

虫の感情の色があったという間に変わってしまったのがニューにはわかった。それは敵意であり、害意であり、「奪う」という意志の色だった。

「だめ！やめて！」

ニューは叫んだ。シグマがニューを突き飛ばした。虫が四本のうち一本の腕を持ち上げた。ファイが魔法を放った。青い光が何本も走った。それは虫の体に吸い込まれて消えた。

「そんな……」

ファイが呆然とつぶやいた。

ブツン——と音がした。

ニュウは地面を転がった。ぴちゃり、と彼女の頬に温かい液がかかった。それは血だった。ニュウは顔を上げた。そこには背中に穴を開けたシグマが転がっていた。ラムダが絶叫した。

シグマは瞳孔の開いた目でニュウを見つめ、僅かに口を動かし、そして眠った。

彼の最期の言葉は「逃げろ」だった。

「あ」

ニュウの口から意味を成さない音が漏れた。

「ああ、あ」

ぎぎぎ、とツチクイモドキが『言った』。

屋敷の中から仲間たちがそれぞれ武器になりそうな物を持ち、飛び出してきた。

彼らは横たわるシグマを見つけ、一様に顔を歪めた。

争いが始まった。

ニュウはただ、シグマを見つめ続けた。

ファイが自分を庇うのも、仲間たちが自分を助けようと動いてくれているのも、少女にはわからなかった。

「だめって、言ったのに」

やがてニュウが呟いた。それは感情のない声だった。

「やめてって——言ったのに」

無表情で呟くニュウの頬を涙がつたい、雑草の上にこぼれ落ちた。ぎぎぎ、とツチクイモドキが『鳴いた』。

ニュウは立ち上がった。そして少女はファイに守られた位置から、ツチクイモドキを虚ろな目で見つめた。

「かえしてもらおうから」

少女が言った。

「シグマを——かえしてもらおうから」

ニュウは何も無い宙空に右手を伸ばした。そこにはこの世で自分だけが見ることのできる『ユラユラ』がある。大気と植物にだけ見えていたそのゆらめきが、今はツチクイモドキの体からも無数に、風になびく紐のように流れ、揺れているのがわかる。

見える世界の全てに紐があり、それはゆらめき、漂っていた。石も、木も、草も、花も、人間もツチクイモドキも。今やニュウにはその全ての紐が見えていた。世界が『ユラユラ』で満ちている。シグマの死を強く感じた瞬間から、それははつきりと少女の目に見えるようになっていた。見えてしまえば嫌でもその意味は知れた。

それは命だった。

ニュウは、この『ユラユラ』に触れることで、知らずに命を食べていたのだ。かつて彼女がユラユラを意識して触ると、それに繋がっている木は枯れた。命をニュウに捕食されたことで死に、存在を終えたのだ。そういうことが彼女にはできた。できるということをいま理解した。それは誰にも説明できない理解のカタチだった。

ニュウは無数にゆらめく紐の一本に狙いを定めた。それは薄茶色の紐だった。少女はそれに手を伸ばした。そして紐に触れ、かつてそうしていた以上に強く『食べたい』と意識し、それを掴み、握り潰した。それは目の前のツチクイモドキに繋がる紐だった。

「ギイイイイイイイイイイイ！」

ツチクイモドキが突然、絶叫し、倒れた。大質量が地を叩き、どすん、と大きな音が鳴る。両手を広げてニュウを庇っていたファイが「ひっ」と声を上げ、慌ててあとずさり、ニュウを抱きしめた。

屋敷の仲間たちも、離れた位置で仲間を襲う他の二匹のツチクイモドキも、みな一斉にニュウを向いた。ニュウは無感情な声でただ一言、倒れた虫に向けて呟いた。

おまえなんかいない、と。



「いま……なにがおこったんだ」

「ニューちゃんが何も無いところに手を伸ばして、握りしめたら――」

「――ツチクイモドキが……死んだ？」

手のひらからツチクイモドキの命を食べたニューは、しかし小さな声で「まだ足りない」と呟いた。

「ニュー、あんた……」

「だいじょうぶ」ファイの声を遮り、ニューは言った。「シグマは、わたしが、なおすから」

ファイに抱きしめられたまま、再びニューは手を伸ばした。

両手をすばやく動かし、無数の紐を、『食べないように』引っ張る。

彼女の世界は今やゆらめく紐に満ちていた。どこにも繋がっていない空気の紐を引っ張り、石に繋がる細い灰色の紐を引っ張り、森の木に繋がる緑色の紐を引っ張り、目当ての紐を紐でたぐり寄せる。そうして本体から引っ張ってきた薄茶色の二本を、ニューは強く握み、握り潰した。

庭に二つの絶叫が響き、二匹のツチクイモドキが絶命した。

それらと戦っていたラムダ、エータ、ガンマ、そしてシノビ六名は振り返り、握った両手を突き出したまま佇むニューを見つめた。

「ちくしょう……っ」

倒れたままのシグマに目をやったラムダが地面に座り込んだ。

ニューはファイの腕をほどくと、シグマの元に跪いた。

仲間たちが次々にシグマの元に集まりはじめる。

ニュウは目を凝らしてシグマを見つめた。シグマの体には紐が一本も繋がっていないかった。命の紐が、既に消えているのだ。

仲間たちが固唾を飲んで見守る中、ニュウは三度、虚空に手を伸ばした。ニュウに見える世界の中で、最も太く、最も輝きの強い紐――すなわち、ニュウ自身の紐を彼女は掴んだ。

そうしてその紐の先端をシグマの体に突き刺し、ニュウの命と接続した。

屋敷の仲間たちには、ニュウが手のひらをシグマの穴の開いた背中に当てただけにしか見えない。しかしその行為を誰もとめなかった。全員の心の中に「この子なら」という理由のない期待があった。シグマの体から、緑色の光の糸が一本、ゆらりとたちのぼった。

二本、三本と糸は数を増し、やがて数えきれないほどの糸が束になり、その束が光の渦となった。それは命の紐を見ることができない屋敷の住人たちにも見える、緑色の、小さな光の竜巻だった。誘拐初日にシグマのやけど跡を治しのがこれだと知っているのは、この場ではラムダ一人だ。しかし場の誰もがその温かい光に癒しの色を見ていた。

その小さな輝く竜巻を、ニュウはシグマの中に押し込み、『命令』した。

「なおれ」

光の竜巻が消え、シグマの体が薄く輝く。仲間たちは期待に顔を上げた。

しかしニュウにはわかっていた。これではまだ足りない。虫を三匹食べた程度では、『命の複製』にはまだ足りない。たりない。もっと。もっとたくさん食べて、シグマにあげなくちゃ。ニュウは両手を高く上げて世界を凝視した。

——ひつようなのは、シグマいつこぶんを、ゼロから作るだけの命……

構成情報は知れている。

素材を。もっと素材を。

ニュウは再び世界に『命令』した。今度は「あつまれ」と。

命の紐がニュウの周囲に集まってくる。ニュウはそこから、とりわけ無機物の命を選び、手を伸ばしてはそれを掴み、次々と手のひらで食べていった。庭の岩が突然まっぴたつに割れ、土が乾涸び、馬車がバキリと砕けた。大気が轟々と音を立て、高く上げたニュウの手のひらの上に光の竜巻があらわれる。それはぐるぐると回り、回ることにごんごん命を取り込み、強く光り輝いていく。頭がひどく痛む。やめろ、やめろと深いところで誰かが言う。それでもニュウは食べることをやめなかった。

たりない。たりない。まだたりない。

もっと。もっと。もっとたくさん。

『ニュウ。これ、どっちがハナコで、どっちがタロウだったかな？』

『いやあ。おじさん、焼き鳥には目がなくてね』

『こらこら、オレンジ水は一日一杯までの決まりだろう？』

ニュウの心の中をシグマとの思い出がポップコーンのように弾けて暴れまわった。

『ニュウの髪は素敵だよ。夕陽を浴びた麦畑の色だ』

『ああ、なんて素晴らしいんだ。僕は——キミが欲しい』

『ニュウっていうのか。可愛いね。可愛いキミにぴったりの名前だ』

とうとうニュウは有機物に——生き物にまで手を出した。

森の全ての木から少しずつ少しずつ、命を略奪していく。鳥から

も、獣からも、魔物からも、森のすべての生き物から少量ずつ命を掠めとっていく。

やがて目を開けていられないほどの光が竜巻に宿ったとき、ニユウは『食べる』のをやめた。これ以上は制御できない、これ以上は纏められない。己に許された限界の量まで命を集めた少女は、そこでようやく竜巻の回転をゆるめた。

『お嬢ちゃん、おじさんと楽しいところに行かない？』
『いきます。つれてって』

「シグマ。いま、なおしてあげるからね」
 呟き。見つめ。微笑む。

そうしてニューウは、その竜巻を。

彼女の紐と繋がるシグマの背中に、力いっぱい叩き込んだ。

[illegible]

命が暴走する。

生が捏造されてゆく。

ニユウとシグマを中心にして。

屋敷の全てを飲み込むほどの光が、天に向かって立ちのぼった。

13. それからのおはなし

「ひろおい！」

「ここが僕らの新しいお家だよ」

「どんぐりやしきよりも広いわ！すごおい！」

「はっはっは。そうだろう、そうだろう」

「ちよつと。ここわたしの家なんだけど」

「今日からここは『どんぐり屋敷二号』だ」

「すごおい！」

「ねえちよつと。ねえったら」



なんだこれは、と騎士が呟く。王女もまったく同じ気持ちであった。

黒の騎士ヨゾラと赤の王女ロカニが戻ると、どんぐり屋敷は瓦礫の山になっていた。

瓦礫の、かつて正面玄関だったあたりに皆が集まっており、中心にはシグマとニューウが手をつないで横たわっていた。

「何があった」

ヨゾラは若い男に聞いた。エータだった。

彼は「いや、あの」と目を泳がせた後、「先輩に聞いてください」とガンマに丸投げした。ヨゾラがガンマに目をやると、今度はガンマが目を逸らした。彼は言った。「ラムダに聞いてください」と。

いよいよきな臭い雰囲気である。ヨゾラはギロリとラムダを睨んだ。しかしラムダは真っ直ぐにヨゾラを見つめ返した。

「何があった」ヨゾラが言った。

「何も」ラムダが答えた。

周囲の仲間たちがゴクリと唾を飲み込む。このときラムダはいっぱいいっぱいであった。一方ヨゾラは彼らの放つ空気から『決意』を感じ取った。つまり、無理に聞こうとするなら戦争だ、という決意を。ヨゾラは溜息をついた。皆殺しにするのは容易い。しかし自分のいいものではなかった。ラムダが深く頭を下げた。

「王女殿下、ヨゾラ閣下。この度は我々をお助け頂き、ありがとうございます。謹んで感謝申し上げます」

うむ、と王女が頷く。ヨゾラが目を細める。ラムダは続けた。

「この御恩は必ずお返し致します。この先我らはずっと、命尽きるまでずっと、王女殿下の側^{がわ}でありたいと思っています。王子ではなく、王女殿下の側で」

交渉のつもりか、とヨゾラは思った。彼は言った。

「ラムダさん。俺は、なぜ屋敷が潰れているのかと聞いているんだ。さっきの光と関係があるんだろう？」

「ツチクイモドキが爆発しました」

「……………」

「……………」

嫌な沈黙が流れた。それはねえだろう！と仲間たちは一様に胸中で叫んだ。

「西熊さんの――シグマさんの服に穴が開いているのはなぜだ」

「転んで破けたのです」

「なぜあの二人は寝ている」

「遊び疲れたのです」

「ツチクイモドキが三体も死んでいるのは？逃したのはこちらの落ち度だった。あなたたちで倒せるような魔物じゃない」

「我々も日々鍛えておりますので、なんとか倒すことができました」

「無傷でか」

「いいえ。エータ君が肩と腕に傷を負いました」

「ツチクイモドキの死体が無傷だと言ってるんだ」

「そ、ういうことも、あるかと」

「屋敷を壊して天まで光をたちのぼらせるような爆発をしたのか」
「……そ、そういうことも、あるかと」

続け様のヨゾラの質問に対し、ラムダは死に物狂いでしらを切り通した。ニュウの力については隠しておいたほうがいい。全員で話し合い、そういう方向で動くことに決めたのだ。ラムダは中でも特にきびしい、王女と騎士への事態の報告という役目を一身に背負い、そして全うした。大事な『御主人様』の命を救ったニュウは、彼にとってもはや命の恩人よりも上位の存在であったからだ。最強の騎士はしぶしぶ納得し、王女はケラケラ笑った。この件でラムダは仲間たちから英雄のごとく褒め称えられることとなる。

「できれば、その娘のことは大事にしてやってほしい」

去り際、黒髪の騎士はそう言った。全てわかったうえで、それでもおまえたちの茶番に乗ってやるのだ、という様子であった。

「彼女が何をしたのかはおおよそ想像がつく。カミヤドリは狙われやすい。守ってやってくれ」

カミヤドリというのがなんなのか、わかる者はその場にいなかった。しかしわからずとも仲間たちは頷いた。彼らの思いは同じであった。即ち、当たり前だ、と。

しかして騎士と王女は――

「ヨゾラ、早く帰ってそなたに抱かれない」

「俺もだよ。俺も早く、キミを抱きたい」

――無敵のバカップルは、瓦礫の山を去っていったのだった。

あのあと、ニュウはすぐに気を失った。

屋敷を瓦礫にした光の柱がゆっくりと消えていくと、その中点には手をつないで眠る二人がいた。シグマとニュウだった。ニュウは

シグマが『新しい命』を得たのを確認すると、満足の笑みを浮かべて意識を手放したのだった。それを知らない仲間たちは「大将だけでなくニュウまで！」と誤解し、クシーなどは声を上げて泣いた。のちにエータとガンマは気付く。ツチクイモドキとの戦いで負った自分たちの傷が完全に治っていることに。

瓦礫の中から掘り起こした毛布で一夜を過ごし、太陽が昇る頃、ニュウは目を覚ました。

不寝番のガンマとエータが大いに心配し、ラムダとシノビたちは感謝の意を込めてニュウを胴上げした。その掛け声と笑い声で皆が起きだし、あれよあれよという間にお祭り騒ぎとなった。自分を中心に大盛り上がりの仲間たちを眺め、なんだかわからないけど楽しいなあ、とニュウは思った。

ひとりひとりから理由不明な『ありがとう』を貰ったニュウは、ただ一人お祭り騒ぎに参加しなかった男の元へとテクテク向かった。その後ろを仲間たちがぞろぞろとついて来る。やがて毛布にくるまった男の前まで歩くと、ニュウは仲間たちを振り返った。

「やっちまえ」

ガンマが言う。その隣でクシーが親指をたてる。

「やっちまえやっちまえ」

エータが笑う。

「御主人様もお悦びになります」

ラムダが頷く。

「あんたのお仕事だもんね」

ファイが苦笑する。

ニュウは「うん！」とにっこり笑うと、瓦礫になったどんぐり屋敷の偉大なる大将さまに、助走をつけてジャンピング・ボディプレスをぶちかましたのだった。

「シグマ、朝よ！えいっ、えいっ、えいっ！」

毛布から「むぐうつ！」と声が上がる。

「ニュー……痛いよ。おじさん死んじゃうよ……」

丁度その時、シノビのササノハが戻って来た。

彼女は息を切らしながら仲間たちのもとまでよろよろ歩き、そしてぼそりと呟いた。

「なんで、屋敷、ないんですか？」

瓦礫の庭は爆笑に包まれた。



「やあルフォー。相変わらず綺麗だね」

「あらユーニ。相変わらず覇気のない顔ね」

「突然なんだけど、僕らをここに住ませてくれないかな」

「本当に突然ね。事情を聞きましょうか」

「こんな大きな屋敷に一人だなんて寂しいだろう？ 使用人もいないそうじゃないか」

「事情を話して、ユーニ。話はそれからよ」

「ラムダを貸すよ。好きに使ってくれていい」

「事情が先よ。勿論ラムダちゃんは貰うけど」

「どんぐり屋敷が潰れて、住むとこなくなっちゃったんだ。いや、参ったよ。はっはっは」

「……………えっ？」

それは青い屋敷であった。

夜である。少ない荷物を壊れかけの馬車二台に積んだどんぐりズ一行が、魔女ルフォーの屋敷を訪れていた。どんぐり屋敷が文字通りの意味で吹き飛んだためである。モルイの街の外周部、囲郭都市

の壁の外側に建つ大きな屋敷。今はその門前でシグマとルフォーが交渉しているところであった。

「それは、一昨日のあの光と関係があるのかしら？」

青い髪 of 美しい魔女——かつてこの国の王の娼であった女が言う。シグマはわざとらしく肩をすくめた。

「そのことでキミに聞きたいことがあるのは事実だ、とだけ言っておくよ。なあ、中に入れてくれないかな。小さな子どももいるんだよ」

「子どもは嫌いだわ。だって若いもの」

「キミだって若いじゃないか」

「ユーニ。たしかあなたには借りがあったわね」

「そんなものは大したことじゃない。たかだか命を救ってあげた程度のものじゃないか。まったくもって、キミはそんなこと、気にするべきじゃあないね。もしどうしても気になるというのなら、そうだね。僕らに壁と屋根をお提供してくれる、というのはどうだろうか？それでチャラにしようじゃないか。家事はうちの子たちに任せてくれていい。みんな優秀だよ」

「それは素敵ね」

ルフォーは妖艶に微笑した。

どんぐり屋敷二号、誕生の瞬間であった。

「よし、許可が出たぞ。みんな入れー」

十日後、青の魔女はその生涯でただ一人、彼女を凌駕する才を持った弟子をとることとなる。

弟子の名前はニューウといった。



★愛想う者／ニューウの独白

どんぐりやしきが壊れちゃったので、ルフォーのおうちに来ました。

いんせきっていうのが落ちてきて、壊れちゃったんだって。ルフォーのおうちは、大きくて、青くて、カッコいいです。

わたしは青が好きです。黒はもっと好きです。

ルフォーはまじよです。シグマが言ってたの。まじよ！すごい！

それから、ルフォーはとってもきれいです。ファイよりです。

わたしは、きれいなお姉さんいいなありたいなあ、と思います。どうやったらきれいなお姉さんになれるか聞いたら、ルフォーが甘いのをくれました。

「うふふ。素直なお嬢ちゃんにはキャラメルをあげましょう。この世界には殆ど無いものなのよ」

きやろめろは甘くてクニクニしておいしかったです。でも齒に付いた！

ルフォーのおうちでもわたしはメイドさんです。

メイドさんのふくはおむねのところがひらひらしてるから、わたしは好きです。

ルフォーのおうちでは、わたしとおじいちゃんのお部屋は、べつべつになりました。

一人でいっこのお部屋なんて、お金持ちの人になったみたいです。わたしは、うれしいけど、おじいちゃん寂しくないといいなあと思います。

おじいちゃんは、だいじょうぶだいじょうぶ、と言いました。

おじいちゃんは、わたしのことが大好きです。

わたしもおじいちゃん大好き！

おじいちゃんは、さいきん、ふわふわしてます。

わたしは、ずっとおじいちゃんといっしょでうれしいなあと思います。

ルフォーのおうちに来てから、シグマがまえより、もっともつとやさしいです。

シグマがやさしいと、わたしはうれしくなって、おなかにもにします。

ルフォーのおうちでは、シグマのお部屋は2階です。

わたしのお部屋も2階です。

わたしは、朝ぎゅってするのがくできるからいいなあと思います。

わたしは、こんなゆめみたいなのが、ずっとつづけばいいなあと思います。

わたしは、シグマとクシーとファイと、メイドみんなと、ガンマとエータとラムダと、タウト、みんなみんな仲良しで、みんなみんなずっといっしょだとうれしいなあと思います。

わたしは、げんきです。



「ねえ、シグマ」

「なんだい、ニュウ」

「わたし、シグマのこと、好きだわ」

「僕も——いや、おじさんもニュウのこと、大切に思ってるよ」

「シグマが『ぴんち』になったら、わたしが助けてあげるわ」

「嬉しいことを言ってくれる」

「もしもわたしが『ぴんち』になったら、シグマは助けてくれる？」

「もちろんさ。ニユウを助けないなんて、考えられないよ」

「それはなぜ？わたしのこと、好きだから？」

「なぜって。そんなの、単純な話だ」

「なぜ？」

「僕は、身内には甘いのだ」

【魔王誘拐】

第一章・了

14. おつかい

「空飛ぶ少女が出たわ！」



「空飛ぶ少女お？」

茹でたジャガを潰しながら、青年は素っ頓狂な声を上げた。
夕食どき、支度したくの最中のことだった。

「おうとも。外周の屋敷に出るらしい」

父親が脅すような声で言った。

何を言ってるんだこいつは——青年は胸の内で溜息をついた。この男の怪談に付き合わされるのはこれで何度目になるだろうか。青年はじとじとした目で父親を見つめた。少なくとも両手両足の指では足りないだろう。髭の本数でもおそらく足りない。子ども相手の仕事で疲れているのに、毎度毎度、頷いて聞いてやる自分は親孝行という言葉の体現者であろうよ。そんな風に彼は思った。父親の怪談はどれもありきたりでつまらなく、そしてなにより話し方が下手だった。

「こいつは俺が独自の経路で仕入れた話なんだがな」

お決まりの語り出し。父親は話しはじめる。

またかと青年は思う。青年の父は独自の経路が大好きだった。大概の場合、それは隣の老人の愚痴や肉入りスープ屋の売り子からの又聞きなどであり、話の多くが信憑性にかけた。

父親がその話を聞いたのは巡りの語り屋からであったという。

それは最近、北門広場の市の入り口を稼ぎ場に行っている声の良い

語り屋であった。彼は若い女が好む話、たとえば英雄ヨゾラとロカニ王女の物語などをいくつか情熱的な調子でうたいあげた後、おまけのように、囲郭都市モルイの最新の怪談——『空飛ぶ幼女^{のち}』の怪談を語ったのだった。

曰く、空飛ぶ幼女はモルイの街の壁の外、
アウトモスト 外周村落の《青色屋敷^{あおいろやしき}》に住んでいるという。

青色屋敷と云えば、かの有名な魔女《青のルフォー》の屋敷だ。
青のルフォーは四年前まで王の愛妾だった女である。ルフォーは何をしでかしたか、四年前より、一級都市への——即ち壁を持つ囲郭都市・城塞都市への出入り一切を禁じられていた。噂では、彼女はモルイの街壁の外側に巨大な屋敷を建て、そこで霞を食んで暮らしているとのことであった。霞が主食かはともかくとしても、屋根も壁も青く塗られた大きな屋敷が壁の外にあり、そこで魔女が一人静かに暮らしていることは事実だった。門番も使用人もいない屋敷に住んでいるのは美女ひとり。そんな場所に不逞の輩が押し入らないのは、偏^{ひとへ}に屋敷の主人が魔女だからであった。青のルフォーに害なす者は丸まらないダンゴムシに変えられてエビ反りの目に遭う、というのが街で多くの者に信じられている噂なのだ。

さて、二十日ほど前^{はつか}からその屋敷に客が住み着いた。

それは三十人ほどの珍妙な団体だった。ときおり数人のメイドが西の大門を超えて買い出しに来るのが目撃されるくらいで、彼らの素性は街の人間たちにはまるで知れなかった。外周村落^{アウトモスト}の住民の証言から、最近の青色屋敷は昼も夜も騒がしい、ということは本当とされている。真実その団体は屋敷に住んでいるのだ。彼らの多くは魔女ルフォーと同じように、昼も夜も屋敷とその庭だけを生活環境としているようだった。不健康な話であるが、しかし近隣に住む者たちはみな、魔女の客であるからと納得していた。

ある時、外周村落^{アウトモスト}にひとつの噂が流れる。それは次のような内容

だった。

青色屋敷には空飛ぶ少女がいる。

俄には信じがたい話である。目撃者は村の女だった。^{にわか}

「見間違いないんじゃないわ！真昼間のことよ。あたし、ケムリなにかやってないんだから！」

女は語った。

女はその日、青色屋敷の近くでキノコをとっていた。当初はそんなところまで行くつもりはなかったが、高く売れるキノコがぼつぽつと群生しているのを見つけ、欲が出たのだ。ふと気づくと女は屋敷の側^{そば}まで来ていた。森の木々が隠れ布となり、ちょうど庭の方からは見えにくい位置だった。別段、深い理由があったわけではない。怖いもの見たさとか、金持ちの暮らしが気になったとか、その程度の動機だ。女は木陰からこっそりと鉄柵の向こう――庭の様子を眺めた。庭には小綺麗な格好をした六人のメイドがいた。一人などはまだ十そこそこと見られる子どもだった。彼女たちは楽しげな声をあげ、お喋りをしながら大量の洗濯物を庭に干しているところであった。

しかし、その方法が異様だった。

噂では、青色屋敷には三十人以上もの人間が暮らしていると聞く。いかにも、女には洗濯物の量が、三十人分といっても決して誇張にならないだけあるように思えた。大量の洗濯物を間隔をあけて干すためには広い空間が必要になる。屋敷の庭は確かに広かったが、趣味なのか、いたるところに石像が置かれており、洗濯物を干すには向いていなかった。

しかし、メイドたちは全ての洗濯物を、それぞれきちんと間隔をあけて干していた。方法は口で説明すれば簡単なものだ。庭の木から木へと物干しひもを結び、そこにズボンやらシャツやらをかけていくのである。これだけであれば難しいことなどない。問題

はその高さだった。

庭の石像は、どれも大人の男が手を伸ばしたくらいの絶妙な高さで、必然、紐の位置はそれ以上の高さになる。それはちょうど、大人の男の頭の上にもうひとり男が立ったくらいの高さだった。当然、跳ねて届くような位置ではない。――そんな高さをメイドが飛んでいた。

「一番ちっちゃなメイドがね、洗濯物を持って飛ぶんだよ。ふわふわ、ふわふわって」

それは確かに飛行だった。跳躍ではなく飛行。まるで蝶のように、幼メイドはふわふわと空を飛んでいた。シャツを三枚ほど持ってふわり飛び上がり、それを干してまたおりてくる。降りた位置には別のメイドが干しやすい形に整えた洗濯物を持って待機している。絶妙なコンビネーションで行われる物干し行為を、女は口をあんどぐり開けて眺めた。

やがてふと、幼メイドが森のほうを向いた。ちょうど空に飛び上がったときだ。見えてはいないだろう、と女は思った。しかし空と陸で視線はしっかり交わった。幼メイドはにこりと笑い、そして手を振った。「こんにちは」。そんなふうに口が動くのが見えた。

女は慌ててその場を離れた。そうして村に帰り、森で見たことを食客に報告した。

「空飛ぶ幼女が出たわ!」

「その食客が語り屋だったってわけさ」

へえ、と青年は言った。なかなか興味深い話だった。

いつもの「家を飲み込む大蛇が出た」や「二足歩行のかい虫が虎を担いでいた」などの阿呆話よりはよっぽど現実味があるように思えた。

「語り屋が女から聞いたらしいんだが、その子の名前は『ヌーン』
っていうらしい」

「ヌーンか。変わった名前だな」

「他のメイドがそう呼んでたらしい。『ヌーン、終わったたらオレン
ジ水、飲みましょうね』って」

「空飛ぶ少女はオレンジ水が好きなのか？ちょっとイメージと合わ
ないな」

「いや。そこは、いっても少女だからな。そんなもんだろう。俺は
思うんだが……その子はもしかしたら、妖精なんじゃないだろうか」
「妖精って……あの妖精か？」

青年が言う。父親はああ、と答えた。

父親が言っているのは、これもまた街の噂の一つだった。モルイ
にある王立第三碩学院——通称第三アカデミーの校庭を夜な夜な妖
精が飛びまわっている。そんな、学生たちの間で有名な噂だ。これ
は他でもない、青年が教えた話だった。彼はアカデミーで基礎魔法
学の教員をしていた。

勿論、二人は妖精などというものの存在を信じてはいなかった。
彼らは『妖精のような魔法』を使う人間がいるのではないか、とい
う議論をかつてしたのだ。アカデミーで妖精の噂が流れ始めた頃の
ことである。空を飛ぶ魔法。それは未だ誰も発表していない魔法。
発表されたなら歴史が動くほどの魔法。魔法にたずさわる者ならば
一度は見る夢だ。父親が言っているのは、つまりそういうことだっ
た。

「アカデミーの妖精と空飛ぶ少女は同一人物だと俺は思ってる」
楽しげな様子で父親が言う。青年はふむ、と頷いた。今回ばかり
は、父親の怪談が面白いものと呼び込みそうな予感があった。

俺の推理では、と父親が言う。その先の言葉は知れていたが、青
年はあえて口を挟まなかった。父親の話に興奮している自分を青年
は自覚していた。

しかして父親は言ったのだった。

「――青色屋敷の空飛ぶ少女は、おまえの学校にいる誰かだ」



「見ろよ。今日も少女が飛んでるぞ」

「いつもより低いな。こりや一雨ひとあめくるか？」

「どうかなあ。おーい、ニュウちゃん！今日どうよ、降ふる？」

「わからなーい！でも、おなががぴちぴちするわ！」

「あー、こりや降るわ、雨」

「降るなあ。『ぴちぴち』の日は小雨こさめだっけ？」

「ああ。洗濯物いれるようメイド連中に言っところ」

「おーい、ファイ！今日ぴちぴちだぞー！」

「うそっ！朝は『くるくる』って言ってたのにっ！」

エプロンドレスの少女が空に浮かんでいる。

裸の男の石像が無秩序に配置された青色屋敷の庭。その上空を『おもしろさま』の指導のもと、今日もふわふわとニュウが飛んでいた。

「ニュウちゃん、そろそろ降りておいでー。キャラメルあるわよー」

屋敷の窓から青髪の女が言う。ルフォーである。自分のいる四階よりも更に高い位置を飛ぶニュウに彼女はひらひらと手を振った。

「はーいっ！」

元気に手を振り返し、にへにへ笑いながらニュウが降りてくる。両手に靴を持ち、手足をだらんと垂らして空中をゆっくり移動するその様子を、ルフォーはまるでミツバチのようだと思った。

やがてトン、と音を立て、ニュウは窓枠に着地した。ルフォーは

「おつかれさま」と言うと、袖から『森永』という謎の記号が印字された黄色の紙箱を取り出し、その中にある小さな四角い塊をひとつ可愛い弟子に与えた。ニュウは「ありがとう!」と喜び、窓枠に靴を置き、小さな塊の包み紙を剥がして口に入れた。甘いくておいしい。なんて素敵な味なのかしら! ニュウは思わずへら、と笑った。菓子である。名前をキャラメルという。ニュウはこれが大好きで、ルフォーと『おべんきよう』をするときには必ず一個もらうのだった。

ルフォーはゆったりした服の袖に紙箱を仕舞うと、いとおしむようにニュウの頭を撫でた。ニュウはえへへと笑ってルフォーの手に触れた。

「『飛行』に関しては、もうわたしに教えられることはなさそうね」「ほんとう? わたし、すごいっ?」

「ええ、凄いわ。飛行師は結界師と並ぶレアなもの。それが発現するだけじゃなく、才能もあるっていうんだから、ニュウちゃんは大したものよ。学校の先生にもなれるわよ? そうしたら一生食べていけるわ」

レアという言葉はわからないが、褒められていることはわかった。ニュウの夢は『およめさん』であるから学校の先生になるつもりはないが、それでも褒められるのは胸がふわふわして素敵な気持ちだった。

人間の扱う魔法は大きく五つに分けられる。時間干涉・空間干涉・自然干涉・人体干涉・精神干涉の五つだ。魔法の道に生きる者は大概がこの中のどれか一つの才能を持っている。人体と精神、空間と自然など、二つに干涉する力を持つ人間もいるが、そんな者は非常に稀で、まずもって国や力のある商家に囲われている。初日の検査でルフォーの見せた『飛行』を即座に再現し『工夫』までしたニュウは少なくとも空間・自然・人体の三つに干涉するだけの力を持っていることになる。これはルフォーに勝るとも劣らぬ素質であった。

ルフォーはすぐにニュウを気に入った。ニュウを虐げた村をなぜ滅ぼさなかったのかとシグマを責めたほどだ。優秀な者は優遇されなくてはならない、ルフォーはそう考えている。劣等が優等の上に立つことを許容できない人間なのだ。女だからという理由で優秀な王女が軽んじられるのは国民として許せるものではない、といって王子暗殺を企てた女である。王が恐怖するのも無理からぬ話だった。

「一応言っとくけど、それはまだ屋敷以外で使っちゃ駄目よ？騒ぎになっちゃうから。飛んでいいのは誰も見てない所でだけ」

「はあい！」

『おペンきょう』に魔法が追加されて以降、ニュウはめきめきとその才能を発揮していった。

切っ掛けはシグマだった。シグマはニュウの力を『心配』し、魔法研究家であるルフォーに相談した。その際、彼は『光の柱』の一件を仲間たちの証言も交えてルフォーに話した。ルフォーは興奮して言った。

「驚いた……それ、《神矢取り^{かみやどり}》よ」

「神宿り？」

「ええ、神矢取り」

「そういえば……よぞら君がそんなことを言っていたと聞いたな。カミヤドリは狙われやすい、とか。ルフォー、そのカミヤドリっていうのは何なんだい？」

シグマは聞いた。そうね、と言いルフォーは顎に手を当てた。彼女は説明した。

「《神矢取り》は、選ばれてしまった人間よ。あなたの世界の言葉でいうなら、『チェンジリング』が近いかしら？」

「妖精の取り替え子か？」

「妖精じゃなく、神よ」

生まれたときから『魔法では説明のつかない現象』を起こすことができる人間を魔法研究家たちは《カミヤドリ》とよんでいる。そ

してカミヤドリの起こす不思議な現象のことは《奇跡》と。魔法研究家の間では、カミヤドリは何らかの大きな力と繋がって奇跡を起こしているのだとする説が多数派だ。しかしてその大きな力は『神の矢』だと考えられていた。

この世界で一般的に神とされているのは『見えない矢を放つ大いなるもの』だ。

- ・朝起きるのは神の放った見えない矢が体をかすめるから。
- ・眠るのは見えない矢に意識を射抜かれるから。
- ・死ぬのは見えない矢に魂を貫かれるから。
- ・生まれるのは見えない矢が腹の中の子どもを起こすから。

神の矢を見ることができるのは生まれる前の胎児と死者だけとされている。

カミヤドリは生まれる前に母の胎内で見えない矢を掴んでしまい、世界から神と勘違いされた者と考えられていた。世界に神と思われるから、奇跡を許されているのだと。

ルフォーはニューに興味を持った。それというのも、カミヤドリは魔法を使えない、という話を、彼女は以前に専門家から聞いたことがあったのだ。しかしニューには魔法のもとなる力が確かにある。ルフォーの研究者としての血が騒いだ。魔法も奇跡も両方あつかうカミヤドリ——想像するだけで胸が踊った。彼女は企み、言った。

「ユーニ。カミヤドリの力は強大だわ。それと知られてしまえば色んな人や組織から狙われてしまう。《写本》だって動くかもしれない。だから、わたしがニューちゃんを鍛えてあげる。なにかあっても、最低限自分の身を守るように」

「ありがとう。頼むよルフォー。キミに相談してよかった」

完全には信用せず、けれども悪いようにはならないだろうという思いから、シグマはそうこたえた。結果としてそれは正解だった。

こうしてニュウの『おべんきょう』に魔法が追加されたのだった。

「さて、それじゃあニュウちゃんには単位修得の試験を受けてもらおうかな」

並んでベッドに腰掛けるニュウの髪をくるくるいじりながらルフォーが言う。ニュウは足をぶらぶらさせ「しけんー？」と聞いた。ルフォーはええ、とこたえた。

「これに合格したら次のステップに進んで、あたらしい魔法を教えます。シグマのお手伝いができる魔法をね」

「やるわ！わたし、しけんやる！」

はしゃぐニュウをルフォーは微笑ましく見つめた。

そうしてルフォーは告げた。近頃過保護な誰かが猛反対するであろう試験内容を、楽しげに。

「試験は、おつかいよ。モルイの街のアカデミーに言って、学長先生にあるものを渡してもらおうわ」

できるかしら？

挑発するようにルフォーが聞く。

対するはニュウである。

返答は明らかだった。

彼女は花のように笑い、答えたのだった。

「まかせてっ！」

14. おつかい（後書き）

総合評価2000を喜び、本日二話目。

15. 冒険前夜

「シグマ、聞いて！わたし、おつかいに行くの！」

「おつかい！？——あの……え？それは、うん？あれかな、ニュウ一人で行くのかな？」

「うんっ！」

「誰に頼まれたんだい？ラムダかな？いやあ、もしそうなら、はっはっは。おじさんちよっと色々と考えなくちゃならないなあ」

「ちがうわ、シグマ。わたし、たのまれてなんかないもの。これは『しけん』なんだから」

「試験？」

「しけんよっ！すごい？」

「試験って……いや、凄いよ。凄いけどさ、でもニュウ。キミには、そういうのはまだちょっとだけ、ほんのちょっとだけ早いんじゃないかなあ？勿論、できないと言うわけじゃないんだ。ただ、物事には順番ってものがあって。鳥だって最初から飛べるわけじゃない。

子どもの鳥は親鳥が飛ぶのを見て、羽の動かし方を練習して、それでようやく飛べるようになるんだ」

「わたし、もう飛べるわ」

「そのとおりだ。今のは喩えがわるかったね。おじさん失敗しちゃったよ。そうだな。つまり魚だって最初は泳げないわけで——」

「おさかながおよげなかったら、おぼれて死んじゃうわ」

「そのとおり。だから、僕が何を言いたいかというよね」

「うん」

「つまりだ。つまり、そう」

「うん」

「………気をつけて、行ってくるんだよ」

「はあい！」

◆◆◆
「ニューちゃんの尾行ですか？」

青色屋敷の屋根の上。シノビのナンバースリー・ササノハが言った。この国の王家の者と同じ髪色、赤をなびかせる女だった。

隣に座る短髪の男が「ああ」と頷く。シノビの副隊長・ナノハナである。時刻は昼過ぎ、昼食の最中であつた。

なんでも、とナノハナが言う。ササノハは茶を差し出した。

「ん、わるいな。——なんでも、魔女殿がニューに課した試験の内容が『おつかい』なんだそうだ」

「ああ、そういえばニューちゃん、ルフォーさんに魔法を習ってるんでしたっけ」

「ふよふよ飛んでるのが日常になってて忘れがちだがな」

「それをわたしたちが尾行するん？」

ナノハナはさすが、と茶を啜り首肯した。ササノハは首を傾げた。

「先輩。それは任務なんですか？ なにか、危険があるとか」

いや、とナノハナは首を横に振った。「そういう訓練をしよう、という話だ」と彼は続けた。

「知っての通り、ニューの『索敵能力』は凄まじいものがある。自室で大将閣下が『おつかい……尾行する必要が……』と仰られているのを聞いてな。俺たちはまだまだ未熟だ。そのことはツチクイモドキの一件でもわかってる。大将閣下がそうなさるように、俺たちもこの機を有効利用しない手はないと思ったんだ」

「なるほど、そういうことだったんですか。ニューちゃんのおつかいを知って、すぐにそれを訓練に役立てよう考えるなんて……閣下はやっぱり、只者じゃありませんね」

「隊長が崇敬するお方だからな。幸い、この屋敷には魔女殿がいる。彼女がいる場所が危険ということはまずないだろうから、俺たちは

屋敷を離れて訓練に専念できる。もしかしたらあの眩きは、俺が
ることに気づいていて、俺に向けて言ったものだったのかもしれない。
い。いや、考えれば考えるほどそうとしか……そうだ。閣下は虫ど
もとの戦いで役に立てなかった俺たちに思うところがあるんだ。か
といつて、閣下は仲間を切り捨てるようなおひとじゃない。それで
俺たちに訓練の機会を教えてくださいさったんだ。……そうか。あれは
俺たちシノビへの『めっせえじ』だったんだ。おまえたちの成長を
待つ、というめっせえじ。思えば閣下は頬に七粒のゴマをお付けに
なっていた。閣下がそんなみつともない真似をするなんておかしい。
気付くべきだった。七は隊長を抜かした俺たちシノビの数。あれは
隊長がいなくてもシノビ七人で力を合わせて成長せよという声なき
お言葉だったんだ。……くそつ。虫との戦いで隊長がいれば、なん
て——一瞬でもそんなことを考えた自分が憎いぜ」

風が吹き、沈黙が流れた。

実際には、彼らの隊長はラムダとしてその場におり、そして彼も
またツチクイモドキの変異体を相手に『盾』以外の仕事を果たせな
かった。ナノハナが聞いたシグマの独り言にしても、単にニュウを
心配しての眩きである。ゴマにいたっては彼の創作料理『ごまにく
まん』の食べかすである。そんなことなど知らぬナノハナは心に炎
を灯した。ここにもまた一つの、思いと思いのすれ違いが生まれる。
やがてササノハが、わたしは、と言った。彼女もまた悔しい思い
をしていた。

「わたしはその時……その場にいませんでした。虫との戦いで誰よ
り役に立たなかったのはわたしです」

手紙を届けた後、王女を抱いて走りだした騎士ヨゾラに、ササノ
ハは一瞬で置いていかれた。駿足が自慢の彼女は、しかし流れ星の
ような速さで小さくなる騎士をまるで追えなかったのだ。確かに往
路で全力を出したササノハの疲労は凄まじいものだった。しかしそ
れを差し引いてもあの黒い騎士より速く駆ける自信はなかった。あ
れは異常だった。そうしてササノハが屋敷についた頃、全ては終わ

っていた。虫は死んでおり、どんぐり屋敷は瓦礫の山になっていた。彼女は戦うことさえできなかった。

そういう意味では、あの一件で誰より辛酸を嘗めたのはこいつなのかもな、とナノハナは思った。

ササノハはちらりとナノハナを見上げた。彼はなにも言わず、遠く下の庭を見つめた。そこにはニュウがいた。しゃがんでちょこちょこ動き回っている。ナノハナはただ庭を見つめ続けた。人を慰めて満足するような男ではない。身内にはとことん厳しい男だった。ササノハにはそれがなんだか嬉しく思えた。

「成長してやる」

屋敷の庭で土をいじるニュウの頭を見つめたまま、ナノハナは硬いものを飲み込むように己に告げた。それは決意のこもった声だった。

「今回の『おつかい』——無駄にするわけにはいかない。俺たちはシノビだ」

はい、とササノハが言った。彼女は力強く頷いた。

「絶対に成長しましょう、先輩。隊長が帰った時に、驚いて腰を抜かすくらいに」

ああ、とナノハナが頷く。こうしてシノビの尾行訓練は決定されたのだった。

「俺たちはシノビ。俺たちがみんなを守るんだ」



「おちびのおつかいを尾行？ エータがか？」

「尾行っていうよりは、物陰からこっそり見守るって感じだろうな。張り切ってた」

「あー。あいつ、おちびに対して妙にお兄ちゃんぶってるところあるからな。心配なんだろ」

「ちよっと甘やかし過ぎな気もするけどな」

「そうなのか？」

「よく飴とか甘いもんやってる」

「甘やかしてそういう意味か。虫かっの」

「おい、虫の話はやめろ」

「……すまん」

「まあ、エータより年下の子っていったら、ニュウちゃんとクシーちゃんと、あとはパイぐらいしかいねえからな。パイはあんなだし、クシーちゃんに至ってはエータよりずっと大人だ。小っちゃい子を可愛がりたい、大事にしたいって気持ちもわかるよ。ニュウちゃんいい子だしな」

「おちびはいい子だぜ、ほんと。おちびぐらいのもんさ、俺の肩を叩いてくれんのはよ。ファイなんか茹で鍋もって『骨が砕けてもいいなら』とか言いやがる」

「なんだ、肩凝ってるのか？俺、叩いてやろうか。うまいぞ」

「男はお呼びじゃねえよ。ガキでもいいから女よんでこい」

「そりゃファイも嫌がるわな」

「けっ」

「しかしあれだよなあ。ニュウちゃんも、そのうち大人になるんだよなあ……。そうしたら男ができたりするわけだ。そのときは俺たちにも紹介してくれるんだぜ、きつと。『わたし、この人とお付き合っているの！』って元気よく、あの笑顔でさ」

「おいやめろ馬鹿野郎、そういうのやめろ。もみあげぶっこ抜くぞ」
「なんでだよ」

「そういうのは駄目だ！許さん！」

「おまえ、エータのこと笑えねえよ」

「俺のは親心とか親戚心とか、そんな感じだ。エータとは違う」

「おまえ、その理屈はちよっと――」

「おーい、ちょっと聞いてくれよ！」

「なんだあ？」

「なんだよ。おまえ扉にどんぐりの絵え描^かく許可は貰えたのか？」

「なんだよじゃねえよ。それどころじゃない。ローが帰ってきてるって話だ。おまえらもう聞いたか？」

「ほんとか!？」

「うっそ、いつの間に！」

「ああ、まだ聞いてなかったか。いやどうも、ファイが裏の森で会ったらしくてよ」

「久しぶりだなあ。半年になるか？今回はどれぐらい居^いられるんだ？」

「あいつ、特殊任務とやらで忙しいみたいだからなあ」

「どれくらいとかはわからん。ファイとちょこつと話して、すぐに森の奥へ行っちゃったらしいから」

「おうおう。女どもが騒ぐぜ、こりゃ。パイなんかべたべたにくつつきたがるぞ」

「ローは、あれちょっと、あの顔、ズルだからな」

「ズルだな」

「ズルだ」

「おまけに頭も人当たりもいいってんだから、世の中どうなってるんだか」

「あんな顔に生まれたら、俺なら間違いなく嫌な奴になるね」

「俺もだな」

「俺もだ」

「女遊びとか超するぜ。率先してする。道でちょっとしたでも可愛い子を見つけたらすぐに声かけてよ。そんでおまえらには『僕の恋人達を紹介するよ。ええと、一番は誰だったかな？』なんて自慢しちゃうね」

「それは顔がどうこうの問題じゃねえよ。生まれつきのクズだ」

「ファイの奴、なんか言ってたか？つまり……アレについてさ」

「ああ、言ってた」
「なんて？」

「ローの奴——また若返ってたってさ」



「これも入れるの？」

「うんっ！」

「これは要らないんじゃない？」

「いるわっ、ぼうけんなんだからっ」

「水筒まで持っていくの？」

「水がないと、さばくに行ったときにたいへんだもの」

「『かいちゅーでんと』まで持っていくの？」

「シグマがくれたのよ！これ、すごいんだから。ここを、こうやって押すとね——ほら見て、ピカって光るの！」

「もう、知ってるわよー。わたしも持ってるもの」

「おそろいね！おじいちゃんももらったって言ってたわ」

「大将さん、仲間みんなにそれと『ぼーさいせつ』をくれるのよ。ほんとう、綺麗よね。こんなにツルツルして滑らかで。おまけにピカピカ光って……これ、なにでできてるのかしら？」

「『しいる』におなまえ書いて、はったのよ！ほら、ここ！」

「ほんとだ。ふふふ。『にゅう』って書いてある」

二人の少女がいた。

ヒカリイシの灯りの下、桃色の小さな背囊はいのうに少女が次々と『ひつじゅひん』を詰め込んでいく。隣に立つもう一人の少女は苦笑しながらその様子を見守っていた。ニュウとクシーの仲良しコンビであ

る。時刻は夕食の片付けを終えてから二時間ほど後。ニュウの部屋でのひとこまだった。

おつかいの『しけん』を明日に控えたニュウは、その支度したくをこれでもかと楽しんでおこなっていた。楽しむことには真剣だ。楽しむとは、即ち「楽しい」の意を事物に付与する行為である。彼女は次々と楽しくなりそうな物、楽しいことに繋がりそうな物をシグマから貰った桃色の背囊、『りゅっくさっく』に詰め込んでいった。たのしいなあ、とニュウは思う。明日を楽しむための楽しい下準備であつた。

やがてそれが終わると、二人は居間に下り、それぞれの想い人と仲間たちに挨拶してニュウの部屋へ戻った。近頃ふたりの間で大流行の『おとまり』である。昨日はクシーの部屋だったので、今日はニュウが『ほすと』だ。日記を書き、水差しから『ねるまえのおみず』を飲み、くすくす笑いながらベッドに入る。ヒカリイシに布をかぶせ、ひとつのベッドの中、乙女たちは夜のおしゃべりに興じた。話題はクシーが服に施すおしゃれな刺繍のことであつたり、ニュウの『そらをとぶまほう』のことであつたり、青色屋敷の地下室のことであつたり、モルイの街の怪談であつたり、或いはそれぞれの『すきなひと』のことであつたりした。

「明日はいつ出るの？」

「九時のカネがなつたらよ」

「お昼はどうするの？」

「ルフォーがおかねをくれたの。輪銭りんせんが3こと、銅貨が1こ。銅貨はなにかあつたときのためだから、使っちゃダメなんだって」

「道はわかるの？」

「門をはいつてまっすぐの、いちばんおっきなたてものよ」

「危ない人に声をかけられたらどうするんだっけ？」

「『あおいろやしきのニュウです』って言うの」

「迷子になったら？」

「ならないわ。わたし『れで』だもの」

「れで？」

「おねえさんのことよ」

「おねえさんだって迷子になるよお。そうしたらどうするの？」

「そういうときは、しかたないから、飛んでもいいってルフォーが言ってたわ。とんでここまで帰ってくるの」

「そう。なら、安心ね」

「あんしんだわ」

クシーが笑い、ニュウもまた眠たげに笑う。下の階から誰かの笑い声がした。

ふとクシーは思い出し、尋ねた。

「ねえ。そういえば、どうして魔法の試験がおつかいなのか、ニュウは聞いてる？」

返事はなかった。ニュウは既に夢の世界へと旅立ったあとだった。クシーは微笑み、ニュウの体に毛布をかけ直すと、自分もまた口まで毛布をかけて目を閉じた。

さら、さら、と。

そんな宵の音が今にも聞こえそうな、月の小さな夜だった。



★ニュウの日記

あしたは、まほうのしけん、の、おつかいです。

わたしは、あしたが、たのしみです。とっても。

きょうは、まほうのおべんきょうは、しなかったでした。

それは、るふおが、いまはもうおしえることない、といったからでした。

きょうのおひるのあとは、わたしは、しぐまのおくつの、こす
のをしました。

それは、ふあいは、にゅううまくなつてはやくなった、といいま
した。

わたしは、うれしいとおもいました。すごくでした。

きょうのいまは、わたしは、あしたのじゅんびをしました。

あしたのじゅんびは、おつかいの、じゅんびです。

それは、くしーといっしょでした。

くしーは、にもつすくないほうがいい、といいました。

わたしは、すこしだけ、じゅんびをすくなくにしました。

わたしは、しぐまはしんぱいしてるなあ、とおもいます。

それは、わたしはあしたおつかいにいくから、だからでした。

わたしは、しぐましんぱいしてかなしいけどうれしい、とおもい
ます。

それは、しぐまがわたしがすきで、だからでした。

わたしはあしたは、しぐまにおみやげとる、とおもいました。

きょうのこれからは、わたしは、くしーといっしょでねます。

わたしは、くしーと、おはなししてねます。

わたしはげんきです。

おしまい。

16. 少年幻想

「そんなに荷物を広げて、何を探しているの？」

「ちよっと、服をね」

「でもそれって……ああ、もしかして彼の？」

「そういうこと。わかっているだろうけど、内密に頼むよ」

「あなたの強みは人脈と道具の数々、そして『秘密』ね」

「強い生き物の何が素晴らしいかって、争わずに済むことさ。弱者は偽装するんだ。キミにはわからないだろうけどね」

「あなたが弱者なら、この世に強者なんているのかしら？」

「キミがいる」

「ええ。弱者に救われたわたしがいるわ」

「そろそろ出るよ」

「過保護なのね」

「彼女には借りがある」

「嘘つき」

「嘘つきだって？」

「あら、怒ったの？」

「いいや。最高の褒め言葉だ」



「ハンカチ持った？ お金はちゃんとお腹のところにしまった？ 学長さんに渡すお手紙も持ったわね？ ——よし、それじゃあ行ってきたさ
い」

「はあい！」

白と黒のエプロンドレス。頭にはフリルのカチューシャ。背中に

は桃色の小さな背囊^{はいのう}。肩からは水筒を提^さげ、万端の用意を整えてニユウがゆく。装備の数が自信を生む。少女はいま、これまでの彼女の中で最強の彼女だった。心は軽く、しかし適度な緊張感がある。おつかい任務の開始である。ニユウは見送りのメイド仲間たちに手を振ると、屋敷の門を出て、街へ向かって歩き出した。

少女の背中が見えなくなった頃、シノビたちが動き出した。

「武器の手入れはいいな？ 存在の稀釈は万全か？ 匂いは消したか？ 術の装填もしているな？——よし、いくぞ」

「「はっ！」」

目立たない服装。わざと目立たないように施された化粧。背中には服の色と相まって目立たない灰色の背囊。その中には危険物の数々。袖の下には暗器を忍ばせ、抜かりなき隠密武装のもとシノビたちが往く。仲間への想いが覚悟を生む。彼らはいま、いつにもまして真剣だった。心は締め、緊張感を切らさない。訓練の開始である。シノビたちは仲間の暮らす屋敷に領くと、それぞれの配置に向かい音もなく走りだした。

少女の大冒険とシノビの尾行訓練はこうして始まったのだった。

屋敷の裏。木剣の素振りを終えたエータは芝に寝転がった。青空が眩しい。汗を掻いた体に風が心地よかった。

エータは憧れの英雄——騎士ヨゾラのことを考えていた。

どんぐり屋敷の『隕石落下事故』のあと、エータとラムダは山へ入り、虫の巣穴を見に行った。そこで見たのは想像を絶する光景だった。エータ、ラムダ、ガンマの三人がかりでさえ一匹も倒せなかったツチクイモドキが、死体となって巣穴の中に、そして周囲に、無数に転がっていたのだ。それらの死体は、体にはどこを探しても傷がなく、みな一様に頭だけを破壊されていた。酷いものなどは頭に手のひらの形の穴があいており、穴のまわりは摩擦熱で熔けてい

た。呆れたことに、あの騎士はガンマの斧をも弾く虫たちを、素手の一発で殴り殺していたのだ。エータは感動した。そんなことをなす人間がこの世に存在することを喜んだ。エータは言った。

「ラムダさん。頑張れば、僕もいつか彼のようになれるでしょうか」無理ですよ、とラムダは笑った。その笑みに平時のあたたかさは無かった。彼は震えていた。

「あれはあまりにも違いすぎる。見たでしょう？瓦礫の山に戻ってきたときのヨゾラさんを。汗ひとつ掻かず、返り血も浴びず、まるで散歩帰りのような姿で帰ってきた彼を。あんなものを目標にしてはいけません。あれはただ恐れ、畏怖すべき対象です。人の身では決して届かない」

エータはごろりと転がった。草が頬にあたり、チクチクした。そうなのだろうか、と彼は思った。本当に無理なのだろうか。努力もせずに諦めなくてはならないほど『違う』ものなのだろうか？騎士ヨゾラもまた、かつては今の自分のように必死になって修行をしたのではないのだろうか。こうして鍛錬を続けていれば、自分もいつかは彼の域に至ることができないのか？そんなふうのエータは思った。彼は知らない。強さを求めるという意味合いにおいてヨゾラが努力をしたことなど一度もないということを。若さゆえの全能感は残酷だった。のちに少年は自分の才能に絶望する。

「あれっ。おまえ、まだこんな所にいたのか」

ふいに声がかかる。

エータはよいしょと上体を起こし、声の方を振り返った。研究部のリーダー・タウだった。

「どうしたんですか、タウさん」

エータが言う。タウは「おう、いや」と頭を掻いた。

「おまえ、今日はニュウちゃんの『すとおきんぐ』するんじゃないかっただのか？」

「ええ。そうですけど」エータは首を傾げた。「それがどうかしたんですか？あ、もしかしてタウさんも行きたいんですか？いいですよ、別に」

「いや、そうじゃなくてよ。おまえはまだ出ないのかなあ、と思つて」

「まだ出ないって、何がです？」

「だから、すとおきんぐだよ。ニュウちゃん、もう出たぜ？」

門のほうを指さしてタウが言う。エータは一瞬ぼかんと呆けたあと、「午後からじゃなかったの！」と叫んで駆け出した。

残されたタウはため息をつく、芝に転がる木剣を拾い、苦笑した。

「あいつ、いつもどっか抜けてるよなあ」



屋敷の中。シグマの部屋では、シグマの顔をしたシグマでない者が書類の仕分けをしていた。処理未処理を分別し、重要度ごとに分け、命じられた仕事を終わるとその人物は大きく背伸びをした。それは屋敷の仲間たちも違和感を抱かぬであろう、シグマそっくりの動きだった。一目見て自分を「ちがう」と見抜けるのは一人だけであろう、と『偽物』は思う。即ち、初対面^{すなわ}で『偽物』の変身を見破っている人間——ニュウだ。

ドアがノックされる。『偽物』はシグマの声で「どうぞー」と気の抜けた返事をした。入ってきたのはルフォーだった。

ルフォーは机の『シグマと同じ顔をした誰か』のたれ目をじっと見つめ、やがて「どっち？」と聞いた。偽物は「偽物の方ですよ」とシグマの声で答えた。ラムダだった。

ラムダは、かつて自分が魔王とされた原因の能力を《変幻自在》

と呼んでいる。《変幻自在》は、握手に応じた相手の形、声、匂いを自分の体で再現する魔法だ。彼には物心ついた頃からこれができる。今となっては、ラムダは元々の自分がどんな顔であったかもわからなかった。

「ラムダちゃん、ここで何してるの？」

ルフォーが言った。彼女は革表紙の本を持っていた。ラムダはシグマの顔で苦笑し、シグマの声で「影武者です」と言った。そうして手元の書類をぴらり、つまんで揺らす。

「ご存知かと思いますが、御主人様は現在、ニユウさんを尾行しています。《旅人組合》からの荷物が今日あす中に届く予定ですので、その受け取りのできる『本人』が屋敷に残る必要があったのですよ」ほんとに便利よねえ、と流し目でルフォーが言う。彼女はラムダの能力を気に入っている。ラムダもそのことを知っている。彼はルフォーから何度も「解剖させてほしい」「研究させてほしい」と言われていた。

ラムダは言った。

「ところで、ルフォーさんはどういったご用件でこちらに？」

「これよ」

ルフォーは持っていた革表紙の本を机に置いた。それはシグマがアカンナの王宮から持ち出した古代文明の秘宝だった。シグマはその本を『使える』ようにできないかルフォーに相談していた。そのことを知るのは当事者二名とラムダだけであった。

どうでした？とラムダが聞く。ルフォーは首を横に振った。

「駄目ね。『ぷろてくと』がかかってるみたい。やっぱり、アカンナ王国の中でしか機能しないのよ。ここでも使えれば、ユーニにまた一つ武器ができたのにね」

そう言っつてルフォーは革の表紙をぽんと叩いた。

それは《予言の絵本》だった。



モルイの街を黒髪の美少年が歩く。

彼は前方をゆく、よく知る金髪の少年の肩をぽんと叩いた。エータだった。

エータは振り向き、黒髪の美少年を見て目を丸くした。

「先生……先生じゃないですか！ ファイさんが言ってたのは本当だったんですね！」

それはエータに戦い方と逃げ方を教えた人物だった。

風が吹き、二人の髪が揺れた。

肉串屋台の屋根で小鳥が鳴いた。

レジスタンス組織《重苦の刃》の副リーダー・ローは薄く笑った。

「ただいま、エータ。半年ぶりだね」

17. 冒険

二人の美少年が小声で話している。道行く女たちは彼らをひと目見ると一様に溜息をついた。一人はくすんだ金髪の、活発な印象の少年。一人は陽の光で黒髪を紫に輝かす、悪巧みを好みそうな顔の少年。エータとローだった。外見の年こそ開きはないが、実年齢は倍ほどにも違う二人。彼らはガラガラと音を立てて進む肉串屋台の陰に隠れてニュウを尾行していた。

「なゆほろ」肉串をはむりと噛んでローが言った。「そんなことがあったのか」

ローは半分ほど食べると隣のエータに串を差し出し、「いる?」と聞いた。結構です、とエータがこたえる。ローはそう、と興味なさ気に言い、残りを食べた。どんぐり屋敷崩壊の一件を懇切丁寧にエータが説明し終えたところであった。この人は変わらないな、とエータは思った。姿も中身も変わらない、と。

(――いや。むしろ若返って……)

「それであの惨状かあ」

ローは串をぺろりと舐め、笑った。

「森を抜けたら屋敷が崩れてる。なんだかよくわからないデカイ虫が死んでる。みんなはいないし、学者っぽいナリの火事場泥棒が瓦礫を掘り返してる。……いやはや、あのときは俺の頭がどうかしたのかと思ったよ」

「今の屋敷に引っ越したこと、よくわかりましたね」

エータが不思議そうに言う。ローはにやりと笑った。

「そんへんは、俺の『力』なら朝めし前」

「先生の力って何なんですか? いい加減、教えてくださいよ」

「切り札を見せる奴があるか。教えたろ? 本当に大事なことは身内にも隠せて」

「教わりましたけど、納得はしていません。僕は先生の秘密をばら

すつもりなんてないし、みんなだって仲間の秘密を売するような真似はしない。そんなこと、最初期から組織にいる先生なら、わかってるはずでしょう」

エータは毅然たる目を師に向けた。黒い目と髪を持つ少年は苦笑し、エータの頭をぽんと叩いた。そうして彼は大通りをてくてく歩くニュウを指さし、「なあ」と言った。

「今からあの子を殺すと言ったらどうする」

唐突だった。エータは一瞬かたまったあと、「そんなの」と言った。

「止めるに決まってるじゃないですか。ニュウは大切な仲間です」
無理だね、とローは言った。

「エータじゃ俺には勝てない。正々堂々、剣と剣、こぶしとこぶしで戦えば別だけど、何でもありになったら俺が勝つよ。負ける気がしない。だって俺は、おまえに能力を知られていないんだから」

「僕だってこの半年で成長してます。やってみなきゃわかりません」
「じゃ、それでいいや」

「えっ？」

「それでいいって言ったんだ。俺はニュウちゃんとやらを殺そうとして、エータに止められる。失敗だ。めでたしめでたしだ。だがエータに捕まった俺はこう言おう。『おまえの秘密を教えなければ死んでやる』。さて、その場合エータはどうする？俺を見殺しにするかい？それとも自分の秘密をばらす？言っておくけど、嘘を言ったって俺は見抜くぜ？」

エータは黙り込んだ。彼はローの言わんとすることを理解した。それをさとり、ローは笑った。子を見つめる親の笑みだった。「そういうことだよ」。優しい声で彼は言った。

「自分より強い奴が現れてニュウちゃんを——彼女じゃなくてもいい、仲間を人質にしたら？『それ』を話さなければ大事な誰かが害されるとき、傷つくとき。そんなとき、エータはそれでも自分の秘密を、或いは仲間の秘密を守り通せるかい？その自信があるかい？

俺は無理だ。そんな自信はない。シグマにも、ラムダにだって無理だろう」

だから隠すんだ、とローは言った。エータは口を尖らせ、がりがりと頭を掻いた。やがて自分を納得させるような声で「すみませんでした」と言った。ローは屋台のゴミ入れに串を放り、「気にするな」と言った。串は外れた。エータが拾った。

「若い内は誰だってそんなもんさ。大事なものと正しいものを混同してしまう。俺もおまえぐらいの歳の頃はそうだった。今の俺が正しいと思っていることだって、年寄り連中からしたら物笑いの種かもしれない」

「自分より若い外見をした人に言われると、奇妙な気分になりますね」

「ぬかせ。それでもシグマやラムダと同一年だぞ」

エータはわざとらしく肩をすくめた。ローがなにか言いたげな目を向けたが気にしなかった。エータは目の前の少年を思った。『少年』というカタチをした彼。自分がシグマに『誘拐』してもらった五年前から――それよりもっと昔から――ずっと『十五歳』を続けているローのことを。聞かないと決めてもやはり気になる。『不老』という人類の夢の一つ。この人はいったいどんな魔法でそれを成し遂げたのだろうか、と。

「おまえは本当に真面目だね」

「先生が不真面目すぎるんです。それで優秀なんだから腹が立つ」

「言うじゃないか」

「逆らわない奴ばかりじゃつまらない。先生が言ったんじゃないですか」

エータがニヤリと笑う。ローはそっぽを向いて口を尖らせた。それでいて目は笑っている。その様はまさに素直になれない十五歳の少年の姿であった。

「揺らぎ無く高度に最適化された全体システムは、大きな外的変化が起きればたちまち破綻する」

「はい？」

「システムを最適化するには、想定外の動きをする『揺らぎ』の要素が必要だってこと。その割合は一割かも知れないし二割かも知れない。正確なところは俺にはわからない。でも、それが ある ことによって全体は成長していくんだ」

「つまり、先生の不真面目はその『揺らぎ』だってことですか？」

「或いはシグマもね」

「大将がさばるところなんて想像もできないけど……でも、確かにわざとそう見えるように振る舞っているようなところはありますね」

「……みんなシグマを崇拜しすぎだと思うけどなあ。あいつ、おまえやみんなが言うほど凄い奴じゃないぜ？」

「どういう意味です？」

ローは答えなかった。エータは首を傾げた。大将が凄い奴じゃないって、どういうことだ？ なにかの暗号か？ エータは考えた。答えは出なかった。

「おっ」

やがてローが屋台の陰から身を乗り出した。エータは思考を中断した。

「どうしたんです？」

「ああ……やっちゃったな。ちよつとまずいことになったぞ」

見てみる、とローが指さす。エータはさされた方向に目をやった。そこにはニュウがいる。ローは言った。

「あの子、財布おとした。ほらあそこ」

エータは慌てた。

どうしよう。出ていくか？ でも、そうしたらおつかいの試験は失敗ってことになるんじゃないのか？ どうするべきだ？ どうするのが正しい？ 彼は悩んだ。

ローは腕を組み、唸った。こちらでもまた少女を心配する表情だった。

た。

ニュウは落とした財布に気づかず、目的地に向けてのしし進んでゆく。

やがて屋台のおやじが言った。

「兄ちゃんたち、いいかげん邪魔だよ」



（財布を——落とした！）

（ニュウちゃんが財布を……っ！）

（落とした……っ！）

（まずい！まずい！まずい！）

シノビたちは慌てた。

それは一瞬のことだった。ニュウがぼとりと財布を落としたのである。目立たぬ服装で彼女のあとをつけていたシノビたちは、顔に出さず、みな一様に苦悩した。彼らは未だ、ニュウにこの尾行訓練を気取られていなかった。彼らの悩みはすなわち、財布が落ちたことをニュウに伝えるか否かだ。直接でないにせよ伝えるとすれば、今の安全な配置を変更し、何らかのイレギュラーな行動を起こさなくてはならない。伝えないとするならば今のままでよい。そこに危険は無い。後者を選び、このあとも慎重に動けば、訓練は途中までは成功するだろう。ニュウがアカデミーの学長に手紙を届け、街を出るところまでは、ばれずに尾行を続けることができるだろう。そのことはシノビの誰もが感じていた。

シノビとして、成長するための訓練を第一に考えるならばどちらを選ぶべきか。

思考は一瞬。七名の心はすぐに決まった。

『配置変更』

帽子を目深にかぶったシノビの副隊長ナノハナは、鼻をこすって合図した。「『しすてむ』を最適化するには、想定外の動きをする『揺らぎ』の要素が必要だ」。ナノハナはかつてのローの言葉を思い出していた。いかにも、この不測の事態はまさに『揺らぎ』なのだ。シノビたちは一斉に頬を掻き、目を擦り、髪を掻き上げ、或いは靴を脱いで引っくり返すなどして了解の合図を返した。

配置を変え、合図を取り、シノビ七名は指示と行動を伝え合う。優先すべきは仲間の無事か、自分たちの成長か。考えるまでもない。それは繋がっているのだ。自分たちが成長し、強くなればなるほど仲間の安全は高く保証されていくのだ。

『拾う・財布・自分が』

『任せる・援護する・おまえを・自分が』

『援護する・自分も』

『気を引く・周囲の・自分が』

『了解・待機する』

『了解・待機する』

少女に財布を届けるべく、彼らは一斉に動き出した。

初めての買い食いが出来ず小さな仲間が顔を曇らせるなど、シノビとして許容できることではなかった。



ふとよく知った『命』を感じ、ニューは立ち止まった。振り返っ

てみたが、知り合いは見当たらなかった。気のせいかしら。彼女は首を傾げた。ニュウの世界には『命の紐』が無数に揺らめいている。それは人の多い場所にいくほど密度を増す。多くの人がいればよく似た紐もある。彼女は、このような街の中ではよほど集中しなければ個人の紐を特定することはできないのだった。無論としてシグマの紐は例外であるが。

ニュウは歩みを再開した。

良い匂いがした。さきほどから彼女の後ろをゴトゴトと音を立てて歩いている肉串の屋台だ。前を見つめてテクテク歩きながら、買っちゃおうかしら、とニュウは思った。いまの自分にはお金がある。お昼をちよつと少なくすればいい。いっこだけなら大丈夫。そんな考えが頭をよぎった。ニュウは首を振り、「だめ」と呟いた。お手紙を届けるまでは余計なことはいらないのよ？ わかった！ 約束よ？ ゆびきりね！——クシーと約束したのだ。誓いを破るわけにはいかない。街は誘惑がいっぱいだった。

いっぽう街の者たちは、桃色の小さな背囊を背負いエプロンドレスを揺らして歩くニュウを、いったいどの貴族の使いだろうか、と思いつながらチラチラ見つめていた。あんな小さな子を一人で歩かせるからには名の知れた大貴族なのであろう。身なりも綺麗で、金の髪は美しい。大事に育てられた子の雰囲気がある。使用人の教育が行き届いたさぞ素晴らしい職場環境なのだろう。自分の娘を預けるならそんな所が望ましい。彼らは口々にそんなことを言い合った。一ヶ月前まで隣国で魔王候補でした。そう告げたら何人が信じるだろうか。

「これこれ、お嬢さん。落とされましたよ」

ニュウは振り返った。背囊の中身が揺れてガチャ、と鳴った。人のよい笑みを浮かべた禿頭の老人が立っていた。「これ、お嬢さんなのでしょう？」。老人は手に持ったものを差し出し、言った。それ

はニュウの『がまぐち』だった。シグマから貰った大事な財布だ。ニュウは慌ててお腹の留め紐を確認した。財布を縛り付けていたはずのそこにはなにもなく、結び目の僅かな緩みだけがあった。ニュウは財布を受け取ると元気よく礼を言った。ありがとうとごめんなさいはおはようの挨拶以上に大事だとファイから教わっていたためだ。老人は「いえいえ」と言って路地裏へと去っていった。ニュウは今度こそ落とさぬよう、財布を手を持ってゆくことにした。少女は再び歩き始めた。アカデミーはもうすぐだった。

路地裏ではナノハナが老人に金を渡していた。

「本当に、こんなに頂いてよろしいのです？」

「勿論だとも。助かったよ」

「あのお嬢さんは、もしやどこかの貴族さまの——」

「ご老人。我々や彼女の素性については詮索しない約束だろう？」

「す、すみません。そんなつもりじゃないんです。ほんとうに」

「それじゃあ失礼する。もう会うこともないだろう。わかっているだろうが、くれぐれも——」

「はい、決して誰にも」

「結構」

銀貨を握りしめて佇む老人を残し、ナノハナは尾行に戻った。

尾行対象の目的地、王立第三アカデミーはもうすぐだった。

「ちょっと聞いてくれ」

「なんだよ。いま玄関に描くどんぐりの絵の構図を考えてるんだが」

「大将とルフォーさんはできてるんじゃないだろうか」

「あん？」

「だから、大将とルフォーさんだ。あの二人、できているだろう。

俺はそう思う」

「突然なにを言い出すかと思えば」

「突然ではない。前から思っていた」

「ルフォーさんは男に興味ねえだろ。研究ができればそれでいい、
って人だ。王様の妾だった人だぜ？愛だの恋だの考える人に、そんな
仕事は務まらねえよ」

「大将は凄い人だ。だからルフォーさんとできてる」

「論理が無茶苦茶だぜ。おまえはいつも言葉が足りねえ」

「そんなことはないだろう」

「あるよ」

「ない」

「ある。おまえの中ではわかってるんだろうが、それを説明しきれ
てねえんだ。たとえば俺が『彼は二十歳だ。だから飯を食う』なん
て言ったらおまえどう思う。まるで意味がわからんだろうが」

「いやわかる。そいつは二十歳まで飯を食わず、水だけで生きると
いう誓いを立てていたのだ。そうすれば病気の母親が治るとジョン
は信じていた」

「誰だジョンって。変な『えびそおど』くっつけて感動系にするの
やめろ」

「だが母は治らなかった。そして明くる日――」

「おいそのはなし長くなるか？」

「――ジョンは自殺した」

「思いのほか短^{みじか}かった」

「とにかく大将とルフォーさんはできていると思うのだ俺は」

「まあ、わかったよ。言いたいことはわかった。で、それがおまえ

にどう関係があるってんだ？」

「うん。俺はどうやらルフォーさんに惚れているようなのだ。だからもしかしたら今後、意図しない形で大将から彼女を寝取る事態になってしまうかもしれん」

「待て。ちょっと待て。もういっぺん頼む。耳が盲めしになったみたいだ」

「俺はルフォーさんに惚れている」

「おお。断言しやがった」

「確かに彼女は研究にしか興味のない女性ひとだ。男など扱いやすい三本足の生き物ぐらいにしか思っていないだろう。大将と付き合っているのにしたって、おそらくは、俺たちの知らない大将の能力に惹かれてのことだろう——」

「いや、大将とできてるってのはあくまでおまえの想像だけだな」

「——だが、それが何だと言うんだろうか。愛されていなければ愛してはいけないのか？ 恋の報われる条件は相思相愛か？ そんなことはないはずだ。そもそも見返りを求める心が愛であろうはずもなし。恋とはすなわちただ恋しく想うこと。それを伝えるのが愛だ。俺は彼女を正しく愛したい」

「おまえ……ちょっとすげえな」

「俺の能力《五里霧中》は、クシーほどではないが充分に『れあ』だ。もしかしたら彼女の研究の役に立てるかもしれん。その可能性を示せるだけでも彼女に気持ちを伝える意味はあるはずだ」

「それで、おまえは何を得るんだ」

「なにも。言っただろう。俺の愛は無償の愛だ」

「正直おまえのことはただの変わり者と思ってたが……なんだか今は恰好よく見えるぜ」

「ありがとう。俺は頑張るよ」

「おい、ルフォーさんが来たぜ。どうするんだ、ほんとに行くのか？」

「行く。行ってこの想いを伝える」

「本気なんだな？」

「ああ、行ってくる。——ルフォーさん！」

「あら？あなたは、ええと……」

「『営業部』のデルタです。あなたに伝えたいことがある」

「なにかしら？」

「自分はあなたを愛しています」

「ありがとう。用はそれだけ？」

「はい」

「じゃ、また夕食時にね」

「はい。夕食時に」

「どうだった。いや、完全に脈無しだったのはわかるが」

「うん。なんというか、あれだ」

「なんだ？」

「相手にされないのは……苦しい」

「無償の愛はどこいった」



「あおいろやしきのニュウです。がくちょうさんにお手紙を持ってきたの」

アカデミーの前に着いたニュウは、門番の男に告げた。連絡は既に入っている。男は門を開け、ニュウを通した。

「どうぞ、お嬢さん」

「ありがとう！」

ニュウは校舎に向かって歩き出した。

間髪入れず、門に二人の少年がやってきた。金髪と黒髪の、どちらも美しい少年だ。黒の方が言った。

「青色屋敷のローです。見学に来ました」

これもまた連絡は受けている。門番はローを通した。

「じゃ、そういうことだから」

門を挟んだ向こう側。エータに向けてローが言った。エータは門番とローの顔を二度ずつ見てから「え？」と言った。

「先生。僕は？」

「エータは許可をとってないんだろ？じゃあ入れないよ」

「でも、先生と一緒になら大丈夫なんじゃ……」

「そんなわけないだろう。事前に連絡を入れて許可をとったのは俺ひとり。なら入れるのも俺ひとりだ。当たり前じゃないか。見学許可なんか一時間もあれば下りるぜ？」

呆然とするエータを残し、ローはさっさとニューを追っていった。

「おまえはもうちょっと下準備の重要性を理解するべきだね」

そんな忠告が空虚に響いた。

18. アカデミー

「わああ」

ニュウはぽかんと口を開け感嘆の声をあげた。

王立第三碩学院は石造りの巨大な城だった。壁や柱に施された獅子・鳥・魔物・聖獣などの浮き彫りがニュウの乙女心を刺激し、人の密度はニュウを大いに興奮させた。校舎の中は子どもだらけで、中にはニュウより幼い子どももいた。ニュウのテンションはやかなの笛のような音を立てて上昇した。ニュウは『すきっぷ』したくなるのをなんとか我慢した。全てが初めて見るものだった。

「がくちようさんはこのてっぺんにいるのね。……もうすぐだわ！」

魔王の城に乗り込む勇者のように、かつて魔王にされかけた少女がいさましく歩き出した。

学長室に向かって廊下をてくてく進む。ふと上を見上げ、ニュウは不思議に思った。建物はかなり新しいのに、天井には、ほんの一月ほど前までニュウが祖父と二人で暮らしていた家にあったような、古い黒くなった木が何本も何本も、お祈りのときの指のような形に組まれている。これは近年スズカゼ王国の建造物に多く見られるようになった変則的なボールト天井の細工なのだが、無論ニュウにそんなことはわからなかった。彼女は思う。あれはなにかしら？ かざり？ それとも、おばけのとおり道？ 幼き乙女は好奇心をフル回転させ、目を輝かせた。『飛行』の魔法を使いたい。そしてもっと近くで見たい。ちよつとだけなら。いいえ、ダメよ！ でも、ほんとうにちよびつとなら——歯の裏側がむずむずした。ニュウは頭の中で、邪悪な好奇心を得意の砂投げによって遠くへと追い払った。ニュウは「ふん」と鼻を鳴らして何度も頷いた。ルフォーとの約束が好奇

心に勝利した瞬間だった。

いっぽう周囲の学生たちは、天井をチラチラ見上げては「ダメよ」だの「ゆびきりげんまんしたもの」だのとブツブツ呟いて歩くエプロンドレスの幼女を不思議に思いながら見つめていた。なぜアカデミーにメイドが――それもあんなに幼いのがいるのかと。

「おいキミ、メイドさんがいるぞ」

「メイド？……おおう、ほんとうだ。なぜ校内にメイドが」

「随分小さいな。初等部の子だろうか？」
ブライマリ

「メイドの格好をしているんだ、ここの学生じゃあなからう」

「やだ。背負ってるあれ、可愛い」

「手に何をもっているのかしら？あの水色のやつ。お財布？」

「どっかの貴族の使いかなあ。届け物とか」

「そうだとしたら寮生ではなく、モルイの街に別邸を持つ貴族の使いということになりますわね」

「スズカゼではあんなに小さなメイドを屋敷の外へ使いにやるものなのかね？我が国では考えられないことだよ。まったく、危なっかしく仕方ない」

「それが危険にならないお家の子なのでは？報復を恐れて誰も手を出さないような」

「チャイブか」

「チャイブだな」

「チャイブ家で決まりだろう」

「チャイブ公爵家のメイドさん？道理で可愛いわけだ」

「ふむ。言われてみればどこか高貴な雰囲気があるね」

「なんでもいいがね、諸君。あの背負い鞆は相当に可愛いと思わんか。幼い少女によく似合っている」

「同意」「同意」「強く同意」

そんな上等クラスの学生たちの会話など耳に入らぬニュウは、のっしのっしと目的の学長室を目指すのだった。

廊下を進み、階段を登り、時には『りゅつくさつく』に座って水筒のお茶を飲み、そうしてまた進む。大事な『がまぐち』をちゃんと手に持っているか十歩ごとに確認し、『かいちゅーでんと』の『でんち』が無くなっていないかも二度確認した。

がくちようさんはどんな人かしら？ルフォーのおともだちだって言ってたわ。がくちようさんも『まじよ』なのかしら？がくちようさんはなに色のまじよなのかしら？

ニュウのわくわくはとどまるところを知らない。蟻のようにたくさんいる学生たちも、柱の立派な彫刻も、壁にかけられた綺麗な絵も、いまや全てがニュウを主役にした物語の挿絵だった。

「きゃあっ」

最上階。廊下の曲がり角。学長室までもうすぐという所でそれは起こった。衝突事故である。角から突然あらわれた誰かにニュウは突き飛ばされた。『りゅつくさつく』のおかげで中途半端なブリッジの体勢になり、頭を打たずに済んだのは幸運であった。ニュウはよいしょと起き上がり、そしてすぐにしゃがんで羽なし鳥のひよこのような動きをした。意味の無い行為である。突然のことに、彼女は軽い混乱状態にあった。

「ご、ご、ごめんなさい！」

頭上から大きな声をかけられる。ニュウははっと我に返り声の主を見上げた。それはニュウよりほんの少しだけ背の高い少女だった。――きれいな青いかみのけ。それに、青い目。ルフォーとおなじだわ……。

ニュウは立ち上がり、少女の顔を無言で見つめた。

慌てたのは青髪の少女である。もしかして打ち所が悪かったの？どうしよう。少女は冷や汗を掻いた。おそろおそろ彼女は言った。

「あの、大丈夫ですか、メイドさん？」

ニュウは「うん！」と元気よく頷いた。少女は「よかったあ」と

眩き、息を吐いた。

「すてきなかみのけね！」

ニュウはにこりと笑って言った。

「……………へっ？」

少女はきよんとした。そんなことを言われたのは兄以外では初めてだった。こんなわけのわからないタイミングで言われたのは真正銘の初めてだ。曲がり角でぶつかった相手に髪を褒められる、そんな事態を誰が想像できるだろうか。少女は混乱した。

「わたし、青い色って、大好きだわ！」

それだけ言うと、呆然とする少女をその場に残し、ニュウは再びてくてく歩き出した。頭の中ではシグマがときおり鼻歌でうたっている『ろっきいのてえま』が流れていた。途中からわからなくなるのでオリジナル曲になるが、むしろそこからニュウの好きな部分だった。一度シグマがその鼻歌のオリジナル部分を聞き「なんでポイントウビーワイルドを知ってるんだ……」と呟いたことがあったが、意味はさっぱりわからなかった。ニュウはにへにへ笑ってシグマの背中のにのしかかり、雨後の森のようなシグマのにおいを楽しんだものである。

目指す学長室はもうすぐだった。

さて、残された少女はストロベリー・ブロンドの幼メイドが去った方向を口を開けて眺めていたが、やがてよだれが落ちそうになった頃、慌てて口を閉じた。

「なんだったのかしら？」

少女は呟く。こちらの不注意でぶつかってしまったのに、にこにこ笑って自分の髪を褒めてくれた。不思議なメイドさんであった。ふと気づくと、足元に、水色のやたらとテラテラした素材でできた『なにか』が落ちていた。

どうしよう、今のメイドさんが落としたのかな？少女は慌ててその『なにか』を拾った。そうして彼女は驚いた。

「うわあ……なんてつるつるした手触り。色も綺麗で、金具もすぐく丁寧に作られてる。すごい。これ、何でできてるんだろう。もしかして、さっきのメイドさん、とんでもないお金持ちの家のメイドさんなのかなあ……」

そうに違いない。だからあんなに浮世離れしていたのだ、と彼女は思った。

届けなきゃ。きっと、とっても高価なものだ。無かったら困るはずだ。少女はよしと頷いた。

彼女は知らない。

それはニューがシグマから貰った『えなめる』の『がまぐち』だった。



ローは学長室を目指してのんびり歩いていた。

制服のローブを着ていない彼を学生たちがちらちらと見る。その視線の中にいくつもの女の匂いを伴うものがあること、そしてまた嫉妬の重い色を持つものがあることに、彼は気づいていた。自分の美貌は知っている。これは武器だ。

思えばこの姿には長く世話になってきた。革命組織、レジスタンス、テロ組織——様々な肩書きで呼ばれる《重苦の刃》。その副リーダーとして、ローはこの姿を交渉材料に、武器を、資金を、アジトを、情報を、そして同志を手に入れてきた。黒髪と聞いて《重苦の刃》の支援者たちが思い浮かべる顔。それは大将たるシグマのものではなく、ローの美貌だった。直接にローを味わい協力者となった女がいた。彼に集まる女たちを求めて山ほどの金貨をなげうった男がいた。そんな者たちとつながりを持つとうと更に多くの人間が集まった。集まった者たちに仮面で顔を隠したシグマが民主主義の思

想を語った。それは未知の概念だった。密室の中、多くの者たちが熱狂した。組織の呼び名がまた一つ増えた。即ち、新興宗教という肩書きが。

長い足で大腿に、ゆっくりと歩きながら、ローは薄く笑みを浮かべた。《重苦の刃》の中で、誰よりも強く民主化を願っているのはローだった。そして彼は、願うだけではなにも起こらないことを知っていた。

この顔にはまだまだ世話になるだろう、とローは思った。

最上階までのぼり、学長室の見える位置までやって来たローは、目当ての扉の前をうろうろと行ったり来たりしている少女に気付いた。彼女はニュウの『がまぐち』を持っていた。ローは眉をひそめた。なぜ、あの子は、あれを持っている？廊下には他に学生や職員はいない。いるのは彼女とローだけだ。ローは廊下を進んだ。

少女ルクリアは向かってくる誰かに気付き、ピタリと足を止めた。それは息を飲むほど美しい顔をした、黒髪の少年だった。制服を着ていないから、学生ではないのだろう。こんなに綺麗な人がいるんだ、とルクリアは思った。すこし怖く感じてしまうほどだった。

「やあ」とローが言った。

「えっ」とルクリアが言った。

ローは微笑み、「ここで何をしてるの？」と言った。

ルクリアは慌てた。

「あの、えっ。あの、えっと」

意味を成さない声が出る。もともと人と話すのが苦手な娘である。くわえて相手はとつぜん話しかけてきた見ず知らずの男。それも十一歳の彼女よりはどう見ても年上だ。どうしよう。年上の男の子なんて、お兄ちゃん以外、まともに話したこともないよ。ルクリアの頭の中は一瞬でグチャグチャになった。

「そのことを聞きたいんだけど」

「えっ？」

ローは『がまぐち』を指さした。

「それだよ、その財布」

ルクリアを衝撃が襲った。サアツと血の気が引いた。

「ここ、これ、お財布だったんですか!？」

なんてことを、とルクリアは思った。ああ、それだったら、拾ったりするんじゃないかった。お金持ちのメイドさんのお財布を拾っちゃうなんて、そんなことがバレたら何をされるか。ああ、でも、お財布が無くちゃメイドさんは困るだろうし……どうすればよかったの? お母さんお父さんごめんなさい。折角アカデミーに入れてもらったのに、わたしは学者さんにはなれそうもないです。いまにも犯罪者になりそうです。アノマテカもごめんなさい。もう一緒に遊べません。少女は涙目になった。

この反応に対し、ローはおや? と思った。

「キミ、それが財布だって、知らなかったの?」

「知りませんでした!」

ルクリアは声を張り上げて無罪を主張した。

「……だって、これ、落し物で。それでわたし、届けてあげようと思って。あの、メイドさんのなんです! その角でぶつかっ**かど**たときにメイドさんが落としたものなんです! わたしより少しちっちゃいくらいのメイドさんで——本当なんです! わたし泥棒なんかじゃないんです!」

少女の必死な様子を見てローは理解した。そういうことかと。そうしてローの口から出たのはマヌケな台詞だった。

「そういうアレかあ」

どういうアレであろうか。実年齢35歳ともあろうものがこれである。泣ける話だった。

しかしてルクリアの方はほっとした。よかった、信じてもらえたみたい。彼女は聞いた。

「それで、あの、このお財布がどうかしたんでしょうか?」

ローは、いや、とこたえた。

「いいんだ。届けてくれるつもりだったなら、それで」

「もしかして、メイドさんの家族のひとつですか？」

「まあ、そんな感じです。キミは——」

「あ、ルクリアっていいいます」

「——ルクリアは、メイドさんが出てくるまで待ってるつもり？」

「はい。……あ、でも、お兄さんが家族の人なら」

そこまで言うてから、ルクリアは「あっ」と声を出した。

ローがくすくすと笑った。

「家族だっというのが嘘だったら財布を盗まれちゃう——そう思ったんだろう？」

「あの、いえ、そんな……」

ルクリアはあわあわとせわしなく手を振った。

「大丈夫。渡せなんて言わないよ。わけあって、今日ここに来てることは、彼女には秘密なんだ。初めてのおつかいってやつでさ。おつかいに家族が手を貸すわけにはいかないだろ？だから、できたらそれは、ルクリアからニュウに渡してあげてほしいんだ。お願いできるかな？」

ニュウっていうんだ、とルクリアは思った。彼女は「はい」と答え、そうして笑った。このひとはいい人だ、と彼女は思った。少しだけお兄ちゃんに似てる——そんなふうに思った。

ローは「ありがとう」と笑い返し、それから「手を出して」と言った。

「手、ですか？」

「うん。お礼にいいものをあげる」

ルクリアは不思議に思いながらも右手を出した。ローはその手に黄色い小さな紙箱を握らせた。ルクリアは紙箱とローを二度ずつ見てから「ありがとうございます」と言った。言ったが、これが何であるかはまるでわからなかった。それはね、とローが言った。

「キラメルっていうんだ。たべ、あー……使い方はニュウに聞いてごらん。きっと気に入る」

ルクリアは紙箱をちよつと振ってみた。カラカラと音がする。中

になにか、小さいのがいっぱい入ってる？ルクリアは紙箱に耳を寄せた。

「別に危ないものじゃないよ。――じゃあ、俺はもう行くね。ニューが学長室にちゃんと着いたことはわかったから」

「あつ、はい。ありがとうございます、これ、きやらめる？いただいて」

「こちらこそ、うちの子の財布をありがとうございました」

「まだ、渡してないです」

ローが微笑み、ルクリアも笑った。そうして手を振り、ローはエータの待つ校門まで戻ったのだった。

「あれ？」

ルクリアが呟いた。

名も知らぬ少年が去ったあと、紙箱を眺めていた少女は、ふとあるものに気付いた。

「この模様って……」

『森永』という謎の記号。その『森』の方をルクリアはどこかで見たことがあるような気がした。

しばし考え、やがてルクリアは思い至った。

「これ――古代ニホン文明の文字だ！」

それは選択科目の考古学で、最初の授業のときに先生が黒板に書いた、いま現在で意味が解明されている数少ない古代文字の中の一つだった。

少年の去った方を見つめ、少女は呆然と呟いた。

「意味はたしか……林、だっけ？」



ニュウは学長室の硬いソファに『りゅつくさつく』を抱いて座り、足をぶらぶらさせていた。その正面には彼女の渡した手紙を熱心に読みながら「やや」とか「ほう」とか唸っている老人がいる。眼鏡をかけ、長靴みたいな形の帽子をかぶった白髪白髭の老人だ。彼こそはルフォアの師にして王立第三碩学院の学長、カルフェボその人である。

ニュウはカルフェボ学長の長い髭が彼自身の吐息で揺れるのを面白がって眺めていた。次は左に揺れる、次こそは右、と予想しながら立派な髭を見ているのは飽きなかった。おじいちゃんもおひげのばしたらいいのになあ、とニュウは思った。でも、おひげがあったらスープのお皿に口をつけられないかしら？それは深刻な問題だった。ファイに台所を許されるようになってから最初に作る料理は、『クチバシ豆とお肉のスープ』と決めている。肉は豚ではなく鳥を使う。シグマと祖父の大好物だ。髭のせいで美味しく食べてもらえないのは悲しいことになった。

やがてカルフェボは手紙から顔を上げ、「ふむ」と言った。次は右だと予想していたニュウは、いきなり髭が前を向いたのでびっくりした。カルフェボはふむふむ、と繰り返し、そうして言った。

「手紙を読んだ限りでは、やはりキミはカミヤドリで間違いないよ
うじゃの」

ニュウは首を傾げた。カルフェボはフォッフォッと笑い、「わからんでもよい」と言った。そうして独り言のように続けた。

「奇跡の本質はヒルマ君の《概念掌握》に似ているようじゃ。名付けるとしたら《命の運用》……いや、《生殺与奪》といったところか。何にしても魔法では再現できぬ力よ。生きとる内に四人もカミヤドリを見ることができるとは。ホホッ。年はとるものじゃて」

手紙を渡してすぐに黙りこんでしまった面白そうな老人が、ようやく話し始めたと思ったら、その内容がよくわからない。ニュウはなんだか仲間はズレにされたような気分になった。なんとか会話を成立させようと思い、ニュウはとりあえず気になったところから拾ってみた。

「ねえ、がくちょうさん。ひるまくんってだあれ？」

カルフェボはうむ、と言って黒い茶を啜る。そうしてふう、と息をついたときには、白かった髭は豪快に着色されていた。茶碗を卓に置き、彼は言った。

「そういう名前のカミヤドリがおったのじゃ。獣の言葉を話す聖女様でな。一昨年に死んでしまったが……本当に惜し者をなくしたもののじゃ」

「死んじやうのはかなしいわ」

「うむ。まったくもって」

カルフェボが目を閉じる。ニュウもそれにならった。ゆっくりねてね——ニュウは顔も知らぬ誰かの穏やかな眠りを祈った。

「カミヤドリっていうのはなあに？ わたしもカミヤドリなの？」

「さよう。カミヤドリというのは、魔法使いの扱うそれよりも大きな魔法を一つだけ使える者のことじゃ。非常に珍しい存在で、そう生まれるものではないと言われとる。儂の知る限り、キオ・ミカサナギ、ヨゾラ・ナツノ、そして二年前に消えたヒルマ・ナツノ、この三人しかおらん。いや、お嬢ちゃんも入れれば四人じゃの」
「わたし、すごいまほうなんてつかえないわ。つかえるのはいっこだけだもの」

「手紙で読んだよ。お嬢ちゃんは『飛行』を使えるんだったの」

「言えないわ。ルフォーとのやくそくだもの」

カルフェボは髭を揺らしてフォツフォツと笑った。ニュウが不思議がったが、彼は笑うだけでなにも答えなかった。

かつてカルフェボはその半生をかけて『飛行』の魔法を研究し、そして完成させた。それを余さず教えたただ一人の弟子がルフォー

である。彼はそのことをニュウに教えようとし、しかしやめた。その理由の一つは、お師匠様のお師匠様というポジションに落ち着くことを癪だと思ったからだ。まだまだ残したいものがある。そして残す先に相応しい相手が目の前にいる。そう思うことこそルフオーの狙いである、カルフェボは存じていた。

かまわんさ、とカルフェボは思った。あえてのせられてやろう。しかしルフオーよ、おまえさんは知っているのかな？ 儂とこの娘が出会うことは運命によって定められた必然だったのだと。カルフェボは髭の下で口を三日月に歪めた。

カルフェボはコホンと演技的な咳払いをし、言った。

「お嬢ちゃん。いや、ニュウよ」

「なにかしら」

「一つ提案があるのじゃが」

「ていあん？」

ニュウは首を傾げた。

窓の外を一羽の大きな鳥が飛んでいた。

長靴帽子の老人は真面目な顔をつくり、眼鏡を光らせ、少女に告げたのだった。

「もしよかったら、儂のところで本格的に魔法を勉強してみんかね？ キミのその『不思議なユラユラ』についても、儂ならば正しい使い方を教えてあげられると思うんじゃない」

19. 友達と仲間

学長室を出たニュウは扉の前に立つ少女に気付いた。曲がり角でぶつかった青髪の少女だった。さっきの子だわ!とニュウは思った。ルクリアである。ニュウにとってルクリアは『いちど話したことがある綺麗な髪の女の子』だ。お姉さんというほどには大きくない、ニュウが初めて『おはなし』をした年の近い子どもだった。おつかいを終えて良い具合に緊張感のとれたニュウは名も知らぬ少女への興味をむくむくと膨らませた。この青い子ともっとお話がしたい、仲良くなりたい――ニュウは強くそう思った。ただ優しくされるのではなく、対等に仲良くなりたいと。ニュウは漠然と、彼女とならばそれができるような気がしていた。理由はニュウにもわからなかった。

「こんにちはっ」

ニュウは元気よく挨拶した。

紙箱をためつすがめつ眺めていたルクリアは、はっと顔を上げた。彼女は慌て、「ええと、拾ったお財布が、ええと」と手をパタパタ動かしたあと、「あの、はい、こんにちは」とこたえた。ニュウがにへらと笑う。可愛い子だなあ、とルクリアは思った。ルクリアもつられてくすりと笑った。

「あの、これ、メイドさんのだよね?」

ルクリアが言った。

ニュウは水色の財布を見、なにも持っていない自分の手を見、そしてもう一度財布を見てから「あーっ!」と叫んだ。

「甘い……すごいよ!こんなに美味しいもの、わたし初めて食べたっ!」

キャラメルを口に入れたルクリアは、顔を輝かせてそう言った。

その言葉を聞いたニュウは「そうでしょ！そうでしょ！」と子を褒められた母親のように喜んだ。場所は中庭の木の下。少女たちはその長椅子に腰掛けて話し合っていた。頭上、空の高い位置を大鷲が飛んでいた。

財布を受け取りお礼を言ったニュウは、黄色い紙箱の秘密を教えるため、座れる場所に案内するようルクリアに頼んだ。立ったままでものを食べるのは行儀が悪いとファイから教わっていたためである。午後まで授業のないルクリアはこれを承諾。そうして中庭の隅、巨人蓬きょじんよもぎの木の下までくると、ニュウはさっそく紙箱の蓋を開け、中から四角い固形物を取り出したのだった。金の少女はにまにま笑い、蒼の少女はきょとんと首を傾げた。

「これを、どうするの？」

「たべてみて。きつとびっくりするわ。あつ、そのうすい紙はたべちゃダメよ。それはちようだい。ポイしたらいけないの」

財布とキャラメルをきっかけに壁が薄くなった二人は、お互いに自分自身のことを語った。ニュウは『がっこう』で『おべんきょう』をするルクリアを面白がり、ルクリアはかの青色屋敷でメイドをしているというニュウに驚愕した。どちらもが自分に無いものを持っている相手を羨み、そして素敵に思った。二人はすぐに互いを気に入る、意気投合した。ニュウに仲間以外の『おともだち』ができた瞬間だった。

ルクリアはニュウにキャラメルを半分与え、ニュウは水筒の茶を分けた。二人はアカデミーに夜な夜な現れるおばけの話をし、青色屋敷の地下に出るおばけの話をし、或いはモルイの街に出るおばけの話をした。ニュウは喜び。ルクリアは怖がった。もちろん怪談以外にも、互いの『おともだち』のことも話した。ニュウはクシーやエータやファイやメイド仲間のことをこれでもかと両手を振って一所懸命に説明し、ルクリアは街の外に住む年の離れた友人・アノマテカのことを教えた。二人は新しい友人を喜び、いつか一緒に街で遊ぼうと約束した。

「――それでね、クシーはガンマのおくつばっかりていねいにやるのよ。めろめろなのっ」

「めろめろ?」

「とっても、とっても好きで、ひとりだけのどんぐりなひとのことよ」

「も、もしかして……その二人は、恋人同士なのっ? き、キス、とかしちゃうのかな?」

「きす? わからないけど、二人は恋人じゃないわ。クシーがひとりでめろめろなの」

「でも、ガンマさんはクシーさんが刺繍を入れた服をいつも着てるんだよね?」

「そうよ。いつかけっこんする! ってクシーはいつも言ってるわ。おさいほうでキラキラをいっぱいつけておけば、ガンマに女のひとがよってこないですって」

「そ、そうなんだ」

もしやガンマという男は酷い女誑しなのではないだろうか。この友人のお姉さんはそいつに騙されているのではないだろうか。ルクリアはまだ見ぬ健気なメイドさんが心配になった。本人のあずかり知らぬ所でガンマの株は暴落した。

「それじゃあ、わたしにこの『きやらめる』っていうのをくれた人はなんていう人なの? 黒い髪、すっごくカッコいい男の人」

「それはシグマね。シグマはわたしのだんなさまなの。とってもカッコよくて、とってもとってもやさしいのよ。すごいんだから!」

ニュウの知る黒い髪をした人間は二人だけ。即ちシグマと、王女の騎士だけだ。恰好いいという条件がつくならば、それはもはやシグマ以外に考えられなかった。シグマが来ていると聞いたニュウは心を研ぎ澄ました。命の紐は見えないが、たしかにこの近く――アカデミー周辺にシグマがいるのを彼女の心は感じとった。他にも数名のよく知る命を感じたような気がしたが、そちらは気にしないことにした。

一方ルクリアはニュウの話を聞き、そっかシグマさんっていうのかあ、とそのまま納得した。恰好いい、優しい、という説明から、ならば彼で間違いないだろうと判断したのである。旦那様ということは、青のルフォーの夫であろうか。青色屋敷の魔女さんって結婚してたんだ。知らなかったなあ。今度お兄ちゃんに教えてあげよう。と。ルクリアは間違った知識を身につけた。

「ニュウちゃんのおつかいはもう終わったの？」

「そうよ。がくちょうさんに、ちゃあんとお手紙を届けたもの」

「学長先生、いい人だったでしょ？」

「おひげがみょーってなってたわ。白いおひげっ。こんなふうよ、こんな！それに、こんな、ぐーんって、お肉をとりにかく時のガンマのおくつみたいなのうしをかぶってたわ！」

大きく手を動かして説明するニュウの様子に、ルクリアは思わず笑った。

「ルキイはがくちょうさんとおともだちなのか？」

ニュウが言う。お友達っていうわけじゃないけど、とルクリアはこたえた。

「学長先生にはとってもお世話になってるの。わたし、ジソの生まれなんだけど、わたしのお家はあんまりお金が無くて、アカデミーには入れないはずだったのね。わたし、本を読むのが好きだからアカデミーの図書館に行ってみたかったんだけど、やっぱりお金がなくて入れなくて」

ニュウは水色の財布をぎゅっと握りしめた。お金はたいせつ、とニュウは思った。

「そしたら、ある日ね、王様が『試験をする』って仰ったの。提案なさったのは王女様で、それは、合格したらちよっとお金でアカデミーに通えるよ、っていう試験だったの。わたし、それに合格してジソの第二アカデミーに行けることになったの」

「すごい！」

ニュウはここぞとばかりにはしゃいだ。自分のことのように嬉し

かった。ルクリアもそれがわかって嬉しかった。やがてルクリアは「すごいことだったんだと思う」と言った。そして彼女はそれからのことを語った。

学術都市ジソは王都とバビに次ぐ大都市である。貴族や大商人の別宅も多く、当然アカデミーにはその子息が多く通っている。中には金があり既に入学しているにも拘わらず王の『試験』を受けた者も多くいた。そんな中、満点の結果を出し見事試験に合格したのはルクリアと騎士ヨゾラの二人だけだった。目立つのは必然だった。入学前から陰湿な嫌がらせが行われることもまた必然だった。

家に落書きがされ、扉の前にゴミを置かれた。直接的な力にうったえる者もあった。

それらの多くは王女の鶴の一声（と黒の騎士による雷嵐業火のごとき圧倒的暴力）で片付けられたが、当然として全てが解決するわけではなかった。

——せっかく合格したのに、アカデミーに行ったらまた虐められる。

——王女様や騎士様だって、いつでも助けてくれるわけじゃない。ルクリアは悩んだ。それ以上に悩んだのは彼女の兄と両親だった。もうすぐ入学という日になっても三人は悩み続けた。将来と引き換えに、酷い目に遭うとわかってい場所へ娘を送り出すのは是か否かと。そんな時、その老人は現れた。遠くモルイの街にある王立第三碩学院の学長にして創立者、カルフェボだった。

「うちにおいて。第二の学長は根の腐った暗愚じゃて、学生の質も施設・設備も濡れた雑巾じゃ。学費は要らんよ。寮も整っとる。キミが優秀なことは試験で知れとるからの。いずれは学者になって我がアカデミーの先生をする、というのが条件じゃ。どうかね？うちには平民出も多くおる。図書館はたしかに第二より狭いが、椅子と蔵書は多いぞい」

願ってもない申し出だった。好きなだけ本が読める。好きなだけ勉強ができる。結果を出せば将来は学者だ。神様はいたんだ、とル

クリアは思った。両親は寂しがったが、最後には「娘を宜しく願います」とカルフェボに頭を下げた。兄などは声を殺して泣いたものであった。こうしてルクリアは第三アカデミーの学生となった。それから日々は世界が輝きに満ちていた。選択授業を殆どとらず図書館にこもるルクリアを気味悪がる者はたしかにいたが、虐めはまるでなかった。「あの子はそういう子だから」と誰もが納得したためだ。理解できない人間を理解できないなりに受け入れる心を第三アカデミーの学生たちは持っていた。それというのも、第三アカデミーは国内はおろか近隣諸国でも類を見ない『学生の自主性を尊重する』という気風をもった学院であった。それは平凡な感性を持った者から見れば異常な考え方である。進みすぎている、とも言える。そんな所に好んでやってくる学生は変わり者が多かった。親も教員もまたしかりだ。好きなことをしろ、という場所で好きな事をしてる学生を――まして物言わず、他人の迷惑とならぬ者を――非難しようという人間はこの小世界にはいなかった。近い者で、優秀な学生が自分の教科に興味を持ってくれず寂しがる教員、というのが少数いたが、彼らにしても実害はまるで無かった。そもそも自分のしたい研究を次から次と飽きるまでしていく教員たちが、好きで図書館にいるルクリアを悪く言うのもおかしい話であった。大義なく優秀な学生の成長を妨げる真似をすれば二つの意味で首が飛ぶ。そのことを教員たちはみな知っていた。学長カルフェボは『怠惰』と『才なき者の嫉妬』を何より嫌う。そして彼は王の無二の親友だ。良くも悪くも彼の方針に逆らえる者は皆無であった。

そんな場所で二年も暮らしているルクリアもまた、周囲からは、「本の虫にも限度がある」として変わり者と見られているのだが、本人はそのことに気付いていなかった。「ああ、あの特待生か。実家が大手の貸し本屋なんだろ？」とアカデミー中に自分の間違った情報が流通していることも彼女は知る由もないのであった。

『おともだちのしるし』として互いの持ち物を交換し、ばいばい

を告げると、ニュウはアカデミーを後にした。ニュウのあげた『HB』という謎の記号が掘られた『えんぴつ』をルクリアは「すごい！これすごいよニュウちゃん！」と絶賛した。ニュウもまたルクリアから貰った、組み紐の先に輪銭を割ったものがつけられたお守りを「きれい！きれい！」とたいそう喜んだ。ニュウもルクリアも知らないことだが、硬貨を半分に割って組み紐で繋ぐのは、遠くモニアクス帝国の古いお守りの作り方だ。意味は『子に降りかかる災いをはらいたまえ』である。



シノビたちは苦戦していた。アカデミーの敷地内には貴族や商人の子息を護衛する同業者が何人もいる。アカデミーそのものに雇われている者もあり、その中には自分たちより明らかに格上とわかるシノビも数名いた。そんな者たちの目を掻い潜^{かぐ}ってニュウを尾行するのは困難を極めた。我らは《重苦の刃》のシノビ、世界を変える革命家たちを陰から支えるシノビなのだ――そんな思いがナノハナを、ササノハを、みなを動かしていた。

『対象・出る・建物から・向かう・木へ』

合図があった。四階の窓から暗号を送ったのは、校舎の中まで入りニュウの様子をつぶさに観察していたササノハだ。その合図を全員が確認した。

木というのはあれか？ナノハナは中庭の隅に目をやった。そこには巨人蓬の木と長椅子がある。ニュウはあの長椅子に向かう、ということなのだろうか？疲れて座れる場所を探している、ということか？

ともあれ、ササノハは優秀なシノビである。詳細がわからないながらも彼女を信じ、ナノハナは仲間たちに指示を出した。

『散開・監視せよ・玄関を・木を』

『了解・移動する・西へ』

『了解・移動する・西へ』

『了解・移動する・北へ』

『了解・移動する・速やかに・東へ』

『了解・隠れる・校舎の陰へ』

ナノハナ以下六名は一斉に、しかし静かに行動を開始した。街での尾行と違い、アカデミーの敷地内ではニューだけでなく他のシノビからも姿を隠さなければならない。こうなるといま着用している『街で目立たない服装』はまるで迷彩性を成さなかった。自分の腕と仲間の援護だけが頼りである。やがて校舎二階の窓からササノハが飛び降りて現れたとき、長椅子に最も近い位置に潜むナノハナはおや、と首を傾げた。

（あいつ……なんであんな、嬉しそうな顔をしてるんだ？）

音もなく着地したササノハは幸せを噛み締めるような顔をしていた。自分と二人の時にだけ見せるものと思っていた緩みきった表情に、ナノハナは僅かな不快感をおぼえた。そうして再度、首を傾げた。なぜそんな気持ちになるのか、ナノハナ自身にもわからなかったからだ。まさしくササノハの積極的アピールが実を結んだ瞬間だったのだが、そのことを知るものは本人たちを含めても未だゼロであった。のちにササノハはクシーに抱きつくことになる。「ありがとうクシー！ やっぱ女は押しだったよ！ 誠実な人こそ押されて落ちるんだよ！」。そんな言葉にクシーもまた己のやり方は正しかったのだと自信をつけ、ますますもってガンマ陥落へ向けた攻勢に出るのだが、それはいますこし未来の話である。

ササノハが丁度よい位置につき、周囲を警戒しながらしばらくの時がたった頃、その瞬間はおとずれた。

ナノハナは瞠目した。ササノハがどうだという顔をした。残る五

名もまた一様に驚き、破顔し、そしてこぶしを握りしめた。

ニュウが、青い髪の少女と、手を繋いで現れたのである。

（あれはまさか、友達！？）

（ニュウに友達ができたのか！？）

（友達だ！チビに友達ができた！ついに仲間以外の友達が！）

（歳も近そうだ！身長はほとんど変わらねえ！）

（クソツタレ、今すぐ帰ってみんなに知らせたい……っ！）

七名は興奮し本来であれば不必要なはずの合図を送り合った。

『疑問・友達？』

『肯定・友達』

『肯定は・早計・友達・不明・まだ』

『友達・絶対・友達・手・手・手』

『友達・おそらく』

『友達・絶対』

『おまえら・しごと・しろ』

シノビたちは手に汗握り、ニュウと『謎の青髪少女』を一心に見つめた。長椅子にいちばん近い位置に隠れるナノハナにも二人の会話は聞こえない。彼らは目視するよりほかニュウと青髪少女の関係を確かめる術はないのだった。しかし声は聞こえずともわかることはある。見ただけでそれと知れるものは確かにあるのだ。『きやらめる』を分け合い、水筒から茶を回し飲みする二人の乙女はどう見ても『おともだち』であった。

やがて二人がそれぞれの持ち物を交換して別れるのを見届けると、ナノハナは腕で目をぐいと拭ぬぐった。そうして彼は速やかに指示を出した。

『訓練再開・それぞれの配置につけ』

『了解・再開する』

『了解・配置につく』

『了解・最高』

『了解・歓喜』

『了解・欲しい・酒』

『了解・尾行を続ける』

尾行は再開された。

涙と鼻水が訓練に支障をきたすことは明白であった。

20. 大人になるといって

ふとニュウは立ち止まった。

西の大門から街を出て、屋敷へと帰る道でのことだ。まっすぐ屋敷へ繋がる道の左手、そこに広がる森の奥に、紐ひもこそ見えないが、大きな命を持った生き物を感じたのである。それはニュウが今まで見た中、感じた中で、大木や川などを除けば二番目に大きな命を持った生き物だった。どうやら動物のようだが、動かず、ただじっとしている。嫌な感じはなかった。

「おおきいのがいる……なんにもしないで立ってる。ヘンな感じ……」

ニュウは不思議に思った。しかし彼女は、この時は特段その『なにか』に強く興味を向けることはなかった。いま最も重要なのは屋敷に帰ることだ。早く帰ってシグマに褒めてもらわなくてはならない。そうしてルフォーには、あの『へんなぼうしのがくちょうさん』に魔法を教わってよいか聞かなくてはならない。ニュウは森の奥の大きな生き物への関心を完全に『消した』。興味・関心を自分の中から外へと捨てる――尋常の者であれば意識してできるものではないこの心理行動が、しかしニュウには楽にできた。シグマの命を複製したあの一件以来、あらゆるものの命を無防備に感じ、見てしまう状態にあったニュウが、その幼い自我を保護するためにここ最近で自然と身に付けた自己防衛手段の一つであった。こうするとニュウはあつという間にその生き物の命を感じなくなり、ユラユラも見えなくなるのだ。

森の奥への関心をなくしたニュウは、水色の財布を握りしめて再び歩き出したのだった。

他方、ニュウから最低でも二十メートルの距離をおいて森に散ら

ばるシノビたち（これより接近すると気付かれるのである）は、少女の様子を見て一様におや、と思った。はじめは気付かれたかと慌てたものだが、どうもそうではないようだ。それでは彼女はなぜ立ち止まり、森の奥を見つめるような真似をしたのか。

ナノハナは『そのまま継続せよ』と部下たちに合図を出した。そうして自分はニュウの立ち止まった地点を探りに向かった。ニュウに『生き物の存在を感じる力』があることは今や仲間全員が知るところである。虫の一件で、事の本質を誰より早く見抜いたのは彼女だった。またもや自分たちの見落としから取り返しの付かないなにかが起こるのではないかと、ナノハナは心配した。山にいたツチクイモドキ、その存在に気付けなかったシノビ。そのことを誰より悔いているのはナノハナだった。

ニュウの立ち止まった場所の近く、彼女が振り向いてもかろうじて見えない位置にしゃがみ込み、ナノハナは森を見つめた。そこにはなにもない。なにものの気配も感じられない。ナノハナはふむ、と一つ頷くと、手鏡を動かし、光の反射でシノビの一人に合図を送った。

『探る・森・自分が・訓練はそのまま続行・自分を除いて』

シノビ一番のお調子者・クスノキは迷うように一瞬だけ動きを止めたが、すぐに『了解』と合図し、ナノハナに背を向け尾行を再開した。

さて、なににもなければいいが。

ナノハナは緊張を保つために小さく息を吸い、速やかに森へと踏み込むのだった。



エータとローは街の食堂で昼をとっていた。

ニューウの尾行は既に打ち切っている。シノビに止められたためだ。アカデミーを出てきたニューウをこそそとつけていたところ、背後から突然オイと声をかけられ、「俺たちがちゃんと見てるからおまえらは要らん。邪魔だ」と制されたのである。背中をとられたことに気づけなかった彼らに真つ当な言い訳などできるはずもなく、二人は不承不承引き下がったのだった。

小麦の麺を肉入りスープに浸して食べる美少年二人を店主や他の客はたいそう珍しがった。普通、麺はどろどろにといった餡を絡めて野菜と一緒に食べるものだ。麺を頼めば餡も細切りの野菜も一緒に出てくるのが当たり前である。それを、やって来るなり「麺とスープ二つずつ。餡はいらないよ。代わりに肉いれてね」である。店主は首を傾げたものだ。そうして言われたとおりに出してやれば、麺をスープに浸し、ズルズルと音を立てながらそれはまあ美味そうに食うではないか。そんなものを見ては気になるのが人情というものである。客のひとりが二人と同じものを注文した。彼は『スープの絡んだ麺を啜って食う』という芸当に苦労し、むせたりもしていたが、やがて小さな声で「これ、うめえな」と呟いた。客が一斉に興味の視線を向けた。そうだろ、と黒髪の少年が嬉しそうな声を上げた。ローである。彼は言った。

「俺の故郷の料理なんだよ。こっちじゃ麺ってあんまり売ってないだろ。家で作るようなものでもないし。そうなると店で食べるしかないんだけど、この辺りじゃどこに行っても小麦の麺は餡掛けだ。参るよ」

「最初、大将から聞いたときは『えー?』って感じでしたけど、今はもうこっちに慣れちゃって」麺を啜りながらエータが言う。「うちの仲間みんなこの食べ方です。僕も今ではスープ無しじゃ食べられない体ですよ」

ほう、と店主が言った。

「そりゃあ、なんていう料理なんだ?」

「うどんだよ。もっと味が濃くて麺がしっかりしてればラーメンっ

て言えなくもないかな。スープがぐつぐつに熱ければもっと美味しいんだけどね」

「それ、大将も同じこと言っていましたよ」

「そりゃ、俺が美味しいと思うもんはあいつだってそう感じるだろうさ」

「実家が同じ街なんでしたっけ？」

「同じ町っていうか……まあ、同じといえば同じか。家の近所に蕎麦屋があつてさ、そこで出すうどんがまた美味しいんだ。当時の仲間と、学校帰りによく行ったよ」

「ソバヤって何です？」

「蕎麦っていう、そば粉を使った麺料理があるんだよ。麺はこれよりもっとずつと細くてザラザラしてる。それを出す店。まあ、その蕎麦はてんで不味かったけどな。どん兵衛の方が美味しいレベルだった」

「どんびえっていうのはよくわかりませんが、美味しいなら食べてみたいですね。いつか連れて行ってくださいよ」

「……まあ、そのうちな」

うどんか、と店主が言った。彼は顎に手を当てて黙りこみ、やがてひとりで頷き呟いた。

「考えてみるか」

その言葉は、麺を啜る音でエータとローの耳には届かなかった。のちにモルイの街の名物となる『ウドンメン』——その誕生に大きな影響を与えたのは二人の美少年であったという。彼らの名を知る者はいない。当の二人もそれが自分たちであるなどと知ることはなかった。半年後、この店は毎日外まで行列が続き、貴族の屋敷に招待されるほどの有名店となるのだが、それはまた別の物語である。

食事を終えたエータとローは街をぶらつくことにした。

ニュウの尾行という当初の目的を失った二人は暇だった。エータはニュウに菓子を買ひ、ローは市の露店をひやかすなどしてそれぞ

れ時間を潰した。

現在、二人は闘技場の客席でケンケラの練習を見ている。

ケンケラは馬と人間の綱引きだ。馬が勝っても特典は無いが、人が勝てばその人間には自由が与えられる。即ち、馬の相手をするのは奴隷であった。人が馬より足腰が強いならば馬車は要らないことになる。馬に勝つような例外もいるにはいるが、基本的には奴隷が引きずり回されるのを金持ちが手を叩いて眺める遊びであった。

青色屋敷の厩舎にいる馬たちより一回りも大きい馬が岩の載ったソリを引く様子をぼんやりと眺めていたエータは、やがて小さく溜め息をつき、呆れの色を多分に滲ませた声で言った。

「先輩は、アレに勝ったんですよね」

ガンマのことである。ローは笑い、「ああ」とこたえた。

「あれは見ものだったぜ。もう十年になるか。当時のあいつの飼い主様も、見物に来てた貴族連中も、それから馬も、闘技場全体がシーンと静まり返ってな。俺だけが爆笑してたよ」

「それ、まったく同じことを大将も言っていましたよ」

「えっ、うそ」

「どうせ二人でゲラゲラ笑って、横でラムダさんが呆れてたとか、そんな感じなんじゃないですか？ だいたい想像できます」

「あー、そうだったかな。……いや、そうだった気もしてきたな」

ローは曖昧に言い、頭を掻いてあははと笑う。先生はすぐ恰好つけるんだから、とエータは苦笑した。

ケンケラで馬に勝利したガンマは奴隷の身から開放される筈だった。しかし土壇場になって雇い主がそれを突っぱねた。本来であればそのような暴挙は許されない。相応の理由が必要だ。彼はガンマが馬に毒を飲ませたと主張した。それというのも、この時、馬の飼いの主とガンマの飼い主は同じ人物だったのである。彼はその催しの後、ケンケラに使った馬を、怪力男に勝った馬として貴族に売るつもりでいた。それがどんな手違いか、怪力男の方が勝ったというのだから笑えない。奴隷に負けた馬の価値など高が知れている。奴隷

を失い、くわえてこれから売ろうという馬の価値まで落としたのではまるで救いがない。馬も怪力男もまだまだ金になるのだ。どうにかしてこの窮地を乗り越えなければならぬ。――そんな思惑から出た嘘であった。

しかしそんな企みも上手くは回らなかった。闘技場からの帰り道、雇い主の男が何者かに襲われ、ガンマも馬も奪われてしまったのだ。むろん襲ったのは《重苦の刃》だった。事前にシグマの手引きで多くの貴族と『握手』をして『姿』をストックしていたラムダが、裏から手を回したのである。

「この道は封鎖だ」

「ここから先は通行止めだ」

「わしが誰だかわからんのか平民ども！道を譲らんか！」

道を封鎖したとされる貴族たちは誰一人としてそれを認めず、結局、一人の男が損をしただけの結果に終わった。その尊い犠牲の影でガンマは自由の身となり、《重苦の刃》は優秀な人材を得たのであった。

「ラムダさんの能力って、凄いですよね。一瞬で誰にでも変身できちゃうなんて。ラムダさんが敵だったらと思うと――」

怖いですよ。エータはそう言った。ローはわざと大袈裟に肩をすくめる。彼は言った。

「誰にでもってわけじゃないさ。握手に応じた相手、それも同性だけだ。時間制限もあるし、決して万能じゃあない」

「そりゃ、そうですけど……それでも十分に凄いですよ」

ローは自然な表情を装ってエータの横顔を見つめた。エータはぼうつと馬を見ている。

エータはラムダの能力を誤解している。他の仲間達もまた、シグマを除けば誰一人としてラムダの能力を正しくは知らなかった。全員が騙されているのだ。

ラムダは自身の能力《変幻自在》を仲間には『握手に応じた男の姿に一時間だけ変身できる力』と説明している。シグマもこれを認める発言をしている。しかしこれは真っ赤な嘘だ。ラムダの能力に課された制限は、握手を求め、これに応じられることだけである。彼は男にも女にも、文字通り自在に姿を変えられることができるし、その姿から成長・老化することさえできる。もちろん時間制限などあるはずもない。仲間たちが『ラムダ』として認識している普段の姿からして、十六年前に手を握った男の成長したカタチなのだから。

ラムダがそのことを仲間に隠しているのはシグマの指示によるものだ。「おまえの能力はいざという時の切り札として使える。仲間にも隠せ」シグマはそう命じた。ラムダにもラムダなりの考えがあり、彼はこれを受諾。以後、この秘密は誰にも明かさねず『一時間しか変身できないのはそれ以上は頭に負荷がかかりすぎるから』『異性に変身できないのは体の構造を理解しきれないから』などともっともらしい嘘の理屈で守られてきた。ラムダの《変幻自在》をいたく気に入る青のルフォーでさえ、彼の本当の能力については知らないのだった。

三時の鐘が鳴った。

ローは背伸びをして肩の骨を鳴らした。エータもそれにならう。風の冷たさがやがて来る季節を教えた。モルイの街は山に近い。ひと月もすればこのあたりは雪で埋まるな、とエータは思った。

「そろそろ帰るか」ローが言う。

「そうですね」エータがこたえる。

二人は屋敷へ戻るべく腰を上げた。まあ、とローが言った。

「帰っても、俺はまたすぐ出るんだけどな」

「出るって、どこにですか？」

「仕事に決まってるだろ」

「えっ？」

「俺は営業部のリーダーだぜ？俺が仲間や支援者を探さなくてどう

するんだ」

「帰ってきたばかりじゃないですか！挨拶は？みんなへの挨拶はどうするんですか！？」

「だから、それをしに帰るんだよ。なににも言わずに出るのはやっぱり気持ちがよくないからな。今日は楽しかったぜ、エータ」

エータはいよいよ慌てた。ローが帰っているとファイに聞いてから、エータには目的があった。それはローの特殊任務に連れて行ってもらおう、というものだった。

革命組織《重苦の刃》の最終目標はアカナ王国の民主化である。そのための同志はひとりでも多いに越したことはないし、武器や食料などの物資も多ければ多いほどよい。エータはローの『勧誘活動』やガンマの『各地の活動組織への支援』のような仕事に憧れていた。だが彼に任される仕事は戦災孤児への援助や難民の生活指導などといった、いわゆる『人気とり』ばかり。組織の株が上がるのは望ましいことだ。エータもそのことはわかってはいるが、しかし数字として結果を実感できない仕事に、気持ちを持て余していたのだった。そんな折にローの帰還だ。これはもう頼み込むしかないと思はれた。

「先生」

「うん？」

「あの、実はお願いがあつて……」

しかして屋敷へ戻る道、エータは思いきって切り出した。自分を先生の仕事に連れて行ってくださいと。必ず役に立つ、足を引っ張るようなことにはならないからと。

ローの答えは一言、「駄目」であった。

「なんで駄目なんですか。僕だってもう子どもじゃない」

「用心は深くして川は浅く渡れ、ってね」

「どういう意味です？」

「さあね」

「教えて下さいよ」

エータは口を尖らせて言った。不貞腐れている自覚があった。ローは苦笑し、こたえた。

「エータは、思いついてから行動するまでが早すぎるんだよ。それはもちろん長所だけだし、時には短所にだってなるんだ。全てが全て思ったとおりに行くわけじゃない。ガンマみたいになれとは言わないけど、せめてシグマと同じくらいには用意をしてから動いてほしいと俺は思うね」

「大将と同じなんて……そんなの、できるわけじゃないですか。あの人は僕たちとは違うんですから」

そんなことはないさ、とローは言った。

「俺はガキの頃からあいつを見てる。あいつのことは誰より知ってるつもりだ。その俺が断言するよ。シグマなんかより、おまえや他の連中のほうが、ずっと立派だ」

それは本心からの言葉だった。

エータが訝しむ顔でローを見る。ローは肩をすくめ、「なんにせよ」と言った。

「アカデミーに行く子を尾行しようっていうのにアカデミーに入れなくて頓挫、なんてことは、今後は無いようにしときな」

エータは俯いた。その頭をローが優しく叩いた。

「いつかおまえを俺の隣に立たせてやる。いつかおまえに俺の秘密を教えてやる。いつかはおまえに頼る時も来るだろう。――でも、エータ。それは今じゃないんだ。ゆっくり、ゆっくり大人になれ。それが今の、おまえの仕事だ」

エータは答えず、ローもそれ以上にも言わなかった。

この日、青色屋敷でローを主役にした宴会が盛大に執り行われた。急な用事で出掛けたというラムダだけは姿がなかったが、それ以外はシノビも交代々々で全員参加の宴となった。女たちは寂しがり、研究部のパイなどは普段のニヒルぶった態度をかなぐり捨て、ローの腰に抱きつき声を上げて泣いた。

そうして夜明け前。みながだらしなく寝転がる広間の中、ローはエータだけをそっと起こした。

「俺はもう行くよ」

「みんなには何も言わなくていいんですか？」

「おまえから言っというてくれ」

「次に帰った時には、絶対、連れてってもらいますから」

「ガンマが悲しむ」

「先輩は過保護なんですよ」

ローが笑い、エータは笑わなかった。

ローがこぶしを差し出す。

そこにエータがこぶしをぶつける。

「またな」

ローが言い。

「はい、先生」

エータがこたえた。

そうしてローは屋敷を出ていった。

エータは気付かない。

帰ったばかりで屋敷にも寄っていないというローがいつアカデミーの見学許可をとったのか。果たしてそんな時間があったのか。

エータは気付かない。ローの秘密に。ローの能力に。

森の奥で鳥が鳴いた。

ガンマの足を抱くクシーが幸せそうな唸り声を上げた。

エータは仲間を起こさぬよう静かに広間を出ると、木剣を持って裏庭へ向かった。

はやく大人になってやる。

強く、強くそう思った。



★ニューウの日記

きょうは、わたしは、おつかいにいきました。

わたしは、おつかいは、ひとりでいきました。すごい。

わたしは、がくちょうさんに、おてがみをわたしたでした。

がくちょうさんは、おひげで、ぼうしで、すごいへんでした。

わたしは、がくちょうさんの、せいとをします。まほうです。

るふおが、いいよにゆうちゃんがんばれえ、といったからでした。

わたしは、まほうとかがんばるからしぐまのやくにたつ、とおもいました。

わたしは、それから、きょうは、ともだちができました。

ともだちは、るきで、ほんとうはるくりあだから、るきです。

わたしは、るきと、ともだちのこうかんのやつを、しました。

わたしは、るきに、2こしかないけど、えんひつのやつをあげました。

るきは、わたしに、ひものおまもりのあおいのを、あげてくれました。

わたしは、るきと、こんどあそぶから、ゆびきりげんまんしました。

わたしは、るきに、ゆびきりげんまんのやりかたを、おしえてあげました。

わたしは、おひるは、おつかいだから、ひとりでかってたべるやつをしました。

わたしは、うどんの、すぶのないのやつを、たべました。

わたしは、おいしいでもすぶもあればもつといい、とおもいました。

わたしは、おいしかったから、まんぞくでした。

しのびは、きょうは、なのはなが、にゅうをみてたんだぜえ、と

いいました。

わたしは、しのびすごいきづかなかたすごい、といいました。
しのびは、うれしいかおでした。ささのははないた。

なのはなは、きょうは、もりのおくでのおぼけたすけてくれた、
といいました。

わたしは、もりになにかいるから、わかるので、それだな、とお
もいました。

わたしは、それはわるくないのだからいいんだよ、といいました。
なのはなは、じゃあよかった、といいました。

わたしは、よるのごはんは、みんなで、さわいでたべるのをしま
した。

いつもより、もっとさわぐやつです。

それは、ろーがいなくなるからでした。

わたしは、さわいでよくてたべるのはおもしろいからすきだよ、
とおもいます。

わたしは、おひるのやつよりもみんなでたべるのほうがすきか、
とおもいました。

ろーは、にゅうちゃんおつかいすごいかったな、といいました。

わたしは、うんといいました。

わたしは、ろーのひみつのことが、わかってます。

わたしは、でも、ひみつにしてるのはだいじだからとおもうから、
いわないです。

わたしは、いま、したのひろまのおへやにいて、そこでねます。
きょうは、とくべつです。

わたしはげんきです。

21. 恋心

「『たびびとくみあい』っていう所からお客さまがいらしたわ。とってもカッコいいお姉さんよ。シグマにお荷物のかくにんおねがいますって」

「もう来たのか。思ったより早かったなあ」

「おむねに赤いお花の『おさいほう』があったわ」

「それはまた随分な大物が来たものだ」

「おおもの？」

「赤の着用を認められるくらいだからね。よほど名の通った《旅人》なんだろう」

「あのお姉さんはすごいお姉さんなの？」

「たぶん、一級の《旅人》だろうなあ」

「一級のたびびとさんはえらいの？」

「《旅人組合》は《旅人》を使った配達屋さんなんだ。一級の《旅人》ともなれば特殊な魔法で大陸中どこへでも三日もあれば荷物を届けてくれる」

「すごいよね」

「そう。すごくて、とても便利だ。国が特権を与えて囲いたがるほどにね。誰も逆らえないから、自分は偉いと思い込んでしまう者が多い。――さて、今回の《旅人》はどうか」



晴れ渡った枯季の空を大鷲が飛ぶ。大鷲は瓦礫の山の上空をぐるり三度まわると、やがてモルイの街の方角へと嘴をむけた。吹く風にはやや水気が足りなかった。

青色屋敷に配達人がやってきたのはメイドたちが昼の用意を始めた頃だった。

「おい。お嬢さん、ちょっといいかい」

庭で紫人参の泥落としをするニュウに声をかける者があった。没頭していたニュウは一度目は気づかず、再度「メイドのお嬢さん」と呼ばれて顔を上げた。柵門の前に女が立っていた。豚の頭が入るくらいの木箱を片脇に抱えた女だ。女はおいでおいで、とニュウを手招きした。なにかしら？お客さんかしら？ニュウはたらいに人参を戻し、門へと向かった。

女はファイより年上であろうと思われた。右頬の深い刃物傷が目を引く女である。しかしニュウが気になったのはそこよりも、彼女の着ている上掛けだった。胸元にほんの小さなものだが、赤い薔薇の刺繍があるのだ。赤いお花？いいのかしら？ニュウは思う。赤はえらいひとの色だから、着ちゃいけないんじゃないか？ニュウはシグマから、『赤』はスズカゼ王国において特別な色で、王族とそれに認められた一部の人間にしか着用を許されていないのだと聞いていた。赤に似た別の色かしら？色の名前はいっぱいあるものね——ニュウはそう納得することにした。

「お仕事中ごめんね」

傷の女はにこりと笑った。ううんいいわ、とニュウはこたえた。

「どんなご用かしら？」

「ここに、シグマ・ユーニって人が居るでしょう？その人に荷物を持ってきたんだ」

「シグマのお客さんね！」ニュウははしゃいだ。「いま門のカギを持ってくるわっ」

「ちょっと、ちょっと！」

女は慌てて手を振った。

「駄目だよ、事前に連絡のない相手をそんな簡単にお家に上げちゃ。お姉さんが悪い奴だったらどうするのさ」

ニュウははっとした。そうだったわ。うそつきのひともいるから、門は勝手に開けちゃいけないんだった。ニュウは考えた。客への対応はファイから教わっている。ルフォーへの客は全て無視し、他の仲間たちへの客はシグマかガンマに知らせるのだ。知らせる時はどうするんだっけ？ たしか、ええと――ニュウはうんと頷く。そうして少女はすました声で言った。

「すぐに主人を呼んできますわ。お名前とごようけんをお聞きしてもよろしいかしら」

「《旅人組合》から来たって言えば通じるはずだよ。荷物の確認をお願いします、って伝えてもらえる？」

「わかったわ。ちょっとだけお待ちになって」

ニュウはスカートの裾をつまんで一礼すると、シグマの部屋へ走った。

パタパタ音を立てて走り去る少女の背を見つめ、女はボソリと呟いた。

「満面の笑みで主人を呼び捨て……まさか、あの歳で愛妾そはめに将来しぼってるの？」

そうだとしたらすごい根性だ、と女は思った。そして夢の無い世の中だ、とも。

「それじゃあ、あたしはこれで」

「お茶くらいお出しするが」

「冗談。《旅人》は速さが命だよ」

「そうだったな。では縁があったらまた。今度はこちらから頼むかもしれない」

「どうかな。余所者に任せる必要もないと思うけど」

「わかるかい」

「それなりに優秀なシノビを飼ってるみたいだ。七人、いや八人かな。本当は今回だって、組合を使う必要はなかったんじゃない？」

「その『赤』はどなたに？」

「王子殿下から賜ったわ。直接にね」

「なるほど、大物だ」

「ありがと。じゃあ、もう失礼するわ——ばいばい、お嬢ちゃん。

巡りがあつたらまた会いましょう」

「またね、お姉さん。気をつけておうちに帰ってねっ」

「ええ。……あなたの空に風の恩寵があらんことを」

女は目を閉じてニュウの頭を一度撫で、そうして風のように走り去った。ただの比喻にとどまらぬ突風を巻き上げるその速さに、ニュウは「すごおい！」と歓声を上げた。一方シグマは女の自分へ向ける視線に棘があつたような気がして首を傾げた。自分はなにかしただろうか。

屋敷に戻るシグマを、手を振って見送るニュウ。そして彼女は紫人參の泥落としを再開した。そうしながら、女の持ってきた木箱を思った。あの箱には何が入っていたのかしら？ 重いのかしら、軽いのかしら？——女が片脇に持っていた時には軽そうに見えたそれを、シグマは両手で重そうに抱えていった。そのことが不思議でならなかった。昨日の宴会でローが見せてくれた『ぱんとまいむ』だろうか？ なにもない場所で見えない壁にぶつかったり重そうに空気を持ち上げたりするあの『魔法』は本当に愉快だった。ローにできることがシグマにできないはずはない。さっきの箱も『ぱんとまいむ』なのかしら、とニュウは思った。

通常、一級の《旅人》が依頼で運ぶ荷物には、どんなに小さなものにも盗難防止の魔法がかけられる。それは荷物を持ち去られすことを防ぐ目的の、重量増加の魔法だ。同様の理由で『一級』に依頼するような者は配達を頼むに際して箱の中に重しを入れるのが常識であった。配達が完了し盗難防止の魔法が解かれても、鉛のたっぷり入った木箱はニュウよりなお重い。しかしそんな真相を少女は知る由もないのだった。

◆◆◆
昼食を終えたニュウはさっそくシグマの部屋を訪れた。木箱の中身がどうしても気になったためだ。青色屋敷に引越して以降、ニュウはメイド見習いの仕事とは別に、仲間たち一同の薦挙によりシグマ専属の走り使いと世話係を兼任している。これによって彼女はシグマの部屋への自由な出入りと会議への参加（お茶汲み係）をなかば公認されている状態にあるのだった。

ノック（戸を叩くことをこういうとシグマから聞いた）をし、「どうぞー」の返事をうけて戸を開けると、シグマが大の字になって床に転がっていた。ニュウは大いに慌て、二人で食べようと思ってとっておいた『きゃらめる』二個を廊下に置き、愛する夫に駆け寄った。

「シグマ、どうしたのっ！」

床にはシグマ以外にも様々な物が転がり散乱している。散らばっているのはニュウには読めない『阿部一族・舞姫／森鷗外』という謎の記号が表紙に印字された赤い綺麗な本であったり、金属製の不気味な仮面であったり、色つきの眼鏡であったり、一面が九つの正方形に区切られた色鮮やかな立方体であったり、そうした物々が入っていたであろう白い蓋なしの箱であったりした。しかしそれらの不思議な物たちも今ばかりはニュウの気をひくことはできない。少女はシグマの頭を膝に載せ、優しく、優しく撫でた。

「けがはない？ 痛いところない？ かゆいところはない？」

「耳の後ろが痒いかな」

「かいてあげるわっ。どう、元気になった？」

「ありがとう。元気百倍だ」

「シグマ、何があったの？ ちかしつのおばけがらんぼうしたの？」

「ええと――」

さてどうしたものか。見下ろすニュウの顔をぼんやり見つめながら、シグマは気まずい思いで口籠った。木箱の蓋がなかなか開かず、無理に引っ張ったら転んで棚にぶつかり、積んでいた『使用頻度・低』の箱が落ちてきたというのが現状の出来上がった経緯である。いかなシグマといえど、瞳に涙を浮かべて自分を心配する少女を前にしてそんなことを言えるほど雰囲気を読めない男ではなかった。

《重苦の刃》の大将・シグマは言った。

「――いや。あの、ちょっと、いろいろあってね」

何がいろいろだろうか。

もうすぐ三六歳になる男の発言がこれである。泣ける話だった。

一方ニュウはこの発言を自分なりに解釈した。即ち、なにか大変なこと――それも自分に言えないようなことがあったのだと。男の秘密を詮索してはいけない、とは先輩メイドの言葉である。ニュウは聖母もかくやという微笑みを浮かべて言った。「わかったわ」と。いよいよシグマの罪悪感は一掃打ちにされ、弾けよとばかり腫れ上がった。

シグマをベッドに座らせ、ニュウは床の片付けをする。おじさんがやるよ。指を切らないように気をつけるんだよ。おろおろするシグマに手を出させるほどファイの教育は甘くない。ニュウは散らばる小物や本や鉄仮面を白くて軽い箱（はっぽすちろりんっていったかしら？）にせっせと詰めていった。やがてニュウが最後の一個を拾い上げた時、「懐かしいなあ」とシグマが言った。

ニュウはシグマを見、手に持った綺麗な立方体を見つめ、そして「これのこと？」と訊ねた。ああ、とシグマがこたえる。ニュウの特に好きな、少しかすれた優しい声だった。シグマはニュウの手から立方体をひょいと奪うと、カリカリ、キリキリ、と音を立ててそれをねじった。ニュウは「わああ」と声を漏らした。ニュウはその立方体が一面を九分割する直線にそって回せるように作られていることをすぐに見抜いた。きれいですてき。それがニュウのもった最

初の感想だった。それはすぐに「おもしろそう」にかわる。やがてシグマが何度かねじり、ニュウの手に立方体を戻した時、はじめ皿に盛られた豪華なサラダのようだったそれは、面ごとに白、赤、青、緑、黄、橙、と色が統一され、キビキビした感を全面に押し出す正方形六枚の集合体になっていた。ニュウは思わず歓声を上げた。

「これ、なあに！？シグマ、これなあにっ！？すごいわ！」

シグマはよいしょとニュウを抱き上げ、ベッドにおろして隣に座らせた。シグマは再度ニュウの手から立方体を受け取ると、「これはね」と言ってまた数回ねじった。

「これは、ルービックキューブっていうんだ」

「るびつきゆるーぐ？」

「ルービックキューブ。ルービックさんの作った立体パズルでね、バラバラにしてから色を整えて遊ぶ、おじさんの故郷のおもちやだよ」

「るびつききゅうぶ……ウソみたいにツルツルだったわ。かいちゅうでんととおんなじ木で作ったの？」

「素材は木じゃなくてプラスチックだね」

「ぷらちつく……それは鉄なの？」

「金属とはまた違う。合成樹脂——っていつでもわからないか。うん。ゴムの仲間、かな」

「ゴムって、お金持ちの子が持ってるたまのこと？」

「そうそう。あれのお友達がこのプラスチック。鉄より軽くて錆びないし、木より丈夫で腐らないんだ」

「シグマって、とってもものしりねっ。わたし、ものしりな人、好きよ」

「嬉しいことを言ってくれるじゃないか」シグマはニュウの手にぽんと立方体をのせた。「そんなキミにはルービックキューブをあげよう」

「いいの！？」

こんな素敵なるものを貰えるなんて！ニュウは大いにはしゃいだ。

まわしてごらん、とシグマが言う。ニュウはキューブをねじった。思ったよりかたい。でも、たのしい。色をころころ動かし、模様を変えていくのは本来の遊び方とは異なるものだが、しかし愉快だった。ニュウは目をきらきらさせてシグマを見上げた。

「ほんとうにもらってもいいのっ？」

いいとも、とシグマは笑った。

「僕はもう使わない。箱の奥で眠っているより、ニュウに遊んでもらえた方がその子も喜ぶだろう。ただキューブには赤があるから、屋敷の外に持っていっちゃあいけないよ。それがルールだ」

「ありがとう、シグマ！」

キヤーと声を上げ、ニュウはシグマに抱きついた。

「おっと」

ニュウをひっつかせたままシグマがベッドに倒れる。窓の外を大鷲が飛んでゆく。バルコニーでササノハが息を飲む。彼女はシノビの仲間たちに合図を送る。『噂・真実・大将・ニュウ・愛・愛・愛』。それを受けたナノハナが合図を返す。『秘密厳守・されど・応援』。

こうしてシグマとニュウの関係に関する情報は、真実とかけ離れたかたちでシノビ七名に伝わったのだった。



「へんなの。おてがみをもってくるのに重いはこを使うなんて、つかれちゃうわ。おねえさんがかわいそう」

「荷物を無事に届けるための《旅人》の知恵、荷物の中身を誰にも知られないための工夫だよ。手紙を奪おうとする悪い奴は、手紙を持っていそうな《旅人》を襲うんだ。壺を奪おうとする奴は壺の入るような箱を持った《旅人》を襲う。それじゃあ、たくさんの《旅

人》が同じ大きさの箱を持っていたらどうだろう？悪いやつは誰を襲っていいかわからなくなってしまうよね」

「ひとのものをどろぼうするのは悪いことだわ」

「まったくもってその通り。でも、そういうことをする悪い奴も世の中にはいるんだ。困ったことにね」

「なんだか悲しいわ」

「ほんとうにね」

「どんな――あつ。なんでもないわっ」

「どんな手紙だったかって？」

「聞かないわ。わたし、せんさくしない女の子ですもの。男のひとのおしごとのことは聞いちゃダメなんだから」

「ただの業務報告書だよ。遠くで働いている仲間からの、仕事の状況を知らせる手紙。今回はこれこれこういうお仕事をしました、こういう結果になりました、自分はこう考えます、大将はどうですか？そんな内容のお手紙さ」

「わたしにおしえてもいいの？シグマ、おこられない？」

「細かな内容や相手は教えられないよ。それはニューだけじゃなく、誰にもね。でも、どんな手紙かくらひは話してあげられる」

「シグマってやさしいのね。わたし、やさしいシグマが好きだわ」

「やさしさなんかじゃないさ」

「……そうなの？」

「ニューはね、これからいろんなことを学んで大きくなるんだ。いろんな人と会って、いろんな人と話して、いろんなことを聞いて、そうして成長していく。知らない人と話すのは簡単なことじゃない。知らない人にもものを聞くのは難しいことだ。でも、今は僕がいる。相手が僕なら、聞きたいことはなんだって聞いてくれてかまわない。答えられないことは答えられないと言うけれど、それで怒ったりはしないから。聞くことは悪くないんだ。間違えたって大抵のことはやり直しが効く。そうじゃないことを知るために、ニューはたくさんたくさん大人に質問したらいい。それができる時期が今なんだ。」

探究心を無理やりに抑えつけちゃいけない。キミはゆっくり大人になりなさい。急かしたりなんて僕はしないから」

「……………うん」

「よし。いい子だ」

「……………」

「———」

「……………あの」

「なにかな？」

「……………なにかしら？」

「うん？」

「へんなかんじなの」

「へんな？」

「いま、おむねがぎゅってしたの。まだしてるわ。おなかとおむねの真ん中がとつてもあつくって、でも体はちよつとだけさむくって、苦しいのにふわふわして……………とってもへんなかんじ。これ、なにかしら？」

「お昼を食べ過ぎちゃったかな？僕も——おじさんもニュウくらいの頃によくあったよ、そういうの。食べたあと、しばらくして急に苦しくなるんだ」

「そうなのかしら？」

「きつとそうさ」

「……………そう、なのかしら」



「わたし、ちよつとお庭でおさんぽするわ」

「そうするといい。用事があったら窓から呼ぶよ」

「またね、シグマ」

「またおいで」

シグマの部屋を出たニュウは、戸にもたれかかり、胸をおさえて首を傾げた。シグマのそばにいたくない。そんなふうに思ったのは初めてのことだ。ニュウは大いに戸惑った。なにかから逃げるような気持ちの胸の奥にある。そばにいたいのにいたくない。近付きたいのに離れたい。理由の掴めない不安がある。これ、なにかしら？ニュウは自分自身を不思議に思った。

ふと足がなにかを蹴った。

それは包み紙にくるまれた二粒の『きやらめる』だった。部屋に入る前に廊下に置き、そのままにしていたものだ。ニュウは『きやらめる』を拾い、一つを包み紙から取り出して口に入れた。美味しけれど、なにかが違うと思った。胸の奥が痒いような気がした。その痒みは掻いても消えないような気がした。

階段を慎重に降り、玄関の扉を開けて庭に出る。

庭には祖父とガンマがいた。ガンマが振り向き、次いで彼と話していた祖父ノルフが顔を上げた。ノルフはガンマの新しい靴を作っているところだった。

ニュウは無言で二人の元へ歩いた。その様子にガンマは首を傾げ、ノルフはふむと頷いた。

「なにかあったか？」

ガンマが聞いた。

「わからないの」

ニュウがこたえた。

「わからないって、なにがだ？」

「わからないことがたくさんあって、なにがわからないか、わからないの」

「むう」

それでは俺にもわからん、とガンマは思った。元より不器用な男である。奇妙に静かなニュウの話を聞いてやろうと考え、それがかなわず黙りこむあたりに彼らしさがよくあらわれていた。クシーが

ガンマに惚れた理由、その第三位がこの不器用さだった。

ニュウは革を測っているノルフに近付いた。ノルフは作業を止め、しわしわの顔をニュウに向けた。そうして彼は薄く笑った。そこに言葉はなく、ただ思いだけがあった。

「おじいちゃん。これ、あげるわ」

ニュウが手を差し出す。ノルフは手のひらを出し、小さな塊を受け取った。

「きやらめるっていうの。とってもあまいのよ」

「そうかい」ノルフは齒を出して笑った。「ありがとうな、ニュウ」ニュウは笑い返すと、「じゃあね」と手を振り屋敷の裏へと向かった。

ちょうどエータが素振りをしている時間である。ニュウは兄貴分の稽古を邪魔にならない場所でぼんやり眺めようと思った。

裏庭にはエータがいた。いつもどおり素振りをしている。ニュウは石像の台座にすわって木剣の動きを目で追った。

エータがニュウに気づく。しかし素振りの手は止めない。ニュウは黙ってそれを見つめた。

今日は風がないなあ、とニュウは思った。風が吹けばいいのに、と思った。理由はわからない。ただ、強い風に吹いてほしい気分だった。

「今のはなんだったんです？」

ガンマが言った。無論ニュウのことである。あんなニュウは見たことがなかった。

「心当たりがありますじゃ」

ノルフは作業を止めず、下を向いたまま言った。

「むかし、死んだ娘が、今のあれと同じ顔をしたことがありました」

「心を病んだのですか？」

「心配するようなものじゃありません。ぐっすり眠れば朝には元に戻ります」

それはなんです、とガンマは訊ねた。

「病といえないこともない」

ノルフは寂しげに笑い、そうしてやはり寂しげにこたえたのだった。

「孫は恋をしたのでしょうか。それに気づいておらんで、戸惑っ
とるんだ」

22. まだ知らない

《旅人組合》

それは大陸各地に支部を持つ巨大な組織である。

《旅人組合》はいわゆる配達屋だ。

配達の依頼は各地の支部で《旅人》として登録した者が請け負う。細かく言えば配達だけでなく連絡、人探しなどもあるが、それらはほんの少数である。《旅人》は依頼を請け負うことを条件として組合の支部のある地域への通行税を減免されるなどの特典を得る。組合で発行される名札は、依頼をこなして『旅人得点』を貯めるほど身分証明としての信頼性が高くなり、各支部で受けられるサービスの質も上がる仕組みになっている。《旅人》の等級は四から始まり、最高が一級となっている。旅人得点を稼いで等級を上げれば報酬も上がる。二級や一級の《旅人》は顧客から直接に指名され、依頼を受けることもある。

依頼にも等級がある。これも四から一級だ。しかし以来の等級は組合の定めた難度の目安に過ぎず、大概のものは誰でも受けられる。例外として一級の依頼だけは一級の《旅人》にしか受けられないが、これは難度ではなく信用の問題だ。一級の依頼は即ち、一級の《旅人》意外には頼むつもりのない者の出したそれなのである。一級に上がるのは簡単ではない。一級になるために必要な旅人得点は五千点。くわえて持ち点が四千を超えると、そこから先はタイムアタックの特殊な依頼でしか点が入らない。これが理由で一級の《旅人》は大陸中を合わせても二百人に届かないのが現状だった。

《旅人組合》は大陸の多くの国々と密接に関わった組織だ。荷物を遺失した《旅人》は、場合によっては刑罰を受けることもある。二級以上の依頼で受け取った荷物をくすねたりなどしようものならば、各国の強力な魔女や魔法屋が処刑人として派遣される、というのはあまりにも有名な話であった。

繰り返すが、《旅人組合》は巨大な組織だ。大陸に《旅人組合》を知らない大人はいない。

ところで。

シグマ・ユーニは《旅人組合》の天敵である。



同志から届いた報告書の返事を書き終えたシグマは、懷から小さな金属製の笛を取り出し、吹いた。

すぐにバルコニーへ続く窓がガラリと開いた。現れたのはササノハだった。

「お呼びでしょうか、大将閣下」

まるで今までずっとバルコニーに隠れていたかのような早さだった。そのとおりなのだろう。相変わらずシノビはわからん——シグマは胸中で肩をすくめた。彼は思う。これが敵でも自分は気付かないのだろう、と。シグマには魔法の才能がない。それはつまり、気配や魔力の流れといった、認識に五感以外の感覚を必要とするものを、まるで感じられないということだ。一組織の長として危険察知・回避の手段は一つでも多く欲しいところである。命の所在を正確に把握するニューの異能をシグマは羨ましく思った。

「これを頼みたいんだ」

シグマが言った。そうしてササノハに書の筒を差し出した。

「路順は6―1―2。急ぎじゃないから、魔法は控えて馬をつかうように」

「はっ」

「気をつけてねって伝えといて。最近、物騒だから」

「了解しました」

筒を受け取ったササノハは一礼し、窓から飛び降り、モルイの街へと走った。

西門を超え街に着いたササノハは、北門広場に向かった。そうしてそこで身なりのよい男にぶつかった。

「おっと、失礼」

男が言った。大丈夫です、とササノハがこたえる。彼女は男の懷に素早く筒を突っ込んだ。

「路順6―1―2。急ぎじゃないから馬を使って。それと伝言『最近は物騒だから気をつけろ』」

「6―1―2、馬。了解――気をつけますと伝えてくれ」

男は小さく呟くと、自然な歩みで人混みに紛れた。一瞬の出来事だった。ササノハはすぐに踵を返した。男もまた、ササノハと同じくシグマに仕えるシノビだった。

青色屋敷には現在、シグマとその近辺を直接的に警護する者がラムダを含めて八人いる。しかし無論のこと《重苦の刃》に命を捧げたシノビはそれで全てではない。その総数は大陸全土で一千名をゆうに超える。彼らは各地に散らばり、それぞれの地方の同志たちと行動を共にしている。モルイの壁の内側にも、情報を収集し、組織の不利益となる者を人知れず排除するシノビ三十名が、表向きは市民を装い、街に紛れて生活している。その仕事は情報収集、脅威への対応、そして通信・連絡である。彼らは《重苦の刃》専属の殺し屋であり、通信員であり、飛脚だ。大陸中に散らばるシノビによって形成された《重苦の刃》の通信網は、一定の条件下で安定して期待された役割を果たすことができるぶん、一人の《旅人》に配達の全てが任される《旅人組合》よりも任務の成功確率が格段に高い。シグマが《旅人組合》を利用しない理由の一つがこれであった。

西の大門に向かう道には《旅人組合》のモルイ支部がある。街で四番目に大きなその建物を側目にかけてつ、ササノハは薄く笑った。褒められる類のそれではない、優越感からくる笑みだった。

「たしかに、わたしじゃ一級の連中にはかなわない」

ササノハは誰にも聞こえぬ声で呟いた。彼女一人で配達をすれば、距離に比例して一級の《旅人》に遅れをとることになるだろう。ササノハの脚は二級中位の《旅人》と同程度。一級は日に三時間の睡眠で馬より速く三日も走り続ける化け物だ。しかし、とササノハは思う。

「《旅人組合》には大将閣下がない」

ササノハにとってシグマは守るべき主であり、そして仲間だが、それ以上に彼は信仰の対象だった。シグマのいる《重苦の刃》が《旅人組合》に劣るとは、ササノハには思えなかった。

大陸のあらゆる大きな組織がみなそうであるように、《旅人組合》もまた穴だらけの組織である。

《旅人組合》には『一級』と呼ばれる、速さに命を捧げた異常者たちがいる。配達のためだけにつくられた極めて用途の狭い魔法をいくつもおさめる彼らは、もちろん優秀な運び屋だ。彼らに頼めば安全確実に、そしてなにより迅速に手紙や荷物を届けてもらえるというのが大陸の常識である。しかし彼らには二つの問題があった。

第一に、一級になるほどの《旅人》は自分を安売りしない。一級の《旅人》に荷物の配達を頼もうと思えばどんなに短い距離、どんなに小さな荷物であっても金貨が必要となる。そして第二に――これが最も重要なのだが、一級の《旅人》は圧倒的に数が少ない。《旅人組合》の支部の置かれた街すべてに一級の《旅人》が住んでいるわけではないのだ。たとえ住んでいたとしても、彼らの仕事は配達業――いつでも街に滞在しているわけではない。コネの無い人間が依頼をしようと思ってもそうそう出会えるものではないのである。一級がいないのであれば、手紙や荷物は安全性と速さを落として二級や三級に頼むか、もしくは身内や知人に届けさせるしかない。そんな理由から、一級の《旅人》がどれほど優秀であっても、《旅人組合》全体で見れば、配達依頼の成功率は二十パーセントを割っているのが現状だった。

そこに目をつけたのがシグマだった。

今から十年ほど前、シグマは資産家事業家向けの事業を興した。会社の名前は《ユービンキョク》。

むろん通信・配達をおこなう会社である。頼まれた荷物を各地のシノビがリレーで運ぶ単純な事業だ。荷物は小さな物に限られるが、それは一級の《旅人》もかわらない。《ユービンキョク》の支部を尋ねれば一級の《旅人》に僅かに劣る速さで荷物を運んでくれる。重要なのはいつ頼んでもその速さで運んでくれるという点だ。コネを持たない個人事業主にとって《ユービンキョク》と《旅人組合》のどちらが理想に近いかは明白だった。各地の同志たち、とりわけ営業部員の努力により、《ユービンキョク》の取引相手は今なお増え続けている。各地で《重苦の刃》の営業部員と契約を結び、シノビの通信網の一部を利用し大陸各地に重要な書類を送る貴族や商會が今ではいくつもあった。彼らの中には《ユービンキョク》なしでは事業の回らない者も少なくない。《ユービンキョク》のあげる年間の利益は、今や《重苦の刃》全体の年間収益の二割を占めるまでになっていた。

《旅人組合》は《ユービンキョク》を恐れている。

シノビとは本来、権力者を影から守るだけの存在である。その常識にとらわれ、顧客も《旅人組合》も気付かない。《旅人組合》以上の利便性をもった《ユービンキョク》という配達屋の実態に。

彼らは《ユービンキョク》が一級の《旅人》に匹敵するだけの人間を無数に飼っていると思ひ込んでいる。そんなことを実現した人間は何者なのかと、ありもしない存在に怯えている。

《旅人組合》という大陸中の誰もが知る巨大な組織。

その《旅人組合》に恐れられている《ユービンキョク》。

《ユービンキョク》を影で操っているのは自分たちの大将シグマだ。そして彼を守っているのはわたしたちなんだ――そのことがササノハの誇りだった。

彼女は思う。本当にやりがいのある仕事だと。

ササノハは《旅人組合》の運営陣が裏でどんなに人道に背くおこ

ないをしているか知っている。それは人攫いだ。かくいうササノハも幼い時分《旅人組合》に攫われた一人だった。せいぜい怯えていなさい、《旅人組合》。

大将閣下に喰われるその日までね。

閣下はおまえたちみたいいな下衆を絶対に許さないんだから。

くすくすと笑いながら、ササノハは屋敷への帰り道を急いだ。

今のところ、シグマに《旅人組合》と争う理由はない。

ササノハの期待は勘違いもいいところであった。



「あれ？」

こなすべき仕事をあらかた終え、ふとベッドに視線を移動したシグマは、そこにあるカラフルな物体を見て声を上げた。ルービックキューブだった。

「なんだ。ニュウ、忘れていったのか」

呟き、苦笑する。あんなに喜んでいたのだ。もしかしたら失くしたと勘違いしてそこらじゅう探し回っているかもしれない。その様子は難なく想像することができた。それは可哀想だな、と思った。シグマは背伸びをし、腰を上げた。

「どうせ今日はもう暇だ。届けてあげますかね」

「一刻ほど前に裏庭の方へ行きました。エータ殿の稽古を見とるのやもしれません」

庭でノルフに会う。彼はいくつもある悪趣味な石像の一つ、その台座に座ってなにやら作業をしていた。

「靴を作ってるのか？」

シグマは言った。ええ、とノルフはこたえた。

「腰が痛むと言ったりましたので」

彼は靴底に当たる部分を持ち上げ、シグマに見せた。それは女物のようだった。作りかけの靴を見て、シグマはふむと唸った。メイドの誰かだとは思うが、誰だろうか。

ノルフは少年時代から靴一筋で生きてきたような男だ。屋敷での彼の仕事はもちろん靴作りと補修である。彼の作る靴は歩いても足の裏やふくらはぎが痛まないと評判だった。

おそらくノルフは「腰が痛いから靴を」と頼まれたのではなく、誰かの腰が痛いという発言を耳にし、そして勝手に作っているであろう。シグマはそう推理した。そういうところのある老人だった。『この世界』では靴底のある靴はまだまだ少数派である。一般的に靴と呼ばれるそれは分厚い革の靴下の中に足の大きさに切った板を入れたものだ。ほんの五年前まで硬い靴底の靴などどこにも売っていなかった。そのことでシグマは随分苦勞したものだ。山奥の村で暮らしていたノルフが靴底のある靴の作り方を知っていたことに、誘拐当初シグマは驚いたものである。このことでシグマは『靴の流布を学ぶために都会まで出る勉強家』という印象をノルフに抱いたが、これは間違いだ。幼いニューと暮らしていたノルフが村を出ることなど一度もなかった。靴底はノルフが、足や体への負担を軽減するにはどうしたら、と一心に考え、そして思いついたものだ。彼はもう二十年も前から『靴底のある靴』を作っている。何を隠そう、現在出回っている『靴底のある靴』は、ノルフの靴を履いて都会へ出た若者と、彼の靴を見てそれに感銘を受けた靴づくりが発端なのだ。靴底誕生までの一連の流れを知る者は今のところ、この世界には一人もいなかった。ちなみに『靴底のある靴』を発表した靴づくりは王より一代限りの爵位を賜り、現在は王都に豪邸をかまえている。

靴は誰のものなのか。気にはなったが、シグマは聞かなかった。

聞くのは野暮に思えたからだ。シグマはノルフと二言三言はなし、裏庭へと向かった。

「ニュウならそこに座って……あれ？ さっきまでそこで見てたんですけど」

裏庭でエータと会う。彼は無心で木剣の素振りをしており、話しかけるまでシグマに気付かなかった。

「屋敷の中にはいなかったんですか？」

エータが言った。たぶんね、とシグマはこたえた。

「部屋と居間にはいなかったよ」

「すいません。素振りに熱中してて」

「エータが謝ることじゃないさ」

「急ぎの用事ですか？」

「いや、別に——」

そこまで言って、シグマはルービックキューブを探して涙目になっているニュウを思い浮かべた。それは愉快的な想像ではなかった。

シグマは言った。

「——たいした用じゃないんだけど、できるだけ早く会いたいかな」
エータの眉がぴくりと動いた。そのことにシグマは気付かなかった。

メイドたちの噂がエータの頭をよぎる。大将は本気よ。そうかなあ？ そうよ。やっぱり虫の一件が効いてるよね。確かにあれ以来、ニュウちゃんに向ける笑顔が優しい気がする——エータはごくりと唾を飲み込んだ。

「大将……さすがにニュウはまだ幼すぎると思います」

「うん？」

「文句を言うわけじゃないですけど……ええと、つまり、ニュウはまだ子どもなわけで」

性的なあれこれは早くないでしょうか——エータはそう言おうと

して、しかし口籠った。恥ずかしくて仕方なかったためである。エータは俯いた。

俯くエータを見て、シグマはなるほどなと思った。彼はエータがニュウを庇っているのだと考えた。おそらくニュウはルービックキユーブを紛失してしまったことをエータに相談したのだ。そしてエータはそのことで自分がニュウを怒ると思っているのだ――シグマはそう考えた。エータの言葉を「まだ子どもなのだから怒らないでやってくれ」という意味に解釈したのである。シグマは、エータがニュウを妹のように可愛がっていることを知っていた。しかしそれにしたって、とシグマは思った。もう十七だろうに、考えが浅はからだ。ニュウを見ているのが自分だけだと思っていけないか？ニュウが子どもだということくらい僕だって理解している。子どもならおもちゃを失くしてしまうことくらいあるだろう。そんなことで怒ったりするものか。シグマは溜息をぐつと堪えた。そうして彼は努めて優しい声を意識し、「エータ」と言った。

「心配しなくていい。彼女の健全な成長を妨げるような真似はしないよ。僕はニュウを大切に思ってる。大丈夫だ」

エータは息を飲んだ。

純愛なんだ、とエータは思った。彼はシグマの言葉を「ニュウを大切に思っているから、成長するまで待つ」と解釈した。果てしなく大きな愛に触れた気がした。これが大人というものか――エータは自分がひどくちっぽけな存在に思えた。

「すみませんでした」

エータは言った。

「余計なことを言って――僕はまだまだ子どもでした」

エータの予想外の落ち込みように、シグマはどきりとした。呆れていることが伝わってしまったに違いない。自分が十七の頃は成長を急かされるのが嫌だったというのに、大人になった自分はそんなにやさしい心を態度に出してしまったのだ。シグマはそう思った。慌てたシグマはエータの頭を優しく叩き、「気にするな、ゆっくり

大人になればいい」とフォローした。

エータははっとした。ゆっくり大人になれ。それはローにも言われたことだった。自分の成長への焦りを見抜かれたに違いない。僕をちゃんと見てくれる大人がいる。そのなんと素晴らしいことか。エータはぐつと歯を食いしばった。嬉しさと悔しさで胸が張り裂けそうだった。

「もしかしたら、ニューはルフォーの所にいるのかもしれないな」

これ以上ないほどあからさまな話の戻し方だった。シグマはもう一度エータの頭をポンと叩くと、「ルフォーの部屋に行ってみるよ」と言い残して裏庭をあとにした。

残されたエータは木剣をぎゅっと握り、小さく呟いた。

「頑張ろう……頑張って追いつかなくちゃ」

わかりやすい空回りのカタチであった。

「ニューちゃんに会うのはもう少し待ってもらえないかしら」

二階の廊下でルフォーと会う。彼女は『Campas』と印字された水色のノートを持っていた。

「居場所を知ってるのかい？」

シグマは聞いた。ええ、とルフォーは答えた。

「ちょっと地下室で実験の手伝いをしてもらっているのよ。あの子、あなたがいると力が入りすぎちゃうから、今は待って」

わかったよ、とシグマが踵を返したところで、その肩をルフォーが掴んだ。

「ねえユーニ。あなた、いま忙しいかしら？」

「忙しくて仕方ないね」

シグマは即答した。自然に嘘をつけることが彼の数少ない自慢の一つだった。

「多忙も多忙。サンタ帽さ」

対するルフォーも即座に返した。

「そう。でも付き合ってね。ちよつと話したいことがあるの。わたしの部屋に行きましょう」

二人はそれぞれ別種の笑みを浮かべた。一方は虎の笑み、他方は虎に睨まれた兎の笑みだった。シグマが言う。

「何度も調べてわかつているとは思うけれど、この体に特殊な力なんてものは無いよ。僕は『手違い品』だからね。根本的な部分が彼らとは違う」

「今日はそのことじゃないわ」

ルフォーは妖艶に笑った。シグマは嫌な予感がした。少年時代、虐められていた頃のことを思い出した。あのいじめっ子たちは今どこで何をしているだろうか。元気でやっているだろうか。虐めを。シグマは遠い目をして過去を思った。過去はキラキラ輝いていた。逃避だった。

窓の外を大きな鳥が飛んでいた。

大したことじゃないのだけれど、と青の魔女は言った。

「《予言の絵本》が起動したの」

かくして。

物語はのろのろと走り出した。

行き先はまだ、誰も知らない。

或いはいつまでも、誰も知らない。

23. 予言の絵本

夢見人は新たな所有者様を歓迎いたします。



灰色の世界に立っている。

視界を上と下でわけて、上は青く、下は灰色に『くれよん』で雑に塗りたくったような世界だ。灰色の中には赤や黄色や緑や、或いは意地汚く領土を侵害する空の青もたくさんあるのに、認識として、そこは灰色に支配された世界だった。そんな世界でニュウが黒髪の子どもたちと楽しげに遊んでいる。笑い合い、叩き合って遊んでいる。その様子を離れた所から、もう一人のニュウが、誰かと手を繋いで眺めていた。

色とりどりの灰色、色鮮やかな灰色――そんな印象をニュウの感性にぶつけてくる無感情な建物たちが無数にたち並ぶ、灰色の世界。そこにぽつんと一軒、場違いに佇む木造建築がある。世界中でそこだけがきちんと色を塗られたような木の家だ。それは小さな店だった。

ニュウと名も知らぬ仲間たちは色のあるその店で、色のある、可愛らしい小さな売り物をそれぞれ手にとって見せ合っている。緑色の細い棒。薄い『びにいる』に閉じ込められた黄色や桃色や赤の大小さまざまな球。これまた薄い、赤い『びにいる』に閉じ込められた何やらペラペラした茶色の物体。世界中の珍品を集めたような店内にはニュウの好きな『きゃらめる』もあった。それらの並べられた箱には白い紙に黒い太字で『10』『20』『50』などと手書

きされた値札が貼られている。どれを買おうか悩むニュウに黒髪の女の子たちが言う。

「ねえ、これ超おもしろいよっ」

「これおいしいよ。すっぱいけど」

「これはダメ。水つかうから秘密基地じゃ食べれないもん」

ニュウはますます悩む。

じわじわじわ、と虫が鳴いている。空の高いところを飛ぶ鳥がひよろろ、と鳴く。子どもたちはみな一様に汗を掻いていた。

店の前には木の長椅子があり、そこでは男の子たちがそれぞれ買ったものを食べたり投げ合ったりしてはしゃいでいる。長椅子の隣には一本足の赤いオブジェが置かれていて、その上に二人の少年が座っている。いたずらっぽい笑みを浮かべたつり目の少年と、ダボダボの服を着た、子どもたちの中でいっとう整った顔をしたたれ目の少年だ。やはり全員が黒髪で、ニュウだけがふわふわのストロベリーブロンドだった。

ニュウは店の奥の椅子に座る眼鏡の老婆に選んだ品を見せ、穴の開いた銀色の小さな硬貨を渡して会計を済ませる。そうして彼女は黒髪の少女たちと店を出て、赤いオブジェに座る二人の少年に菓子を見せた。

「買ったわっ」

ニュウが言う。

「おう、買ったか。食い方はわかるか？」

つり目の少年が聞く。

わかるわ、とニュウは元気よくこたえた。たれ目の美少年が優しくに笑う。

「外国にだってお菓子くらいあるさ。王様は過保護すぎ」

つり目は「王様じゃない、国王陛下だ」と言っオブジェから飛び降りた。そうして彼は仲間たちを振り返り、手を腰に当てて言った。

「よし、魔女も無事に買い物を終えた。これより我々は、速やかに

基地へと帰還する！」

おーとか、わーとか、統一されない返事の声が響く。

つり目とたれ目が先頭を歩き、その後ろをぞろぞろと仲間たちがついていく。ある少年は桃色の棒で仲間をつつき、ある少年は黄色い球を地面にぶつけて弾ませる。二人の少女が共同購入した『きやらめる』を分け合い、また別の少女が自分の買ったものと交換するよう願い出る。秘密でないことをひそひそ話で言い合って笑う少年と少女の姿もある。十人を超える子どもたちから成るその集団に男女の隔てはまるで無く、そこでは誰もが楽しげに笑っている。輪の中には購入した菓子の食べ方をこっそり黒髪の少女に訊ねるニュウの姿もあった。

遠ざかる子どもたちの背中をニュウは見送る。

あちらには色があり、こちらには色がない。

胸にはひどく切ないうずきがあった。自分は彼らを知らないはずなのに、体の深いところには置き去りにされたような痛みがあった。ニュウは子どもたちの中で仲間としてはしゃぐもう一人の自分を羨ましく思った。自分はなぜあそこにはいないのだろう、と彼女は思った。

自分と手を繋ぐ誰かがなにかを言う。その声は聞こえない。ニュウはその誰かを見上げる。逆光で影になり、顔がよく見えない。なぜかユラユラも見えない。ニュウにはそれが男であるということしかわからなかった。男がニュウの手を引いて歩き出す。ニュウはそれに抵抗した。嫌だ、と彼女は思った。帰りたくない、彼らと一緒に遊びたい。強くそう思った。ぐずるニュウを男は優しく抱きしめた。そうして彼はニュウの頭をぽんぽんと叩き、耳元でなにかを言う。男の声はやはり聞こえない。その言葉はわからない。けれどわかることはあった。

男はシグマだった。

「あらあら。わたしだけの特等席だと思っていた場所に、可愛らし

い先客がいるわ」

唐突に夢がかき消えた。

どうやらうたた寝をしていたようだ。ニユウは顔を上げた。青空を背にルフォーが笑っていた。そこは青色屋敷の屋根の上だった。

「おはようニユウちゃん、よく眠れた？」

ルフォーが言う。ニユウは目をこしこしやって「うん」と答えた。「こんなところでなにをしているの」

ルフォーが聞いた。

「ルフォー。わたし、へんなの」

ニユウは言った。ルフォーは首を傾げながらも、ふむと頷き、ニユウの隣に腰を下ろした。眼下には揺れる洗濯物と多数の石像、そして靴を作っているノルフが見えた。ルフォーは続きを促した。

「どんなふうに変なのかしら？」

「わからないの。わからないんだけど――」

ニユウは自分の心のおかしな動きをルフォーに説明した。

シグマを変に意識してしまうこと。シグマのことを考えると、これまでではふわふわしていた胸がドキドキと高鳴り、時にチクチク痛むこと。突然不安な気持ちになること。その理由がわからないこと。シグマにあげようと思っていた『きゃらめる』を祖父にあげてしまったこと。初めてシグマのいない所に行きたいと思ったこと。ニユウは自分自身にもわからない感情を懸命に言葉にした。ルフォーならこの悩みをなんとかしてくれるのではないかとニユウは考えた。その考えは一面では正解であった。

ニユウの拙い説明を聞き、ルフォーは現状を理解した。そして迷った。

ルフォーには二つの道が用意されていた。ニユウに正しいことを教える道と、誤魔化す道だ。『それ』について正しく教えることがニユウの心に何らかの影響を与えるであろうことは想像に難くなかった。教えればニユウは変わるだろう。それがどのような変化にな

るか、ルフォーにはわからない。ニユウは優秀な子どもだ。様々な場所や場面で活躍できる立派な魔女になるために必要な才能をいくつも持っている。それだけに、『それ』を知ることによって生じる変化によってニユウの才能が好ましくないかたちに曲がってしまうことをルフォーは恐れた。それはひどく惜しいことだ。むしろ正しい知識を得て好ましい変化があらわれることも十分に考えられる。しかし嘘で誤魔化してしまえばこれまでもどりのニユウを保持できる自信がルフォーにはあった。現状維持か、未知か。ルフォーの迷いは重かった。

やがてルフォーは溜め息をついた。なぜわたしがこんなことをしなくてはならないのか。こんなのはそれこそユーニの仕事でしょうに。ルフォーはニユウの目を見、そして言った。

「ニユウちゃん」

「なにかしら？」

「あなた、血はもう始まってる？」

ニユウは首を横に振った。首からさげた、ルクリアから貰ったお守りが揺れた。

「もうすぐかもしれないって、クシーが言ってたわ」

「じゃあ、きつとそのせいね！」

手をポンと打ってルフォーが言った。ニユウは頭に疑問符を浮かべた。

「そのせいって、どのせい？」

「体が子どもから大人になろうとしている時期にはね、どうしても心が不安定になってしまうものなの。不安になったり、普段は思わないようなことを思ったり、好きな人のことを妙に意識してしまったり——それは女の子なら誰もが経験することなの。だからニユウちゃんは、なにも心配しなくていいのよ」

「ほんとう？……じゃあ、おむねのチクチク、なおるの？」

「わたしの言うとおりにすれば必ず治るわ。ニユウちゃんはユーニが大好きなのよね？」

「めろめろだわ」

「ユーニと一緒にいられて、どう？幸せ？」

「とってもしあわせよ」

「だったら、難しいことを考えすぎて、知らなくてもいいことを知ってしまうのは悲しいと思わない？ニュウちゃんはユーニが好き。ユーニもニュウちゃんが好き。二人は一緒のおうちで、幸せに暮らしてる――」

頭上で鳥が鳴いた。風が吹き、森の気が揺れ、音をたてた。雲が一瞬だけ太陽を隠した。ルフオーは言った。

「――それじゃ足りない？」

それは呪いだった。

「……………あ…………」

ルフオーの言葉でニュウは、自分がどれだけ恵まれているかを再認識した。そして少女は思い出した。シグマに誘拐された当初の、いつか幸福な夢がさめてしまうのではないかという、あの恐怖を。ニュウの心の奥で黒い生き物が言う。これ以上を望むなど。全てを失うぞと。それは恐ろしい声だった。ニュウはその声に屈した。

雲が移動し、また太陽があらわれる。腰掛けた青い屋根からの照り返しがニュウの顔を明るく染めた。ニュウは頷き、笑った。「そうよね」と彼女は言った。それはまるで汚れたところのない、真っ白な笑みだった。

「考えすぎるのはよくないって、クシーもゆってたわっ」

「そうそう。気にしすぎは駄目よ。楽しく生きなくちゃ」

ルフオーはニュウの頭を撫で、女神のように優しく微笑んだ。青の魔女は誤魔化す道を選んだ。

「ありがとうルフオー。やっぱりルフオーはなんでも知ってる、たよりになるお姉さんねっ」

少女の言葉にも、魔女の心は痛まなかった。

ただ、思うところはあった。

かつての自分なら――カルフェボの教え子として昼も夜も本の上

に未知を追いかけていた当時の自分なら、現状維持などという不拔けた選択は決してしなかっただろう。かつて少女だった女はそんなことを思った。



「しばらくここでのんびりしていなさい。今日のお勉強はお休み。ユーニとファイちゃんにはわたしから伝えておくわ」

「そうしたら、わたし、なおる？」

「勿論よ。今のあなたに必要なのは休むこと。そして余計なあれそれを考えないことよ。シグマを好きなままのニュウちゃんになりたいでしょう？」

「うんっ」

「じゃ、気の済むまでここでのんびりしていなさい」

「ねえ、ルフォー」

「なにかしら？」

「ルフォー、おつかいがおわったら、あたらしいまほうを教えてくれるって言ったわ」

「忘れてないわよ。ちゃんとカルフェボ学長に伝えておいたわ。ユーニの役に立てる魔法をニュウちゃんに教えてあげてね、って」

「どんな？どんなっ？」

「それはその時のお楽しみよ」

「ルフォーさん、どこにいたんですか」

廊下を部屋に向かって歩くルフォーに呼びかける声があった。それはなにやら慌てた様子のデルタだった。

「どうしたの？」

ルフォーが言った。デルタには税務関係の書類の仕分けを頼んでいた。それが慌てて自分を探しにくることは、さてはなにかやらかしたか？ルフォーは胸の内で溜息をついた。

「すぐに部屋に戻ってください」

デルタが言う。

「理由を話して」

ルフォーがこたえる。

デルタは僅かに逡巡したが、やがて言った。

「自分にもわかりません。とにかく、《予言の絵本》が大変なんです」

ルフォーは走りだした。



「なにかご用でしょうか？」

ふと立ち上がり、二階の自室からバルコニーに出たラムダは開口一番そう言った。そこにはナノハナがいた。

「相変わらずおまえの気配察知はとんでもないな」

頭を掻き、ナノハナが言う。

「シノビでもやっていけるぞ」

「本職の皆さんには敵いませんよ」

「いや、おまえからは確かに才能を感じる」

「またまた」

冷や汗モノの発言だった。

ラムダは慇懃な良家の青年を絵に描いたような笑みを浮かべ、ちらとナノハナの服装にそのきつね目をやった。シノビの副隊長は青色屋敷ちかくの森で目立たぬようにとこの度あらたに作られた、新品の迷彩服を着ていた。なかなか悪くないですね。ラムダは思った。

彼はシノビたちの作ったこの迷彩服にシグマの名義で手直しを加えていたのだった。

「して、どのようなご用件で？」

ラムダが切り出す。ああ、とナノハナが言った。

「これからササノハを連れて森の様子を見に行くんでな。閣下もガシマも忙しいようだから、おまえに言っておこうと思ったんだ」

「森というと、例の『木のおばけ』とやらですか？」

「ああ。ニューの奴は、害はないから放っておいていいと言うんだが、そうもいかないだろう。敵意は無いというからこちらからなにかしてやることはないが、それにしたって、森に何がいるかくらいは知っておいた方がいいと思うんだ」

虫の一件のこともあるしな——ナノハナは付け足した。

ラムダはふむ、と唸った。森の奥に居る『なにか』についてはシグマを通して聞き及んでいる。便宜上『木のおばけ』と呼んでいるそれは、しかし誰も姿を見ていないため、木であるかどうかもおぼけであるかどうかも定かでない。

発端は昨日だ。シノビたちは訓練でニューを尾行していた。その途中、ニューは突然あしを止め、森の奥を見つめて動かなくなった。それを不思議に思ったナノハナが森を探索。そこで不思議な現象にあったというのだ。彼はそのことをシグマに、『木の化け物に助けられた』と報告した。

「助けられたかどうかはわかりませんが、森の奥の、ある一点に踏み込んだ時、どこからともなく女の声がして、そいつに『この先には危険があるから来るな』と言われたんです。いま思えば、どうして助けられたなんて思ったのか、それにどうして声の言うことを信じたのか、まるでわからないんですが……」

勿論シグマにわかるはずがなかった。ナノハナは同じことをニューにも話した。ツチクイモドキ事件以降、このてのことに関するニューの信頼度は仲間の中でも上位にあった。これに対しニューは「わるいのじゃないからだいじょうぶよ」と答えたが、仲間を守るこ

とを職分の第一とするシノビにとっては、やはり気味が悪いのはどうしようもなかった。

「今からすぐに行くのでしょうか？」

ラムダが聞く。そのつもりだ、とナノハナはこたえた。

「では、私もその場所に案内してください」

ナノハナは首を傾げた。

「来るのは別にかまわんが、相手は言葉のわかる生き物だ。争うつもりはないぞ？」

「ルフォーさんも仰っていましたが、もしかしたら精神干渉系の魔法かもしれないと思ひまして。争わないにしても、戦力が増えて困ることはありません。二人より三人。用心に越したことはないでしょう」

こうして森の探索が決まった。

集合場所に現れたラムダを見てササノハがげんなりした顔になるのは、これより十三分後のことである。



シグマがルフォーに連れられ四階にある彼女の部屋へ行くと、そこには先客がいた。デルタである。シグマは大いに驚いた。デルタがルフォーに懸想していることをシグマは知らなかった。

「デルタ。なにしてるんだ、こんなところで」

「ルフォーさんの手伝いをしています」

デルタはきびきびと答えた。

「キミ今日、休みじゃなかったか？」

「はい。だから手伝わせてもらっています」

「いいのか、せっかくの休みがそんなふうで。嫌だったら断ってもいいんだぞ？それでルフォーに虐められるようなら僕に言いなさい。」

力になるから」

ひどいこと言うわ、とルフォーが言った。彼女がこれまで実験と称してラムダや他の仲間たちにしたことを思えば、シグマの発言は『大将』として仲間を思いやる真つ当な言葉であつた。しかしデルタは「いいえ」と首を横に振った。

「自分は自分の意志で、自分から望んで、ルフォーさんの手伝いをさせてもらっています」

ここまで言われれば如何に鈍感なシグマといえども、この実直な青年の想いを察せられないものではなかった。顔に騙されたのか、可哀想に。シグマは同情した。彼はデルタに「そうか」とだけ返し、しかしそれでは優しさがないと考え「何事も努力だ、頑張れ」と付け加えた。これをデルタはシグマからの宣戦布告と受け取った。大将が俺を一人の男として見てくれている――デルタはぐくりと唾を飲み込んだ。汗が背中を滑り落ちた。彼は消え入るような声で「頑張ります」と答えた。滝のように汗を掻くデルタをシグマは気の毒に思った。そうか、自分でも叶わぬ恋だと気付いているんだな、とシグマは小学五年の初恋を思い出そうとした。その時の気持ちは覚えていのに、初恋の相手の顔や名前は思い出せなかった。老いは今この瞬間も迫っていた。

「これを見て」

シグマに本を差し出し、ルフォーが言った。

革表紙の本だった。黒い表紙には『D i a r y／鈴風・六乃宮・平野』という記号が金で箔押しされている。ほんの二月前まで隣国の秘宝であつたそれは《予言の絵本》だ。

シグマは、およそ彼の思う絵本像とはかけ離れた厚さと重さをもつそれを受け取り、そして開いた。白紙である。シグマはページをぺらぺらと捲っていく。アカナナの王宮から盗んで以降ずっとそうであるように、《予言の絵本》は全てのページが真つ白だった。

「なにも無いようだが」

シグマが言う。その手をルフォーがぺしんと叩いた。

「黙って見ていなさい。どこのページでもいいから、開きっぱなしにして」

シグマは言うとおりにした。

やがて一分が経とうという頃、変化はおとずれた。

本のページがうつすらと光りだし、そこに黒い線で絵と文字が現れたのだ。

「こ、これは……」

シグマが驚きの声を上げる。

ルフォーがニヤリと笑う。

デルタはごくりと唾を飲んだ。

白紙だったページには禍々しい龍の絵とともに、シグマにだけ読める文字でこう記されていた。

譲渡の完了を確認しました。

契約を此れに。

夢見人は新たな所有者様を歓迎いたします。

24. 物語のはじまり

本に浮かび上がった文字は、シグマが読み終わると、淡い光とともにフツと消えてしまった。慌ててページを捲れば、それは本のいちばんはじめのページに、最初からその状態だったかのように記されていた。

「何が書かれているの？」

ルフォアが聞く。シグマはわざとらしく肩をすくめてみせた。

「どうして僕に聞くんのだ。僕がなんでも知っていると思っただけ——」

「巫山戯てないで、早く教えてくだらないかしら」

ルフォアが睨む。彼女はずいといとシグマの横に移動し、文字を指さした。

「これ、古代文字でしょう？」

デルタが息を飲んだ。シグマは横目でデルタを見た。ルフォアは続ける。

「門外漢のわたしじゃ『完』『夢』『人』以外の字は読めなかったわ。ひと月ちかく調べて、様々な魔法的接触を試して、ようやく今日その対象が起動したのよ。わたしの探究心はもう一秒だって抑えが効かないの。早く読みなさい、さあ」

シグマは溜息をついた。この件に関して部外者であるデルタに知られるのは望ましくないように思えたが、事態が事態だ。仕方あるまい。シグマのコネの中には、秘宝級の発掘物をいじくり回した経験を持つ人間はルフォア以外にいなかった。魔女の機嫌を損ねる訳にはいかない。シグマは古代文字——自分の生まれ故郷の文字を音読した。

三人はしばし黙り込み、各々その意味を考えた。デルタは腕を組み、ルフォアを目を閉じ、シグマは頭を掻いた。

譲渡の完了を確認しました。

契約を此れに。

夢見人は新たな所有者様を歓迎いたします。

やがてはじめに口を開いたのはデルタだった。

「どういう意味なのでしょうか？」

彼は言った。

「譲渡の完了というのはなんとなくわかります。おそらく《予言の絵本》の持ち主がアカンナ王から大将に変わったことを言って——書いて——いるのでしょうか。しかし『契約』と『夢見人』の部分が自分にはさっぱりです。大将はご存知ですか？」

シグマはうーんと唸った。彼は本をひっくり返したり振ってみたりしたのち首を横に振り、言った。

「僕には譲渡云々のところからしてわからないよ。そもそもこれはネコババしたものだ」

「ねこばば？」

デルタが首を傾げる。盗んだって意味さ、とシグマがこたえた。

「譲り受けたものじゃないんだ。譲渡なんていう表現は正確じゃない。もしかしたら、この本は僕らと同じように未熟な意思を持っているんじゃないだろうか？ そうだとしたら、自分の持ち主が変わったことを盗難じゃなく譲渡だと誤認した、と考えることができる」

「『ぷろぐらむ』ということも考えられるのじゃないかしら」

本を覗き込みながらルフォーが言う。

「持ち主が変わって一定期間——四十日から五十日が経過すると自動的に『譲渡した』とみなされてしまう類の『ぷろぐらむ』。どう？」

「それは魔法で可能？」シグマが訊ねる。

「愚問ね」ルフォーがこたえる。「今の魔法で不可能だとしても、古代人にはできたでしょう。未来予知なんてことができるほどの秘宝を作る文明を持っていた人たちですもの」

なるほど、とシグマは言った。

「『夢見人』というのは何なのでしょうか」デルタが言う。「自分は聞いたことのない言葉です」

「そこなんだよねえ」

シグマは顎に手を当てて唸った。彼は本の『夢見人』の所に指を当てた。

「これ、そもそも僕には正しい読み方がわからないんだよ。ユメミビトなのか、ムケンニンなのか、或いはちよつとひねってユメミンチュだったりムーミンだったりするのか。日本語ってそこらへん曖昧だから」

「ニホンゴ？」

デルタがまた首を傾げる。古代文字のことよ、とルフォーがこたえた。

「読み方はともかくとして、この本の名前か肩書きか、変わったところで一人称というのも考えられるわね」

「名前は『予言の絵本』ではないのですか？」

「それは呼び名だよ。初代アカナ王が勝手にそう名付けただけで、本当の名前は誰も知らない」

「では、契約というのとは？」

「契約を此れに、と言っているくらいだ。これで契約は完了しましたよ、ということじゃないかな。それとも契約しろという意味だろうか」

デルタはふむ、と頷いた。

そのあたりは確かめることができそうだな、とシグマは思った。

「もしかしたら、そのあたりは確かめることができるんじゃないかしら？『ぷろぐらむ』にせよヒト的な意思があるにせよ、『予言の絵本』はこちらに話しかけてきたのだから、こちらから話しかけることも可能なんじゃないか？」

「なるほど。さすがルフォーさんだ」

さっそく試してみましよう、とデルタが言う。シグマは思いついたことを先に言われてしまった時のあの何とも言えない気分を味わ

った。

《予言の絵本》との対話は様々なかたちで試みられたが、どれも結果は失敗だった。

シグマが優しく話しかけても、デルタが強い口調で脅してみても、ルフォーが『伝心』の魔法で意思をぶつけてみても変化は無かった。本なのだから筆談すべきではないのか、とのデルタの案を採用し、シグマが古代文字で白紙のページに『こんにちは』『あなたの名前をおしえてください』『あなたは何ですか?』などと書きこんでも、やはり返事はなかった。書いた文字がすぐに消えてしまったことには三人とも驚いたが、それ以外には目立った反応はなにも起こらなかった。

「何がいけないのかしら……」

やがてルフォーが革椅子にへたり込んで力なく呟いた。

「言葉も駄目。筆談も駄目。魔法も駄目。ふむ……あとは何かあるでしょうか」

背筋を伸ばして行儀よく立ったままデルタが言う。彼もまた怒鳴りすぎて疲れていたが、惚れた女にだらしない姿を見られるのは御免であった。

「ちよっとお水飲んでくるわ」

そう言ってルフォーが立ち、部屋を出てゆく。自分も行きます、とデルタが続く。デルタはドアの手前で振り返り、言った。

「大将はなにか飲みますか? 持ってきますが」

「んー、僕はいいやー」

革表紙の本を下から覗き込みながらシグマがこたえる。デルタは苦笑し、「一応、水だけ持ってきます」と言った。

「ん。悪いねえ」

「あくまで誠実に、正面から正々堂々、全力でぶつからせていただきます。簡単には負けませんよ」

「んー。……………ん?」

シグマはドアを振り返った。ぱたり、がちや、と音を立ててドアが閉まった。

「今の、どういう意味だ？」

さっぱりわからなかった。

シグマはふうと息をつき、来客用の革椅子に座り込んだ。そうしてうんともすんとも言わない本を眺めた。シグマはアカンナで外務長官を務めていた時の記憶を掘り返した。その当時、《予言の絵本》は不定期で、アカンナ王国の危機になりうる災害を絵物語によって知らせるだけのもだった。突然本が光り、絵と文字が浮かび上がるのだ。国はそれを読んで災害の対抗策を用意し、そして災害をギリギリまで育ててから刈り取っていた。

しかし、とシグマは思った。

かつてアカンナにいた頃、《予言の絵本》に浮かび上がる文字はこの大陸全土で使われている文字であり、断じて古代文字などではなかった。それが、いまこうして浮かび上がり、最初のページに定着したのは古代文字だ。この違いは何なのだろうか。シグマはうーんと唸った。

「おかしいといえば、今まで放置してたけど、前にあった物語が消えたのも不思議な話なんだよねえ……」

シグマがアカンナの勇者アルファと協力して王宮から《予言の絵本》を盗み出した際、本に記されていた過去の災害の物語は、シグマの見ている前でふっと消えてしまった。その時シグマはその現象を秘宝の持つ防衛機能によるものであるかと考えた。持ち主でない者に盗みだされたことで、本の未来予知の機能が失われたものと思っただのである。しかし、『譲渡の完了を確認しました』などといった文が浮かび上がったにもかかわらず相変わらず他のページが全て真っ白であることを考えると、あれは間違いだったのだろうか、と今は思える。シグマは大きく溜め息をついた。アカンナの危機を知らせるこの秘宝が動けば、シグマはまた一步野望に近づく。それだけに秘宝と対話できず、《予言の絵本》が正しく動作しているかどうかどう

かわからないのは不安であった。

ふとシグマは窓を見た。それは何気ない行動で、特段理由のない視線の動きだった

ニュウが窓の外を飛んでいた。

彼女は何をするでもなく、ただふよふよと庭の上空を飛んでいた。シグマは首を傾げた。

「地下室にいるんじゃないのか……？」

実験の手伝いとやらはもう終わったのだろうか？それならば忘れていったルービックキューブを渡してやろう。シグマはバルコニーに出た。そうしておーいと手を振った。

ニュウが振り向いた。

ニュウの目がシグマの姿をとらえた。

シグマはへらりと笑った。

「やあ、お嬢さん。こんな所で会うなんて奇遇だね」

ぼんっ、と一瞬でニュウの顔が真っ赤になった。

ニュウはシグマを見ながら手足をパタパタと不規則に動かす不思議な舞いを疲労したのち「ひわあああ」と奇妙な声を上げて屋根の方へと飛び去った。

「……え？」

シグマは大いに戸惑った。彼女はどのようにして逃げた？部屋の中に戻ったシグマは考えた。僕と話すのが嫌だったからか？いや、それはない。嫌われているとは考え難い。シグマはニュウに懷かれている自信があった。今ではシグマもニュウを実の娘のように思っている。自他ともに認める仲良しだ。ならばニュウはなぜ逃げたのか。いたずらでもしたか？シグマは顎に手を当て、頷いた。つまみ食いくらいならしそうに思えた。シグマは苦笑した。それで怒るのはファイの仕事だ、僕なら駄目な父親らしく見て見ぬふりをしてあげたものを――シグマは自分が対等の相手として認められていないことを少しだけ残念に思った。

シグマは再び革椅子に座り、テーブルの上にルービックキューブ

を置いた。上になっている面は赤一色だった。

赤い色。スズカゼ王家の色。血の色。

血……？

不意に、シグマの頭をひらめきが駆け抜けた。

「そうだ。もしかしたら！」

シグマはがばりと立ち上がり、ルフォーの机へ向かった。そうして引き出しを上から順に漁った。目当ての物は一番下の引き出しにあった。それはナイフだった。シグマは《予言の絵本》の最初のページを開いた。文字と絵はいつの間にか消えていたが、しばらく待つと紙が薄ぼんやりと光り、またあの文字列と龍の絵が現れた。

譲渡の完了を確認しました。

契約を此れに。

夢見人は新たな所有者様を歓迎いたします。

シグマはナイフを自分の親指に押し当て、軽く引いた。僅かな痛みものち、じわ、と指の先に血が滲んだ。流石はルフォーのナイフだ。彼女と同じでよく切れる。シグマは期待に胸踊らせながらページの、龍の絵の上に一滴、血を垂らした。

「契約を此れに、というのはおそらく『これに契約のサインをしろ』ということ。オカルトの契約といえば血だろう……頼むぞ……」

しかして、黒い龍の絵はぬるりと動いた。

「ははははっ！ 成功だ！ 成功したぞ！」

シグマは叫んだ。

龍の絵は瞬く間に形を崩し、文字を巻き込んで複数の曲線となり、渦となり、それが混じり合って複雑な模様を創り上げた。白い紙の上で黒い渦巻きがいくつもいくつも、ぶつかっては形を変え、他方を飲み込み、飲み込まれ、また分裂した。やがて渦巻きは時間をかけて小さくなってゆき、たくさん線になった。線たちはくっつき合い、最終的には文字の形になった。

シグマは《予言の絵本》を高く掲げて哄笑した。

「やった！やったぞ！ははははっ！」

ちょうどその時、ルフォーとデルタが戻ってきた。シグマは言った。

「見たまえっ、成功だ！どうだい、僕にかかればこんなものさ！」

「うそっ！」

ルフォーがシグマに駆け寄る。

「どうやったの！どうやったのよ！」

デルタは慌ててシグマのために持ってきた水を飲み干し、革椅子に『ぷらすちっく』の『こっぷ』をほうって本を覗き込んだ。シグマは変化した最初のページを開き、二人にも見えるようにテーブルに置いた。

「さすが大将だ……さすが、俺たちの大将だ……！」

デルタが感極まった声で呟く。

「それで、それでっ？何て書いてあるのっ？」

ルフォーが急かす。デルタが息を飲んで見つめる。

そこには次のような文章が記されていた。

契約は成立しました。

これより夢見人は契約者様の歩む未知を照らします。

契約者、西熊様によき未来のあらんことを。



青色屋敷の周囲に広がる深い森の中、難しい顔で話し合う三人の男女の姿があった。女が一人に男が二人。ササノハ、ナノハナ、ラ

ムダである。『木のおぼけ』の正体を探り、あわよくば対話し相互不可侵の約束を結ぼうと森へ入った三人だった。結果、彼らの思惑は尽く失敗に終わった。

「不思議な声でした」

耳に水でも入ったように頭を振ったのち、何とも言えない渋い表情でササノハが言った。彼女は十メートル先にある樹々の開けた地点の入り口から折り返して戻ってきたところだった。

「思っていた以上に優しい声でした。もっとおどろおどろしい声を想像していましたよ」

「やはり無理だったか」

別段残念そうでもなくサノハナが言う。すみません、とササノハが返す。いやいい、とサノハナは手を振りこたえた。

「実を言うと、森に入る前から無理だろうとは思っていたんだ。それでも探索を決めたのは危険が無いと踏んだからだ。ラムダ、おまえはあれをどう思った？」

周囲の木を調べていたラムダが振り返る。彼は顎に手を当て、たしかに、と言った。

「危険なものには思えませんでした。魔法によらない強制力とでも言いましょうか……私は若い頃に精神干渉の魔法を何度もうけていたのですが、おぼけさんの力はそのどれも違うものに感じられました。どちらかというと高位の空間干渉に近いような気がするのですが……或いは認識に作用する類の結界——いえ、わかりませんね」

お役に立てず申し訳ありません、とラムダが言う。

ふむ、と腕を組んだサノハナが唸る。

ササノハは小石を拾い、ついいま自分の戻ってきた地点——自分の入れなかった地点に向けてそれを投げた。小石はササノハの踏み越えられなかったラインを越え、枯れた大木に当たってカツンと小さな音を立てた。うーんと唸って、ササノハは言った。

「石は届くのになあ。鳥も入れるみたいだし……やっぱり、わたしたちだけが入れないということなんでしょうか？ここは人間どもの

来る所じゃないぞ！みたいな」

風が吹き、巨人蓬の木々がさわさわと鳴いた。

そうかも知らん、とナノハナが言った。

森へ入り、半時間と少し歩いたところにそれはあった。それは枯れた大木を囲む、そこだけぽっかりと木々の無いひらけた空間だった。

そこに踏み入ろうとするとどこからともなく声が聞こえ、絶対に入ってはいけないという気持ちになる――ナノハナはそう説明した。それを聞いた時、ラムダは内心で溜息をついたものだった。シノビが怪談を恐れてどうするのかと。シノビの隊長としての落胆だった。「信じられない気持ちはわかる。俺もあの時は自分で自分がわからなかった」

その場所に着くまでラムダは半信半疑だった。しかしラムダは現実にはそれに触れた。こうなってはもはや信じるほかなかった。我々が『木のおぼけ』と呼ぶ何者かは確かにいるのだ、と。

「あそこだ。あの木に近づこうとすると声が聞こえるんだ」

森に入り、目的の場所まで着くと、ラムダは二人に自分をはじめに行くと言った。ササノハもナノハナもそれを了承した。

枯れた大木に向かい、ラムダはゆっくりと歩き出した。中ほどからぼつきりと折れた大木には確かに異様な雰囲気があった。その周囲、半径五メートルほどの空間にだけ木がないのも雰囲気を出すのに一役買っているように思われた。開けた場所まであと四メートルというあたりで、ラムダは大木の足元に大人一人が入れそうなくらいの、それなりに大きな穴が開いているのを発見した。なにかの巣か？ラムダは穴を凝視した。声が聞こえたのはその時だった。

【――この先には危険があります。引き返してください――】

それは女の声だった。

ラムダの体からふっと力が抜けた。

とても優しい声だった。こんな声が言うのだから、きっとこの先は危ないのだ。そうに違いない。ラムダはそう思った。

ラムダは今は亡き母を思い出した。聞こえた声は母のものに似ている気がした。ラムダの頭の中を少年時代の思い出が駆け巡る。あの頃はまだラムダなどという名前ではなかった。厳しいけれど家族思いの父がいて、ときどき怖いけど優しい母がいて、何でもそつなくこなす子どもらしくない自分がいて、そして――

――そうだ。途中からはユウもいた。俺の十四の誕生日に現れたユウ。俺の親友。あいつは何をやらせても駄目な、不器用な奴で、でもすごく頑張り屋で、ぜったいに負けを認めない奴で……ああ、この前なんて川で息を止めすぎて。そうそう。母さんが怒って、川遊びは禁止になったんだ。おまえのせいだ、おまえも悪い、って喧嘩になって、その日は口を聞かなかったっけ。そうだ。喧嘩はしょっちゅうだった。でも、いつも決まって最後にはユウが「ごめん、仲直りしよう」って……ああ、そうなんだよ。あいつは昔から、友達をなくすのを何より怖がって――

「ラムダ」

瞬間、夢は弾^{はじ}けた。

「あ……え………?」

気づけばラムダの目の前にナノハナが立っていた。隣にはササノハもいる。いつの間に近づくかれたのだろうか？ラムダは首を傾げた。二人は気遣う顔をラムダに向けていた。ラムダは後ろを振り返った。ラムダがいるのはついいま向かっていたはずの、あの開けた空間から十メートルほど離れた場所だった。

「ああ。そうか……俺は――私は夢を見て……」

ラムダは女の声が聞こえたことを思い出した。

「あれは幻術とは違う……魔法とも。もっと直接的な……」

ぶつぶつと呟くラムダをナノハナとササノハは心配した。ラムダは首を横に振り大丈夫だと主張した。

「少々、効きすぎてしまったようです。歳のせいでしょうかね」

ラムダは笑い、ナノハナとササノハは苦笑した。しかしこれはラムダの本音だった。彼は実際に『木のおぼけ』の『優しい声』を聞き、思い出をひらかれたことで、あれは長く生きた者ほど強く影響されるのではないか、と考えた。事実、帰路で二人に訊ねたところ、ササノハもナノハナも過去の夢を見せられたりなどしておらず、ただ優しい声を信じなければいけない気持ちに襲われたただけだと語った。

ラムダの後にはナノハナが走って突っ込んだり、三人で手を繋いで向かったり、用意してきた縄を使ったり、別々の方向から三人同時に向かったり、いろいろな方法を試したが、結局どのやり方でも枯れた大木のあるひらけた場所には入れなかった。むろん対話が目的なので攻撃的な手段はとらなかった。遠くから話しかけてみたりもしたが、これも返事はなかった。

「無理だと思うがどうだろう」

「先輩に賛成です。わたしも無理だと思います」

「では、無理なので諦めるという方向で」

「「異議なし」」

一時間ほど試行錯誤し、三人は『木のおぼけ』との接触を諦めた。帰り道、並んであれこれ話すラムダとナノハナの背中を見つめながら、ササノハは、どうせ失敗するなら先輩と二人で来たかった、と心で泣いた。ラムダさんは来なくていいですよーそんなことを言える筈がなかった。ラムダはササノハの命の恩人だ。ササノハの生まれ故郷の村で《重苦の刃》を悪く言おうものなら、もれなく村人全員参加の袋叩き祭りが開催される。十五年前、《旅人組合》の指示で村を襲った人攫いの一団から幼いササノハと女たちを攫い返したのはローとラムダの二人である。ラムダには頭の上がらないサ

サノハなのだった。

ふとササノハは足を止めた。

美女に姿を変えて助けに現れたラムダの言葉をササノハは思い出した。

『――地に立つ人に上下などありません。みな平等なのです。罪なき者が虐げられていいはずがありません』

彼はそう言った。幼いササノハはその日、民主主義を発症したのだ。ところで、このときササノハはラムダが美女に変身した姿を見ている。つまり彼女は後に聞いた『同性にしか化けられない』という話が嘘だと知っているのだった。無論、なにか意味のあることなのだろうと察して聞かずにいるが。

「地に立つ人……平等。地に、立つ。上下はない。……上下？」

ササノハは呟く。そうして彼女は閃いた。

空からならばあの場所にも到達できるのではないだろうか、と。

気づけば前に行く二人との距離がひらいていた。

ひらめきを伝えるべくササノハは駆け出した。

「先輩、ラムダさん、すごいこと思いつきました！」



エプロンドレスのフリルが揺れる。干されたシートがぱた、ぱたと音を立てる。寒いほどではないが、風が出てきた。時刻は三時を回ったところである。

そろそろいいかしら、とニュウは思った。ひなたぼっこをつまらないとは思わない。むしろ好きだが、少女はどちらかというと、一人にいるより誰かと話し触れ合うことを好む性質をもっていた。

真っ青な屋根の上、ニュウはよいしょと立ち上がり、背伸びをし

た。屋根の縁から庭を見下ろす。つい先ほどまでそこで靴を作っていた祖父はいつの間にかいなくなっていた。

小さな少女が安全に屋根をのぼりおりするには空を飛ぶほかない。そしてニュウにはそれができた。ニュウは目を閉じ、体の中をあたたかいものが流れていく感覚に心を集中した。

魔法をつかうには手順がある。そう言ったのはルフォーだった。

ニュウが魔法の勉強を開始した日のことだ。その日の夕方、ルフォーは言った。あなたは魔法の手順のことなんか考えなくてもいいわと。手順を知らないニュウがルフォーの飛行を再現したのを見てのことだった。魔法は魔を使って力を作り出す技術だ。魔は命である。体の内を流れる魔は自分の命、外を漂う魔は世界の命だ。ニュウは命を感じ取ることができる。魔法が起動するとき、魔がどのようにしてうごくのか、ニュウには手に取るようにわかるのだ。ルフォーの魔法を真似るのは難しいことではなかった。

ニュウは深呼吸した。体の中を流れるあたたかいものが大きな泡を作り、自分をすっぽりおおってしまうさまをイメージする。泡はシグマから教えてもらったシャボン玉――それが大きくなりすぎたものの中にニュウが浮かんでいる。そんな絵をニュウは思い描いた。そうして体の力を抜き、目を開けると、少女は屋根の上、人の頭一個分ほどの空中に浮かんでいた。呪文を唱えず、難しい計算をせず、ルフォーとは別のアプローチで同じものを再現した、ニュウだけの飛行魔法であった。

いちど浮かんでしまえばあとは簡単。すべてが自由だ。ニュウは空中を自在に動きまわった。

洗濯物の干されているあたりまで高度を落とし、シートとシートの合間をふよふよ泳ぎ、ルフォーの部屋が見えるあたりまで上昇する。誰もいない庭の上空をニュウは、ルフォーにミツバチみたいと評される、手足をだらんと垂らした姿勢で飛び回った。ニュウ自身としては、この姿勢は池にぷかんと浮かぶカエルをイメージしたものだ。魔法で空を飛ぶと聞いてニュウが最初に思い浮かべたの

が脱力したカエルの様子だったためである。ニュウの頭の中では、彼女は飛んでいる時、シャボン玉の中に浮かぶカエルになっているのだった。

飛んでいるとつい楽しくなって目的を忘れてしまう。降りることをすっかり忘れたニュウはふよふよと庭の上空、屋敷の四階くらいの高さを飛び続けた。やがてそろそろ飽きてきた頃、飛んでいるニュウと同じ高さから「おーい」という声が聞こえた。ニュウはそれがシグマの声だとすぐにわかった。

ニュウは屋敷を振り返った。シグマはルフォーの部屋のバルコニーにいた。

ニュウとシグマの目が合った。

シグマはいつものようにへらりと笑って言った。

「やあ、お嬢さん。こんな所で会うなんて奇遇だね」

瞬間、ニュウは混乱した。何を言っているのかわからなくなった。

——まだなおってなかったんだわ！さっきよりひどくなってる！

ニュウは顔が真っ赤になるのを感じた。普段ならなんでもないそれを、ニュウは恥ずかしいと思った。脱力したカエルだったはずの手足は背中を掴まれた虫のようにバタバタ動いた。どうしていいかわからなかった。シグマの口が僅かに動く。なにかを言うつもりだ。ニュウの体内で魔が暴れた。もう一言でもシグマが喋る前にと、ニュウは奇声を発して空へと逃げた。

「ひわあああ」という不思議な声が空に響いた。



僅かに時を遡る。

ルフォーとデルタは《予言の絵本》との対話に疲れ、休憩に居間で茶を飲んでいた。部屋の反対側ではノルフがメイドの副リーダー・

カップに靴を渡していた。カップは「あ、ありがと」と普段の男勝りを馬にでも食われたような声でノルフに礼を言った。その様子をファイがこっそり見ていた。平和な時間だった。そこにクシーがやってきた。

「すみません、ルフォーさん。ニュウ見ませんでしたか？」

「ニュウちゃんになにか用事？」

「いえ、用事っていうほどのことじゃないんですけど、今日どっちの部屋でお泊りするのか、まだ決めてなかったなと思って」

「あなたたち、本当に仲良しさんねえ」

「そうですよ。へへへ。今日はニュウのお友達のルキイチちゃんのことを教えてもらうんです」

「アカデミーで知り合ったっていう子ね。どんな子なのかしらね――ああ、ニュウちゃんなら屋根の上にいるわよ」

「なあんだ、いないと思ったら屋根だったんですね。じゃあ、庭から声をかけてみます」

そう言ってクシーは居間を出ていった。外から「ニュウー、ニュウー」という声が聞こえてくる。やがてクシーが戻ってきた。彼女は言った。

「ルフォーさん。ニュウ、屋根の上にいないみたいなんですけど」

「あら、じゃあ、もう降りたのかしら？」

その時、外からシグマの笑い声が聞こえた。どうやら窓を開け放って笑っているようだった。

ルフォーは耳をすました。デルタもそれにならう。

『――成功だ！成功したぞ！』

二人ははっとして互いの顔を見た。



ニュウは森の上空を飛んでいた。

シグマから慌てて逃げた結果である。ニュウはかつてない速度で飛んでいた。その姿はもはやカエルではなかった。屋敷の外では飛ばないようにと言われているのに、屋敷がどんどん遠くなってゆく。悪いことをしているとはわかっている。今すぐ屋敷に戻らなければならぬこともわかっている。けれども今は屋敷に戻りたくないのだった。

やがて顔の熱が冷めた頃、ニュウは地上から大きな命を感じた。それはきのうも感じた命だった。ニュウは森に視線を下げた。そこには半径五メートルほどの、円状にひらけた場所があった。その中心には枯れた大木が立っている。あそこだわ、とニュウは思った。ユラユラは見えないが、大きな生き物がそこに居るのをニュウは感じた。

ニュウは真っ直ぐその場所に降下していった。

サク、と音を立てて着地する。

ニュウは辺りを見回した。そこは不思議な空間だった。大きな枯れ木を中心にしたその円の中は、なにもない場所だった。木どころか草も生えていない。地面は栄養を吸われつくしたような、白いサラサラの砂だった。

ニュウは夢で見た灰色の世界を思い出した。どこかと聞かれても答えられないが、半径五メートルのこの小さな空間が、どこかあの無機の世界に似ている気がした。

ニュウは大きな枯れ木を見つめた。その足元には人がひとり入れるくらいの穴があいていた。危険は感じなかった。ただ、大きな命を持った何者かは、あの穴の中にいるのだと思った。ニュウは誘われるようにして穴へ向かった。その中にいる生き物がひどく寂しがつているようにニュウには思えた。

ニュウは穴の中に入った。穴に入るとすぐに短い階段があった。そこをおりると通路になっていた。暗くはない。ニュウはカツ、コ

ツ、と音を立てて通路を進んだ。壁も床も天井も不思議な石で作られており、全体がぼんやりと光っていた。壁や床の石からは、森や川に転がっている普通の石よりも少し大きな命が感じられた。ユラユラは薄い黄色だった。通路はそれほど長くない直線の一本道で、道の先には木の扉があった。ニュウは扉の前まで歩いた。長い年月でボロボロになった扉には取っ手がなかった。ニュウは両手で扉を押した。手に触れた扉の表面はザラザラしていて、少しでもさわり方を悪いと手にとげが刺さるように思われた。

ギギイ、と音が鳴り、扉が開いた。途端、埃が舞い上がる。ニュウはけほ、けほ、と咳き込んだ。中は通路と同じ素材でできた丸い部屋だった。ちょうど半径五メートルほど、枯れ木を中心にした地上の円と同じくらいの面積の、何もない部屋だ。ただぼんやりと光るだけの部屋。そんな小世界の中心にそれはいた。

女だった。

それは黒いドレスを着た、人形のように美しい、埃まみれの女のカタチだった。

それは目を閉じ、ピクリとも動かず、部屋の真ん中で安楽椅子に座っていた。

ニュウにはそれが人形でなく生き物だということがすぐにわかった。人間のカタチをしているが人間ではない。ユラユラも無い。けれど、それは間違いなく生き物だった。女のカタチをしたそれから確かに命が感じられた。

「さみしがっていたのはあなたね」

ニュウは言った。そうして少女は一步、部屋に踏み込んだ。

途端、女の目が開いた。

シュー、と音を立て、女の体全体から蒸気が噴きだした。ひどい量の埃が舞い上がり、部屋は瞬く間に霧で満たされた。ニュウは口を抑えてしゃがみ込んだ。体中に生ぬるい湿気を感じた。

続けて女は上を向き、口をガバリと開けた。口は耳まで裂けていた。ニュウは目を細めてそれを見た。強い風が吹き、ニュウの体が部屋を中心に向かって引っ張られた。ニュウは入り口の壁にしがみついてそれに耐えた。なんと女は舞い上がった埃を凄まじい勢いで吸っていた。

やがてキュイイイという不思議な音が鳴り風が止んだ頃、部屋は塵一つない綺麗な空間になっていた。

女が口を閉じて顔を下ろす。ニュウは立ち上がり、スカートを払った。エプロンドレスに汚れはなかった。女がニュウを見つめた。ニュウも女を見つめた。女の体や服は綺麗になっていた。シグマと同じ黒い髪、黒い瞳の女だった。思わず溜め息が出るほど美しい、『おもち』のように白い肌をした女だ。女は感情の色のない鋭い目でニュウを見ていた。ニュウは別段、それに恐怖を感じなかった。

ニュウは女の前まで歩いた。女は黙ってニュウを見つめている。椅子に座っているから正確なところ不明だが、身長はシグマより僅かに低いくらいであろうと思われた。

ニュウが目の前まで来ると女は口をひらいた。今度は耳まで裂けたりせず、普通の、喋るときの大きさだった。床まで届きそうな長い髪を僅かに揺らし、女は言った。

「パスワード・を・入力してください」

綺麗な声、とニュウは思った。

言葉の意味はわからないが、会話をしてくれるつもりはあるようだ。ニュウは考え、やがて言った。それははじまりを告げる挨拶の言葉だった。

「はじめまして。あなたはだあれ？」

女の黒目がクルクルと色んな方向に動いた。

……ジー、ガガ、キュイ。

……ジー、ガガ、キュイ。

女の体からそんな音が鳴り、やがて女はニュウが綺麗と感じた声で、しかしめちゃくちゃなりズムで言った。

「はじ・メ・ましテ——あ・ナタは・だれ」

……ジー、ガガ、キュイ。

……ジー、ガガ、キュイ。

再び女から音が鳴る。それも個性だとニュウは思った。世の中にはニュウの知らないことがたくさんある。自分とちがうからって悪い目で見るのはカッコわるいことだわ。ガンマが言ってたもの。ニュウは黙って女を見つめた。

「承認」

女が言う。ニュウは首を傾げた。

突然、女が椅子から立ち上がった。

「あわわっ」

ニュウは驚いて三步さがった。

女がその距離を一步でつめる。

「パスワードを確認しました」

言って、女はオロオロするニュウの足元に恭しく跪いた。

ぼんやり光る石の部屋。その中心、自分の前には跪いた女をつむじ。ニュウはどうしてよいかわからなかった。わからないから、とりあえず女の頭を撫でた。それくらいしかすることを思いつかなかった。女の髪は指どおりのよいサラサラの直毛だった。

女は跪いたまま顔を上げ、ニュウの目を見つめた。

「オカエ、な——、——せ」

そうして女、古代ニホン文明の生物兵器は無表情のまま。

氷のような声で淡々と、少女に告げたのだった。

「おかえりなさいませ、ドクター・ヒルマ。

2件の未読メッセージがあります。再生しますか？」

【魔王誘拐】

第二章・了

25. 僕の物語

「差別の恐怖で縛り上げた空虚な結束をしてオトモダチと呼ぶのなら、そんなものは要らねえよ」



閉じられたカーテンが揺れている。部屋の隅では老婆が泣いていた。

着物をきた真っ白な髪のお婆は、遊女のように足を崩して床にすわり、実体のない涙をぽろぽろ零しながら、膝の上の何もない空間を撫でていた。天井のLED蛍光灯が本来なら有り得ない明滅を繰り返し、そのたびにジジジ、という耳元で羽虫が飛ぶような音が鳴った。本棚はカタカタと揺れ、ワインのボトルが床をゆっくり転がる。僕はそれらを部屋の入口から黙って見つめている。隣では依頼人が震えていた。

『着替えんしゃい。おねまに着替えんしゃい』

誰にともなく老婆が言う。見えない誰かに語りかける。

ひとめ見て、駄目だとわかった。こいつはもう手遅れだ。おそらくは発生からして手遅れだったのだろう。壊れたカタチで生まれ、今なお壊れ続けている。壊れてから死ぬと、死後も壊れ続けるのだ。なにも見えていないから、スタートとゴールが同じ。どこまで行っても終わりが無い。そして老婆はそのことに気がついていないのだ。僕にできる処置は一つしかなかった。

『着替えんしゃい。おねまに着替えんしゃい。裸のまんまじゃあ、

風邪をひくけえ』

老婆は何もない場所を撫で続ける。泣きながら、優しく優しく撫で続ける。僕は溜め息をついた。

「あの……やっぱりなにか、いるんですか？」

依頼人の女が言う。ハムスターみたいに落ち着きのない女だ。女の肩には小さな犬がしがみついていた。

「ええ。ちよっと大きめのやつが。たぶん、迷い込んだんでしょ」
そうこたえて、僕は部屋に踏み込んだ。「あっ、ダメ！」。女が慌てて僕の服を掴む。かまわず僕は部屋の隅に向かった。一歩、二歩、そして三步目。途端、強風が吹き、天井の蛍光灯が割れた。破片がばらばらと僕の目の前に落ちる。依頼人がキヤアと叫んだ。僕は振り返って言った。

「そこで待っていてください。間合いに入ってこの程度なら、大した力はない。すぐ終わります」

「は、はい……よろしくお願いします」

依頼人の肩の上で犬がキャンと吠えた。

僕は老婆に話しかけた。それは一応の確認だった。

「おばあさん。僕の声が聞こえますか」

『着替えんしゃい。おねまに着替えんしゃい』

「おばあさん。僕が見えますか」

『着替えんしゃい。おねまに着替えんしゃい』

「おばあさん。今がいつだかわかりますか」

『着替えんしゃい。おねまに着替えんしゃい。裸のまんまじゃあ、風邪をひくけえ。着替えんしゃい。着替えんしゃい。かわいい坊や。着替えんしゃい』

老婆はこちらを向かず、ただ涙をこぼしながら膝の上、何も無い宙を撫で続ける。こぼれ落ちたはずの涙は床に水滴を残さず、ただ消える。老婆は空っぽだった。僕は最後を告げた。

「おばあさん。今からあなたを殺します」

『着替えんしゃい。着替えんしゃい。おねまに着替えんしゃい。わ

たしのかわいい、かわいい、かわいい坊や』

僕は僕の隣、僕の頭よりも三十センチ高い位置、なにも無いはずの場所を見上げた。

そこにはなにも無い。誰もいない。いるけれど、いない。見えな
いならばいないはずだ。だからいない。

「教授」

僕は言った。

教授はなにも言わずに僕を見つめた。僕は老婆を指さした。

「あれを、食べる」

教授は僕の顔をじっと見つめ、老婆を見、そうしてまた僕を見つめたのち、『ヴォ』と小さく鳴いた。

ごう、と強い風が吹いた。僕の制服はパタパタと音を立て、僕の髪はめちゃくちゃに乱れた。依頼人が後ろでヒッ、と声を上げた。

キャン、と犬が吠えた。部屋の本棚からドサドサと本たちが落ちた。そうして風は止んだ。

教授は二本の足で真っ直ぐ老婆に向かって歩いてゆき、そして老婆の目の前で太い太い左腕を振り上げた。

それは巨大な猿だった。右腕のない猿。僕以外には見えない猿だ。『風邪をひくけえ。着替えんしゃい。おねまに着替えんしゃい。着替え——』

教授は高く上げた左腕を老婆に振り下ろした。

グチャリ、と僕にだけ聞こえる音がなった。僕にだけ見える血を散らし、老婆は二度目の死を迎えた。断末魔の悲鳴さえない一瞬の死だった。教授はちらと僕を見、すぐに視線を戻し、僕にだけ見える老婆の死骸に口を寄せ、そして吸った。老婆の死骸や血はゆっくりと透明になり、教授の口に吸い込まれて消えた。部屋にいるのは僕と教授だけだった。

——ああ。顔色ひとつ変えずにこの光景を見られるようになったのはいつからだろう。
もう思い出せなかった。

「あ、あの……終わったんですか？」

廊下から恐る恐るの体で依頼人が問う。

僕は、はい、とこたえてサングラスをかけた。教授の姿は見えなくなり、依頼人の肩にしがみついていた犬もフツと消えた。窓の外では蝉がやかましく鳴いていた。

除霊完了です、と僕は言った。

「これでもう、この部屋に霊が出ることはありません」



店長から携帯に連絡があったのは朝の五時にもならない頃だった。両親は起きておらず、セミだってまだ鳴いていない時間だ。僕は弟の部屋のドアを開け「出かけてくる」と声をかけた。遮光カーテンで閉めきった部屋の中、液晶の明かりとキーボードを叩く音がB級ホラーを演出していた。この時間、弟が起きているのは知れている。むしろ奴はこれから寝るのだ。弟は振り向かず、ドアに背を向けたまま「了解、いってら」と言った。机の上に置かれたビー玉がキラキラ光っていた。

僕は制服に着替え、鞆を背負い、居間に書き置きを残し、最後に愛用の目をきっちり隠すサングラスをかけて家を出た。ドアをそっとしめて鍵をかけ、ガレージから愛車のMTBを出したところでメールが入った。弟からだった。

——件名…なし

——本文…面倒事が起こる。女に気をつけろ。

二階を見上げる。西側の部屋の窓。真っ黒なカーテンを僅かに開

けた隙間から弟が手を振っていた。あいつが言うんだ。なにか良くないことが起こるのだろう。僕は「わかった。ありがとう」と返信した。そうして二人だけが知る『いつてきます』『言い訳よろしく』の合図をし、自転車のペダルを踏んだ。

弟が変わったのは誘拐騒ぎの後からだった。

四歳の頃、弟は行方不明になった。僕と庭で砂遊びをしていた時のことだ。母さんの園芸用シャベルを取りに玄関へ行き、戻ったときにはもういなかった。最初はどこかに隠れているんだと思った。家の中を探した。近所を探した。弟は見つからなかった。夕方になり、母さんが警察に電話した。夜になっても弟は見つからなかった。それから三日間、弟は見つからなかった。警察は誘拐事件として捜査を開始した。なにかあるとすぐに警察を悪く言う人がいるけど、警察の人たちは頑張っていたと思う。弟の写真や映像がテレビや新聞に載った。母さんは駅前でビラを配った。父さんはネットに弟の画像を貼りまくった。四日目の朝、弟が見つかったと連絡があった。早朝ランニングをしていた老人が、倒れている子どもを発見した。それが弟だった。発見場所の公園は家から五十メートルも離れていなかった。テレビの取材に弟は、誘拐されたのではなく迷子になったのだと語った。マスコミはここぞとばかりに警察を非難した。『四歳の子どもが住宅地で四日間の迷子！』などという煽り文が電車の中吊り広告に載ったりもした。どれも僕たち家族にはどうでもいいことだった。僕たちはただ弟が帰ったことを喜んだ。

けれど、弟の体は無事ではなかった。

帰ってきた弟は変わっていた。

父さんも母さんも、他の人たちも、誰も気付かなかったけれど、僕だけは違うとすぐにわかった。それに気付いた理由は子ども同士だからではないし、双子の不思議な繋がりがあるからなんていうものでもない。誰もが持っていて僕にだけ見えるもの、弟だって行方不明になる前までは持っていたはずのもの――それがなくなっていたのだ。当時の僕には『それ』の正体がまだよくわかっていなかった。

たけど、弟に『それ』がなくなっていることを変だと感じるくらい
の頭は既にあつた。それ以外にも弟が変化していると知ったのは発
見から一ヶ月が経った頃だった。その日、弟はそれを僕にだけこっ
そり教えてくれた。

「兄ちゃん。おとなりの、あのうるさいジジイ、あした死ぬんだぜ。
おふろでころんで」

翌日、隣の爺さんが死んだ。僕と弟は留守番で、葬式には行かな
かったけれど、その夜、両親が話しているのを聞いた。お年寄りじ
やなくてもお風呂は気を付けなくちゃいけない。母さんはそう言っ
ていた。

僕の知らないどこかに行き、そこから帰ってきた弟は、未来を視
るようになっていた。

僕が生まれつき、おばけを視るのと同じように。

焼酎バー《タケ☆ハラ》。

はくおり

きたはくおり

箔織駅の西口、北箔織わくわく商店街のなかほどに建つ雑居ビル
の地下でひっそりと営業する閑古鳥養成所。ここで鍛えられ一人前
となった閑古鳥たちが全国に不況を運ぶ逸話はあまりにも有名であ
る。本日の僕の目的地だった。

ビルの前にはガラの悪いツンツン頭の中年男が立っていた。男は
煙草をふかしながら、わざとらしく何度も腕時計をチェックしてい
る。僕はさも急いで来たというふうにしてその人物の前で急ブレーキを
かけた。

「すみません。待たせちゃいました？」

いやいい、と男は言った。店長こと竹原ノブオ。焼酎バー《タケ
☆ハラ》の店長で、僕の仕事のパートナーだ。店長は上を向いて煙
を吐き出し、これ見よがしに胸ポケットから取り出した携帯灰皿へ
と吸殻を突っ込んだ。『悪そうだけど実はいい人』に擬態して未成
年を食いまくる悪人は今日も絶好調。男の僕が相手でも演技に手を
抜かないのだった。女を騙すには男からということなのだろうけれ

ど、今更もいいところ。うちのクラスの委員長が学校に来なくなつた理由を、僕は仲間から聞いて知っている。中絶の費用が意外に安いということも。

「わりいな、こんな朝っぱらから」店長がぶっきらぼうに言う。「どうしてもすぐに解決してほしいって言うもんだからよ。なんでも、家に出たそうで」

「いいですよ、お金さえ貰えれば」。言つて、僕は自転車をおりる。「お客さん、もう来てます?」

「中で待たせてる。可愛い、物静かな子だ。惚れるなよ。俺は惚れた。こんな気持ちになつたのはガキの頃以来だ。ガラじゃないが、運命を感じてる」

「わかつてますよ、そう言つてたつて伝えればいいんでしょう?」

「そんなつもりはねえよ」

僕は肩をすくめてみせた。こうやつてこの人は何人の女を食つてきたんだらう。羨ましいとはまるで思えなかった。運命の人でもない女にいたずらして何が楽しいというのか。

僕はビルの駐車場の隅に自転車をとめ、店長を残して、下品な貼り紙と落書きに埋め尽くされた狭い階段を降りた。仕事の話し合いは一对一が基本。その点で流行らない店というのはすこぶる都合が良かったし、金さえ渡せば余計な干渉の一切をしてこない店長もまた実に便利だった。やかましいベルを鳴らして開いたお洒落な扉の先、その人は入り口に背を向けるかたちで、カウンター席にかけていた。座つていてもわかる、背の高い女。長い髪も、着ている男物のスーツも真っ黒だ。ベルの音は聞こえたはずなのにまったく振り向く気配がない。僕はわざと足音を立てて、無駄に広い店内を女の元へ向かった。

「お待たせしました」

女のすぐ後ろに立つて言う。女は振り向かず「待ってなんかいいよ」とこたえた。

「座ったら?」

見ればカウンターに置かれたグラス——店長が出したのであろう青い色のカクテルはまるで飲まれた形跡がなかった。この時から僕はもう既に嫌な予感がしていた。僕は鞆を床に置き、女の右隣に座った。ようやく女が僕の方を向いた。

とんでもない美女だった。

年はたぶん二十歳はたちくらいで、黒髪ロング前髪ぱつつの眼鏡装備。おまけに細くて胸はぺたんこ。親友の顔が頭をよぎる。あいつの——王様の理想がそのまま形になったような美女だった。

僕も現代人だ。ネットやテレビなんかで沢山の美男美女を見てきた。だけど、そんな僕の頭を映像検索しても、ここまで綺麗な生き物は王様の家にいる《女神》くらいしか記録されていなかった。あつちは触れがたい、神聖な、それこそ女神のような美しさだが、こつちは引きずり込まれるような魔女の美だ。ロリコンの店長が趣味を殺してまで狙いたくなる気持ちもわかるうというものだ。それくらい女は美しかった。

へえ、と男装の麗人は言った。眼鏡がキラリと光った。

「おやおやおや。これはこれは。いいねえ、いいねえ。実にいいよ。わたしほどじゃあないが、綺麗な顔をしてるじゃないか」

いきなり正直な人だった。僕は「はあ、どうも」と曖昧に礼を言った。

「いい成長をしたんだなあ。お姉さん嬉しいよ」

初対面の美女が年一で会う親戚のおっさんみたいなのを言うてくる。美人だけど、いろいろと濃い女だ。関わりたくない。それが彼女に対する僕の初印象だった。

「いくつになる？」

「先月で十四になりました」

「十四歳かあ。ああ、いいねえ十四歳。十四歳といったら、高校生？ 中学生か。若いなあ。未来はジャポニカの自由帳みたいに真っ白だろう」

女の声は純粹に僕の若さに感動している風で、子どもに子どもと

言って怒らせるゲス根性のようなものはまるで感じられない。この人だってじゅうぶん若いように見えるけど。冒険心がうずく。僕は言った。

「おねえさんはいくつなんです？」

「はたち二十歳だよ」

女は躊躇なく答えた。そして「体はね」と付け加えた。

「からだ？」

僕は首を傾げる。そう、と女は言った。

「肉体年齢というやつ。実際の歳はわからないんだよ。千を超えたあたりで数えるのをやめてしまったから。たぶん、一万は超えているはず」

笑ったほうがいいんだろうか。僕は悩んだが「はあ」とだけ返事をした。別に仲よくなりたいたいわけじゃない。欲しいのはお金。他は余分だ。僕はスイッチを切り替えた。

「なんて呼んだらいいですか？」

「好きなようにどうぞ——というのはキミの仕事を増やすだけか。」

それじゃあ、魔女で」

偽名とさえ呼べないレベルだった。顔の印象そのまんまだ。僕は努めて顔の筋肉を動かさないようにして「魔女さんですね」と言った。

「それじゃあ魔女さん、僕は何をすればいいんですか？」

えー！と魔女さんは言った。

「なんだよ、もう本題に入っちゃうのかい？もっとおしゃべりしようぜ。久々なんだ、人と話すの」

「おしゃべりって言ったって、何を話すんです？一万歳超えのお姉さんが好みそうな話題なんて持ってませんよ。それに魔女さん、急ぎだったんじゃないんですか？家に出たとかで。店長からはそう聞いてますけど」

「急ぎ？家に出た？……ああ、そっかそっか。そういえばあの子、そんなことを言っていたなあ」

魔女さんは何やら僕にはわからないことを言い、一人で納得するように頷いた。

「まあ、死ぬような事件じゃない。家にいる幽霊のことはどうでもいいよ」

どうでもって。

「頼みたいことは他にあるんだ」
魔女さんは言った。

「でもその前に、お話をしようじゃないか。わたしの頼みごとは五分もあれば終わるようなことだ」

「いえ、五分で終わるかどうかは話を聞かなきゃわからないわけだ――」

「終わるさ」

サングラス越し、眼鏡越しに、目が合う。

「大丈夫。必ず終わる。すぐ終わる」

まるで二枚のレンズなど無いかのように、魔女さんはまっすぐ僕の目を見つめた。カチ、と音がした。時計の長針が動く音だった。

僕は壁の時計に目をやった。まだ六時にもなっていないかった。僕は言った。

「まあ、依頼人さんがそれでいいって言うなら、こっちは別にかまいませんけど」

「そうかい！ 嬉しいなあ。お姉さん、素直な子は好きだよ。それじゃあ、おしゃべりをしよう。すぐしよう。くだらなくて意味がなくて、湯屋も桶屋も儲からないような話をしよう。夏休みの予定とか、初恋はいつだったとか、はじめてキャンプに行った日のこととか、運命を信じるかとか、どうしてもよくてつまらなくて、明日になれば忘れてしまうようなお話をしよう」

魔女さんはぺらぺらとよく喋った。店長の言っていた『可愛らしい』というのはこのことだったんだろうか。僕にはちっともそんな風には感じられないけれど、店長は魔女さんの、このおしゃべりなところを可愛らしいと思ったのだろうか。悪い意味で子ども好きの

彼のことだ、きっとそうなのだろう。だって魔女さんの顔は、可愛くなんてない。ただ美しいだけだ。他に可愛らしいと評価される要素は無い。

——あれ？でも、物静かな子だとも言っていたような……気のせいか？

僕は魔女さんのどうでもいい質問にこたえ、くだらない言葉に相槌を打ち、つまらない冗談に笑い、時には冗談を返したりもした。話のうまい人というのはいるもので、話題それ自体はまるで楽しくなかったし、何を話したかも殆ど覚えていないのに、時間はあっという間に過ぎた。

「おっといけない、そろそろ起きる時間だ」

亜鎌神社の大蛇の話がオチに近付いたとき、それを遮るように、うちつけに魔女さんが言った。時刻は七時になるうとしていた。このときには、彼女に対する僕の警戒の壁は、ノートパソコンの箱ぐらいには薄いものになっていた。

「起きるって、何がです？」

僕は訊ねた。

「可愛い女の子だよ」

「女の子？」

そう女の子、と魔女さんは言った。子どもがいるんだろうか。二十歳で。早いけれど、珍しいというほどでもないか。或いは親戚の子とか。いずれにしても潮時のようだ。「じゃあ」と僕は言った。

「そろそろ本題に入りましょうか？」

「そうだね」と魔女さんが言った。「名残惜しいけど、そうしよう」
魔女さんは懷から一枚の写真を取り出し、僕の前に置いた。写真には両手をチョキにして満面の笑みを浮かべる白人の女の子が写っていた。着ているのはメイド服。そしてカメラにピースサイン。いかにもって感じだ。日本に住んでる子なんだろうか。高いところか

らジャンプした瞬間を下から撮ったものなのか、背景は青空だった。魔女さんを見たあとではだいぶ霞むけれど、ふわふわの綺麗な金髪で、将来が楽しみな、可愛い女の子だった。ガイジンサンの年のとり方はわからないけれど、たぶん十歳かそこらだろう。僕は魔女さんの横顔に視線を戻した。

「この写真がどうしたんです？」

「わたしが今日ここに来た理由だよ。その子を見かけたらわたしに教えてほしいんだ」

「あー……」

僕は額に手をやった。ため息が出る。店長、なにやってんだよ、あいつ。

「……すみません。店長から何を聞いたか知りませんが、自分、人探しはやってないんですよ。なにぶん学生ですから、時間のかかる仕事は難しくて」

しかし魔女さんは、わかってるよ、と笑った。

「探せというんじゃないんだ。キミが偶然、あくまで偶然に彼女を見つけた時、そのときにわたしに連絡をしてほしいんだよ。それだけでいいんだ。探されると、むしろ困る」

探されると困る？探しているのに探してはいけない？どういうことだろう。僕は頭を掻いた。

「いや、まあ、それでいいっていうならこっちはかまいませんけど……。本当に探しませんよ？簡単な仕事だからって安くしたりもできませんし」

「問題ない」

「名前はなんていうんです？」

「アラタ・ヒルマ。アラタが名前で、ヒルマが苗字だ」

「アラタちゃんですね。じゃあ、もし偶然アラタちゃんを見つけたら連絡をしますけど、その時には彼女に、魔女さんが探してることを伝えますか？なにか事情があって、話しかけないほうがいいとか、そういうのありますか？」

「うーん。伝えてくれると助かるけれど……たぶんその機会は無いよ。探さない限り、キミは彼女と出会わないだろうから」

見つけたら連絡をしてほしい。自分が探していることを彼女に伝えてほしい。けれど僕には探さないでほしい。そもそも見つかることを期待していない。この人はいったい何がしたいんだろう？

「この子、アラタちゃんはこの近辺にいるんですか？」

「こちら。駄目だよ、そんなことを聞いたら。探そうという気が起こってしまうじゃないか」

本当に何がしたいんだ、この人。

ふと僕は弟のメールを思い出した。

——面倒事が起こる。女に気をつける。

予言のとおり。いま僕の隣には確かに面倒くさい女がいるのだった。

彼女は目を閉じ、グラスのふちを人差し指の爪ではじいた。青い液が揺れ、涼しげな音が鳴る。僕はこっそり溜め息をついた。

「いくら？」と魔女さんが言う。

僕は「五万です」とこたえた。

魔女さんは「五万ね」と言っって懐から可愛い水色のがま口財布を取り出した。そしてそこから二つ折りにして輪ゴムでしばった紙幣の分厚い束を抜き、「ごまん。ごまん」と呟きながら銀行券を数え、僕に差し出した。

「たしかめて」

僕はお金を確認した。三枚多かった。魔女さんの顔を見る。「おしゃべりの分だよ」と彼女は恰好よく笑った。僕はお礼を言ってお金をポケットに突っ込んだ。

「くれぐれも探さないように頼んだよ」

おかしい忠告に「はい」と頷きを返す。

「あの、連絡先は——」

魔女さんはカウンターの写真をとんとん、と指で叩いた。めくってみると、裏に赤マジックで携帯の番号が記されていた。その下に

は黒字で「除霊に五万は安すぎる」と書かれていた。僕は魔女さんを見つめた。魔女さんは気にする様子もなく「それじゃあこれで」と言って椅子から立ち上がった。僕と同じくらいの身長——やっぱり女のひとにしては大きかった。

「今日は楽しかったよ。またいつか遠い場所で会おう」

「はあ」曖昧に頷く。「まあ、縁があったらということだ」

「縁はあるさ」

魔女さんはクールな笑みを浮かべて言った。ブレない女性^{ひと}だった。そうだ、と彼女は言う。

「まだ名前を聞いていなかった。よければ教えておくれよ。キミ、何ていうんだい」

「ユウです。西熊^{にしぐま}勇。ウェストのベアで西熊。ブレイブで勇です」

「西熊勇くんね。いい名前じゃないか。ギリシャ文字が二つだ」

「え？」

「N（ニュウ）の中にΣ（シグマ）がいる」

ニュウの中にシグマ？

ニシグマユウ。

ニ・シグマ・ユウ——ああ。なるほど。

「ほんとですね。確かにニュウの中にシグマだ。気付きませんでした」

「恰好いい名前だ」

「どうも」

「恰好いい名前だけど、それは本当にキミの名前かい？」

「そうですけど、それがどうかしましたか？」

魔女さんは僕の目を——サングラスをじっと見つめ、そして僕の頭の上あたりにチラリと目をやった。サングラスをかけている今の僕には見えないけれど、そのあたりには僕の守護霊、教授がいるはずだ。

僕は背中に嫌な汗が出るのを感じた。

——このひと……まさか見えてるんじゃない……

魔女さんは意味ありげに笑った。

「勇ましいと書いてユウ。いい名前だ。本当に素敵な名前だよ。だけど、漢字一文字っていうのはどうなんだろう。ちょっとキミのイメージには合わないんじゃないかな。そうは思わないかい？」

「そんなこと言われても……どうでしょうね。自分じゃよくわかりません。だいたい、僕が決めたわけじゃありませんし」

「僕が決めたわけじゃない、ね。なるほど。キミはそう考えるんだね」

この女、僕の秘密を……僕らの秘密を知っている？

いや。そんなはずはない。あのことを知っているのはこの世で四人だけ。僕ら家族だけだ。

僕はおどけるように肩をすくめてみせた。

「そういう魔女さんも、魔女というよりは天使って感じですよ」

魔女さんは一瞬驚いたような顔をしたのち、意味深な笑みを浮かべて「そうかもね」と言った。そうして出口へ向かった。

「見送りは要らないよ。狭い階段で後ろを歩かれるのは怖いからね」

僕は立ち上がり、僅かに上げた腰を下ろした。そうしてわかりました、と言った。

「ご利用ありがとうございました。ある日どこかで偶然金髪の女の子を見かけたら、すぐに連絡します」

よろしく、と手を振り魔女さんは店を出ていった。

ドアが閉まる。扉につけられたベルがやかましい音を立てた。

その音に混じり、逆方向、背中の方から小さな音が聞こえた。

僕はカウンターを振り返った。音は厨房の方から聞こえていた。小さな、叩くような音。それに、声のようなものも。僕は椅子を立ち、厨房へと向かった。

「誰かいるんですか？」

バックヤードを覗き、声をかける。

——ドン、ドン、ドン！

——ンー、ンー、ンー！

音と声は業務用冷蔵庫から聞こえていた。厨房の床には肉や野菜やら玉子やらがぶちまけられていた。冷蔵庫に誰かがいることは明白だった。嫌な予感がニトロで加速する。いくら店長でも冷蔵庫に人を監禁するほど腐った頭はしていない。僕は気付いた。やったのはおそらく……。

散らばる食材を踏まないように気をつけて巨大冷蔵庫まで歩く。僕は意を決してそのドアを開けた。

「シー！ンシー！ンンシーッ！」

冷蔵庫の中では、口をガムテープで塞がれ、手足をロープで縛られた女が体育座りでキンキンに冷えていた。

携帯を取り出して時刻を確認する。七時五分。僕は舌打ちをし、頭を掻き、そして溜め息をついた。

「シー！ンシー！ンンシーッ！」

女がうめく。

僕はサングラスをはずして女を見つめた。縛られた女の上では守護霊の子犬が毛を逆立たせて僕を威嚇していた。

言うまでもなく。

縛られているのは本当の依頼人だった。



「ふおれで遅刻したのか」

ソーセイジドッグを頬張りながら王様が言う。僕はお茶をひとくち飲んで「お金は貰えたからいいんだけどさ」とこたえた。

「んでおまえ、その魔女には電話してみたの？」

「してないよ。なんか、気味悪くて」

「おいおい。幽霊みえる奴がただのオンナ怖がるなよ」

「それがどうもおかしいんだよね」

「おかしいって何が？」

「店長も、依頼人の大学生も、見てないって言うんだよ。魔女さんのこと」

「人を冷蔵庫に閉じ込めるような奴だぜ？悪いことしてる自覚があるなら顔隠すぐらいするだろ」

「いや、そうじゃないんだよ。顔を隠すとかじゃなくてさ——」

昼休みの美術準備室。僕はいつものように王様とお昼を食べていた。美術部なんてものではなく授業でも殆ど使われないこの部屋は、棚の一つが僕や王様や他の仲間の私物で埋め尽くされる有様になっているのだけれど、そのことに先生たちが気付いた様子はまだなかった。朝早くから呼び出されたせいで、僕の今日のお昼は十六茶とツナマヨにぎり。チョコレートだろうが弁当だろうが、包装されている食べ物好きになれない僕にはどうにも嬉しくない食事だ。顔をしかめてちよつとずつツナマヨを食べながら、僕は今朝の出来事を王様に話して聞かせた。

王様、本名・吉嶋未紅は僕を救ってくれた恩人だ。僕だけでなく、彼に救われた人間は山ほどいる。王様は小さい頃から僕らのリーダーで、僕のかげがえのない親友で、そして学校でただ一人、僕の持つ不思議な力のことを知っている人物だった。

「うん？つまり、どういう意味だ」

「だから、そのままの意味だよ。見てないんだ、魔女さんのこと」
依頼人の大学生は魔女さんの姿を見ていないと語った。そんな人は知らない、そもそも店には誰も来なかった、と。僕はそのことを王様に説明した。

「いやいやいや。だったら、その大学生は誰に縛られたんだよ。器用に自分で縛ったってのか？」

「本人はそう言ってる」

「何のために」

「さあね。自分で自分の口にガムテープ貼って、自分で自分の体縛

って、それで冷蔵庫に入ってドア閉めました。理由は思い出せません——だってさ。笑えるだろ？」

「大丈夫なのか、それ。魔女とかいう奴に脅されてるんじゃないの？」

「それがさあ、僕も最初はそう思ったんだけど」

「だけど？」

「ずっと入り口の前に立ってた店長も、魔女さんのことは見てないって言うんだ。依頼人の大学生——Aさんにしとくけど——Aさんがタケ☆ハラに入ってから僕が到着するまでがだいたい三十分。そのあいだ店長はずっと階段の入口で煙草吸ってて、その様子はビルの防犯カメラにもちゃんと映ってるんだ。カメラの撮影範囲には階段の入口もはいつてて、僕も見せてもらったけど、やっぱり魔女さんは映ってなかった。というか、Aさん以外が出入りしたところは映ってなかった」

「非常口は？ Aさんが何らかの理由で非常口の鍵をあけた瞬間、そこから入り込んできたとか。Aさんは勝手に非常口をあけたことで怒られると思って嘘をついたんだよ。どうだ？」

「入ったのは非常口でいいとしても、出たのは正面なんだよ。それは僕がこの目で見てる。でも——」

「正面の、あのくそみたいに汚い階段から出る様子が、カメラに映ってない」と

「そう。そしてさらに恐ろしいのが店内の監視カメラ」

「待て。店内ってなんだ、タケ☆ハラのか？ 朝の六時だろ？」

「いやまあ、そうだけど。営業時間外とはいっても、誰もいない店で人ひとり待たせるわけだからね。店の物を盗まれたり壊されたりしたら困るじゃん。店長はやっぱり監視カメラを録画に入れてたわけ」

「おお、それは見たい。予想はつくけどあえて聞くぞ。何が映ってた？」

「誰もいない席に向かって……一人で話す僕の姿があああ！」

「わーーーーー!」

「わーーーーー!」

僕は馬鹿みたいに互いの肩を叩きまくった。馬鹿みたいっていうか、馬鹿だった。だいたいいつもこんな感じだった。いつも馬鹿だった。おおむねいつだって僕らの世界は平和だった。それは確実に王様のおかげだった。

本当の所をいうなら、僕には魔女さんがこういうものなのか、おおよそわかっていた。

彼女はおそらく、女神さんの同類だ。

物心ついた頃には既に、僕の世界はおぼけでいっぱいだった。道を歩き、空を飛び、壁をすり抜けるそれらがおぼけだと気付いたのは五歳の時で、その頃にはもう、僕は『たりない子』として世間に認知されていた。壁と話し、電柱に怯え、人と向きあえばその肩の上、何も無い空間を見て泣き笑いするのだから無理もない。幼い頃の僕には霊と実体の区別がなかった。さわれない生き物もいるんだ、くらいに考えていたように思う。

背後霊や守護霊と呼ばれるものがある。

定義は知らないが、僕にはそれらしきものが見える。およそ全ての人間には肩のあたりに『なにか』がくっついており、僕はそれを守護霊と呼んでいる。それは人だったり犬だったり蛇だったり動物凶鑑にも載っていないような奇怪ななにかだったり、様々だ。ずっとと見ているけれど、僕にわかる共通点は、人間の肩のあたりにくっついているということくらいだ。うちの家族でいうなら、母さんはザリガニ、父さんは蝶。僕についているのは隻腕せきわんの猿で、名前は『教授』だ。守護霊のついているものは生きているもので、そうでないものは霊——五歳当時の僕が定義した生者と死者の見分け方がこれだった。僕の知る限り、守護霊のついていない人間は死者と、そして僕の弟だけだった。

六歳の時、西熊家は東京から、箔織市はくおりしの今の家に引っ越してきた。逃げてきたと言い換えることもできる。たりない子と誘拐された子の兄弟の住む家はテレビ局や出版社にとって格好の取材対象で、両親がそれを嫌ったのだ。

新しい土地の小学校に入学した僕は、その翌日からさっそく虐められた。もちろん理由は僕にあった。僕が学校にいる間中、サングラスをかけていたからだ。

父さんの部屋で遊んでいた僕は、サングラスをかければ霊が見えなくなることに気付いた。理由は不明だが、サングラスをかけてさえいれば僕は普通の子になることができた。もちろん僕は喜んだ。両親も、もともと幽霊なんて本気で信じてはいない人たちだったけど、いつも僕がなにかに怯えていることは知っていたから、その原因らしきものが取り除かれたことは大いに喜んでくれた。弟もよかったねと言ってくれた。

僕は父さんと一緒に何度も何度も病院へ通い、サングラスさえあれば僕が暴れないことを医師に認めさせた。そうして長い名前の載った診断書も貰い、できるだけ隙間がでにくい、目をすっかり覆い隠すサングラスをオーダーメイドした。全てが完璧に回っているように思えた。馬鹿な僕は、普通の子どもになってはじめての友達をつくるのだと意気込んだ。

そして待っていたのは虐めだった。

僕はたりない子だった。

考えのたりない子だった。

人と違う者がはじかれないはずがなかった。登校から下校までずっとサングラスをしている生徒が虐められないはずがなかった。サングラスをとっただけで怯え、暴れ、蹲うずくまる同級生を好奇心旺盛な子どもたちが見逃すはずがなかった。そして僕は運も悪かった。『PTAのえらいひと』というよくわからないポジションの大人が僕を盲人と勘違いし、勝手に恥を掻いたのだ。それからは虐めのレベルが格段に上がった。子どもの残虐性が大人に保証される恐ろしさは

筆舌に尽くし難い。入学から三ヶ月で僕は不登校になった。虐めが嫌で学校を休んだのではない。心は負けていなかった。体が負けたのだ。虐めによって受けた傷で僕は入院した。

事件が起こったのは入院した翌日だった。

僕を階段から突き落としたクラスメート三名が死んだのだ。死因は三人とも脳梗塞だった。彼らの親はこぞって言った。西熊の子が呪ったのだと。両親は怒った。馬鹿を言うなど。そんなことが人間にできるわけないだろうと。ところでおまえらはうちの子への殺人未遂を認めたなど。両親と死んだいじめっ子の親たちは裁判一步手前というところまで揉めに揉めた。さすがにこの事態にはこれまで傍観を決め込んでいた学校側も動いた。どう動いたかという、家に五十万円を持ってきた。これで訴えないでくださいと。そして訴えたら社会的に殺すぞと。僕はその日、父さんが泣くのをはじめて見た。僕は両親に申し訳なく思った。

だって、三人を殺したのは僕なのだから。

気付いたのは三人が死んだその日、まだ死の連絡など回っていない朝のことだった。僕はその前夜、僕の守護霊の、隻腕の猿に願いをした。どうかあいつらを殺してくださいと。その頃まだ猿は、小学一年生の僕と同じくらいの大きさしかなかった。それまで会話などしたこともなく、僕の後ろを黙ってついてくるだけだった猿は、僕のお願いに「ヴォ」と返事をした。それが肯定の返事だったことは翌朝わかった。起きたとき、僕の肩にそっと触れていた猿は、一回り大きくなっていた。そしてその日、僕を突き落とした三人が死んだと連絡があった。当時の僕は既に、これらの因果関係に気付かないほど子どもではなくなっていた。守護霊で人を殺せると知った日だった。のちに僕は知る。守護霊は守護霊を食べて成長するということ。そして守護霊を殺された人間は死んでしまうのだと。僕の守護霊、隻腕の猿は、クラスメートの守護霊を食い殺したのだ。

殺害の日、僕は猿に名前をつけた。よく見れば頭のよさそうな顔をしている彼ないし彼女に、『教授』という名前を。

退院した僕を待っていたのは徹底的な無視だった。この時の僕は既にお友達という神話を信じなくなっていたから、これはむしろ望ましいことだった。無視されるということは、危害を加えられないということだ。靴を隠されることもなく、トイレの水を飲まされることもなく、ペットを殺されることもないということだ。僕はそれを、扱いがマシになったと受け入れた。寂しくなかったわけでは決していないけれど、傷つけられないことは喜ばしかった。みんなは僕を無視し、僕はみんなを無視する。利害は一致していた。

そんな日々が一ヶ月ほど続いたある日、その少年はやって来た。

少年の名は吉嶋未紅^{きよしまみく}。のちに僕の親友になり、僕らの王様になる化け物だった。

王様は言った。

「おまえ、俺の仲間になってくれよ。虐められて、友達いないんだろ？ ちょうどいい。おまえの役職は『総理大臣』な」

突然だった。吉嶋未紅のことは知っていた。隣のクラスの化け物だ。何をやっても一番で、いつもみんなの中心にいる、それでいて誰とも特別には親しくないおかしな奴。それが未紅だった。そんな子が休み時間に、別のクラスの自分を訪ねてきたのだ。混乱しないはずがなかった。それに僕には、たとえ彼が有名人でなかったとしても、彼を気にする理由があった。それは吉嶋未紅の守護霊のことだった。

「どうして僕を友達にしたいの？」

クラスの視線が集まる中、僕は訊ねた。

「友達じゃない。仲間にしたいんだ」

王様は真顔でこたえた。

「友達ってのが何なのかはよくわかってる。おまえを虐めてるそいつらのゆるい繋がりのことだろ？ それは要らねえ」

「友達がいらないの？」

僕が喉から手が出るほど求めたものを、目の前の少年は要らないと言う。それが信じられなかった。けれど少年は力むでもなく、自然体で答えた。要らねえ、と。

「俺が欲しいのは裏切らない仲間だ。差別の恐怖で縛り上げた空虚な結束をしてオトモダチと呼ぶのなら、そんなものは要らねえよ。欲しがるようなもんじゃない。現に俺には、友達なんて一人もいないぜ?」

小学一年生の僕には王様の言う難しい言葉の意味はわからなかったけど、それでも思うことはあった。この子の隣で、この子みたいに強く生きられるなら、自分には友達なんて要らないと。僕はそう思った。

こうして僕たちは仲間になった。

最初は二人だけだった。けれどすぐにメンバーは増えた。

王様はこの地域の、ある条件を満たした小学生に声をかけ、子どもだけの活動組織を作り上げた。それは学校の垣根を超えた繋がりがかった。以後様々な『伝説』をうちたてるこの組織は、名を《王国》といった。メンバーは勿論《国民》で、《王国》に入ることは《亡命》。《王国》の指導者である吉嶋未紅の肩書きは《国王》で、主権は彼にあった。

《王国》に《亡命》するための最も大きな条件は迫害されていること、すなわち虐めを受けていることだった。王様はこれについて悪びれもせず「俺は可哀想な奴が好きなんだ」と語った。それが本心からの言葉だったかどうかはわからない。ただ一つ言えるのは現在のカタチ——今や《王国》は王様を中心にしてまとまる、完璧に近いシステムで取り締まられた、専制君主国家の理想像のようなものになっているのだった。

王様は《国民》それぞれに役職をつくり、基本的にその役職で呼んだ。

《王国》には名前が原因で虐められた者が少なくなかった。中に

は聖騎と書いて『ぼらでいん』と読む奴もいる。自分の名前にコンプレックスを持っている人間にとって、名前でない呼び名を与えられることは、本当の自分を認めてもらえたような気持ちになるものだ。僕も自分の名前が嫌いだから、よくわかる。

仲間は僕を名前で呼ばない。ソウリと呼ぶ。総理大臣だからソウリ、と。

それが僕の誇りだった。

「みんな遅えなあ」

「授業が長引いてるんだろ」

「それにしたってちよつと遅すぎねえか？——あ、おまえの携帯ブルってるぞ」

机の上の携帯が震えていた。ランプは緑色。メールだ。2016年の同時多発通り魔事件以降、生徒児童の携帯電話持ち歩きは多くの自治体で半義務化されている。僕は受信ボックスを開いた。未読メール5件。

獵師、軍、画家、王子、牧師——全て《王国》の仲間からだった。

あ、と僕は気付いた。

王様の携帯が振動する。

「あれ、俺もだ」

王様がメールを開く前に僕は言った。

「ねえ、王様。今日ってさ」

王様は黙って携帯を操作する。

「中庭で食べる約束してなかったっけ？」

王様は黙って携帯を胸ポケットにしまった。うん、と彼は言った。

「俺も、いま思い出した」

僕らは走りだした。



「守護霊ってさ」

「うん」

「普段なに考えてんだろうな」

「なにってどういう意味？」

「守護霊ってのは宿主の肩あたりにくっついてるもんなんだろう？こ
う、こんな感じに、ペターって」

「重いよ。まあ、ものによるけど、人間っぽいのはだいたいそんな
感じだね。子犬とかネズミみたいな小っちゃい連中は肩の上に乗っ
てる」

「うん。だから、肩にくっついてるわけだろ？」

「まあ、基本はね。別に肩じゃなきゃいけないってわけじゃないら
しいよ。ただそこが掴まりやすいってだけで。前も言ったけどさ、
連中、宿主にくっついてないと消えちゃうんだよ。で、守護霊が消
えちゃったら宿主は死んじゃう。去年、強姦魔の大学生ぶっ殺した
ことあったじゃん。あのとき実はうちの教授、あのクズの守護霊、
食べてないんだよね。あんなゲスにくっついてるような奴を食べさ
せたくなくてさ。首根っこ掴んで、宿主から引き離してただけなん
だ。そしたらフツと霧みたいになんか消えちゃった」

「いつでも宿主にくっついてなきゃならないなんてさ、自分の時間
がなくて、好きな事もできないで、どんな気持ちなんだろうな」

「ああ、そういうことか。それなら、ほんの一握りの例外を除けば、
問題ないと思うよ」

「どういう意味だ？」

「守護霊っていうのは——まあ、守護霊って名前は便宜上、僕がそ
う呼んでるだけだけど——連中は、基本的には宿主の一部なんだよ。
宿主が怒れば守護霊も怒るし、宿主が悲しんだら守護霊も悲しむ。
それだけのものなんだ。だから、極一部の特別な守護霊以外は、別
段なにかを思ったりはしないんだってさ」

「なんだよ。じゃあ、別に守護霊に気を遣って品行方正に生きる必要も……ん？その言い方だと、その話は誰かに聞いた知識なのか？おまえ以外にも『見える』奴いるの？」

「まさか、いないよ。いたとしても僕は知らない。『極一部の特別な守護霊』に聞いたんだよ。その人と僕、けっこう仲いいから」

「ああ……俺のか」

「そゆこと」

「なあソウリ」

「うん？」

「もう百回ぐらい聞いてると思うんだけどさ」

「うん」

「俺の守護霊って、どんな奴？」

「女のひと、とだけ言っとく」

「いい加減教えてくれてもいいと思うぜ。背は低い？高い？」

「ノーコメント。言っちゃ駄目って言われてるから」

「かわいい？美人？」

「ノーコメントだってば。ルックスに関する質問は全部ノーコメント」

「いま何してる？」

「王様の三歩うしろ歩いてる」

「おおお……いいねそういうの。控えめで。大和撫子って感じなんだろうなあ。黒髪のおしとやかな美女。日本人としては、色つきの髪はやだよなあ。やっぱ黒じゃないとさ。金髪なんかビッチ臭くて論外だ」

「王様、ちょっと黙れ」

「あん？」

帰り道。自転車を押して歩きながら、僕は王様からは見えないように、誰かさんの強力すぎる守護霊——額に青筋を立てた金髪の美女へと頭を下げた。真っ白なローブを着た、神話の世界からやってきたかのような美女。いや、美女と美少女の中間？そんなことはない

い。彼女の存在こそ、僕が吉嶋未紅という人間に興味を持った最初の原因だった。僕は彼女を女神さんと呼んでいる。

彼女はあまりにも存在が濃すぎる。僕が話しかければ返事をするし、質問をすれば答えてくれる。冗談を言えば笑ってくれるし、悪いことをすれば叱ってくれる。強い守護霊は少しの間であれば宿主から離れて単独行動ができるものなのだけれど（教授は二時間ほどで、これでもかなり凄い）、女神さんはそもそも学校に来ない日すらあるし、来ても王様の体には殆ど触らない。王様が僕の家泊まる日なんかはまずもって来ない。そういうときに何をしているかというところ、どうも王様の家で本を読んだり、街をぶらぶら歩いたりするらしいのだ。本を読めるということは、つまり物にさわれるということだ。普通の幽霊にできるのは風を起こすことくらいで、浮遊霊や守護霊を食べまくってかなり強くなっている教授でさえ、物や人にはさわれない。そしてなにより凄いのは、星の数ほど居るおばけの中でただ一人、彼女だけがサングラスをした僕の目にも映るということだ。何から何まで規格外。まさに王様にふさわしい守護霊。それが女神さんなのだった。教授なんて、殆ど意思なんてないくせに、彼女に近づくのを嫌がって今もちょっと距離をおいているほどだ。

僕は金髪碧眼のスレンダー美女に向かって話しかけた。王様が横で通訳しろとやかましく言ったが無視した。

「王様も、悪気があるわけじゃないんです」

わかっています、と女神さんはこたえた。

「あなたの前ではミクが素直になる。わたしはそのことを嬉しく思います」

「こんな奴ですけど、これからよろしくお願いします」

「ミクを見守ることはわたしの天命です」

前に、僕はこの人に聞いたことがある。どうしてあなただけはサングラスをしているも見えるのかと。その時の女神さんのこたえの意味が、僕は今もわかっていない。彼女はこう答えたのだ。「本来、

わたしはミクを見守るだけの存在です」と。それについてはその後なにを聞いても、女神さんは「わたしは嘘をつくことができません」と言うだけで、答えてはくれなかった。

それ以降、僕はなぜか、彼女を見ていると悲しくなるのだった。

「あーあ。自分の守護霊だけでも見えねえもんなあ。ぜったい黒髪的美女だと思うんだけどなあ。眼鏡なんかかけててさ」

「王様、黙れ。ぶっとばすぞ」

放課後。僕は王様の家にいた。王様が、どうしても見せたい物があると駄々をこねたためだ。

しかしその見せたい物というやつが見つからなかった。王様は自室の机の引き出しを一段一段とりはずして中をたしかめた。それでも彼は目的のものを見つけれなかった。

「おっかしいなあ。きのうの夜、いや今朝まではたしかにあったんだけど……」

「何を見せたかったの？」

「写真だよ。小五のとき——ほら、キャンプ行ったら？」

「あー、行った、行った。めちゃくちゃ浅い川でリョウシが溺れて、グンが泣きながら助けたんだよね。死ぬなー！ってさ。あれは笑ったなあ」

「そう！そのあとのこと、覚えてるか！？」

「そのあと？そのあとは、ええと、みんなで写真撮ったよね。山をバックにして。あっ。見せたかったのって、あのときの写真？それだったら僕も持ってるよ。王様のお父さんがデジカメは味が無い！とか言ってポラで撮ったやつだろ？わざわざ全員分撮ったじゃん」

「全員分。そう、そこまでは俺も覚えてるんだ。ソウリ、おまえその全員が誰だったか、覚えてるか？」

「誰って、そりゃ当時キャンプに参加したメンバーでしょ。僕と、王様と、王子とガカとリョウシとグンと、ソロバンとニンジャと、

あとボクシ」

「メンバーはそれであってる。じゃあ、大人は何人いた？」

「何人なんにんってなんだよ。王様のお父さん一人だろ。他にいた大人っていったらキャンプ場の管理のおっさんぐらいじゃなか」

王様は肩を落として黙り込んだ。やがて彼は「だよなあ」と言った。

「大人は一人だったはずなんだ。だってそのせいでうちの親父はクソPTAにごちゃごちゃ言われたんだから。まして、外国人なんかいなかったはずなんだよ。それなのに――」

「待って。外国人ってなに？」

僕は王様の言葉を遮って訊ねた。妙な予感があった。王様はああ、とこたえ引き出しを荒らすのをやめて僕に向き直った。それがさ、と彼は言った。

「きのうの夜、アルバムを整理してたらキャンプの写真が出てきたんだよ。けど、そこに俺の知らない奴が三人も写ってたんだ。自慢じゃないけど記憶力はいいほうだ。俺が忘れてるとはどうしても思えないんだよ。一人は日本人のおっさん。もう一人もたぶん日本人で、俺のタイプど真ん中の、日本人形みたいな髪した、たぶん二十歳ぐらいかな？眼鏡かけた女。で、最後の一人は金髪の、当時の俺たちよりちょっと年下ぐらいの、外国人の女の子なんだけど――なあ、そんな奴らいたか？俺が忘れてるだけなのか？」

王様の、タイプの女。日本人形みたいな髪。眼鏡。

金髪の、外国人の子ども。当時の僕たちより少し年下ぐらいの。

「ねえ、王様」

僕は言った。そしてポケットから今朝の写真を取り出した。

「この子に見覚えある？魔女さんから渡された写真なんだけど」
写真を差し出す。

受け取った王様は息を飲んだ。

「ああ……ああ……」

そうして彼は写真と僕を交互に見て、つぶやいた。

「思い……出した……」

王様は写真をぎゅっと握りしめ、涙をこぼして僕を見つめた。僕は戸惑った。王様がこんなふうに泣くところを僕は初めて見た。たぶん他の仲間だって見たことはないだろう。僕は言った。

「思い出したって何が？その子のこと？」

王様は、クソッ、と言って力いっぱい頭を振った。

「ちくしょう。なんで。どうして忘れてたんだ……クソッ。わからねえ。でも、いま確かに思い出した。ぜんぶ思い出した。魔女だ。仲間だ。仲間だったんだ……それなのに――」

「だから、何だよ。なにを思い出したんだ。魔女さんがどうしたんだよ。僕にもわかるように言ってくれ」

王様はごしごしと手の甲で目をこすってから、僕に写真を突き返した。

やがて彼はか細い声で言った。

「……………なんで……………」

そして僕の物語がはじまった。

「なんでおまえが忘れてるんだ……」

ニュウは、おまえの初恋の相手だろうか」

26. 僕の運命

運命を信じている。

生まれ、出会い、別れ、愛し合うことに理由などは必要ないのだと。

全ての現象は最初から、大きななにかによって予め定められているのだと。

世界は物語で、僕らはそれぞれが主人公なのだ。

今でも僕は、そう信じている。

今でも僕たちは、そう信じている。



「初恋の相手……この子が、僕の？」

王様が握りしめたせいでシワがついた写真を注意深く見る。そこに写っているのは両手でピースをしている金髪の女の子。それはやっぱり、僕にはただの『かわいい子ども』でしかなくて、見覚えなどまったくくないのだった。

「本当に覚えてないのか？」

王様は真剣な、不安そうな顔で訊ねる。泣いたあとの目は真っ赤で、普段の王様らしくない、まるで自分自信を信じきれていないような声だった。僕は考える。穴が開くほど写真を見て、思い出そうとしてみる。チクリと頭の奥が痛んだ。

——考えてどうなるっていうんだ。

——わかるはずがないだろうに。

僕は首を横に振った。

「僕は、女の子を好きになったことなんて無いよ。そもそも恋愛な

なんてものに興味がないもの。僕が少女漫画とか大っ嫌いなもの、王様は知ってるだろ？」

「知ってる。知ってるけど、そうじゃねえんだ。あのときだけは違ってたんだよ。なあ、冗談じゃなくほんとに、マジで覚えてないのか？ 魔女だぞ。名前はニュウで、役職は《魔女》。小五の夏休み、一ヶ月だけだったけど、俺んちに住んでただろうが。ほら、やたら日本語の上手い、っていうか日本語しか喋れないおかしい外人だよ。おまえ、ニュウのことが好きになったって言って、そのことで俺に相談してきたじゃねえか」

王様の顔は、ふざけたりからかったりしているふうではなかった。長い付き合いだ。至って真面目に言っているのがわかる。王様は本当に写真の子を知っているのだ。少なくとも『知っている』と思っているのだ。だけど、王様とずっと一緒にいた僕が、彼女を覚えていない。いや、覚えていないんじゃない。知らないんだ。初恋云々にしてもそうだし、王様の家に外国人の一家が住んでいたことだって、記憶にない。僕も王様も、どちらも嘘をついていない以上、どちらか一方の記憶が、或いは両方の記憶が、間違っているのだ。

依頼人を閉じ込めてまで僕に写真を渡した魔女さん。写真の女の子を知っているという王様。王様と一緒にいながら女の子のことを覚えていない僕。なにか大きなことが動き出していて、知らずにその中心に立っていたことにたったいま気付いたような、そんな気持ちがある。それは決して嫌な気持ちではなかった。

王様は写真の女の子とその家族について話した。僕は黙ってその話を聞いた。

女の子の名前は田中ニュウちゃん。彼女には父と姉がおり、母はなかった。お父さんとお姉さんは生粋の日本人で、ニュウちゃんは亡くなったお母さんの連れ子だそうだ。ニュウちゃんは、僕らが小学五年生だった、あのキャンプの年の夏休み、一ヶ月の間だけ、お父さんとお姉さんと一緒に王様の家に住んでいた。なぜこの箔織はくおりに來たのかは王様にもわからないという。王様の家に住んでいたのは、

お父さん同士が知り合いだったためだ。ニュウちゃんは過去に虐められていた時期があり、その話を聞いた王様が《王国》に迎え入れた。彼女の役職は《魔女》だった。気持ちのいい子だった。《王国》の仲間は僕も含めて皆すぐにニュウちゃんを気に入った。僕らは夏休みの間中、毎日一緒に遊んだ。キャンプにも、海にも、プールにも、僕らがいる所には必ずニュウちゃんが一緒にいた。ニュウちゃんは誰よりも夏休みを楽しんでいた。そんな彼女にいつしか僕は恋をした。夏休み最後の日、僕は彼女に告白した。そしてフラれた。その日の夜、ニュウちゃんとその家族、田中一家はいなくなった。話が終わると王様は僕を睨んだ。どうだ思い出したか、とでもいうように。僕は申し訳ない気持ちで首を横に振った。

「ごめん……やっぱり思い出せないよ。忘れてるっていうよりも、そもそも、そんな事実があったと思えないんだ。いくら頭の中を探してみても、やっぱり、王様の家に誰かが居候してたっていう記憶は見つからないよ。外国人の子どもと遊んだ記憶も無いし、ましてや僕がその子に惚れてたなんて、想像もできない」

「つまり俺の思い違いで、現実にはニュウもその家族もいなかったと」

「或いは僕の頭が狂っちゃってるかだね。そっちのほうがパーセントは高いと思う。なにせ僕ときたら、幽霊を見ちゃうようなおかしな奴だから」

僕は魔女さんのことを思った。彼女は写真の女の子の名前を『アラタ・ヒルマ』だと言った。田中ニュウとアラタ・ヒルマは同一人物なのだろうか。それとも王様の勘違いで、まったくの別人なんだろうか。もちろん、そんな子はいなかったという説が僕の中では最有力なだけけど。しかし魔女さんの言葉——『ニュウの中にシグマ』、あの言葉が僕はどうにも気になるのだった。それに、魔女さん本人のことも。王様の言う、ニュウちゃんのお姉さんの特徴は、あまりにも魔女さんのそれと合致しすぎていた。

僕は王様に訊ねた。写真の子は本当に当時の子かと。王様は「間

「違いない」と答えた。

「くどいようだけど、ソウリは本当に魔女を——ニュウを覚えてないんだな？」

「《王国》に誓って」

王様は腕を組んでしばし黙り込み、やがて「よし」と言った。

「みんなに聞いてみよう。二人じゃ分母が小さすぎて、埒が明かない」

「《国会》を開くの？」

「ああ。みんなに決めてもらう」

《国会》というのは、五人以上の《国民》を集めて納得するまで話し合う会議のことだ。当事者だけでは解決できない揉め事、納得できない問題が起きた時に《国会》は開かれる。《国会》で決まったことには誰も逆らってはいけなし、当事者もそれ以外も、《国会》が閉じたあとにはその議題に関することを口にしてはいけなし、それが《王国》の決まりだった。そしてこの話し合いには、王様は参加できない。たとえ王様が揉め事の原因だったとしてもだ。主権者としての《国王》は《国会》の決定をただ『認める』ことしかできない。これは王様本人が決めた《法律》だった。主権が王様にある《王国》においてこうした議論の場が作られたのは、《国民》一人一人に責任意識とプライドを持たせるためだ、と王様はかつて僕に語った。迫害された者たちの集合体にはそれが絶対に必要であると当時小学一年生の王様は考えたのだ。そしてそれは正解だった。《国会》を作るにあたって王様が決めたルール『遮らない・決めつけない・感情的にならない』——この三つを守り、問題が起こるつど皆で話し合うことによって、僕たち《国民》は論理的思考力を育て、虐めで殺された自尊心を蘇らせた。本物の国会のように下品なやじが飛び交うことのない極めて人間的な話し合いは、幼かった僕らの心の成長に大きな役割を果たしたように思う。《国会》は、最低五人と言いながらも、ひとたび開けばよほど大切な用事でもない限り全員が集まるのが通例で、そしてそれは《国民》全員の望みで

もあった。《国民》は役割こそ違えど全員が対等の仲間だ。《王国》の仲間に問題が起ったときにはいつだって協力して解決したいと、僕らはみんなそう思っているのだ。

「それじゃあ、僕は電話帳、上から順にかけるね」

「俺は下からだな。一応、家にいる奴にはキャンプの写真、持ってくるように言っといてくれ」

「了解」

こうして王様の家に皆が集まることになった。

そうなるはずだった。

いつもなら。

「……すげえな。全員が来れないなんて、珍しいこともあるもんだ」

「初じゃない？こんなの」

「ああ」

「元旦でさえ半数以上は集まったのにね」

「引っかかるなあ。なーんか引っかかる……」

「電話では、みんなニュウちゃんのこと知らないって言ってたよ。まあ、田中ニュウを知ってるか、《魔女》を覚えてるか、しか聞いてないから、他の要素で覚えてる、知ってるって奴もいるかもだけど」

「こっちもだ。俺のほうも、誰も覚えてなかった。これは……陰謀の匂いがするぞ」

「馬鹿いうなよ。僕らが示し合わせて王様を騙してるって？冗談じゃない」

「そうじゃない。そうじゃなくて——なんつーか、俺たち全員、《王国》の全員が陰謀に巻き込まれてる感じっつーか……。俺の頭の中には、魔女のことも、親父さん、姉ちゃんのこと、今までどうして忘れてたのかわからないってぐらいに、はっきりと『ある』んだよ。あれが全部なかったことだなんて信じられないんだ。誰かが

俺たちから《魔女》と田中家に関する記憶だけをそっくり盗んだんじゃないかって、そんなことさえ思えるくらいだ」

「記憶を盗むなんて――」

「ありえない、なんて言うなよ？ 幽霊を見る奴がこうして目の前にいるんだ。ノーマルの俺には、ありえないとは思えねえよ」

王様はじつと僕の目を見つめた。赤くなったままの目で。なあ、と彼は言った。

「まだ確かめる方法があると思わないか？」

「僕んち行ってキャンプの写真見る？ それとも誰かに画像送ってもらう？」

「写真のことは電話で全員に聞いたよ。全員がしまった場所を思い出せないって言ってた。けど、それよりもっと簡単で、すぐにできる方法があるだろうよ」

僕には王様の言わんとしていることがわかった。僕はわざと大袈裟に溜め息をつき、はいはい、と言った。そうしてひらひらと手を振る。

「わかったよ。聞けばいいんでしょ」

「わりいね」

王様はへらりと笑った。仕事に関係がありそうだから、帰りにこっそり聞こうと思っていたのだけれど。守秘義務にかかわる部分はぼかせばいいか。

僕は部屋の入口を振り返った。そこには金髪の美女がいる。今も当時も僕らの近くにいて、そして言葉を話せる、王様の守護霊――女神さんが。女神さん、と僕は言った。はい、と女神さんはこたえた。僕は訊ねた。

「女神さんは当時のこと――三年前の夏休みのこと、覚えてますか？」

女神さんは宝石のような緑色の目をまっすぐ僕に向け、それから王様を見て、再び僕に目を戻してから「はい」と言った。喉が鳴った。口の中の唾液がいつの間にか全部どこかに行ってしまった。

「その時のこと、教えてもらってもいいですか？」

女神さんは僅かに黙り込み、やがて「わかりました」と言った。

「答えられる範囲であれば、お答えします」

「ありがとうございます。じゃあ、早速おしえてください。三年前の夏休み。キャンプをしたあの夏休みに、田中ニューちゃんという外国人の女の子は、この家に住んでいましたか？王様は、いたって言うてるんです。でも、僕にはそんな記憶、ありません。正しいのはどっちですか？」

女神さんは僕から視線を外し、王様を見つめた。僕は女神さんの表情がよく見えるようにサングラスを外した。王様が「おい、なんて言ってる？」と言った。しかして女神さんはこたえた。

「彼女の名前をわたしは知りません」

「————え」

王様が「おいてば」と僕の肩を掴む。けれどこっちはそれほどころじゃなかった。

「ですが、ここで——この家で、ある少女が暮らしていたことは事実です」

僕は絶句した。

衝撃だった。写真の女の子は、確かにいたのだ。

驚きから回復した僕は一気に興奮した。僕の記憶が間違っていた？王様が正しかった？いや、まだだ。まだわからないことだらけだ。王様の家にニューちゃんがいたのは本当だとして、彼女が僕らの仲間だったかどうかはまだ不明だ。それに僕とのこと。小五の僕が彼女に恋をして、そしてフラれたということも。——僕は身を乗り出し「じゃあ！」と言った。しかし続く言葉は女神さんに遮られた。彼女は言った。

「落ち着いてください、ソウリ。喋らないで。黙ってわたしの言うとおりにしてください。そうしていただけるなら、少女について、わたしの知っていることの一部をあなたにお話します」

女神さんはいつもの氷ったエメラルドのような目で僕の顔を見て、

そしてチラと横に視線をやった。そこには王様がいる。僕の肩を揺すりながら「なあ」だの「おい」だの言っている王様が。ああ、と僕は思った。そうか。このひと――

僕は目だけで頷いた。では、と女神さんは言った。

「ミクに『そんな少女はいなかった』と伝えてください。全てはミクの気のせい、勘違いであつたと」

――このひとは、王様に知られたくないんだ。どんな理由からかは知らないけれど、女神さんはニューちゃんとその家族のことを、王様には教えるべきじゃないって、そう考えているんだ。僕はこのとき、僕たちの記憶を奪ったのが女神さんなのではないかと思った。結果から言えばそれは間違いだつただけけれど、このときの僕はそう思った。

女神さんは僕を見つめる。僕はそれに目で頷き返した。

「おい。おいつてば。なあ通訳。仕事しろよ。こっちは見えも聞こえもしねえんだぞ。俺の守護霊はなんて言ってるんだ？俺の黒髪美女は」

僕は王様に向き直り、うん、とこたえた。そしてサングラスをかけなおした。自分が酷い裏切りをしているように思えた。

「やっぱり、そんな子はいなかったって言ってるよ？」

えっ、と王様は言った。

「えっと。それはつまり……………えっ？」

王様は心底わからない、という顔で僕を見た。それからついさっきまで僕が向いていた方――女神さんのいるあたりに目を向け、そしてまた再び僕を見た。

「それは、マジで？」

「うん」

「守護霊が嘘ついてるってことは無い？」

「そんな人じゃないよ」

王様は腕を組み、なにごとか唸ったのち、やがて「そっか」と言った。それはそのままいつもの調子の声だつた。

「んあー、どうにもまだ信じられねえんだけどーいや、信じられねえってのはソウリのことじゃなくて、俺の頭のことな。でも、うーん。まあ、おまえが言うんだもんなあ。ソウリが俺に嘘なんかつくわけえねえし……わかった！《魔女》のことは俺の勘違いだった！写真もたぶん見間違いだ！この話はもうやめよう！」

王様はきっぱりと言い切った。言い切って、自分を納得させた。自分の記憶ではなく、僕の言葉を信じて。そうして王様は照れを誤魔化すように頭を掻き、笑った。

「勘違いだったかあ……いや、参ったね！俺ってば、いもしねえ奴のために泣いちゃったよ。感受性やべえぞこれ。はずかしー！」

笑いながら空のペットボトルをべしべし叩く王様に、僕も笑い返した。

「まったくだよ。僕が恋だなんて、びっくりしたっての。ははは」

「夢かなんかだったんかね。小っちゃい頃って、そういうの、区別つかねえじゃん」

「ああ。そうかもね。僕もそういうことよくあったよ」

ここに《忍者》がいたら、僕は間違いなくぶん殴られているだろう。

王様は僕を疑わない。僕が自分に嘘をつくなんて、彼は考えもしない。僕だけじゃなく、仲間の誰をも、本当の意味で王様は疑わない。仲間に対してだけは、王様は鈍感だ。それでいて仲間の危機には誰よりも早く駆けつけるのだ。ガンジャ事件のときもそうだったし、本屋事件のときもそうだった。仲間は裏切らないもの。王様の中では、それは絶対の常識なのだ。いつだって王様は僕らを平等に愛し、そして平等に信じるのだ。漠然と思った。もしも王様が死ぬ時がくるなら、きっとその死は、仲間の裏切りによってしかもたらされないだろうと。どんな事故も事件も、寿命でさえも、そんなものが僕らの王様に勝てるとは思えない。だけど仲間なら、あっさりと背中を刺すことができるのだから。そうして死の瞬間にさえ、王様は裏切られたことに気づかないのだろう。彼は僕らを絶対に、何

があつたって信じ通すのだから。こうした王様の『信賴』は、王様を除く《国民》の全員が心配していることだった。《王国》には王様の知らないルールがある。『王様を裏切った者を許してはいけない』というルールが。それこそが《国民》の結束力を高めている最も太い鎖なのだというのを、王様だけが知らないのだった。

その後は、夏休みの予定をどうするか、どうしたら身長が伸びるか、《そろばん》はいつ《王子》をオトすのか、などの取り留めない話をして、三時前には王様の家を出た。『吉嶋』の表札がかけられた武家屋敷を後にした僕は、女神さんの指示に従い、公園へ向かった。入口に自転車を停めて待っていると、五分もせずに女神さんは現れた。「お待たせしました」と彼女が言い、僕は「いいえ」とこたえた。女神さんが王様以外の隣に腰を下ろすことはないを知っていたから、僕もベンチには座らなかった。僕たちはブランコの近くで立ったまま話をした。

「言うとおりにすれば知っていることの一部を話す――わたしはそう言いました。始めに言うておくと、わたしがあなたにお話できることは決して多くありません」

僕は頷いた。そして構いません、と言った。

「僕が女神さんに質問をして、女神さんはそれに答える。女神さんは、話せない内容であれば話せないと言う。僕は女神さんの話せない内容を追求しない。それでいいですか？」

わかりました、と女神さんはこたえた。どこかでカラスが鳴いた。それじゃあ、と僕は言った。

「一つ目ですけど……王様の部屋にあつたっていう、キャンプの写真。隠したのは女神さんですね？」

「はい」

やっぱり。そうじゃないかと思った。

「どうしてそんなことをしたんですか？」

「理由は二つあります。一つはお話できません。一つは、これか

ら起こる事件にミクが関与することを防ぎたかったからです」

「事件？このあたりでなにか起こる予定でもあるんですか？」

「はい。しかし、事件については、お教えすることができません」
機先を制されてしまった。ふむ、と僕は唸った。

「じゃあ、事件はいいとして――キャンプの写真。これには王様の言うとおり、田中ニユウちゃんとその家族が写っていたんですか？」

「はい。正確には、田中は偽名で、一緒にいた二名も家族ではありませんが、少女と男性、それに女性のカタチをしたものが写っています」

「偽名っていうのは、まあいいです。名前は知らないって言ってたし。でも家族じゃないとしたら、じゃあその三人はどういう関係なんでしょうか？」

「三名は同じ組織に属しています」

「組織？」

「遠い国の組織です。それ以上は答えできません」

いよいよきな臭くなってきた。事件。偽名。遠い国の組織。僕の中のなにかがうずいた。王様は陰謀の匂いがする、なんて言っていたけれど、今は僕もそんな気分だった。こういうのを昔は中二病と言っていたらしい。父さんの部屋の古い漫画で読んだことがある。そして僕はリアルタイムで中二だった。ワクワクを押し殺して僕は言った。

「わかりました。それじゃあ、女性のカタチをしたものっていうのについて教えてください。それは女の人とは違うんですか？」

女性のカタチをしたもの、なんていう表現じゃ絵が湧かない。王様の言いようから、魔女さんのことだと思っていたのだけれど。監視カメラに映らなかった魔女さんは、確かに女性のカタチをしたものではある。

女神さんの返答は「それもお答えできません」だった。お答えできないことは思いのほか、僕の聞きたいこととかぶっていた。せめてお答えできない理由くらい聞かせてほしいんだけど。

「写真を見せてもらったりもできないですか？」

「写真、ですか……」

女神さんは顎に手を当てて考えるように黙り込んだ。純白のローブと、ストレートの綺麗な金髪が風で揺れた。幽霊なのに、風の影響を受けて。教授の毛は風で揺れたりなんてしない。他の守護霊や浮遊霊もそうだ。僕はときどき思う。女神さんは、本当は守護霊なんかじゃなくて、もっと別の、僕の知らないとんでもなく凄いものなんじゃないだろうか。小さいビニール袋が公園からぎりぎり見える車道の上を飛んでいった。やがて女神さんは「申し訳ありません」と言った。その顔は僕の初めて見る、どこか迷っているような表情だった。

「駄目ですか？」

「はい」

なんとなく、これについては、食い下がったら見せてくれそうなのがした。僕はそうしたい気持ちをぐっと我慢した。話せない内容については追求しない。自分でそう言ってしまった。女性の力タチをしたものの正体を知ることが、今はまだかなわないようだった。

僕はポケットから魔女さんに渡された写真を取り出し、女神さんに見せた。

「王様の家に住んでた子って、この子ですよね？」

女神さんは上品な仕草で覗き込み、それから頷いて「そうです」とこたえた。

魔女さんの探している女の子がかつて王様の家にいた子と同一人物だというのは、どうやら間違いないらしい。

「僕がこの子のことを好きだったっていうのは本当ですか？」

「それは不明です。わたしにはあなたの心を覗く力はない。事実だけを言うなら、あなたはその写真の少女に愛の告白をし――」

女神さんが言い淀む。「フラれた?」。僕は促した。女神さんはいかにも言いづらそうに目を伏せ、「はい」とこたえた。覚えてい

ない失恋に気をつかわれるのは地味につらかった。

「その時の僕は、なんて言ってフラれました？告白の言葉じゃなくて、女の子の方……あー、なんて言ったらいいかな。つまりほら、タイプじゃないとか、好きな人がいるとか、あるじゃないですか」

第三者に過去の自分がフラれた状況を訊ねる。どんな状況だ。自分で言って恥ずかしくなる。女神さんはこれまたやりにくそうに答えてくれた。

『今はまだダメなの。いつかわたしをむかえに来てね』

女の子はそう言ったそうだった。要するに、自分を磨いて、恰好よくなって出直して来いと。十歳かそこらの子どもが随分と気の利いた返事をしてくれたものだった。そんなことを言われた当時の僕はいったい何を思ったのか——今の僕にはわからなかった。さつきより近い場所でカラスがまた鳴いた。

「僕に記憶が無いのはどうしてですか？」

「忘却したためです」

そういう意味じゃねえ。

「それは、まあそうでしょうけど。……変な聞き方になりますけど、誰かが忘れさせたんですか？それとも、僕が自然に、勝手に忘れた？」

「自然とはいえないカタチでしたが、少なくとも、あなたが記憶を失うにあたり、なにか人為的な力が影響を及ぼした事実はありません。人の意志によらず、世界の決定によってあなたは少女とその仲間を忘れました」

世界の決定って。ずいぶん凄そうな言葉が出てきた。

ともあれ、それじゃあ、女神さんは関与していない、ということか。

「そっか……すみません。僕、実は女神さんがやったんだと思ってました」

正直は美德だなどと誰が言ったのか。我ながら実に失礼な物言いだった。女神さんは小さく、苦笑した。

「わたしに人間の記憶を奪う力はありません」

「ひとの記憶を奪える奴もいるんですか？ 僕が、女神さんやほかの幽霊たちを見るみたいに」

「悪魔という存在がいます。吸魂鬼とも呼ばれる彼らは、人間の記憶を食べることができます」

「悪魔、ですか」

「はい。悪魔についてはお教えできません。世界には人間にとって不思議なものが、あなたが思うよりもずっと多く存在します。一つ答えられるとすれば、それはあなたが少女の記憶を――少女と関わった記憶を失くしたのは必然だったということです」

「そしてそれは僕だけじゃない」

「はい」

僕は写真を見つめた。

「電話して聞いた限りじゃ、仲間も誰も覚えていなかった。《王国》の全員がこの子のことを忘れていました。……ねえ、女神さん。」

どうして王様だけがこの子を、ニュウちゃんのことを思い出したんですか？ ニュウちゃんのことが好きだったという僕じゃなく、王様が。それにはなにか理由があるんですか？」

「ミクが思い出したのは、運が良かったからです」

「僕や他のみんなが、なにかの拍子に思い出すことはありませんか？」

女神さんは「それは……」と言ってから口を噤んだ。そうして睨むようにして僕の目を見た。僕は目を逸らさなかった。カラスが鳴いた。さっきより、もっとずっと近いところで。やがて女神さんは口を開いた。

「あなたには二つの道が用意されています」

「二つの道？」

はい、と女神さんは頷いた。

「一つは少女——忘れられた少女と出会う道です。この道をゆけば、あなたは大切なものを失います」

ゴクリ、と音がした。僕の喉が鳴った音だった。

「この道をゆくには、少女を心から見つけたいと願い、そして探さなくてはいいけません。そうすればあなたは彼女を思い出し、そしてこの夏の終わり、少女の生まれる世界で目を覚ますでしょう。これが一つ目の道です」

少女の生まれる世界という表現は難しくてわからないけれど、つまり、ニュウちゃんにもう一度会えるということだろう。僕は頷いた。女神さんは続けた。

「二つ目は、一つ目よりも安全な道です。この道では、本来失われるはずの物が失われるということはありません。全ては流れのままに、あなたはあなたのまま、あなたの世界を生きることにあります。方法は一つ目よりもずっと簡単です。少女を探さない。それだけです。この道をゆけば、少女を思い出す機会は永遠に失われます」

風が吹き、砂粒がサングラスにあたってカチ、と音を立てた。

女神さんはまっすぐ僕を見たままで、その表情は変わらないけれど、僕にはなんだか、その顔が、目の前の僕を哀れんでいるように見えた。

「一つ目の道を選んで失うものは何か、なんて、聞いても教えてくれませんよね」

「はい」

「まあ、そりゃそうか」

それを教えてくれるなら、わざわざあんな回りくどい言い方はしないだろうし。

写真の中では少女が笑っている。かつて自分が恋をした子だとわかると、途端にかわいく見えてしまうあたり、僕というやつは存外安上がりになっていくようだった。

ですが、と女神さんが言った。僕は顔を上げた。

「それは誰かの命ではありません。あなたの選択によって失われる

べきでない命が失われることはありません」

「……そっか。誰かが死ぬわけじゃないんだ」

「はい」

胸が軽くなる。そして気付く。自分が既に、おおかた選ぶ道を決めてしまっているということに。

前から思ってたんですけど、と僕は言った。はい、と女神さんはこたえた。

「女神さんって、もしかして未来が見えたりします?」

「わたしが見るのは現在だけです。わたしが知っているのは、一度通った過去の道だけです」

いいえ、とは女神さんは言わなかった。現在だけを見て、過去だけを知る。当たり前のことを言っているはずなのに、なにかはぐらかされたような気分があった。

「ちょっと気になったんですけど」

「はい」

「二つ目の道を選んだとして、記憶を取り戻した時点で引き返して、二つ目の道を歩き直すことはできないんですか?」

「可能か不可能かというならば、可能です。記憶を取り戻してすぐに少女を探すことをやめればいい。そうすれば二つ目の、なにも失わぬ道を中途から歩くことができます。取り戻した記憶を再び失うこともおそらくはないでしょう。しかしわたしはその方法をおすすめしません」

「どうしてですか?」

「自分にできないことを人に勧めるのは悪である、と考えるからです。もしもわたしがあなたと同じ立場に立たされたとしたら、記憶を取り戻したのちに搜索を打ち切ることなど絶対にできません」

強い口調だった。強いひとだった。誰のことを思っているのかは明白だった。

「女神さんが探すとしたら、王様ですか?」

「そうは言っていないません」

「目、泳いでますけど」

「他に質問はないのですか？ ないのでしたらそろそろ失礼させていただきますが」

僕は笑い、女神さんは笑わなかった。

この人が側にいるなら王様は大丈夫だろう。そう思った。なぜそんなことを思ったのか、このときの僕にはわからなかった。

話は終わり、僕は女神さんに礼を言って公園を後にした。

抽象的で目的地の見えない、けれど方法論だけははっきりとした話だった。方法として、僕は一つ目の道をゆくことを決めていた。名も知らぬ少女を思い出したい。初恋のひとに会ってみたい。このときの僕は強くそう思っていた。

別れ際、女神さんは僕に「気をつけてください」と言った。僕はその言葉を軽く受け取った。それが彼女に許された精一杯の警告なのだ、このときの僕は気付くことができなかった。

僕が僕を失う運命は、僕が思うよりもずっと前から、火花を散らして、僕の中で走り出していたのだった。



帰宅した僕は自転車をガレージに入れ、部屋に鞆を置き、制服を着替え、机の引き出しに携帯とサングラスをしまって弟の部屋へと向かった。ドアを開けると、薄暗い部屋はいつもどおり効き過ぎのエアコンで肌寒く、これまたいつもどおり二台のPCが起動していた。去年の誕生日に僕が買ってやった椅子に座る弟は、二つのキーボードをそれぞれ片手で器用に叩いて、何やら僕にはわからない恰好よさげな作業をしていた。不登校児である弟が両親に怒られない理由の一つ――僕の除霊なんかとは違う、きちんとした収入のあるお仕事というやつだった。弟の仕事がどんなものなのか、僕は知ら

ない。

後ろ手にドアを閉め、部屋の小型冷蔵庫から、五百ミリペットに入った作り置きのお茶を取り出す。それを持ってベッドに座り、ただいま、と僕は言った。弟は作業の手を止めて僕を向き、おかえり、とこたえた。僕はお茶をひとくち飲んだ。弟が椅子から立ち上がり、僕のすぐ隣に腰を下ろした。そして「ひとくち」と言った。

「冷蔵庫にまだあるよ」

「ひとくちだけ欲しいんだよ。できれば兄さんの飲んだやつ」

「びっくりするほど気持ち悪い」

「いつものことじゃん」

弟は僕の手からお茶を奪って飲んだ。わざわざペットボトルを回して僕が口をつけた部分から飲むあたりが本物臭さを際立たせていた。弟はゲイで、そしてブラコンだった。僕なんか及びもつかない重度のブラコンだ。

僕はベッドに寝転んで「うええーい」と自分でも情けないとわかるダミ声を出した。

「今日はもう、ほんと、いろんなことがありすぎて疲れたよ」

「だろうね、と弟は言った。」

「朝、変な人に会った。魔女さんっていうんだけどさ。あれたぶん幽霊だわ。女神さんとはめはるレベルの」

「知ってる。メールしてやったら」

「帰りは王様の家でこれまた変なことがあった」

「知ってる。写真だろ。言っとくけど家にもねえよ？」

「マジで？」

「マジ」

僕はベッドの上をゴロゴロ転がり、弟の背中をベシリと叩いた。弟は僕の尻を撫でた。

「なんで写真が失くなったのかは、おまえ知ってるの？教えるのは無しね。知ってるか知らないかだけ」

「知らねえ。っていうか、この家にその写真が無いのかどうかも本

当は知らねえ。俺が視たのは、写真を探して見つけられなかったという兄さんの未来だけだから。本当はどこかにあって、ただ兄さんが馬鹿で見つけられなかったのかもしれないし」

「それでも僕は、おまえが嘘をついてて実は見つかるっていう可能性にかけて、探すぜ」

「ああ。たぶん俺が見たの、その未来だわ」

「……ウンコふめ」

「地雷ふめ」

僕は再び弟の背中を叩き、弟は再び僕の尻を撫でた。

「写真のことさあ」

「うん」

「女神さんに聞いたんだ。でも、なんかよくわかんなかった。『お答えできません』ばかりで」

「知ってる。女神って奴は俺には見えねえけど、兄さんの運命が今日、公園で分岐することは随分前から知ってた」

「僕は大切なものを永遠に失うんだってさ」

「それも知ってる。っーか、やっぱそっち選ぶんだ？」

「そりゃそうだろう。だって僕、中二だぜ？『安全だけど何も無い道と、何があるかわからない道、どっちか選べなさい』なんて言われたら、もうその時点で道は決まってるよ」

「ぶっちゃけるけど、苦労するぜ？」

「ああ。やっぱり、それも見えるんだ？」

「まあ、俺と兄さんに関わる未来のことだからな。兄さんが何を失うのか教えてやろうか？」

「んー……」

「『別にいいや』だろ？」

「先に言うなよ」

ヒヒヒ、と弟はいやらしく笑った。

「兄さんはなんっーか、もうちょっとこう、人生ってもんを真剣に考えたほうがいいんじゃないかねえの？いつか死ぬぜ」

「別にー。将来の夢なんか無いし、死ぬのも特段怖くないし、それにいいよとなったら霊能力者で食っていけるもん。王様やみんながいるし、おまえもいるし、死ぬまでそれなりに楽しく生きていくでしょ」

だらしねえなあと弟が言い、うるせーと僕がこたえた。僕はうつぶせになって布団に顔をうずめた。弟の布団は女物の香水の匂いがした。引きこもりの弟に客など来るはずもない。ネット通販で買ったのだろう。色気づきやがって。

「なあ、ホームページ更新してくれた？」

布団に顔をうずめたままこもった声で言う。ああ、と弟がこたえた。

「そーいや見せたいものがあつたんだ。掲示板に来てた変な奴。兄さん絶対びっくりするぜ？」

「なんだよ」顔だけを起こして訊ねる。「荒らし？」

弟は「そういうのじゃない」と言って立ち上がり、マウスをがちがちやり出した。僕は起き上がり、弟の肩にゾンビみたいのにのしかかってディスプレイをのぞいた。重いけど嬉しい、という弟の言葉は無視した。僕は弟が、妙にニヤニヤしているのが気になった。

まだ小学校の低学年の頃のことだ。僕は王様の提案で心霊現象についての情報を集めるページを作った。その頃はまだ自分が見ているものに多少の不安があり、そのことで王様に相談することもあった。相談といっても王様には幽霊が見えない。ぶっちゃけただの愚痴と弱音だった。王様は「物は試しだ」といってホームページ作りを提案した。気長にやっていたればおまえと同じ症状の奴が見つかるかもしれない、とかそんな感じのことを言っていた気がする。結果として、有力な情報が寄せられることはこれまで一度として無かったけれど、作ったページは中学に上がる頃にはそこその人気サイトになっていて、僅かとはいえ広告収入がはいることもあって、今も惰性で更新を続けているのだった。サイトを立ち上げたと言っても、コードがどうこうとか、そういう難しそうな作業をこなしてく

れたのはぜんぶ弟で、無能な僕は「こういうのがいい」「こんなのも欲しい」と横で好き放題指示を出していたに過ぎない。更新だって殆ど弟任せだ。我が弟はこの世で王様の次ぐくらいに優秀なのだった。そんな弟の兄ラブ心を利用し、ことあるごとに無償の協力を要請する僕は筋金入りのクズ野郎なんだろうと、最近はけっこう本気で思っている。それでも生き方を変えないあたりが僕だった。

「あったあった、ここだ」

弟はサイトの目玉である掲示板『心霊体験談』の中でも特に利用者の多い『フリートーク』のログをブラウザに表示し、拡大した。そしてカーソルを動かし、ほらこいつ、と言った。僕は身を乗り出してログを見た。むぎゅああ、という弟の苦しそうな唸りは無視した。『ミスター・ロー』。そう名乗る人物の書き込みは、山形人と福岡人のいかにも慣れ合いっぽい座敷童子に関する語りをぶった切るかたちで投稿されていた。

◎【ミスター・ロー】

2022/07/19 (火) 09:02

――横から失礼します。

――当方、異世界に帰れなくて困っています。

――『大怪獣ギモギモ』『紅月の写本』『重苦の刃』

――これらの言葉に心当たりのある方、書き込みよろしく願います。

――12時頃にもう一度邪魔します。

――どうか私を助けてください。

「なにこれ」

「まだあるぜ」

弟は画面をスクロールさせた。ミスター・ローは、今度は新潟人、愛知人、秋田人が中心となってなまはげの起源に関する談義をしている時に現れた。

◎【ミスター・ロー】

2022／07／19（火） 12..02

――横から失礼します。

――当方、異世界から来た者です。元の世界に帰れなくて困っています。

――『橙のリホ』『赤のテンマ』『青のルフォー』

――これらの言葉に心当たりのある方、書き込みよろしくお願ひします。

――15時頃にもう一度邪魔します。

――どうか私を助けてください。

ミスター・ロー氏の発言はことごとく無視されていた。

「こんなので驚くような人間を僕は知らない」

「ここはまだびっくりポイントじゃねえよ。次だから」

弟は再度、画面をスクロールさせた。次にミスター・ローの書き込みがあったのは今から三十分ほど前、ちょうど僕が王様の家を出たあたりの時刻だった。沖縄人ふたりが複数のIDで、一反木綿についてのそれぞれの主張と、それを絶賛する内容の自演を大量投下し合っているところに、ミスター・ローはまたしても現れた。

◎【ミスター・ロー】

2022／07／19（火） 14..54

――横から失礼します。

――三度目ですが、異世界に帰れなくて困っている者です。

――みなさん私を無視しないでください。

――『ロカニス・ティル・フェイベリオス』『ノギオム・レッド』

『アラタ・ヒルマ』

――これらの言葉に心当たりのある方、書き込みよろしくお願ひします。

——18時頃にもう一度お邪魔します。
——どうか私を助けてください。

「アラタ・ヒルマ！」

思わず大きな声が出る。僕は食い入るようにしてディスプレイの文字を見つめた。それは魔女さんから聞いた、写真の少女の名前だった。全身に鳥肌が立つのを感じた。体が震えた。喜びを予感する震えだった。

「ほうら、びっくりしただろ？ 視えたんだよ」

言って、弟は背にのしかかる僕をペしペし叩いた。僕は弟を解放し、ディスプレイを見つめたまま、どういうことだ、と呟いた。弟は笑い、教えてもいいけどさ、とこたえた。

「兄さん、俺の口から聞きてえの？ 聞きてえなら視てやるけど」
やめろ、と僕は言った。

「要らない。自分で考えたい」

未来の視える弟からは、大事な未来のことは聞きたくない。聞いちゃいけない。あの日からずっとそうだったし、それは今後も変わらない。

弟は僕を振り返り「知ってる」と言って笑った。満面の笑みだった。

「六時にまた来るって言ってんだし、とりあえず、それまで待たらしいんじゃないの？」

「んー、そうするかあ。長いなあ」

「俺も見たいから俺のばそちゃん使っていいぜ」

「うん、ありが——勘違いしないでよね！ 感謝なんかしてないんだから！」

「古いよ。ツンデレ^{ふり}っていつの流行りだ。チョコベリバとかの時代だろ」

「馬鹿、そんなに古くないよ。JKで女子高生とか言ってた時代だ。

おまえはホントに歴史弱いなあ、不登校児。未来だけじゃなく過去も見つめろよ」

「そういう兄さんは生物の成績悪いらしいじゃん。もうちょっと生きてる奴のことも勉強したほうがいいんじゃないの？」

「鼻の穴にカブトムシ刺され」

「尻の穴に俺のカブト――」

「おいそれ以上言ったら戦争だぞ」

弟は仕事をしながら、僕は弟のベッドで携帯をいじりながら、薄暗い部屋で僕たちはそれぞれ六時を待った。

隣の家が犬が鳴いていた。

夏休み突入を一週間後に控えた、涼しい日のことだった。

この日、僕は僕の、運命に出会う。

27. 僕の名前

「こんばんは、いつかのだれか君^{くん}。はじめましては言わないよ」



「来たぞ」

弟の言葉で、僕はベッドから飛び起きた。

「どれ？」

立ち上がり、弟の肩に手をかけてディスプレイをのぞく。弟はほらこれ、と言ってカーソルで小さく丸を描いた。自然と体に力が入る。弟が「痛えよ、肩」と言ったが僕は気にしなかった。ブラウザには待ちわびた謎の人物、自称異世界人ミスター・ローの書き込みがあった。それは心霊現象とは何の関係もない『ヤンヤンつけボーは今も売っているのか』という話題で二十人ほどが盛り上がっている場の空気をこれまたぶった切るかたちでのことだった。ヤンヤンつけボーは明治製菓のロングセラー商品で、幼稚園の頃から弟の大好きなお菓子だ。履歴を見ると、そもそもこの話題をふったのは弟だった。

「仕事してたんじゃないのかよ。なんだ『十年くらい前、棒のかたちしたクッキーにチョコつけて食べるお菓子あったよね』って。白々しい。おまえネットで箱買いしてるじゃんか。だいたいあれ、クッキーじゃなくてクラッカーだろ」

「うるせえな、そんなもん日本だけの決まりじゃねえか。アメリカじゃ全部クッキーだ。んなことより異世界人みろよ」

◎【ミスター・ロー】

2022/07/19 (火) 18:01

——私も今日ヤンヤンつけボーを食べました。とても美味しかったです。

——ところで、私は異世界に帰れなくて困っています。

——私を異世界に送り返してくれる人を探しています。

——『鈴風秋斗』『六乃宮蒼魔』『平野栄欄』

——これらの人物に心当たりのある方、書き込みよろしくお願ひします。

——21時頃にもう一度邪魔します。

——どうか私を助けてください。

「異世界人ヤンヤンつけボーの話に乗っかってきたぞ。異世界人を自称する奴がヤンヤンつけボーって。キャラ付けブレすぎだろ。あんなのどこで買ったんだよ」

「ネット使えるみたいだし通販じゃねえの。もしくは現地民に貰ったとか」

「これ、三つ目、何て読むんだ？ エイランでいいの？ 二つ目はたぶんソウマだよな」

「俺が知るかよ。それよりどうする、話しかけてみる？」

「うん。アラタ・ヒルマを知ってるっていう体^{てい}でレスしてみる」

「了解。んじゃちよい待って、ID切り替えっから」

言っていると、弟はもう一つのディスプレイに何やらごちゃごちゃしたウインドウをひらき、そこで難しそうな作業をはじめた。コンピュータ初級者に手伝えることなどない。僕はその間、おとなしくスレッドの流れを見ていた。ミスター・ローの書き込みには、今回はいくつかのレスポンスがついていた。

◎【ハシビロ@偏平足】

↓【ミスター・ロー】

2022／07／19（火）18：02

——個人名はまずくないですか

——マナー違反だと思います

◎【豆柴17号】

2022／07／19（火）18：02

——こいつまた来てんのかよ

◎【カチカチ山の小松】

↓【ミスター・ロー】

2022／07／19（火）18：02

——おまえくどすぎ

——すべったネタ繰り返し返すとかどういう神経してんの？

◎【夜闇の祭司】

↓【ミスター・ロー】

2022／07／19（火）18：03

——調べてみたが、どの名前もヒットせぬようだ

——というか、異界の者も菓子を食べすのだな（微笑）

◎【桃色パンダ】

2022／07／19（火）18：04

——香ばしいのが二人になったな

——11時とかになるともっと増えるぞ（苦笑）

「完了しましたよっ」と

「できた？」

「ああ。このハンドルなら、本人が見逃しても他の連中が騒いで気付くはず」

「よくわかんないけどありがとう」

「チュー1回でいいぜ」

「地面とやってろ」

弟が立ち上がって場所を譲る。僕は椅子に座り、二つあるキーボードの一方を引き寄せ、意味もなく「あああ」とタイプしては消した。

「おい、早くしないとどっか行っちゃまうかも知れないぜ」

「わかってるよ。いま考えてんの」

やがてして僕は本文を入力し、弟を振り返った。

「どうかな」

「いーんじゃねえの？」

僕は投稿ボタンをクリックした。

◎【西方のクマ@復活】

↓【ミスター・ロー】

2022/07/19（火）18:09

——あなたの発言に興味があります。

——私は『アラタ・ヒルマ』らしき人物に心当たりがあります。

——それは金髪の幼女で間違いありませんか？

「じゃあ、あとは食いつくのを待つだけだな」

僕たちはディスプレイをじっと見つめてその時を待った。少しすると、画面の上から下へと凄まじい数のレスポンスが流れ出した。その殆どは今まで書きこまずに眺めていた名無しの連中だった。スレッドは瞬く間に埋められていった。

◎【匿名】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19 (火) 18..09
——!!!?

——クマじゃん!!!

——クマ入店!!!

◎【匿名】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19 (火) 18..09

——クマさんキター——!

——よろこびの俺!

◎【匿名】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19 (火) 18..09

——西方のクマ入店よろこび!!!

——よろこびの俺!!!!!!

◎【匿名】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19 (火) 18..10

——よろこび!よろこびの俺!

——マジおひさ!てかクマ生きてたのね!

——また予言きかせてくれえええええ!

◎【匿名】

2022/07/19 (火) 18..10

——誰だよクマ死んだとか言ったの

——生きてるじゃねーかシネ

◎【桃色パンダ】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19（火） 18..10

——クマ入店よろこびの俺

——つかクマが異世界（笑）に反応したことにおどろきの俺

——ようじょ愛しいですとてもすげく

◎【匿名】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19（火） 18..11

——クマああああああああああ！！！！！！

◎【夜闇の祭司】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19（火） 18..11

——ほう・・・やはり、やはり生きていたか

——とりあえずは久しぶり、とだけ言っておこう

——多くを語るのは好まぬのでな

「うわぁ、なにこれ。みんなすごい食いついてきた」

「まあ、俺が半年前まで使ってたコテハンだから」

「よくわかんないけど、おまえはネットだと人気者ってこと？」

「その認識でも別に間違いじゃない」

含みのある言い方だった。こいつ、予知を使って何かやらかったんじゃないだろうな。

「にしても夜闇の祭司さん本当ブレないな」

「そいつ朝も昼もいるぜ。俺から見てもいつ寝てんだか不思議なレベル。『フリートーク』なんて下手すりゃ書き込みの10パー以上夜闇の祭司なんじゃねえの？」

掲示板は、閲覧はともかく、書き込みはログイン制だから、なり

すましは実質不可能だ。十パーセントが本当だとすれば恐ろしい廃人だ。

固定ハンドル【夜闇の祭司】さんはサイトを立ち上げた最初期からの常連で、文章は当時からこんな感じだった。この人、心が成長して、自分のキャラ付けを恥ずかしく思うようになったりはしなかったんだろうか？それとも当時から既に大人だったとか？僕なんか体に合わないダボダボのパーカーを着て歩くことが最高に恰好いいと思っていた小五の自分を、可能なら今からでもぶっ飛ばしに行きたいくらいなのに。あの頃のことを思い出すだけで背中が痒くなつて、顔から火が出そうになる。

あ、と弟が声を上げた。僕はミスター・ローを見逃したかと思いいえ、どこ」と聞いた。弟は、いやそうじゃない、と言った。

「今日これから宅急便くるんだったなーって。いま思い出して」

「なんだよ。またなんか要らないもの買ったの？セレブが」

「要らなくねえよ。必要なんだって」

僕は、どうだか、と肩をすくめてみせた。

弟はネット通販を頻繁に利用する。それ自体は別にたいしたことじゃない。大きな買い物と言えば今はネットが主流だ。僕だってよくネットで本を買う。けれど弟はそういうのとは違う。弟の買うものは色々おかしいのだ。ヤンヤンつけボーを箱買いするくらいなら『ああ、そんなに好きなのか』で納得できる。キャラメルの大入りの金も同じ理由で納得できる。何万円もするラジコンだって自分の金で買えと言われれば断固として拒否するけれど、弟が買う分にはまだ理解はできる。でも、そうじゃない物——例えば懐中電灯五十本とか、ノート三百冊とか、鉛筆五百ダースとか、そんなのはやっぱり、業者じゃあるまいし、どう考えたっておかしい。引きこもって家から出ず、学校にも行かない弟が文房具を、しかもそんなに大量に、いったい何に使うというのか。懐中電灯だって、部屋に見当たらないということはたぶん、使われることなく押入れにしまわれているのだろう。未来が視える奴のことだから、これらの買い物が無

意味ということはないのだろうけれど、聞いても弟は「兄さんには関係ない」と言って、僕には教えてくれないのだった。

弟は左手で右目をおさえるいつもの予知のポーズをとって、やがて「あと三十秒で来るな」と呟いた。

「俺、ちよつと下いつてくるわ」

「いつてら」

弟が部屋を出ていく。階段を降りるトントンという音がし、間もなくチャイムが鳴った。僕はディスプレイを黙って見つめる。一分が経ち、二分が経ち、けれどもミスター・ローは現れない。

不意に弟の携帯がふるえた。振動が長い。電話だ。渡してやろうと携帯に触れた瞬間、ダダダッ、と大急ぎで階段をのぼってくる音が響いた。すぐに弟がドアを開けて現れ、そして僕を見、携帯を見た。

「どうした、そんなに慌てて。ああ、電話がかかってくる未来、視えたとか？ まだ切れてないよ。ほれ」

僕は携帯を放り渡した。弟はそれをキャッチし、そして微妙な表情で「見た？」と僕に訊ねた。なにが、と僕は聞き返した。

「電話。誰から来たか」

「いや、見てない」

「本当に見てねえな？」

「見てないってば。おまえが誰と電話しようが興味ないもの。それより、さっさと出てやれよ。切れちゃうじゃん」

弟はまだ何か言いたげな顔をしていたが、やがて「ああ」とこたえて電話に出た。盗み聞きしていると思われるのも嫌なので、僕はすぐにディスプレイに向き直った。携帯で話す弟の声は小声で、よく聞こえなかった。

弟がよろしくない大人とよろしくないお付き合いをしていることは知っていた。自室で一人にいるときに、弟の部屋から電話の声が聞こえてくることがあるのだ。『盗む』とか『殺す』とか、そんな言葉を口にする弟の声が。おぼけが見えるのと未来が視えるのとで

は天と地ほども価値が違う。予知なんていうのは、ふるいようによってはキリストにさえなれる、外れた力だ。そんなものを持っていて使わないという選択肢は、普通の人間の頭には存在しない。弟が未来予知を用いて、僕にも内緒で何かをしていることについて、だから僕は、責めるつもりも問いただすつもりも特にないのだった。自分だって教授にさんざん人殺しをさせているわけだから、そんな僕がどの面下げてという部分もあるのだけれど。

やがて五分もせずに通話を終えた弟は、再び部屋を出て行き、みかんなら8キロ箱というサイズのダンボールを四箱持ってヨタヨタと戻ってきた。その時にもまだミスター・ローの書き込みはなかった。

弟はどっこい醤油ラーメン、と言ってベッドの上にダンボールを置いた。

「なにそれ。今度はどんなへんてこ買ったんさ」

「電池とか薬品とか、まあ色々」

「何に使うんだ、そんなの」

「秘密。兄さんには関係ねえよ」

「中、見ていい？」

「いいけど、別に面白いもんなんかねえよ？つーか、んなことより異世界人はどうしたんだよ。まだ返事来ねえの？」

「まださねえ。騒いでるのは部外者ばかり」

「心当たりのある方は書き込みヨロシク、とか言つといて、書いてやったら返事なしかよ。あの野郎、何やってんだよ。ふざけやがって」

「忙しいんじゃないの。宇宙船の修理とか」

ダンボールのテープをはがしながら投げやりに返事をする。「宇宙人と異世界人は別物だろ」という弟の言葉を無視して、僕は一つ箱を開けていった。中身は弟の言ったとおり、ありふれた、つまらない、面白みのない物たちだったが、明らかにおかしい物があった。

「なあ弟」

「なんだよ兄」

「大量の電池はいいよ。海外から取り寄せたっぽい薬もまあいい。大量の造花も、大量の下着もまだいい。でも、これは何？ソフィダのロリエだの……生理用品なんか、それもこんなにたくさん、ほんとに使うんだ。僕にはおまえがわからないよ」

「ああ、それね。いや俺、実は女なんだわ」

「マジで」

「マジ」

「ふうん」と僕は言った。「じゃあしょうがない、僕も女で」

「マジかよ」

「マジだよ」

弟の、これ以上は踏み込むという合図。それにのっかる僕。いつもの茶番だった。僕らはいつも近くて遠い。ダンボール箱の蓋を閉じ、ぱそ子ちゃん（式号機）の前へと戻る。スレッドは今も消費され続けている。ミスター・ローからの返事の書き込みはまだなかった。

「来ないなあ、異世界人」

「あと11分で父さん帰ってくるぜ。そしたらすぐ飯だ」

「アラタ・ヒルマ……偶然の一致とは思えないんだけどなあ」

もしかして、僕の書き方が悪かったのだろうか。アラタ・ヒルマらしき人物に心当たりがある、なんていう不確実な表現じゃなく、はつきりと『知っている』と書いた方が良かったんじゃないのか？もう一度書き込むべきか？僕の中で、弟に聞いてみたいという気持ちガムクムクと膨れ上がった。そいつを僕はすぐに叩き潰した。

結局、夕食の時間になってもミスター・ローは現れなかった。



夕食どき、父さんの会社から発売前の商品が盗まれた、という話に相槌を打つ。母さんはいつもどおりにこにこ笑って、僕はフウンとかへエとか言いながら話を聞いていた。とりわけ熱心に聞いているのは弟で、奴は僕の隣で口にもものを入れたままウンウン頷いていた。

「それって、大事件なんじゃないの？」

両親にだけ使う、普段のそれより幾分やわらかい口調で弟が言う。そうなんだよ、と父さんはこたえた。

「それなのに幹部連中、警察には届けないときたもんだ。頭を下げる営業の連中が可哀想でなあ。怒鳴られに行くのは何も知らない若い子だろうに。辞めなきゃいいんだが」

我が家の家長が勤めているのは『アマネ屋』というそんなに大きくない玩具会社で、父さんはその開発部で働いている。今回ぬすまれたのは昔の特撮の怪獣人形——いわゆるソフビ人形というやつで、復刻版・百体限定の、しかも既に買い手の決まったものだったらしい。

よくわかんないんだけどさ、と僕は言った。

「なんで警察に言わないの？ 取り返してもらえるかもしれないじゃん」

「まあ、取り返してもらったところで、一度盗まれたものをそのまま売るわけにもいかないからなあ」

父さんが言う。ふうん、と僕はこたえた。壊れてないなら別にいいような気がするけれど、そのあたりは気持ちの問題なんだろうか。父さんは続けた。

「それに警察を、倉庫とはいえ社内に入れるのは気持ちのいいことじゃない。しかしなあ、それでもやっぱり警察には届け出るべきだったって、父さんは思うよ。警察に言っておけば納期が遅れることへの言い訳も立つんだから、そうしたらお客さんだって、納得はできなくても理解はしてくれるだろう。そのあたり、上の連中はわか

ってないんだよなあ」

「保険は？ ああいうのって警察に被害届を出さないと、下りないんじゃない？」

弟が訊ねる。父さんは苦笑いして首を横に振った。

「ソフビなんかがあった新しい方の倉庫は、保険に入っていないんだ」
「あちゃー」

「本当、あちゃーだ。笑えないよ」

僕は、それって内部犯なんじゃ、と思ったが黙っていた。

盗まれた人形のモデルとなった怪獣はそれほど人気のあったキャラクターではなく、採算のために、注文が百件に達したら作りますとホームページで告知していたものだったらしい。一体三万五千円もするその人形の発売が決定されたのは告知から一年後。つまり注文した人たちは一年も待たされたことになる。その結果がこの有り様では、文句の一つも言ってやりたくないなる気持ちに僕にもわかった。

おかわりは？ と母さんが言う。半分でいいよ、と言って弟が茶碗を差し出す。

会話に間隙が生まれる。救急車のサイレンが遠くに聞こえた。テレビでは、三年飲み続ければ永久に髪の色が戻らないという『飲む染髪剤』について、頭の悪そうなコメンテーターたちが、副作用による人体への悪影響を焦点に、という体で『徹底討論』とは名ばかりのじゃれ合いを演じていた。

「犯人の居場所、視てあげようか？」

唐突に弟が言った。邪気のない、おもちゃを貰った幼児のような笑みを浮かべて。

僕は溜め息をついた。教授が弟を見た。母さんはフフフと笑い、父さんは苦笑した。

「まったくこいつときたら……これで何回目だ？ 親を試すんじゃない。言っただろ。父さんは、おまえの予知能力に頼る気なんか

無いってな」

母さんが弟に茶碗を差し出す。僕はエビフライの尻尾を弟の皿に載せる。父さんはトマトにマヨネーズをかける。何事もなかったように。なにも思っていないように。ああ、と弟が言った。そうしてクシヤリと髪を掻き、「知ってる」と切なげに笑った。

僕の霊視を信じない両親は、けれど弟の未来視のことは信じている。言ったことがそのまま真実になるとあっては、オカルト否定派の両親も信じないわけにはいかなかった。霊能力と違い、予知能力は形としてあまりにわかりやす過ぎたのだ。

西熊家の人間は、本人が望まずして手に入れたものを賛美しない。例えば、父さんも母さんも人の容姿に頓着しない。服のセンスや鍛えた体を褒めることはあっても、顔を褒めることは滅多にない。あったとしても髪がだらしないとか、化粧が上手だとか、その程度だ。逆にどんなに姿の醜い人をも二人は嫌わない。打ち明けると、自惚れを差し引いても僕と弟はかなり整った顔をしている。けれど、そのことを両親に褒められたことは過去一度もなかった。人間の価値は努力の総量で決まる――父さんと母さんはそう考えているのだ。正直に言うと、僕はその考えが必ずしも正しいとは思わないけれど、そんな考えを持った両親の間に生まれたことは幸運だったと思う。だってそんな考えを持っていたからこそ、父さんと母さんは僕の味方でいてくれたし、弟の予知能力を知った時も、それに微塵も価値を見出さなかったのだから。むしろ二人は、その力によって家族の絆が壊れる可能性を恐れたほどだ。

「家族は協力し合うべきだが、一方的に頼られていいのは大黒柱だけだと父さんは思う。息子に頼って成り立つ家族なんてクソ食らえだ。父さんはおまえの予言には頼らんぞ。親は息子に頼ったりなんかしない。正直、年をとっても子どもに介護されるのは、父さん御免だ。この家の大将は父さんだ。母さんも、頼るなら父さんをあてにするように。いいな」

「言われなくても、私が頼るのはお父さんだけよ。それよりもお父

さん、子どもの前でクソ食らえだなんて言うのはやめてね」

「そうだな。ごめんなさいっ！」

そんなやり取りがあったのが、僕がまだ小学校にも上がっていない頃、今の家に引っ越してくるより前のことだった。それから今まで、両親が弟の予言を頼ったことは、一度しかない。僕が僕でなくなったあの出来事、一度きりしか。

「ホント、うちの家族は欲が無いねえ」

弟のそんな言葉に、僕らは誰も、なにも言い返さなかった。

言葉にしなくても伝わる思いがあることを僕らは知っていた。



「うおお、来てるじゃん！タイミングよすぎ！」

夕食の片付けを終え弟の部屋に戻った僕は、点けっぱなしのPCを見て思わず大きな声を上げてしまった。その声に「どうしたー、ゴキブリかー？」と一階で父さんが反応する。僕は慌てて「なんでもない、こっちの話！」と返事をした。

どれどれ、と言い僕の肩越しにディスプレイのぞく弟。ブラウザの中央、有象無象で賑わう『フリートーク』には、今からほんの2分前にミスター・ローの書き込みがあったことが強調文字で表示されていた。

◎【ミスター・ロー】

↓【西方のクマ@復活】

2022/07/19（火）19..18

——ご返事の遅れたことをお詫びします。

——あなたを本物であると信じます。

——もしもあなたが異世界への帰り方を知っているなら、

——或いは知っている方をご存知なら、東の中立地帯へ来てください。

——お金はあります。

——どうか私を助けて下さい。

——九時にまた来ると言いましたが、今日の書き込みはこれで最後になります。

——私は赤き魔の社で一週間あなたを待ちます。

「……赤き魔のシャ？」

「ヤシロだ、バカ」

「知ってたよ、バカ」

暗号か何かだろうか？僕は首を傾げた。来てください、と言っているのだから『東の中立地帯』と『赤き魔の社』は同じ場所なのだろう。掲示板にはミスター・ローへの「意味わかんねえよ」「死ね」などの書き込みが相次いで投稿されていた。ミスター・ローに質問はできない。そう思った。ミスター・ローは僕を『本物』と勘違いしている。『本物』というのはおそらく関係者のことだろう。ここで僕が質問をしてしまえば、そうではないとバレてしまう。僕には未来を視る力なんてないけれど、なんとなくそんな気がした。僕はどうしてもミスター・ローに会いたいのだ。疑われるわけにはいかなかった。

女神さんは言った。写真の女の子を探す道を選べば、僕は彼女を思い出し、そしてこの夏の終わり、彼女の生まれる世界で目を覚ますだろうと。なんとなくだけけれど、ミスター・ローの言う『異世界』というのは、女神さんの言っていた『組織』の隠語なのだと思う。田中ニユウちゃん（偽名）と、その家族（偽装）の所属している組織を表す隠語が『異世界』で、『帰れない』は組織への勧誘か何かを表す言葉——掲示板へ書き込まれた数々の謎の言葉は暗号で、それに気付いた者を組織に迎える、或いはそのための試験をする、なんていうのはどうだろう？——これなら女神さんの言っていたこと

に一応の説明がつくように思う。『少女の生まれる世界で目を覚ます』というのは、つまり僕が彼女のいる組織で働くことになる、という意味なのではないだろうか？そして今ミスター・ローが書き込んだ『赤き魔の社』というのは、そこへ入るための試験会場のような所なのではないだろうか？

まったくの思い違いかもしれない——けれど僕はミスター・ローと、そして写真の女の子が僕の運命を大きく動かす人物なのだということを半ば確信していた。

「ここでヒントその1」

出し抜けに弟が言った。

「『赤き魔の社』はこの近くにある、兄さんも行ったことのある場所です」

「おいっ、僕は教えてほしいなんて——」

「ああ、言ってるねえよ。わかってる。でもこればかりは俺が俺のために言わなくちゃいけねえんだ。そうしないと後々困るのは俺だから」

「どういう意味だ」

「聞きてえの？」

ニヤニヤといやらしく笑う弟。僕は吐き捨てるように「要らない」とこたえた。知ってる、と弟は笑った。僕は考えた。赤き魔の社——そういう名前の場所がこの近くにあるのだろうか。それも僕を知っている場所が。いや、そんな場所は知らない。おそらく名前は暗号なのだ。

「赤き魔の社……赤き魔の社……」

呟きながら、僕は頭をひねる。弟は相変わらずニヤけた顔で僕を見ていた。

「赤き魔の社。赤き、魔の、やしろ」

「ヒントその2。漢字だけを並べて考えましょう。おい睨むなよ。しょうがねえんだって」

「わかってるよ。漢字な、漢字……赤、魔、社。アカ、マ、ヤシロ。」

アカマヤシロ」

「ヤシロは『シャ』なんだろ」

「ヤシロは、シャ……アカマシャ……アカマ……あかま亜鎌神社か！」

「御名答」言って、弟はベッドにごろんと横になった。「大正解で、どうすんだよ？行くの？」

「行くよ。いますぐ行く」

「そ。んじゃ頑張って。別に『危険は無い』から」

「……………」

ひとこと言ってやろうと思ったが、面倒になってやめた。

僕は掲示板に『今から向かいます』と書き込んで弟の部屋を後にした。

「――あれっ？」

自室に戻り、机の引き出しを確認した僕は首を傾げた。携帯が無いのだ。たしかに入れたはずなのに、引き出しの中は空っぽだった。いや待て。僕はたしか、サングラスも一緒にここへ入れなかったか？「思い違いかな？いや、でも……」

サングラスは机の上に、はじめからそうだったように置かれている。ぶつぶつと独り言をいう僕を、教授が横で黙って見つめていた。制服のポケットにも、鞆の中にも、やはり僕の携帯電話は無かった。「なあ、僕の携帯知らない？」

弟の部屋に戻り、訊ねる。PCをつけっぱなしでベッドに寝転んでいた弟は、顔だけを上げて「吉嶋くんきちしまちに忘れて来たんじゃないねーのお？」とやる気の無い声を上げた。

「そうなのかなあ。……おっかしいな、ぜったい引き出しに入れたと思うんだけど」

「探しものなんて、探してる内は見つからねえよ。そういうふうにできてんだ。エアコンやテレビのリモコンがいい例だろ」

「そうかもしれないけど、携帯はさ、無いと困るだろ」

「問題ねえよ。すぐに戻ってくるから」

「おまえ——」

——何か知っているのか？ そう言おうとして、けれどやめた。弟が思わせぶりなことを言うのはいつものことだ。僕は頭をがしがし搔いた。

「わかったよ。じゃあ、行ってくる」

「いつてらっしゃいまし。父さんたち晩酌やってるから、今なら氣付かれねえで出れるぜ。俺も焼き鳥もらってこようかな」

「焼き鳥なんて、あんなの僕には何がいいんだかわかんないけどなあ。まあ、バレたら言い訳よろしく」

「ああ、そうそう。それと、異世界人からの返事。今度は早かったぜ。『キツネの隣でお待ちしております』だよ」

亜鎌神社には、境内に入ってすぐのところに石狐がある。弟の言ったとおり、どうやらミスター・ローがいるのは亜鎌神社で間違いないようだった。

今にも心臓が破裂しそうなのを、僕の二つの肺が感じていた。僕はこっそり家を出て、亜鎌神社へと向かった。



「あれ、ソウリじゃん。どっか行くのか？」

亜鎌神社へ向かう道、商店街の入り口で王様に会った。

「ちようどよかった。ねえ、僕きよう、王様の家に携帯わすれていなかった？」

「携帯？ いや、無かったぞ。あったら氣付くと思う。なに、おまえ今から探しにいくの？」

「ああ、いや。そうじゃないんだ」

僕は慌てて手を振った。女神さんとの約束だ。正確には、約束なんてしていないのだけれど、これ以上あの人の心労を増やしたくな

い。今から向かう場所にいる誰かが写真の子と関係しているのだとすれば、王様には話せない。僕は曖昧に笑った。

「兄さんに頼まれて、買い物に行く所なんだ。携帯はたぶん、部屋のどこか、ベッドの下にでも落ちてると思うよ。探しものって、探してる内は見つからないじゃん」

エアコンやテレビのリモコンとかさ、と弟の台詞を丸パクリする。ふうん、と王様は言った。

「じゃあ、十時ぴったりに電話してやるよ。そんときにまだ見つかってなかったらそれで気付くかも知れねえし」

「助かるよ、ベッドの下からポイントウビーワイルドが鳴るのを待ってる。ところで王様はなんでこんなところにいるの？」

「ああ、ちよっと店長に聞きたいことがあってね。まあ、それはもう終わったんだ。今は帰るところ」

王様は制服のままでった。僕と別れてすぐタケ☆ハラに行ったのだろうか。王様と店長はあまり仲が良くない。僕らが二年に上がったばかりの頃、《画家》がしつこくナンパされたとかで、王様が焼酎バー《タケ☆ハラ》まで話をつけにいったのだ。そこで何がおこなわれたのか僕にはわからないけれど、その一件以降、店長は王様を露骨に避けるようになった。そんな店長の店にわざわざ行ったりするのだから、なにかよほど大事な用事だったのだろう。いつもならそれについて詳しく訊ねてるところだが、この時の僕は全く気にならなかった。今は一秒でも早くミスター・ローに会いたかった。そして名も知らぬ初恋の人のヒントを手に入れたかった。

「そういえば、写真の件だけど」

「っ……なんだよ、まだ言ってるの？」

僕は身構えた。

「いや。親父に聞いてみたんだけど、知らねえって言ってたよ。やっぱ俺の勘違いだったんだな」

王様と別れ、僕は再び亜鎌神社へ向かって自転車を走らせた。

その男は、参道の長い石段を越えた先、石狐を背にして立っていた。

すらりと背の高い、痩せた男だった。彼は葬式帰りのような真っ黒のスーツを着て、足元を見つめていた。その隣に、見たことのある女がいた。魔女さんだった。石段を登って現れた僕に、魔女さんは男よりも早く気付いた。気付いたというより、まるで最初から僕の現れるタイミングを知っていたかのように、彼女はまっすぐ、現れた僕の顔を見つめていた。魔女さんは朝とは打って変わって肩がむき出しになった真っ黒のドレスを来ていた。どうして彼女がここにいるのか？そう考えるのと同時に、お金を受け取り、探すなど言われた女の子を探している僕は後ろめたい気持ちになった。魔女さんは鋭く冷えた声で言った。

「サングラスを外さないでください」

一瞬、誰の声かわからなかった。しかし口を動かしたのはまぎれもなく魔女さんだ。見れば彼女の顔には眼鏡が無かった。その顔は朝の楽しいなものとはまるで違う、感情のあたたかさの一切が無い、亡霊のような表情だった。

僕は言われたとおりサングラスをつけたまま鳥居をくぐった。男がゆっくりと顔を上げる。息が詰まった。ここにいたくない。あの男の顔を見たくない。あの男に顔を見られたくない。あの男と目を合わせたくない。そんな気持ち胸の奥から沸き上がって僕の足を止めた。だが遅かった。男が完全に顔を上げた。男の目が僕をとらえた。僕もまた男の顔を見た。二人の目が合った――その瞬間、男は信じられないものを見たように、口をぽかんと開け、目を丸くした。

「なんで……おまえがここに……」

低い声で男が言った。

「いや、そうか、あの時の……そういうことか。僕はこれを経験していたんだ。……あの野郎、騙しやがった。つまり僕は、あのとき

の僕を演じなければいけない……クソッ。どうしたらいい。二十年も前のことなんか覚えてないぞ……」

ぶつぶつと意味のわからないことを呟く男——おそらく彼がミスター・ローなのだろう——から目を逸らして、僕は魔女さんに語りかけた。

「すみません、魔女さん。お金はお返しします」

言外に、写真の女の子を探していることを告げる。ここに魔女さんがいるのでは、僕が謎の組織『異世界』とやらを知らないことは隠せそうにない。そう思っただけの発言だった。しかし魔女さんは「いえ」と冷たい声で言った。

「その必要はありません。あれはいま眠っています。あれに代わり、あなたに渡した現金を、そのまま贈与することを私が言明します」朝とはまるで別人のような魔女さんの声に、話し方に、服装に、そして表情に僕は薄ら寒いものを感じた。

眠っている……？それは、どういう——

訊ねようとし、けれどやめる。わかりました、と僕は小さくこたえた。どうして聞かなかったのかは自分でもわからなかった。聞かなかったのではなく、聞けなかった。そんな気持ちが胸に残った。

「ええと——」

男が言った。僕はサングラス越しに、目を細めて男を見つめた。

石狐の蝋燭に照らされた男の顔は疲れて見えた。少しだけ顔が——顔のどこがと言われてもはっきりとはわからないのだけれど、雰囲気は父さんに似ている気がした。父さんよりは若いように見える。

「——ああ、参ったな。どう言えばいいのか。まさか、キミが来るとは、思ってもいなかったものだから」

まるで僕を知っているかのような言いようだった。文化祭前、台本を暗記したばかりの学生のように一語一語、区切って言う喋り方がひどく不気味だった。僕は訊ねた。

「確認しますが、おじさんが【ミスター・ロー】ですか？僕は【西方のクマ】です」

「おじさん、ねえ。確かにそのとおりだが、キミにだけは言われたくなかったなあ」

そう言って頭を掻くミスター・ロー。根拠もなく、本当になんとか、この人はイヤな大人だ、と思った。僕が一番きらいなタイプの、何の努力もせずに人の上に立って、下の人間を馬鹿にする大人だと。

「自己紹介をしよう」ミスター・ローが言った。「【西方のクマ】だの【ミスター・ロー】だの、そんな名前じゃあ呼びづらくて仕方がない。僕のこととは田中と呼んでくれ。キミのことは知っているつもりだ。こんばんは、いつかのだれか君^{くん}。はじめましては言わないよ」

僕を知っているということよりも、田中というその苗字に、僕はふるえた。田中ニューウー——そんな言葉が僕の頭をよぎった。この人が写真の女の子の、お父さんを演じていた人なのだろうか。だとすれば、魔女さんはお姉さん？

「僕は——」

僕は迷った。僕を知っているという初対面の人に、本名を名乗るべきかどうか。僕は男、田中さんから目を逸した。そしてドレスの女と目が合った。彼女は氷のように冷えた目をしていた。駄目だ、と理解する。僕はもう、魔女さんに名前を教えてしまっている。僕は言った。

「僕の名前は、西熊勇です」

「違うね」

田中さんが言った。

「なにが——」

僕は反射的にとぼけた。しかしそれを遮って田中さんが「違う」と繰り返した。

「それはキミの名前じゃないだろう？」

彼は言った。心臓がうるさくなり、顔から血が引いていくのを僕は感じた。石狐の足元の蠟燭が田中さんの顔をあやしく照らす。彼

は流し目で僕を見て、そしてこの世で四人しか知らないはずの、西熊家の秘密を口にしたのだった。

「キミは勇君じゃない。そっちは弟の名前だろう？ なあ、太郎君」



昔々あるところに、それはそれは仲のよい少年少女がいた。

昔というのは1995年で、あるところは兵庫県神戸市、少年少女は当時十二歳の、のちに僕と弟の両親になる二人だった。

二人の家は家族同士も仲が良く、その日は少年の家に少女とその家族が泊まり、若い二人の将来を肴にした小さな飲み会がおこなわれていた。

それが起こったのは朝早くのことだった。

兵庫県南部地震。

のちに阪神・淡路大震災と呼ばれる死の揺れは少年の家を瞬く間に瓦礫へと変え、少女の両親を死者にした。それは特別な行為の結果としての死ではなかった。子どもの身代わりとなって死んだのでなければ、見ず知らずの誰かを助けるために死地へと飛び込んだわけでもない。救いの無い、ただの圧死だった。

両親だった肉塊を見つめながら、家族を失った少女は少年に言った。

「ねえ。もしもわたしたちに子どもができたら、男の子ならお父さんの、女の子ならお母さんの名前をつけてあげたいの。男の子なら勇太郎、女の子なら華子^{はなこ}って……」

十三年後、かつて少年少女だった二人の間に生まれたのは一卵性双生児だった。男の双子が生まれると判明した時には既に、彼らは子どもたちに与える名を決め終えていた。少女の父、勇太郎の名を

割って、兄には太郎、弟には勇という名を。

数多くの小さな問題はあったが、子どもたちは元気に育った。兄の太郎がサングラスを手放せないことも、弟の勇が未来を視ることも、二人にとってはただの個性——些細な問題だった。

大きな問題が起こったのは、東京から今の家へと引っ越すことが決まった、その翌日のことだった。その日は朝からずっと、勇が太郎にくっついて離れようとしなかった。もともと互いの他に遊び相手がいなかったため、仲の良い兄弟ではあったが、それでも太郎がトイレに行くだけで「こわい」「あぶない」と泣きじゃくるのは異常なことだった。勇は何度も何度も太郎に言った。おれと名前を交換して、自分の名前を気に入っていた太郎は勿論そんなのイヤだと突っぱねた。

二人は勇に訊ねた。どうして今日はお兄ちゃんにべったりなの？ どうして名前を取り替えっこしたいの？ なにがそんなにこわくてあぶないの？ 勇は泣きながら答えた。

「だって、兄ちゃん、死ぬんだもん。そういう未来、みえたんだもん」

勇の話によると、どんなにたくさん未来の世界を覗いても、その全てで太郎は十歳まで生きられないとのことだった。

「おれ、兄ちゃん死ぬの、イヤなんだもん」

これには二人も慌てた。息子の未来予知になど頼らないつもりでいた二人だったが、自分たちの子どもが死ぬとあってはそんなプライドも障子紙同然だった。

「どうしたら太郎は助かるの？ お願い、教えて」

勇はこたえた。太郎を連れ去ろうとしている『死』は強力で、西熊太郎が西熊太郎である限り死の運命からは逃れられないのだと。

「でも、おれが兄ちゃんになったら大丈夫。今ならまだおれと兄ちゃん、顔とか声とかぜんぶおんなじだから、いれかわってもごまか

せる。おれなら未来をみて、あぶないところには行かないようにできるから、死なないもん」

勇の言葉の真偽は勇本人にしかわからない。けれど勇に未来が視えるのは本当だ。たとえ勇が嘘をついていたとしても、子どもたちを愛する二人は勇の言葉に従うほかなかった。

かくして勇と太郎は入れ替わった。一卵性の双子だった彼らは、当時はそれこそドッペルゲンガーのように『同じ』だったから、実家の両親たちでさえ孫の入れ替わりに気付かなかった。

太郎は勇になり、勇は太郎を演じた。

入れ替わりを知る人間を増やさないように、そしていつ運命がやってきても逃げられるように、かつて勇だった太郎は引っ越した後もなるべく家を出ないようになり、学校にも通わなかった。

さながらガタカのように、兄弟は互いになりました。

どちらがヴィンセントでどちらがジェロームだったのかは本人たちにもわからない。

それは誰も知らない、知らないはずの、西熊家の秘密だった。



「……そんなことまで知ってるんですね」

知っているとも、とミスター・ロー、田中さんはこたえた。

「そうです。僕は兄の太郎です」

「それで。キミはここへ何をしに来たのかな、太郎君」

太郎——かつて僕のものだった、大好きな名前。

「あなたに会うために来ました」

「そう。キミは僕に会うためにここへやって来た。僕に会って記憶を取り戻すために——そうだね？」

心を覗いたように田中さんが言う。はい、と僕は頷いた。

「そのとおりです」

「ふむ、素直でよろしい。安心したまえ。なにも心を読んだわけじゃない」

「……。僕は異世界のことなんて知りません。あなたに、僕の運命を変えてもらうためにここへ来ました」

「運命か。そんなものを信じていた頃もあったな。生まれ、出会い、別れ、愛し合うことに理由などは必要ないのだと。全ての現象は最初から、大きななにかによって予め定められているのだと。世界は物語で、僕らはそれぞれが主人公なのだ——ああ、そういえば昔の僕は、そんなふうに使っていた気がする。いったい、いつから——」

「シズマ様、それ以上は」

魔女さんが制止をかける。田中さんは「ああ、すまない」とこたえた。

シズマ——田中静馬？それが彼の、ミスター・ローの本当の名前なのだろうか？

キミは、と田中さんが言った。

「キミは今、自分の未来をあまりに軽く考えている」

風が吹き、足に砂粒があたった。

「記憶を失い、それを取り戻すなんて物語の主人公みたいだとワクワクしてはいないかね？弟の予言と女神の言葉を無条件に信じて、危険などありはしないと高たかを括くくってはいないか？ノーとは言えないはずだ。現にキミは今、彼らが本当に正しいのかどうか確かめるすべが無いのいいことに、根拠のない言葉を鵜呑みにして、まともな人間ならば決してしないような軽率な行動をとっている。夜の八時に、ネットで一度短いやりとりをただけの男に会うために、こうして人気のない神社を訪れている」

ジャリ、と砂を鳴らし、田中さんは一歩前に踏み出した。

なぜ弟のことを知っているのか。なぜ女神さんのことを知っているのか。わからない、僕にはわからない。僕の中にある臆病者の僕

が必死に警鐘を鳴らす。僕はいつでもサングラスを外せるように右手を緊張させた。

「運命を変えてほしいと言ったね」

田中さんはゆっくりと僕に向かって歩いてくる。魔女さんは石狐の横にじつと立って動かない。僕は足に力を入れて「はい」とこたえた。

「運命を変えられるのは自分だけだ。誰も他人の運命に干渉することとはできない」

僕は黙って頷く。一步、また一步と、田中さんは近づいてくる。

「人間は生きるべき誰かを殺すことはできないし、死ぬべき誰かを生かすこともできない。自分が変えられるのは自分だけなんだ。――が、キミは運がいい。この世で僕だけは、キミに、運命を『見せる』ことができる」

田中さんはいよいよ手を伸ばせば届く位置まで僕に近づき、そして止まった。僕はぐくりと唾を飲み込んだ。どこかでふくろうに似た声の鳥が鳴いた。

「キミがこれから辿る運命の一端、『痛み』の記憶を見せてあげよう。その上で、それでもニュウを探す道を選ぶというのなら、その時は弟にその旨を伝えなさい。彼はキミにビー玉を譲り渡すだろう。そのビー玉を貰ったとき、キミは奪われた全てのものを思い出すだろう。そしてその瞬間、運命は動き、キミの未来は確定されてしまうんだ」

田中さんは『ニュウ』とはっきり言った。写真の女の子の名前はニュウでいいんだ。そしてビー玉。僕は弟のビー玉のことを知っている。それはおそらく、かつて弟が誘拐され戻ってきたときに握りしめていた、僕が今まで一度も触らせてもらったことのない、あのビー玉のことなのだろう。このひとは、いったいなぜ、そんなことまで――

「さあ」

疑問を遮るように田中さんが手を差し出した。

「この手を掴みなさい。運命を見せてあげよう。予言は所詮、言葉に過ぎない。言葉では決して伝わらない痛みに触れ、それでも運命を変えたいと願うことができるか――できると信じるなら、この手を掴みなさい」

あなたも、と僕は言った。知らず、声は震えていた。

「田中さんも超能力を持っているんですね。それは人の過去を視て、そして人に未来を見せる力なんだ」

「どうかな。だが、昔はもっと強い力を持っていたよ」

「どんな力ですか」

「手を触れずに人を殺す力。キミの霊能力と同じくらい強い力さ」
やっぱり、この人は僕のことを知っているんだ。

僕は胸いっぱい酸素を吸い、ゆっくりと息を吐いた。きっと、これは組織に入るための試験なんだ。僕はいま試されている。未来に何が見えても逃げないような人材を、田中さんたちの組織は欲しているのだろう。そこにはきっと、僕と同じように不思議な力を持った人たちがいるのだろう。そしてその中の一人が僕の初恋の女の子なのだ。

僕は魔女さんに目をやった。魔女さんはやはり今朝とは違う人のように、笑いもせず、頷きもせず、ただ冷たい目で僕を見つめ返した。続けて僕は田中さんに目をやった。彼は一瞬だけ眩しいものを見たような顔をしたあと、すぐに目を逸した。

「心の準備はいいかい？」

「大丈夫です」

じゃあ、と田中さんが言い、はい、と僕がこたえた。

僕は彼の手を掴んだ。

そうして僕は気絶した。

意識が途切れる間際、ズレたサングラスの隙間から教授が見えた。石畳に体を打つ。

どこか近い所からボーントゥビーワイルドが聞こえた。

ステップンウルフの演奏ではなく、ヒンダーのカバー・バージョ
ン。

僕の携帯の着信を知らせる歌だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2766w/>

魔王誘拐

2011年11月4日08時02分発行